

聖歌譜

徹夜禱

ВСЕНОЩНАЯ.

НОТНОЕ ПѢНІЕ.

聖歌譜

徹夜禱

大阪ハリストス正教会

目 次

徹 夜 禱

晩 課	1
来れ我等の主神に	1
我が霊(百三聖詠)第一	2
来れ我等の主神に	4
我が霊(百三聖詠)第二(ギリシヤの歌譜)	4
同 上 (同) 第三(ヤコフ・チハイ作曲)	6
同 上 (同) 番外(パウエル渡辺師の曲に依る。デ・リオフスキー作曲)	9
悪人の謀 第一	11
同 上 第二(キエフの歌譜)	13
同 上 第三(ヤコフ・チハイ作曲)	14
主や爾に呼ぶ 第一調(ギリシヤの歌譜)	15
同 上 第二調(モスコフの歌譜)	18
同 上 第三調(ギリシヤの歌譜)	20
同 上 第四調(同 上)	23
同 上 第五調(同 上)	26
同 上 第六調(同 上)	29
同 上 第七調(同 上)	32
同 上 第八調(同 上)	34

聖にして 福たる (聖ソフロニイの祝文).....	37
天に在します (同) (キエフの歌譜).....	38
聖にして 福たる 番外第一 (デ・リオフスキー作曲).....	39
同 上 番外第二 (ドオレツキイ作曲・小原甲三郎訳).....	40
ボ ロ キ メ ン.....	41
主よ今爾の言葉に従い 第一 (シメオンの祝文: ヤコフ・チハイ作曲).....	43
同 上 第二 (ロマキン師作曲).....	44
同 上 第三.....	45
同 上 第四 (ヤコフ・チハイ作曲).....	46
同 上 第五 (同 上).....	47
生 神 童 貞 女 や.....	48
早 課.....	49
至高きには (聖歌六段の初: キエフの歌譜, デ・リオフスキー訳).....	49
主は神なり 第一調.....	50
同 上 第二調.....	51
同 上 第三調.....	52
同 上 第四調.....	53
同 上 第五調.....	54
同 上 第六調.....	55
同 上 第七調.....	56
同 上 第八調.....	57

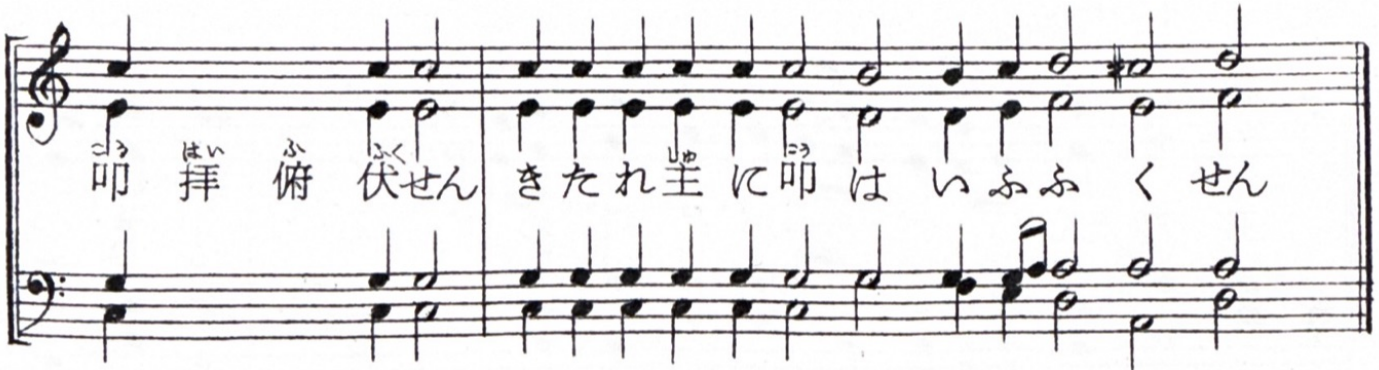
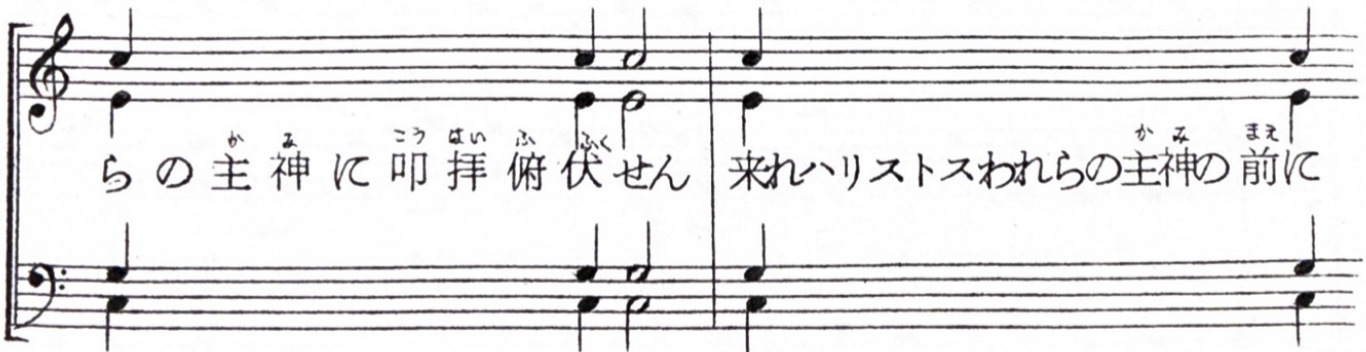
主の名を讃揚げよ	第一	59
同	上 第二	60
同	上 第三	61
同	上 第四 (ロマキン師作曲)	63
同	上 第五 (ヤコフ・チハイ作曲)	64
同	上 第六 (デ・リオフスキー訳)	66
同	上 番外第一 (オロロフ作曲, 金須嘉之進訳)	67
同	上 番外第二 (小原甲三郎訳)	68
同	上 番外第三 (ロストウスキー作曲, 東海林重吉訳)	70
同	上 番外第四 (同 上)	71
我等ワイロンの河辺に坐し (百三十六聖詠)		72
同	上 (同上、デ・リオフスキー作曲)	73
主や爾は崇め讃らる		74
我が幼き時 (アンティフォン第四調)		78
ポロキメソ		79
ハリストスの復活を見て		82
光栄は・憐み深き主や		84
ファリセイの光栄		86
我が心主を崇め	第一	89
同	上 第二	91
同	上 番外 (デ・リオフスキー作曲)	94
凡そ呼吸ある者	第一調 (ギリシヤの歌譜)	97

同	上	第二調（モスコフの歌譜）	97
同	上	第三調（ギリシヤの歌譜）	98
同	上	第四調（同 上）	99
同	上	第五調（同 上）	100
同	上	第六調（同 上）	101
同	上	第七調（同 上）	101
同	上	第八調（同 上）	102
光	栄	は	103
生	神	童 貞 女 や	103
大	頌	詠 第一	104
同	上	第二（キエフの歌譜）	109
同	上	第三（ロマキン師作曲・アレクセイ 小原訳）	114
同	上	番外（ギリシヤの歌譜，デ・リオフスキー訳）	119
今	救	い は	125
主	や	爾 墓 より	126
萬	寿	詞	128
		一時課	129
生	神	女 や 第一	129
同	上	第二	129
同	上	第三（デ・リオフスキー訳）	131

カタワシヤ（共頌）（デ・リオフスキー訳）.....	132
復活規程 イルモス 第一	136
同 上 第二	142
同 上 第三	147
同 上 第四	153
同 上 第五	157
同 上 第六	162
同 上 第七	167
同 上 第八	172

暮 **晩 課**

来れ我等の主神に



吾が霊 一番



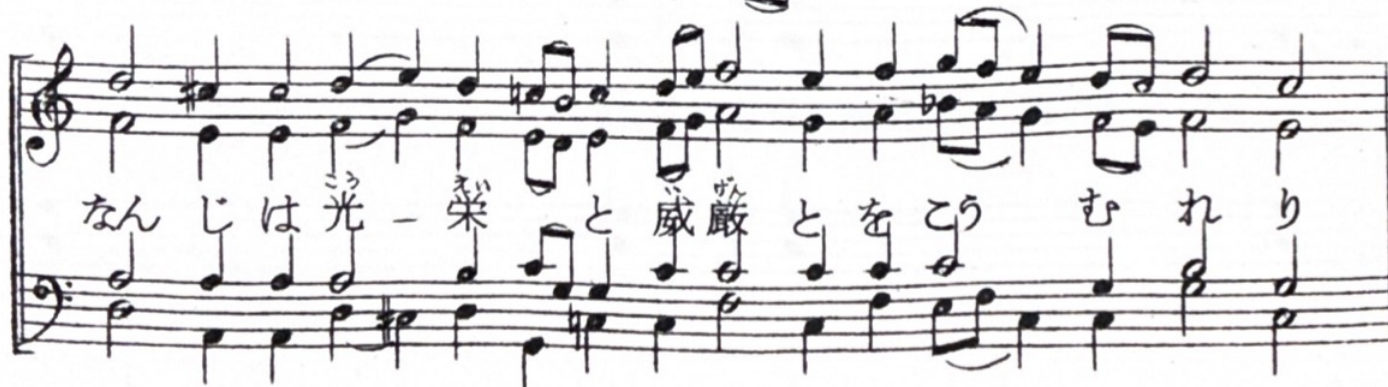
わがたましいや ^{しゅ}主をほめあげよ ^{しゅ}やなんじは



あがめほめらる ^{しゅ}主わが ^が神やなんじは ^{いた}至って



^お大いなり ^{しゅ}やなんじはあがめほめらる



なんじは ^{ひかり}光 - ^い榮と ^が威厳とをこゝむれり



^{しゅ}やなんじはあがめほめらる やまの

い ただ きに みず た つ み ず た つ

主 や なん じの しわざ は 奇 偉 な り

やまの あいだ に みず な が る みず な が る

主 や なん じの しわざ は 奇 偉 な り

みな 知 恵 を も つ づ くれ り 知 恵 を も つ づ くれ り

-4-

光 え い は なん じ 方 ぶ つ を つ く り し 主 に 帰 す

来れ我等の主神に 二番

ア ミ ン 来 れ わ れ ら の 主 神 に 叩 拜 せ ン 来 れ ハ リ ス ト ス

わ れ ら の 神 に 叩 拜 俯 伏 せ ン 来 れ ハ リ ス ト ス わ れ ら の 神 の

前 に 叩 拜 俯 伏 せ ン き た れ 主 に 叩 は い ふ ふ く せ ン

吾が霊 二番

わ が た ま し い や 主 を ほ め あ げ よ 主 わ が

か み や なん じ の だ い な る こ と か ぎ り な し

なん じ の 光 え い と ち か ら の お ご そ か な る こ と

は か り が た あ に ^{しゅ}主 の な せ し こ と

か そ え ん や わ れ け る う ち わ が ^{しゅ}主 を

う た い ほ め ん ^{しゅ}わ が う た は ^{しゅ}主 に い れ ら れ ん を

わ^れ主^のた^めに た^のし^まん た^のし^まん

吾が霊 三番

ヤコフ・チハイ作曲

わがたましいや主^をほめあげよ主^わがかみや

なんじはいたて大^いなりなんじは光^えいと威^い厳^{げん}とを

こうむれりなんじはひかりをきるこころも^のごとく

笑^をはるこま^くの^ごとしみずのうえになんじの

みやをた て くもをなんじの くるまとな し かげの

つばさにてゆ く なんじはししゃをもつて かげとな し

えきしゃをもつて ほのお とな すなんじはちをかたきも とい

にたて り かれは 世世に うごかざらんなんじ ふちにて

これをおお えること い ふくのごと し やまの

いただきにみずた つ なんじのおどしによつてかれは

はしり なんじのいかづちのこえによつてすみやかにさる

やまにのぼりたににくた り なんじかれのためにさだめしところに

いたる なんじさかいをたててこれをこえざらしむ かえりて

ちをおおわざらん わがたましいや 主をほめあげよ

我が霊や（百三聖詠）番外
（パワエル渡辺師父の曲に依り）

— 9 —

デ・リオフスキイ 作曲

アミン わがたましいや 主をほめあげよ

主やなんじはあがめほめらる 主わがかみや

なんじはいたておおいなり 主やなんじはあがめ

ほめらるなんじは光えいと威厳とを

こうむれり 主やなんじはあがめ



ほめらる やまのいただきにみずたつ



みずたつ ^い主 やなんじのしわざは



奇偉なり やまのあ ^いただに



みずながる みずながる ^い主 や



なんじのしわざは 奇偉なり みなちえをもて

つくれりちえをもつてつくれり光えいは

なんじ^は万^んぶつをつくりし主^{しや}に帰^きす

悪人の謀 一番

あく^く入^いのはかりごとによかざる人^{ひと}は福^{ふく}なり

アリル イヤ アリル イヤ アリル イヤ

主^{しや}は義^ぎ人^{じん}の道^{みち}を知る 悪^{あく}人^{にん}の道^{みち}はほろびん

アリル イヤ
おそれて

主^いにつとめよ おののいで その前^{まへ}によろこべよ

アリルイヤ

およそかれを^{たの}恃むものはさいわいなり

主^{しゅ}やたてよ

アリルイヤ

わが神^{かみ}やわれを^{すく}救いたまえ

救^{すく}いは主^{しゅ}による

アリルイヤ

なんじの降^こ福^{ふく}はなんじの民^{たみ}にあり

光^{こう}榮^{えい}は父^{ちち}と

アリルイヤ

子^こと聖^{せい}神^{しん}に帰^きすいまもいつも世^よ世^よにアミン

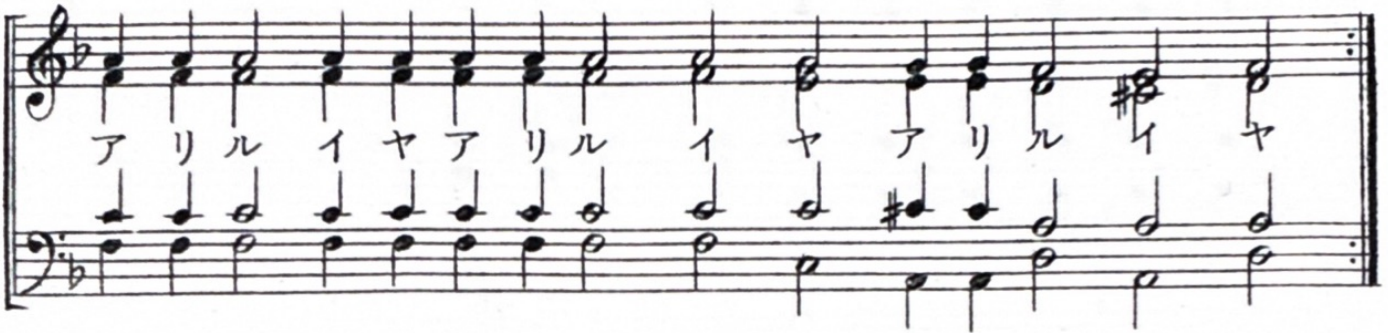
アリルイヤ

悪人の謀 二番

-13-



あく^{にん}人にくみせざる^{ひと}人はさいわいなり



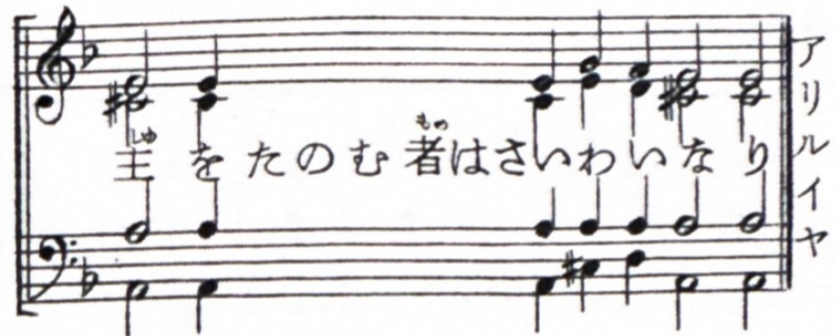
アリル イヤアリル イヤアリル イヤ

ゆっくりと



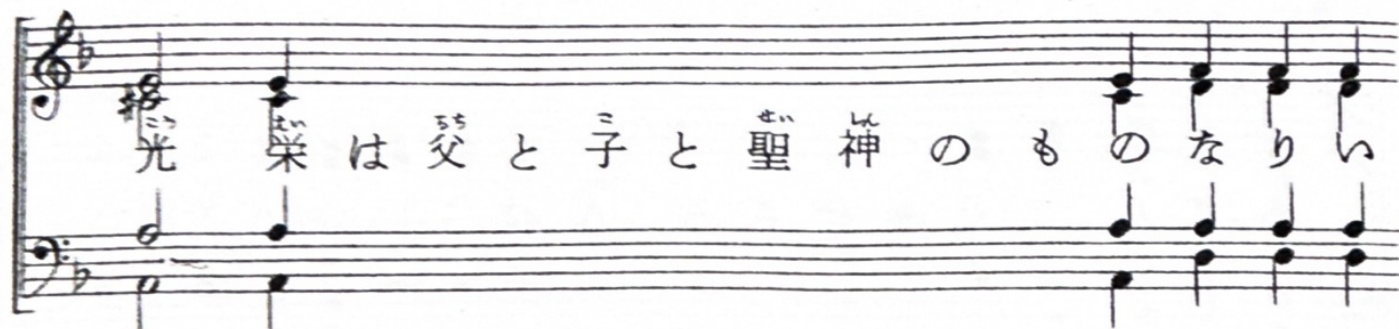
よろこべよ

アリル
イヤ



主^{しゅ}を^たのむ^{もの}者はさいわいなり

アリル
イヤ

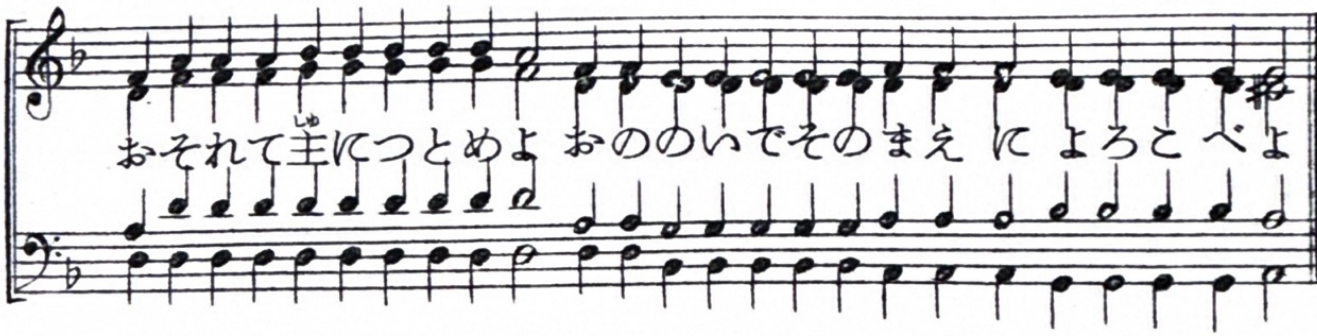


アリル
イヤ

悪 人 の 謀 三 番



アリル
イヤ



おそれて主^{しゅ}につとめよ おののいでそのまえ によろこべよ

アリルイヤ



およそ かれをたのむものは さいわいな り

アリルイヤ



主^{しゅ}やたてよわがかみやわれをすくいたま え

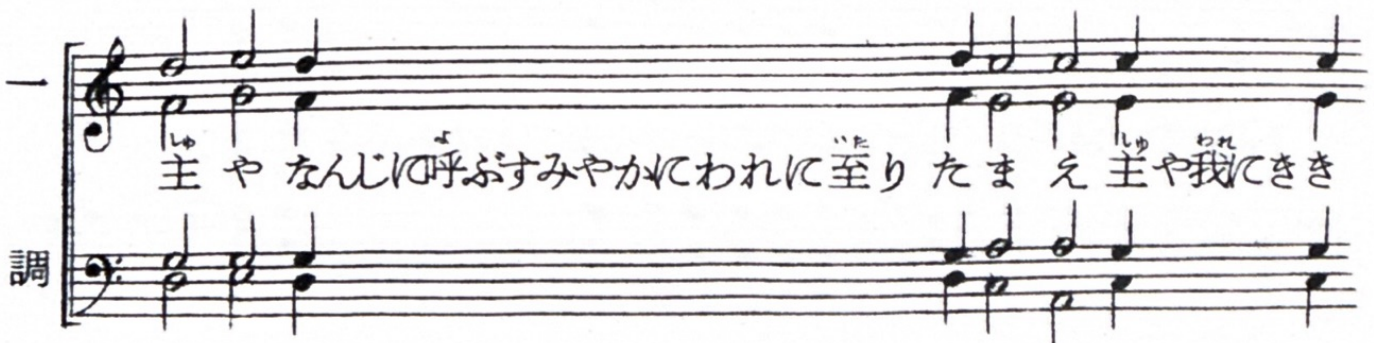
アリルイヤ



すくいは主^{しゅ} によ るなんじの幸^{さい}ふくはなんじのたみにあり

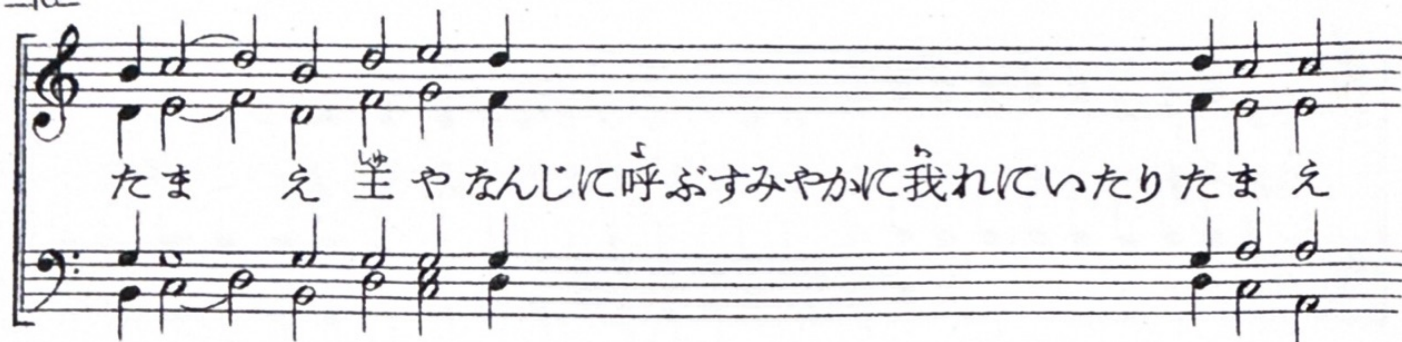
アリルイヤ

主や爾に呼ぶ



主^{しゅ}やなんじに呼ぶすみやかにわれに至^{いた}りたま え主^{しゅ}や我^{われ}にきき

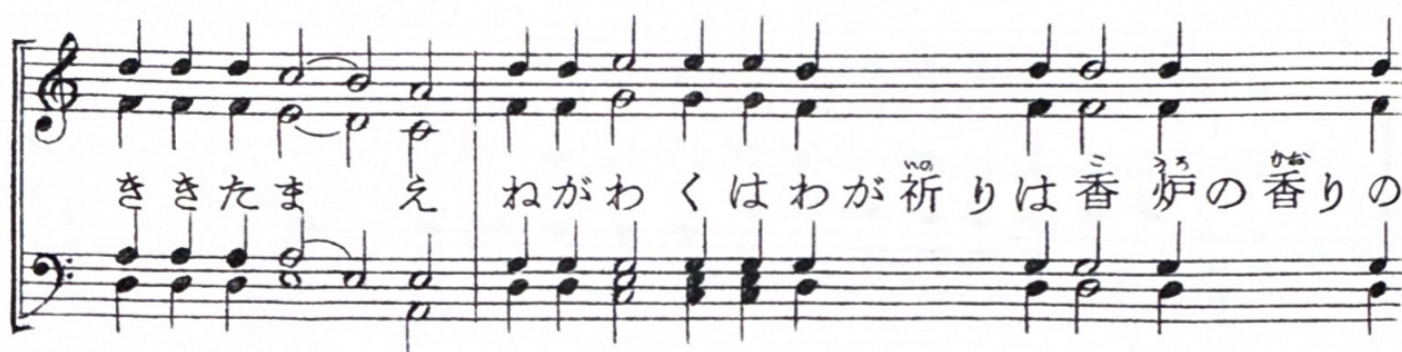
調



たま え 主やなんじに呼ぶすみやかに我れにいたりたま え



なんじに呼ぶときわが祈りの声をいれたま え 主やわれに



ききたま え ねがわくはわが祈りは香炉の香りの



ごとくなんじが顔の前にのぼりわが手を挙ぐるは



暮の祭のごとくいれられん主やわれにききたま え

-17-

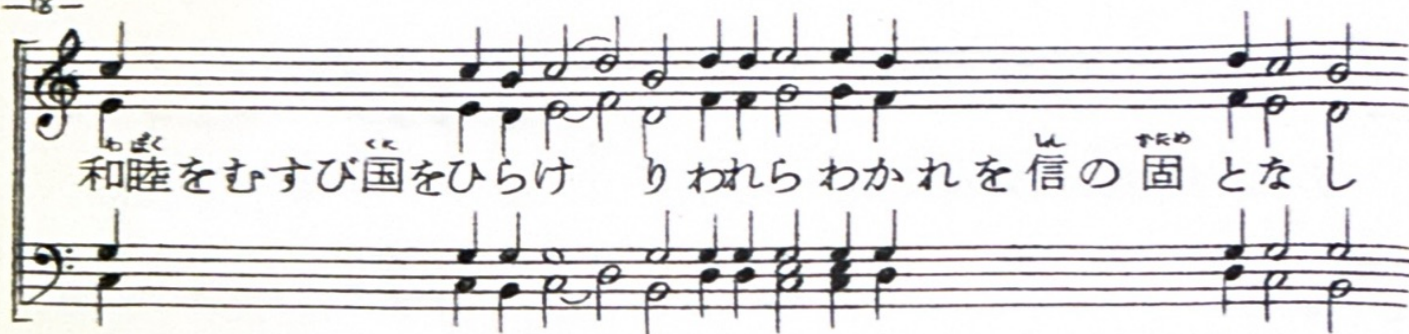
光 榮 は 父 と 子 と 聖 神 に 帰 す 今 も い つ も 世 世 に ア ミ ン

ひ と よ り 生 れ て 主 宰 を う み し 全 世 界 の 光 榮 と 天 の 門 な る

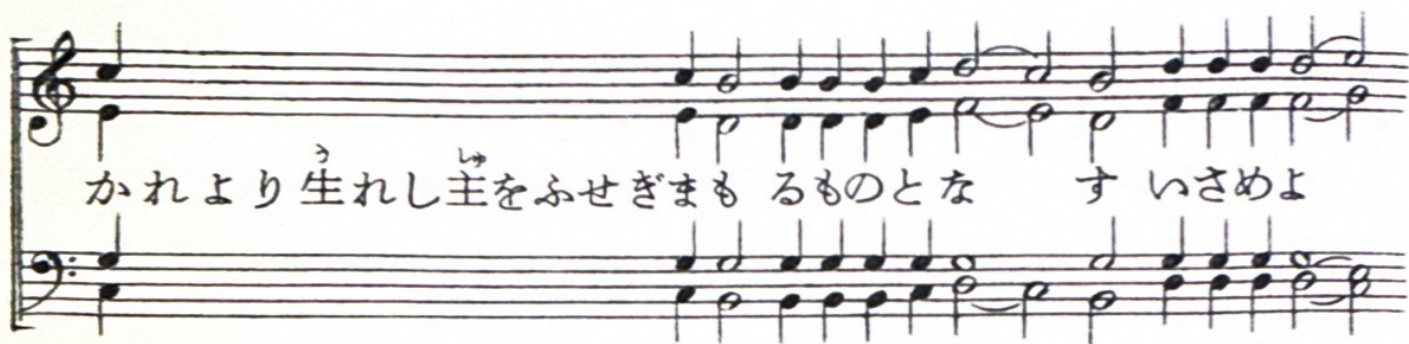
童 貞 女 マ リ ヤ 諸 神 使 の う た 諸 信 者 の か ざ り な る も の を ほ め

う た う べ し か れ は 天 と ひ と し く 神 の 宮 と ひ と し き

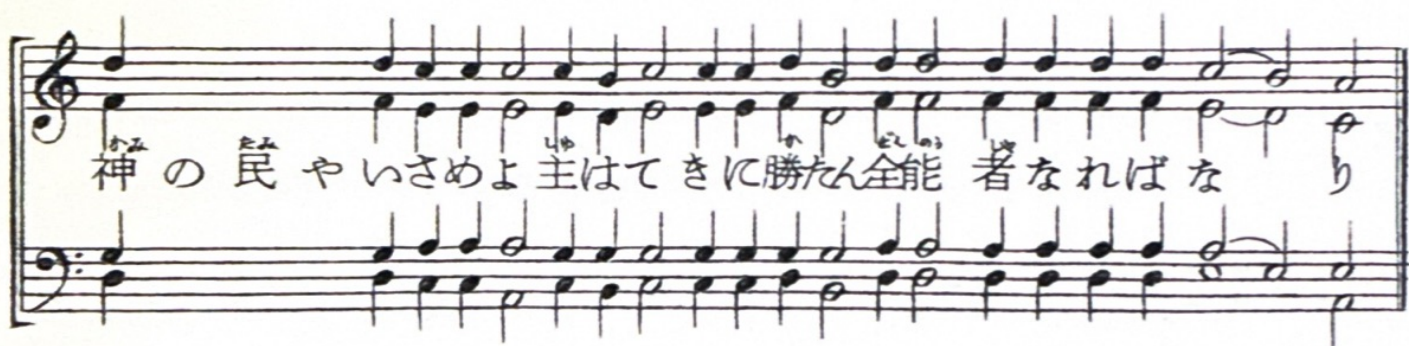
も の と し て あ ら わ れ た り か れ は 仇 の へ だ て を や ぶ り



和^わ睦^{ぼく}をむすび^{くに}国をひらけ りわれらわかれを^し信^{すけ}の固^{ため}となし

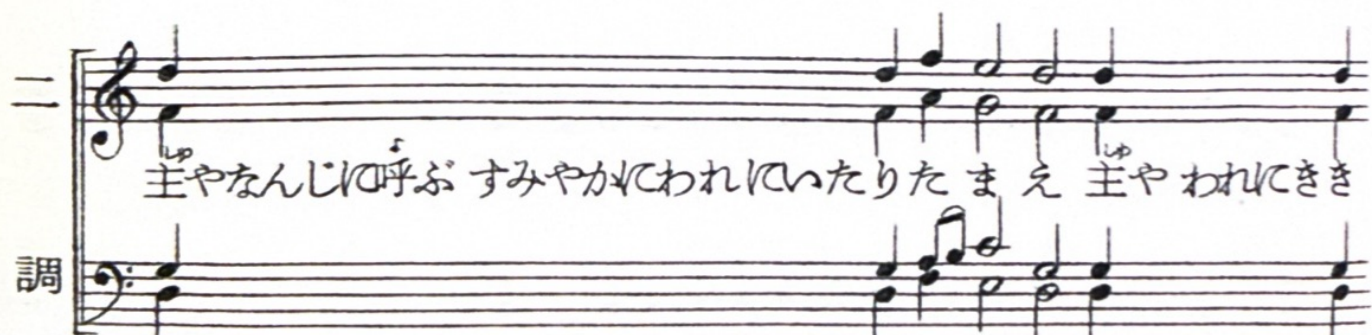


かれより^う生れし^し主をふせぎまもるものとなす いさめよ



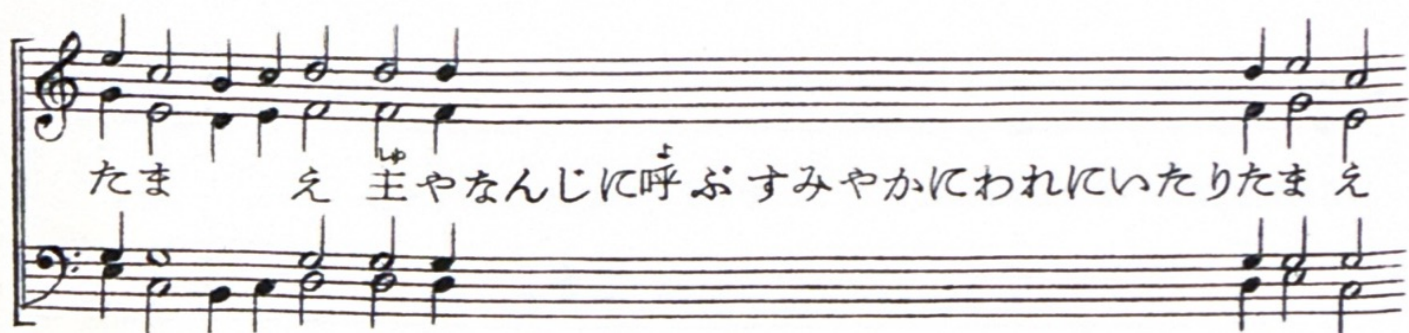
神^{かみ}の民^{たみ}やいさめよ主はてきに^か勝たん^{せい}全能^{とく}者なればなり

二

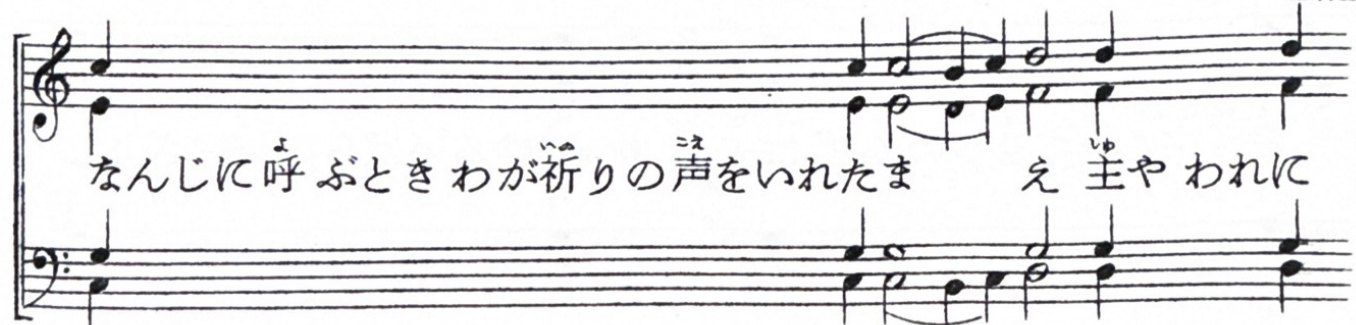


主^{しゅ}やなんじに^よ呼ぶすみやかにわれにいたりたまえ 主^{しゅ}やわれにきき

調



たまえ 主^{しゅ}やなんじに^よ呼ぶすみやかにわれにいたりたまえ



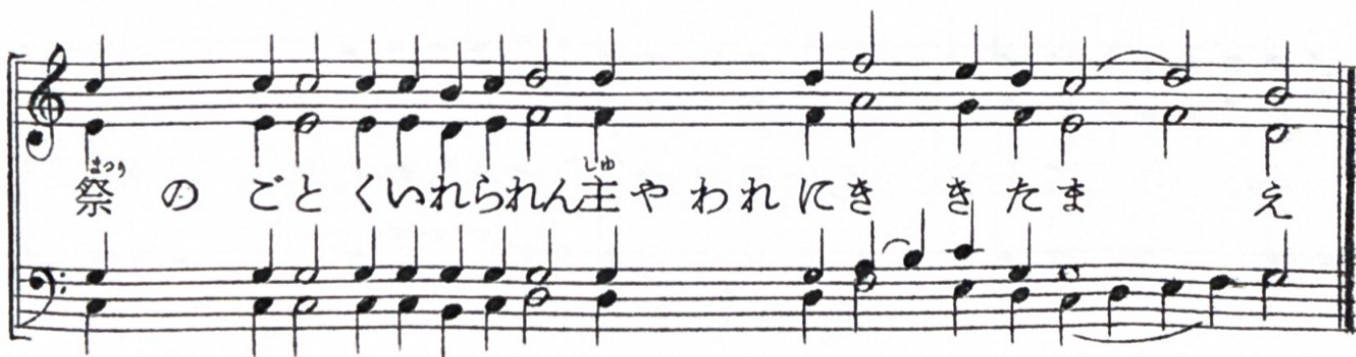
なんじに呼ぶときわが祈りの声をいれたま え 主やわれに



ききたま え 願わくは我が祈りは香炉の香りの



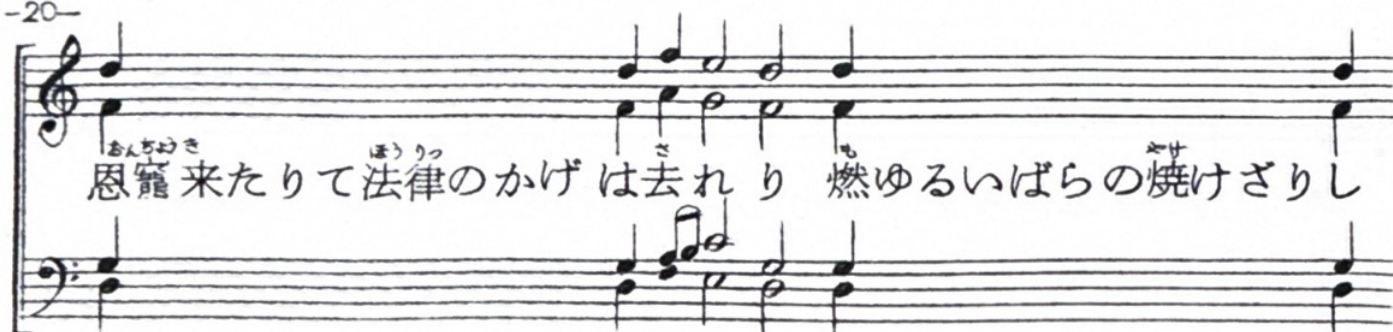
ごとくなんじが顔の前のほり わが手を挙ぐるは暮の



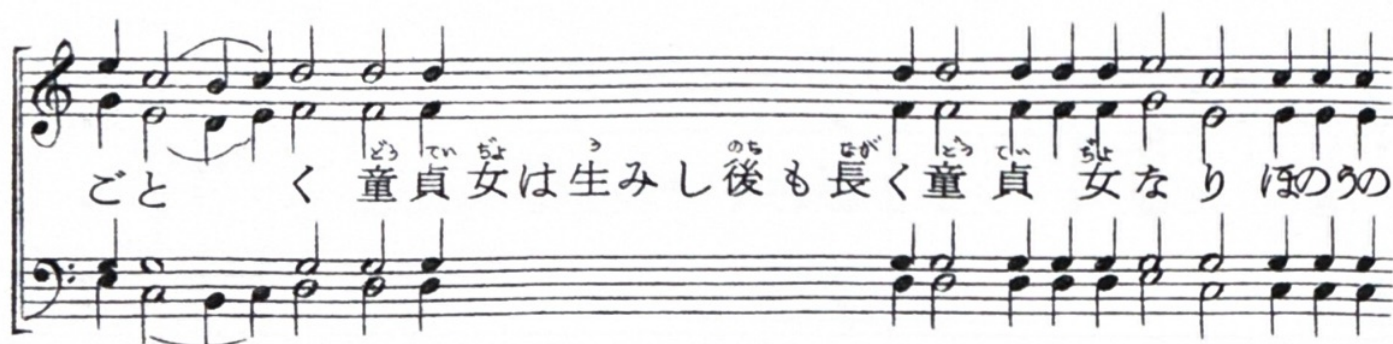
祭のごとくいられん主やわれにききたま え



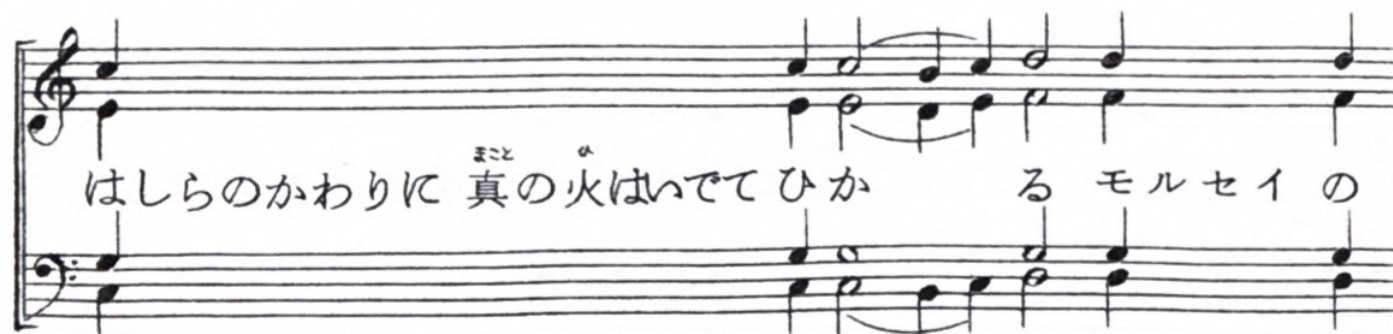
光栄は父と子と聖神に帰す今もいつも世世にアミン



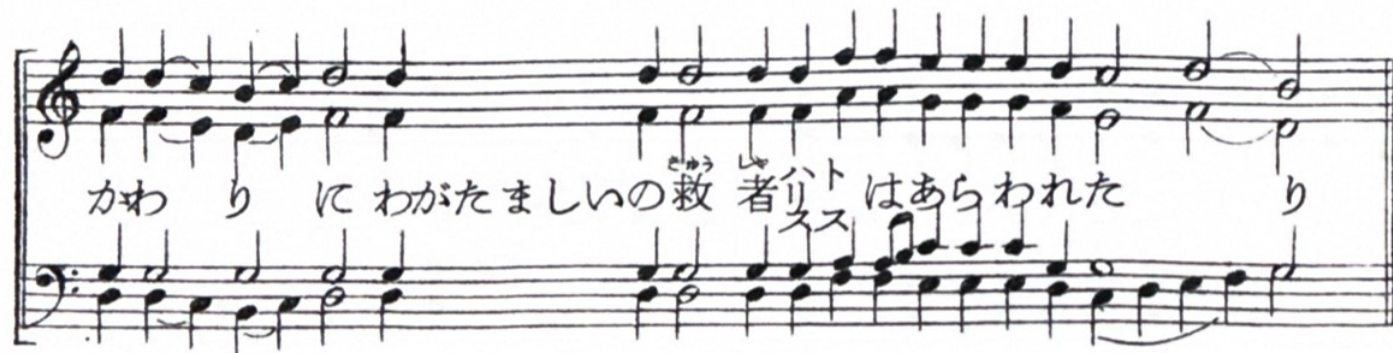
おんちのみき ほうりつ かげは 去れり も 燃ゆる いばらの 焼けざりし



ごと く 童貞女 は 生みし 後も 長く 童貞女 なり ほのろ

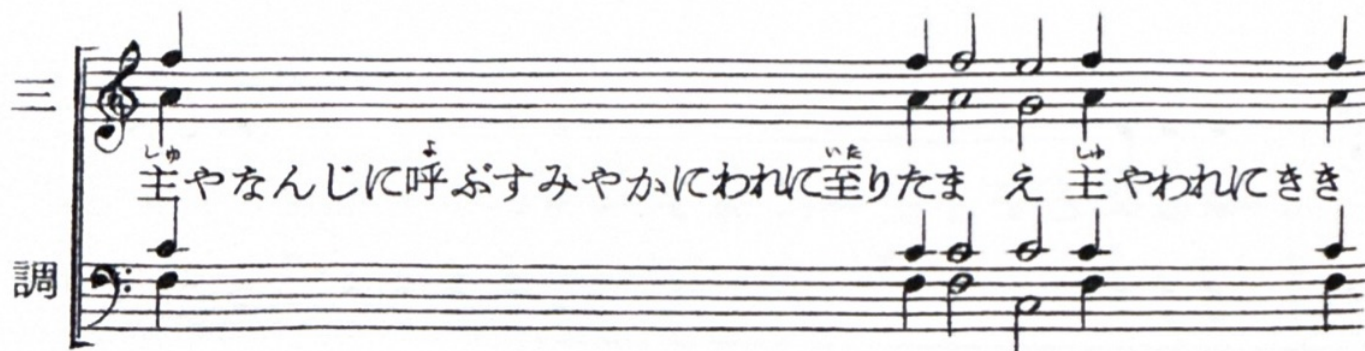


はしらのかわりに 真の火はいでて ひか る モルセイの



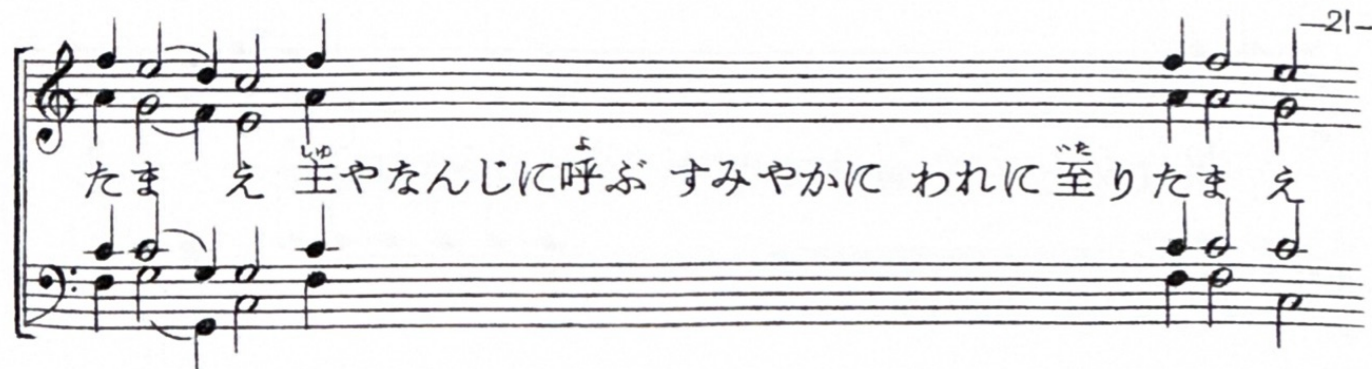
かわ り に わがたましいの 救者 イスは あらわれた り

三

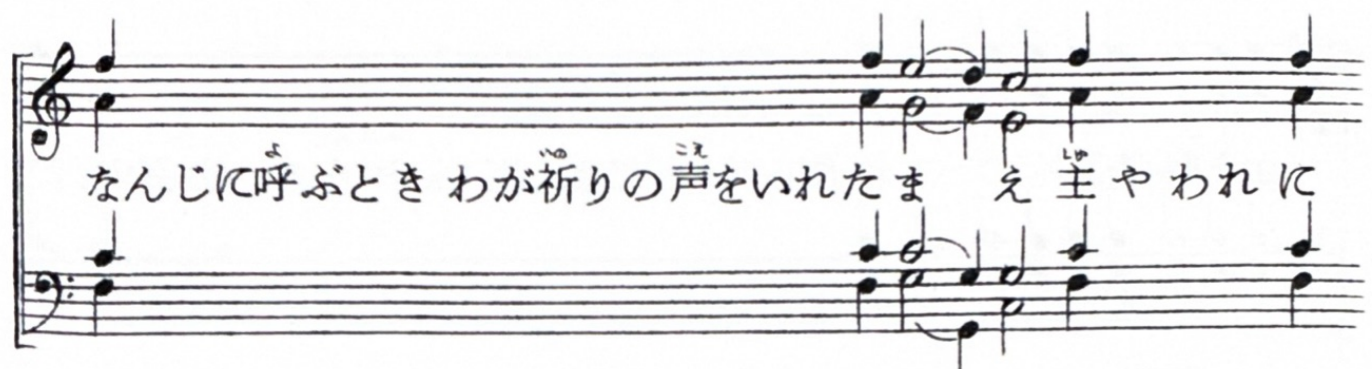


主やなんじに 呼ぶすみやかに われに至りたま え 主やわれに きき

調



たま え 主やなんじに呼ぶ すみやかに われに至りたま え



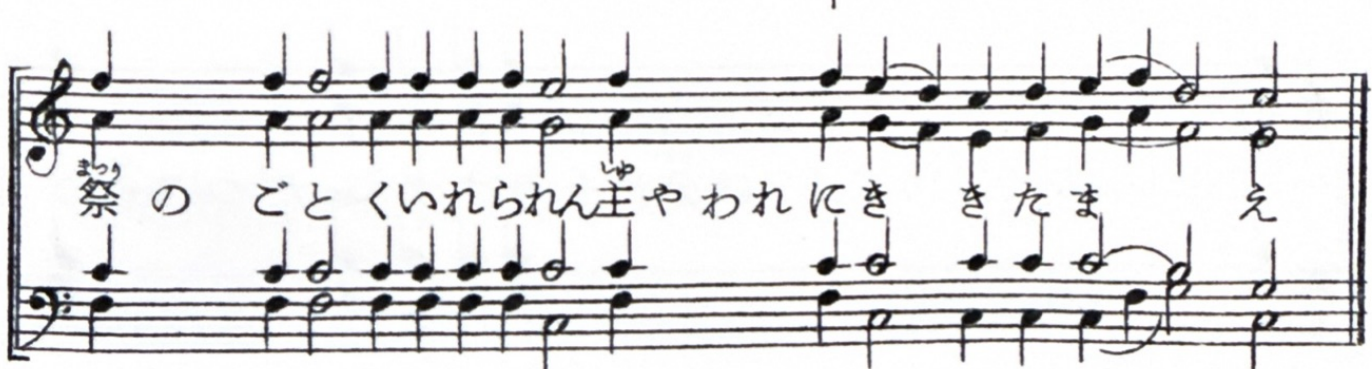
なんじに呼ぶとき わが祈りの声をいれたま え 主やわれに



ききたま え 願わくはわが祈りは香炉の香りの



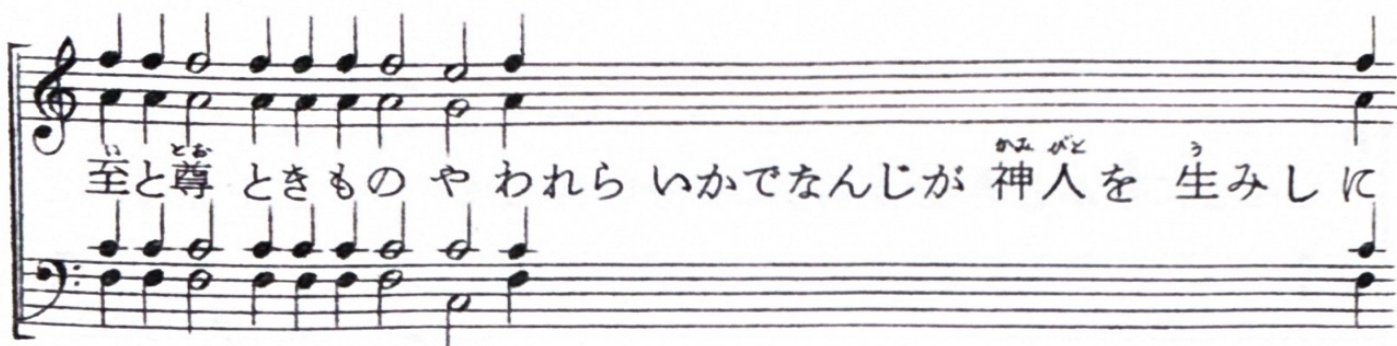
ごとくなんじが顔の 前に のほり わか手を挙ぐるは暮の



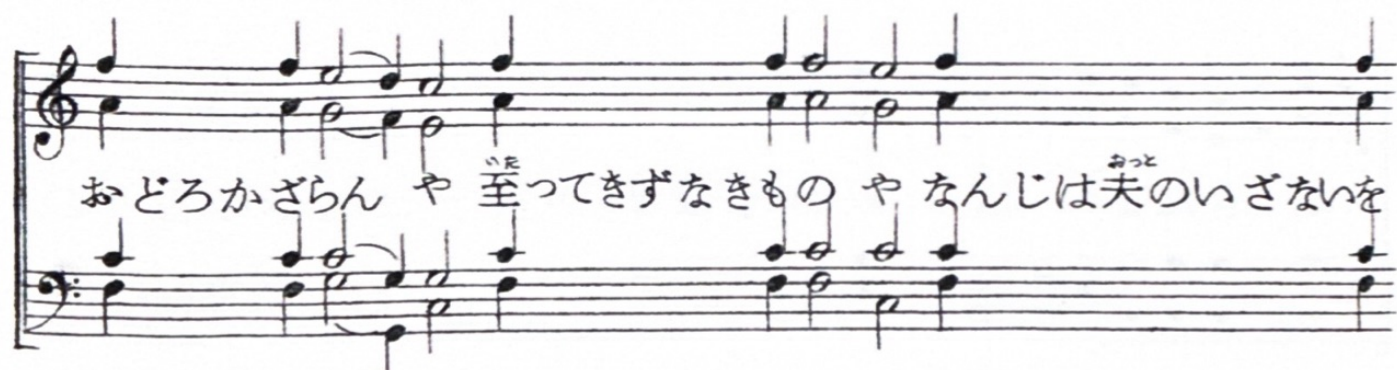
祭の ごとくいれられん主やわれにききたま え



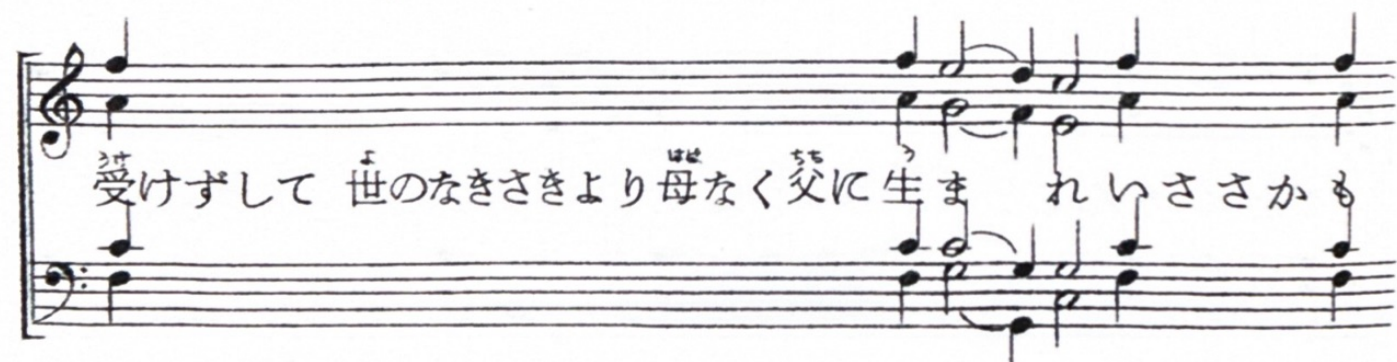
光^{ひかり}榮^{えい}は父^{ちち}と子^こと聖^{せい}神^{しん}に帰^{かへ}す 今^{いま}もい^いつも世^よ世^よにア^あミ^みシ^し



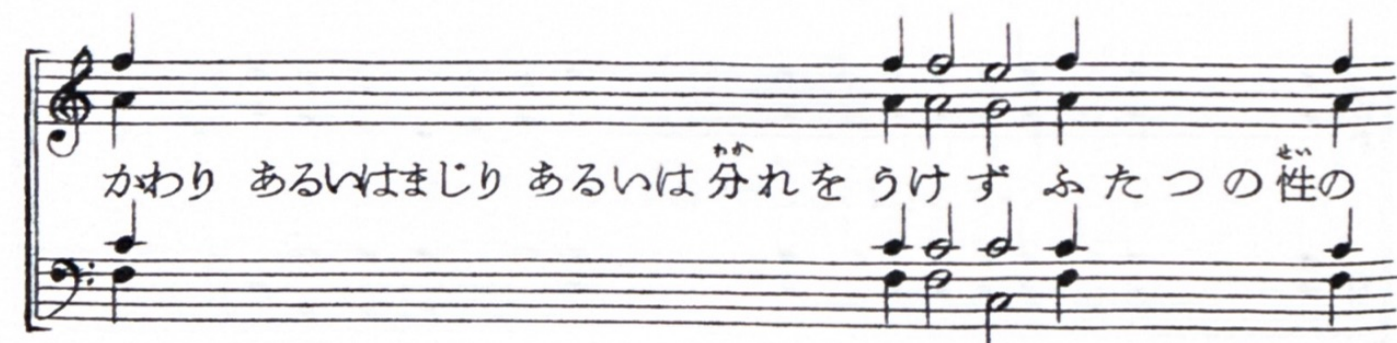
至^{いた}と尊^{とん}ときものやわれらいかでなんじが神^{かみ}人^{びと}を^を生^うみしに



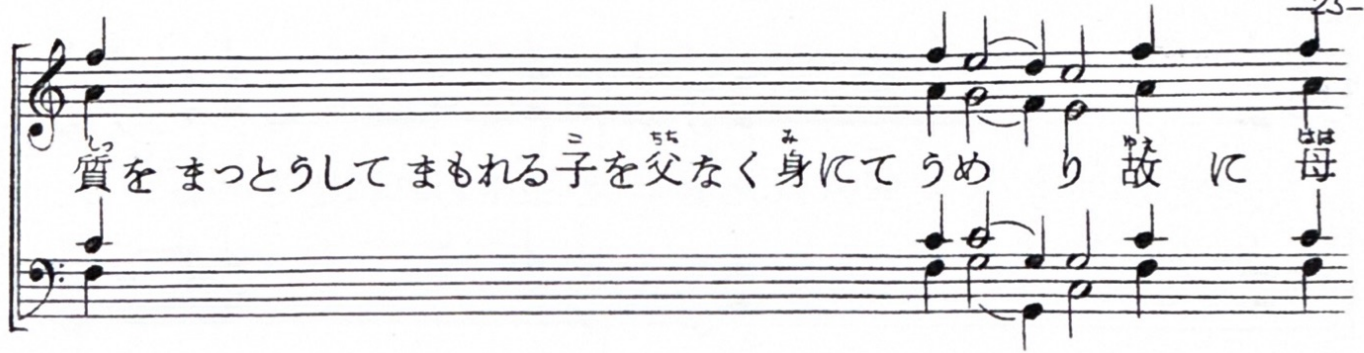
おどろかざらんや至^{いた}つてきずなきものやなんじは夫^{おつと}のいざないを



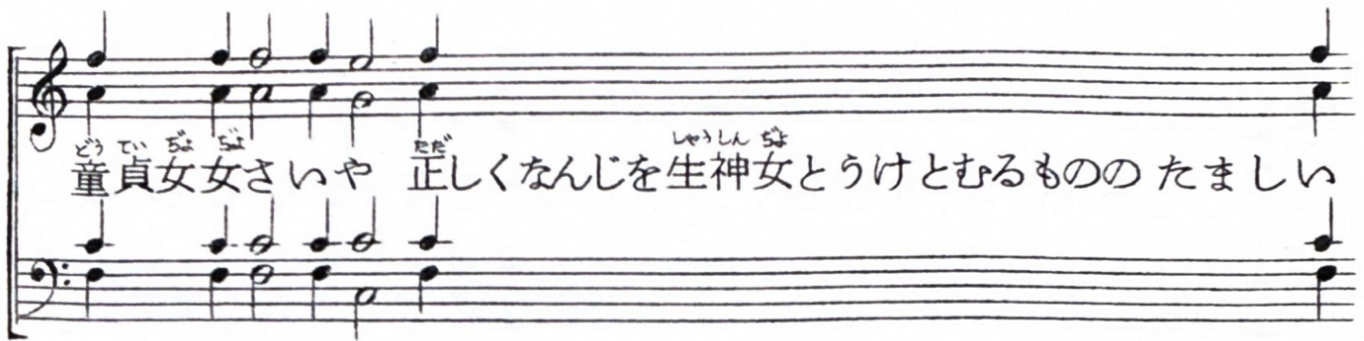
受^うけずして世^よのなきさきより母^{はは}なく父^{ちち}に^に生^うまれいささかも



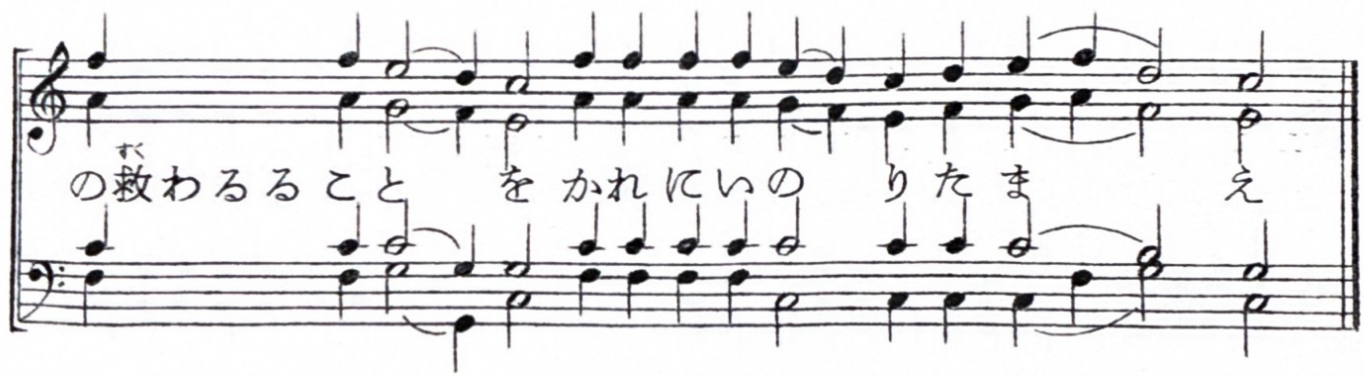
かわりあるいはまじりあるいは分^われをうけずふたつの性^{せい}の



質をまっとうしてまもれる子を父なく身にてうめり故に母

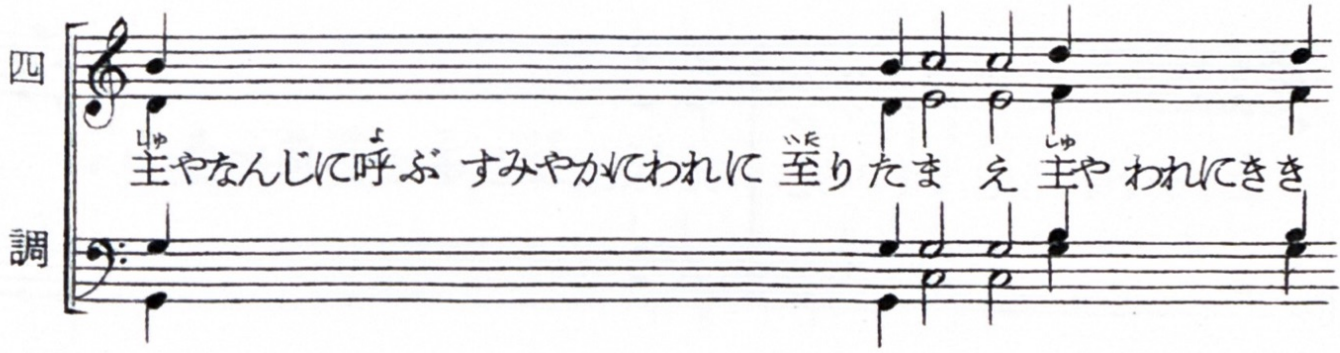


童貞女女さいや 正しくなんじを生神女とうけとむるもののたましい



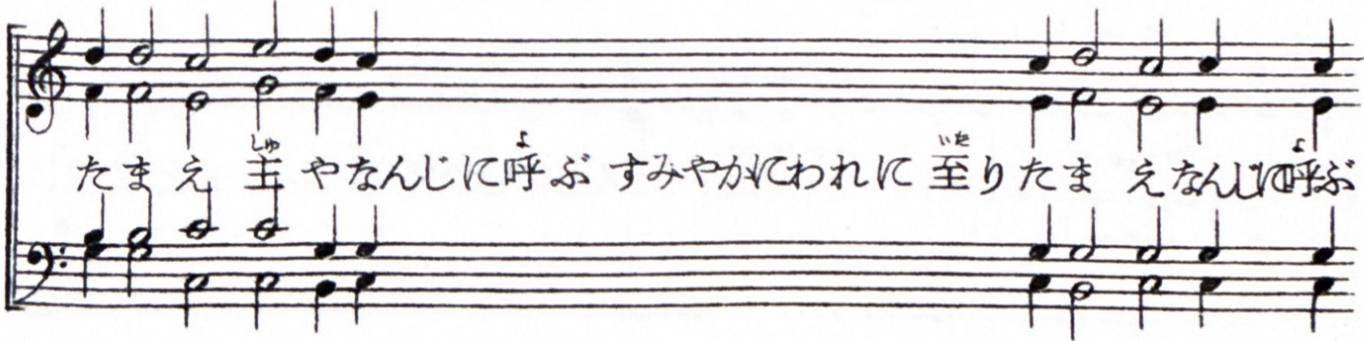
の救わるることをかれにいのりたまえ

四

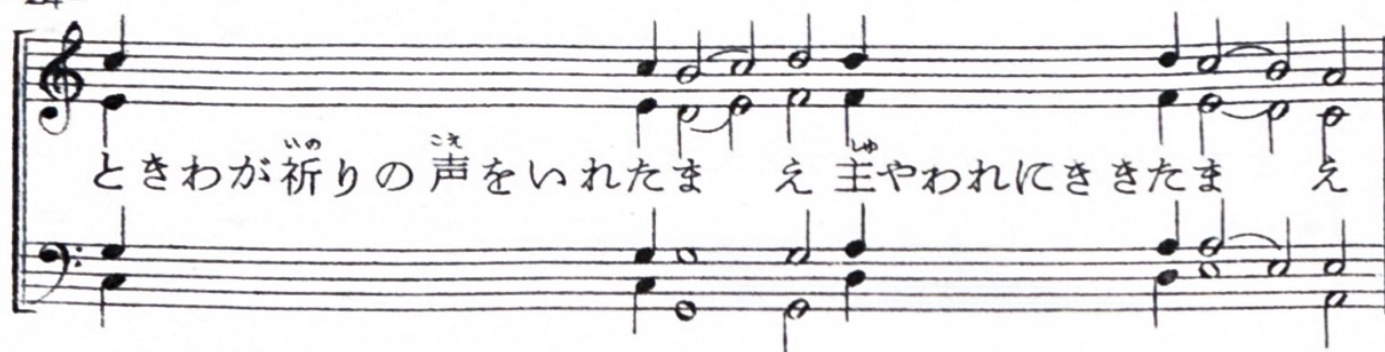


主やなんじに呼ぶすみやかにわれに至りたまえ主やわれにきき

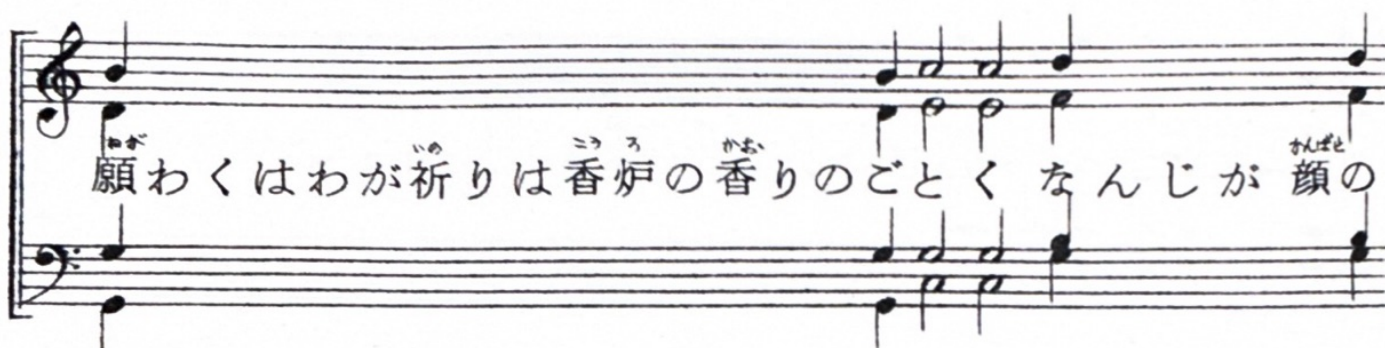
調



たまえ主やなんじに呼ぶすみやかにわれに至りたまえなんじに呼ぶ



ときわが祈りの声をいれたま え 主やわれにききたま え



願わくはわが祈りは香炉の香りのごとくなんじが顔の



まえにのぼりわが手をあぐるは暮の祭のどくいれられん



主やわれにききたま え 光榮は父と子と聖神に帰すいまも



いつも世にアシ 生神女やなんじに依って神の先祖となりし

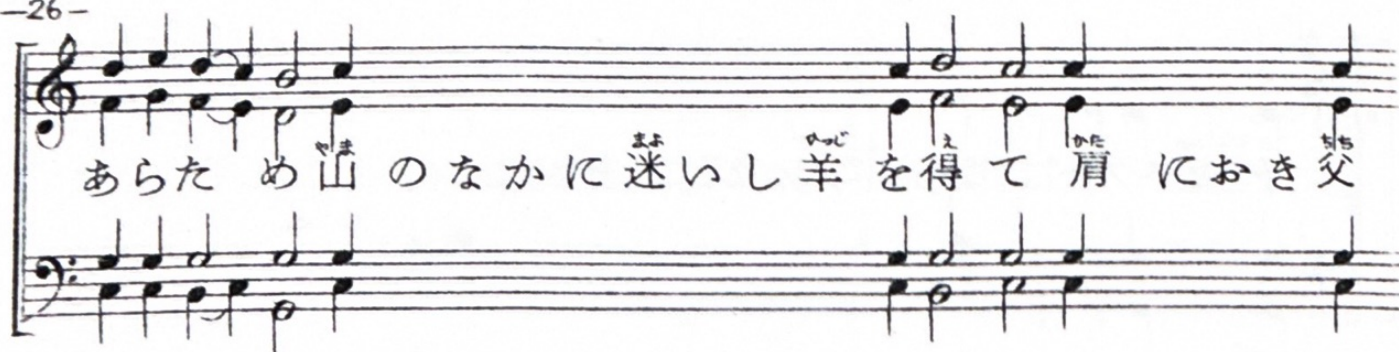
予^よ言^{げん}者^{しや}ダヴ^いトは なん^{なん}じに大^{おほ}いなることをなせしものになん^{なん}じのことを

うたいよべり女^{にょ}王^{おう}はなん^{なん}じの右^{みぎ}に立^たてりとけだし父^{ちち}なく

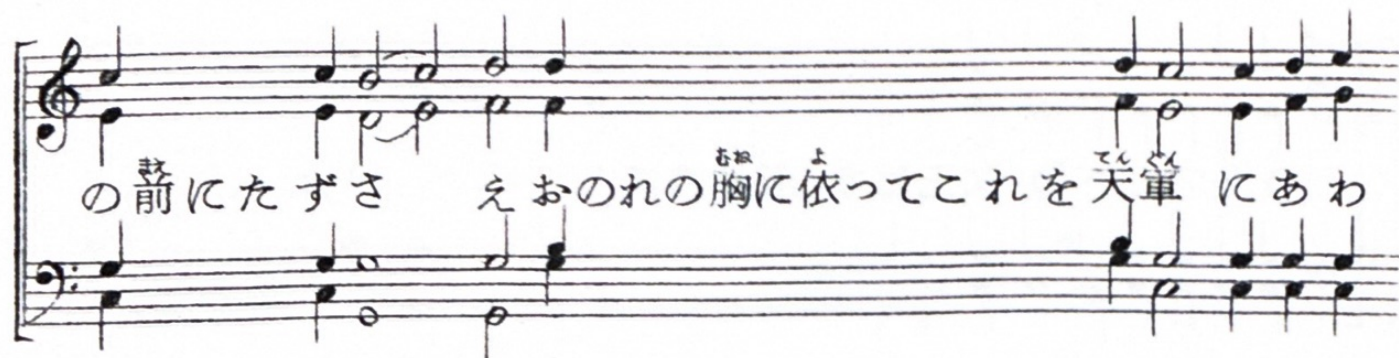
なん^{なん}じよりあまんじて人^{ひと}の性^{せい}をと^とりしか み^みつ^つス大^{おほ}いに^にして

ゆたかなる隣^{おと}れ^れみ^みをたもつ^つの主^{しゅ}はなん^{なん}じが母^{はは}にしていのちの

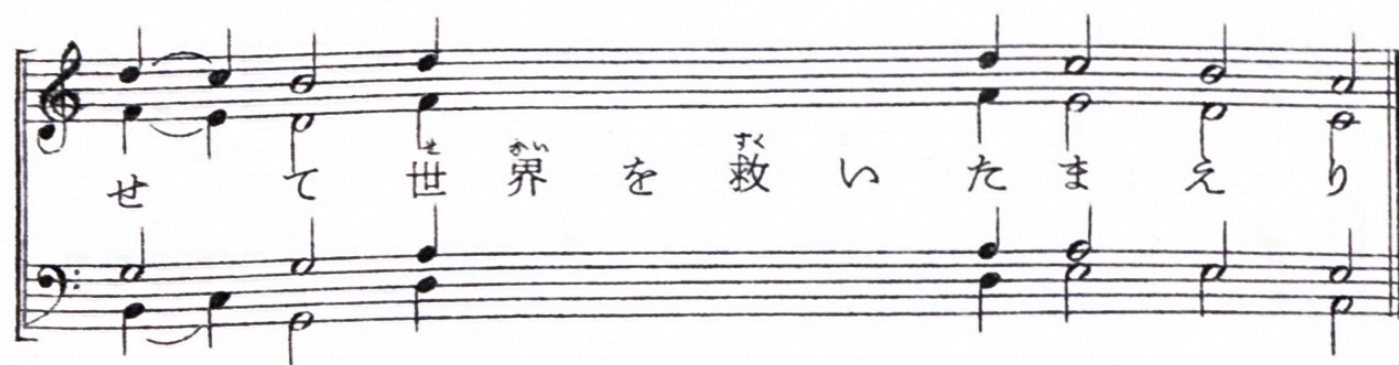
なかだちたるをあらわして欲^{よく}に朽^くちたるおのれのかたちを



あらため^{やま}山のなかに迷^{まよ}いし羊^{ひつじ}を得^えて肩^{かた}におき父^{ちち}

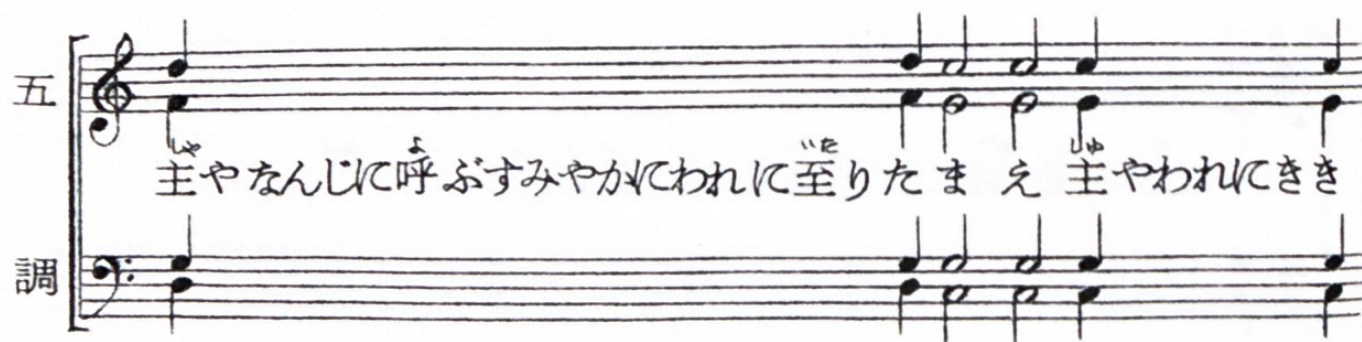


の前^{まへ}にたずさ えおのれの胸^{むね}に依^よってこれを天^{てん}軍^{ぐん}にあわ



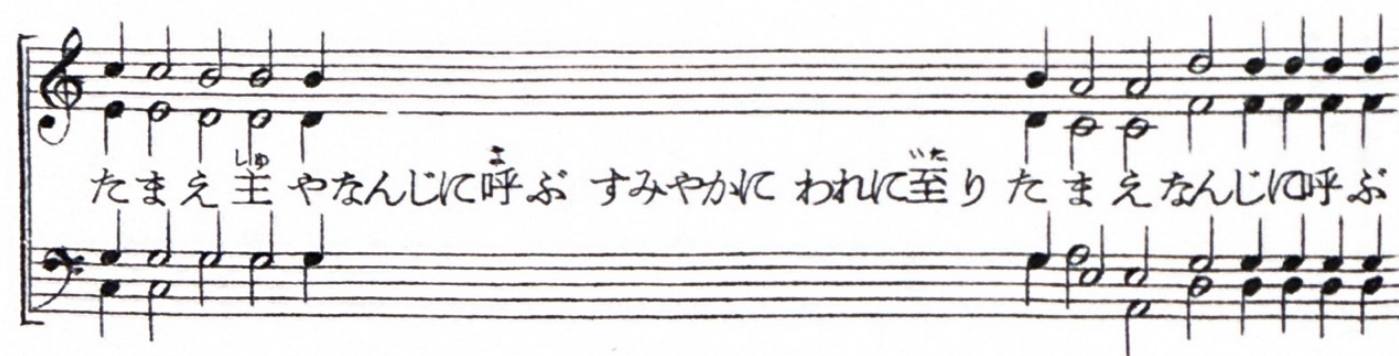
せ て世^よ界^{かい}を救^{すく}い たま え り

五

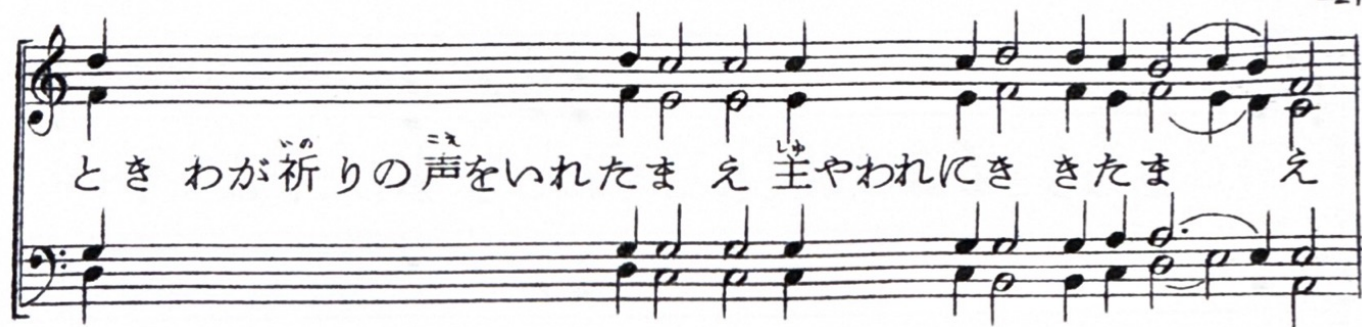


主^{しゅ}やなんじに呼^よぶすみやかにわれに^{いた}至^{いた}りたま え 主^{しゅ}やわれにきき

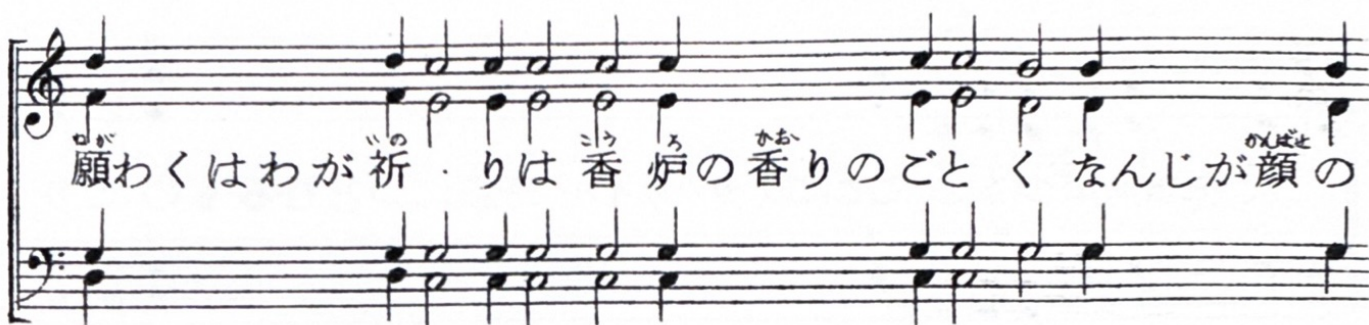
調



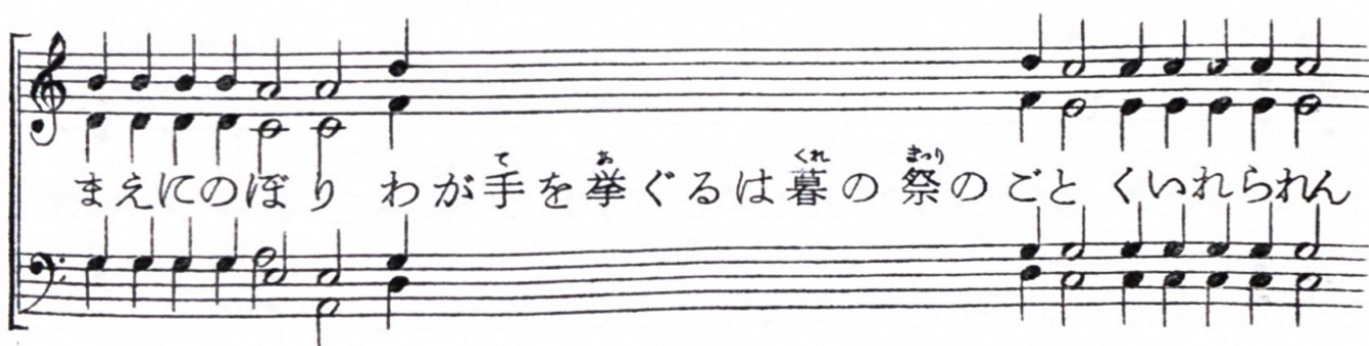
たまえ主^{しゅ}やなんじに呼^よぶ すみやかにわれに^{いた}至^{いた}りたまえなんじに呼^よぶ



ときわが祈りの声をいれたまえ主やわれにききたまえ



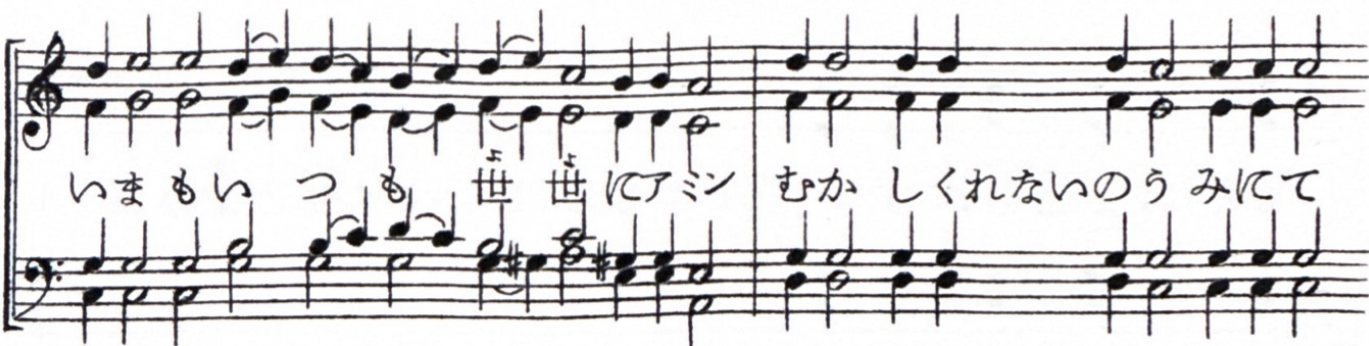
願わくはわが祈りは香炉の香りのごとくなんじが顔の



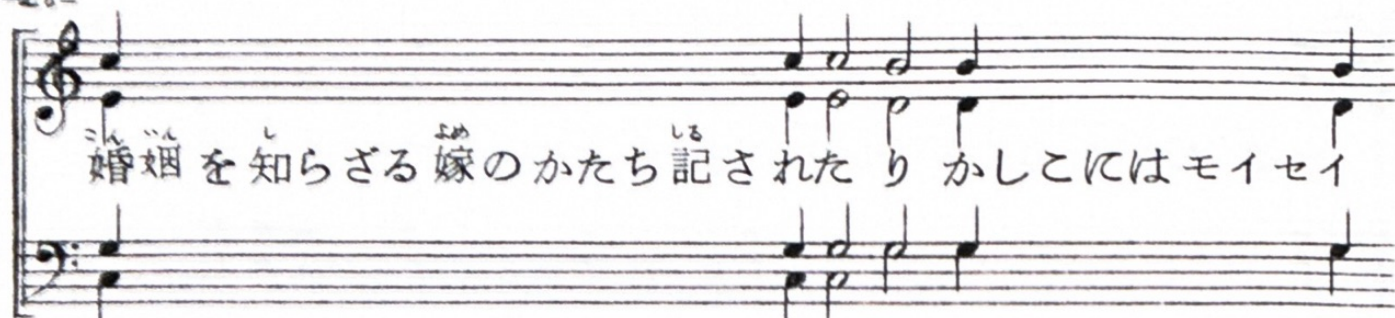
まえにのぼりわが手を挙ぐるは暮の祭のごとくいられん



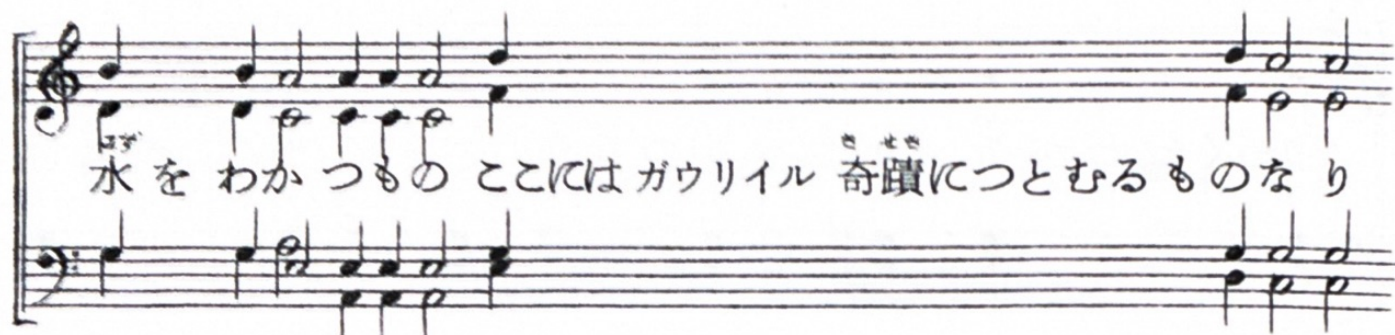
主やわれにききたまえ 光榮は父と子と聖神に帰す



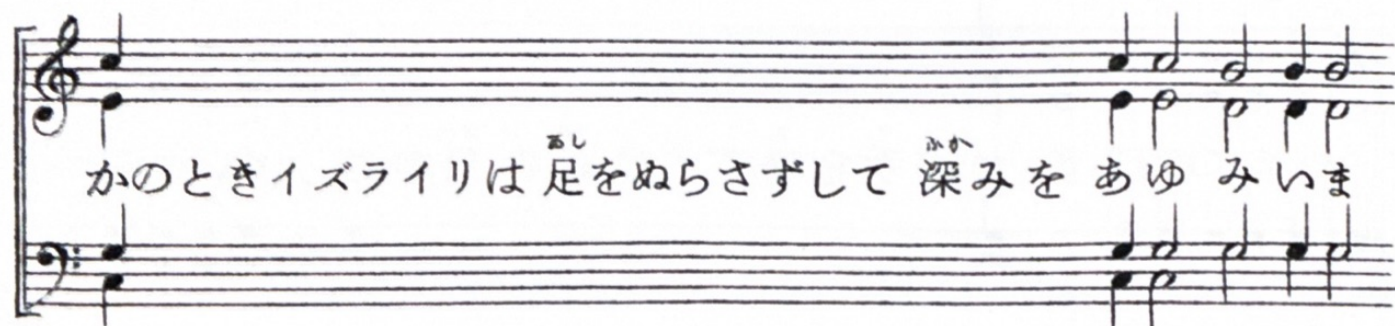
いまもいつも世々にアミン むかしてくれないのうみにて



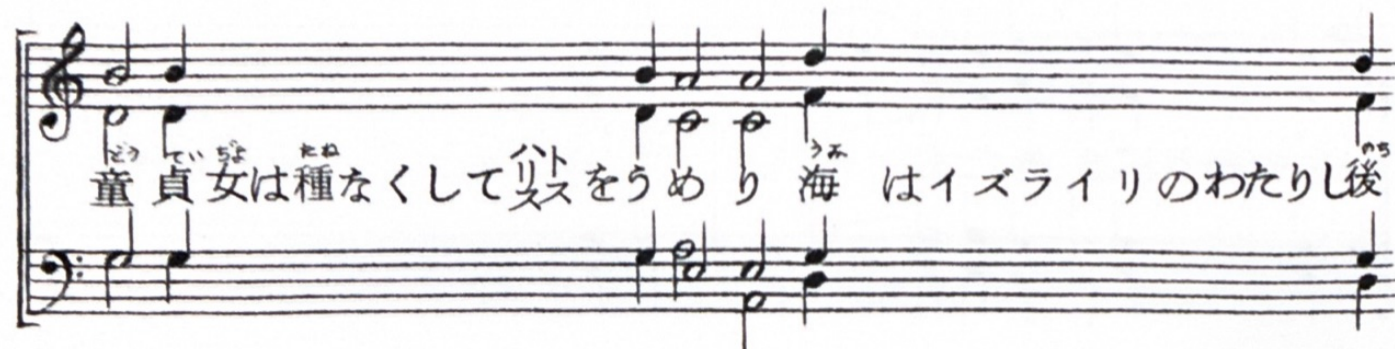
婚姻^{こんいん}をし^し知らざる嫁^{よめ}のかたち記^{しる}されたりかしこにはモイセイ



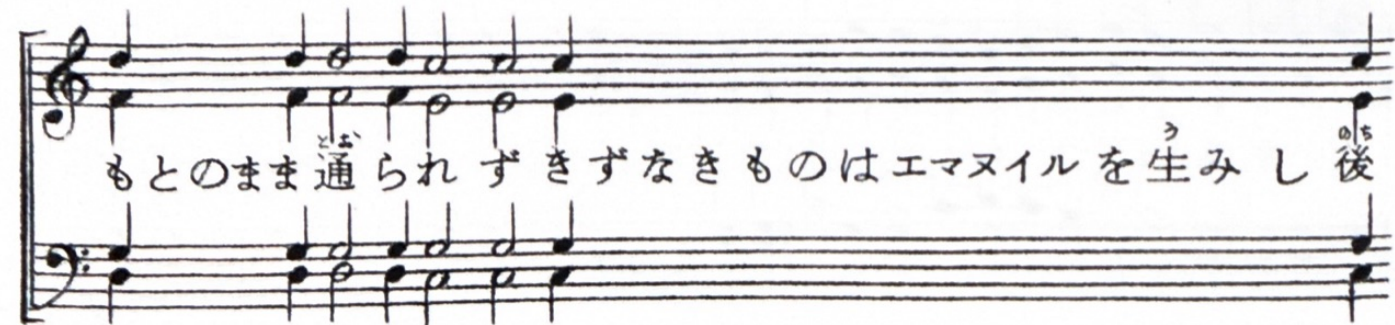
水^{みづ}をわかつものここにはガウリイル奇蹟^{きせき}につとむるものなり



かのときイスライリは足^{あし}をぬらさずして深み^{ふかみ}をあゆみいま



童貞^{どうぢやう}女^{にょ}は種^{たね}なくして糸^{いと}をうめり海^{うみ}はイスライリのわたりし後^{のち}



もとのまま通^{とほ}られずきずなきものはエマヌイルを生^うみし後^{のち}

もとのままきずなし 永遠えい えんにしていと 永遠えい えんなるもの ひとと

なりてあらわれしかみやわれらを 憐あはれれみたま え

六

主しゅやなんじに呼よぶすみやかにわれに至いたりたま え 主しゅやわれにきき

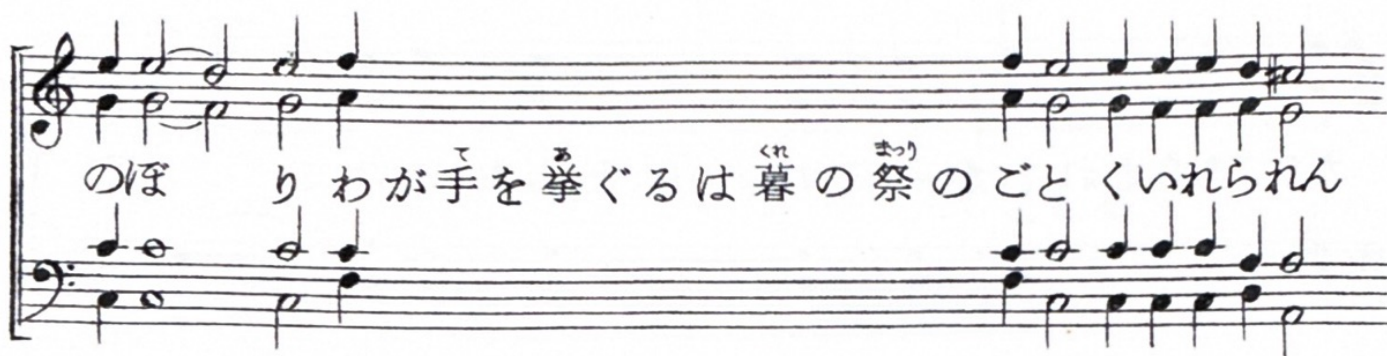
調

たま え 主しゅやなんじに呼よぶすみやかにわれに至いたりたま え なんじに

呼よぶときわが祈いのりの声こゑをいれたま え 主しゅやわれにき きたま え



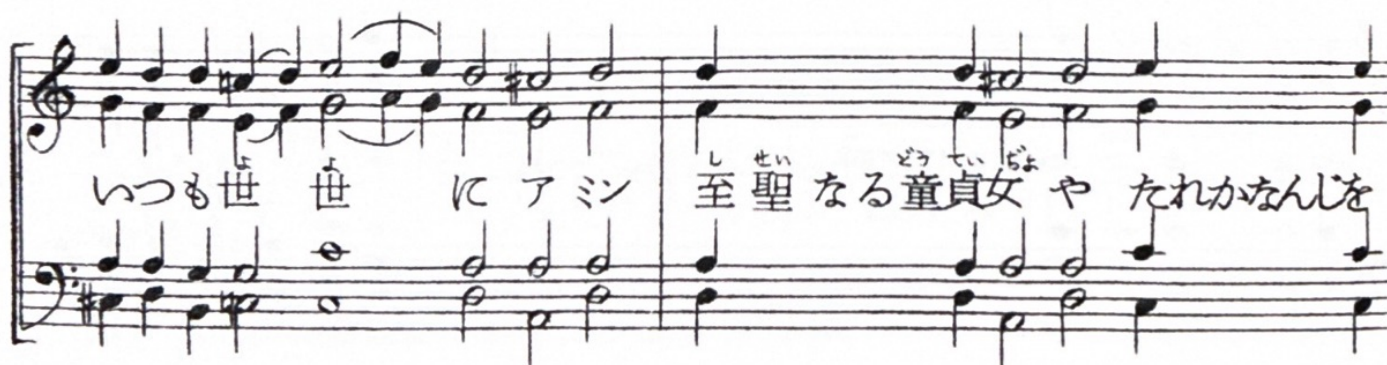
願^{ねが}わくは我^わが祈^{いの}りは香^{かう}炉^ろの香^かりのご^とくなんじが顔^{かんばんと}の前^{まえ}に



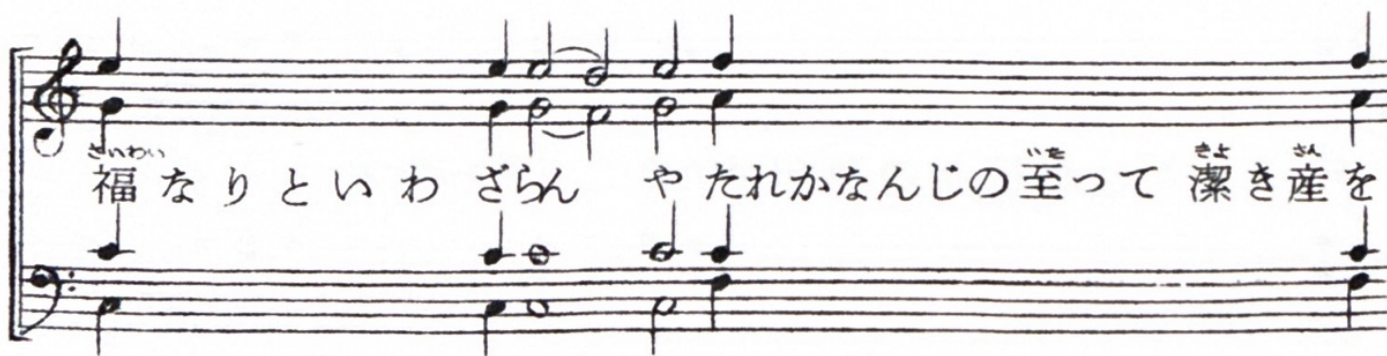
のほりわが手^てを挙^あぐるは暮^{くれ}の祭^{まつり}のご^とくいられん



主^{しゅ}やわれにききたまえ 光^{こう}榮^{えい}は父^{ちち}と子^こと聖^{せい}神^{しん}に帰^きす今^{いま}も



いつも世^よ世^よにア^あシ 至^し聖^{せい}なる童^{どう}貞^{てい}女^{にょ}やたれかなんじを



福^{ふく}なりといわざらんやたれかなんじの至^{いた}って潔^{きよ}き産^{さん}を

うたわざらん や 世のなきさきに父よりひかる 独生の子は

なんじ潔きものより言いがたく身を取りてい で本性の神は

われらのために 本性の人となれり その位ひとつにして

相いわかれず その性 ふたつにして相いうしなわ ず

潔くして いたって福なるものや わがたましいの憐れみを

こうむらんことをかれにいのりたまえ

七

主^{しゅ}やなんじに^よ呼ぶすみやかにわれに至^{いた}りたまえ主^{しゅ}やわれにきき

調

たまえ主^{しゅ}やなんじに^よ呼ぶすみやかにわれに至^{いた}りたまえなんじに

呼ぶときわが祈^{いの}りの声^{こゑ}をいれたたまえ主^{しゅ}やわれにききたまえ

願^{ねが}わくはわがいのりは香^か炉^ろの香^かりのごとくなんじが顔^{かほ}の



まえにのぼりわがてをあぐるは暮の祭のごとくいれられん



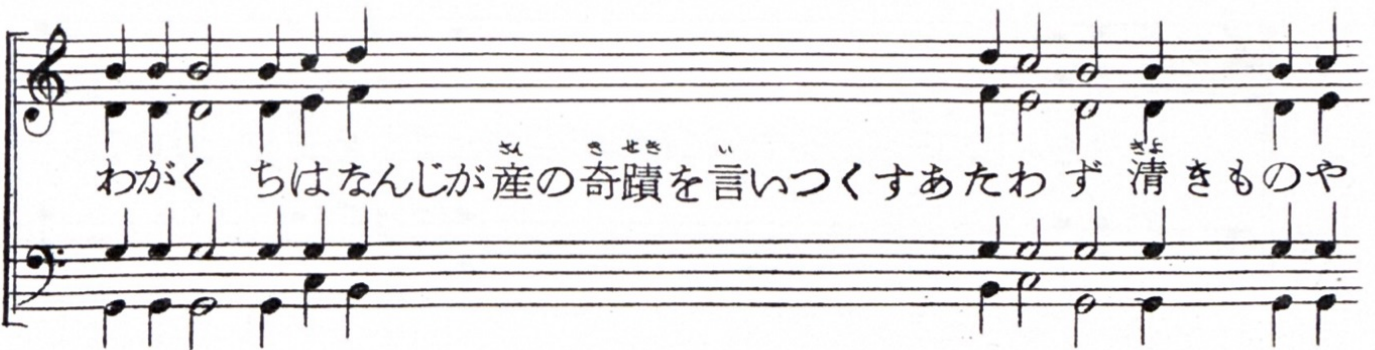
主やわれにききたまえ 光栄は父と子と聖神に帰す今も



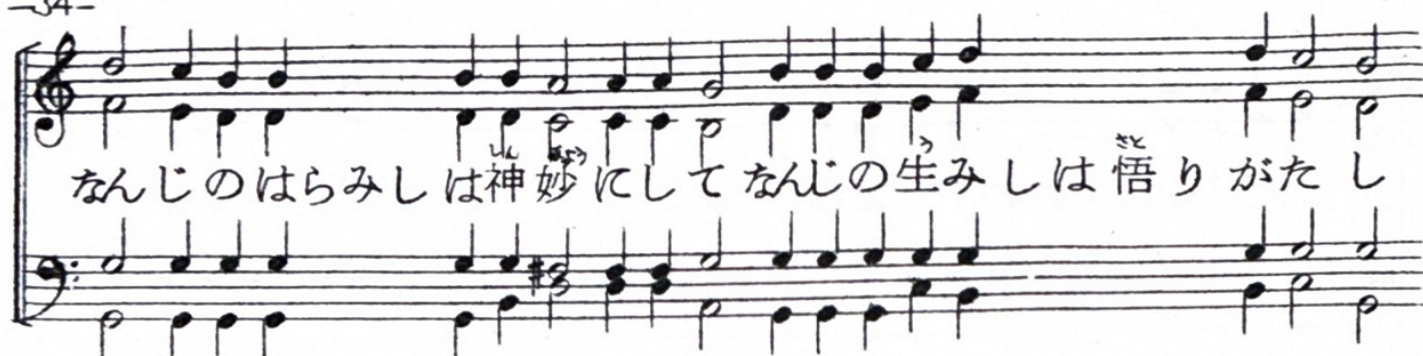
いつも世々にアミン 生神女やなんじは常の法にこえて



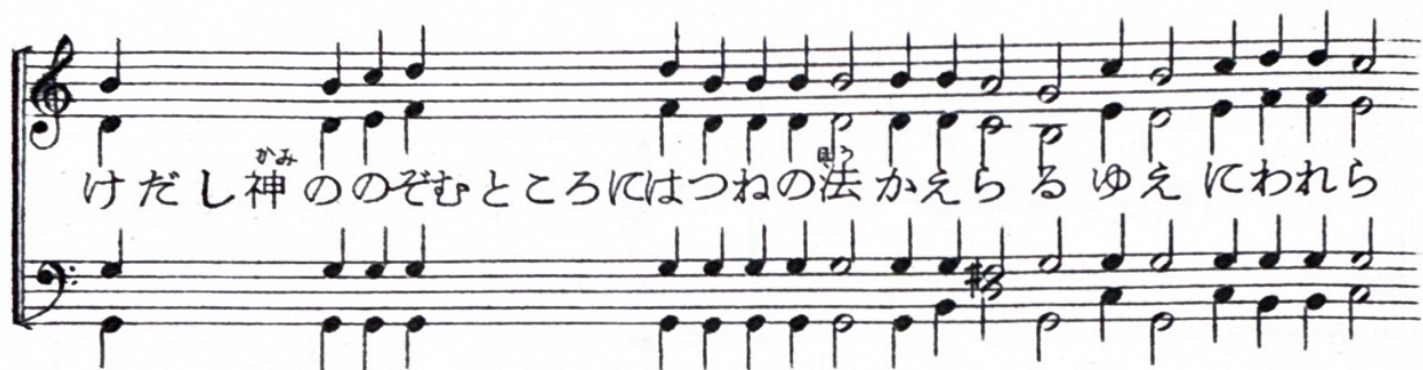
ははとなりことばとちしきにこえて童貞女にとどまれり



わがくちはなんじが産の奇蹟を言いつくすあたわず清きものや



なんじのはらみしは神妙にしてなんじの生みしは悟りがたし



けだし神のぞむところにはつねの法かえらるゆえにわれら

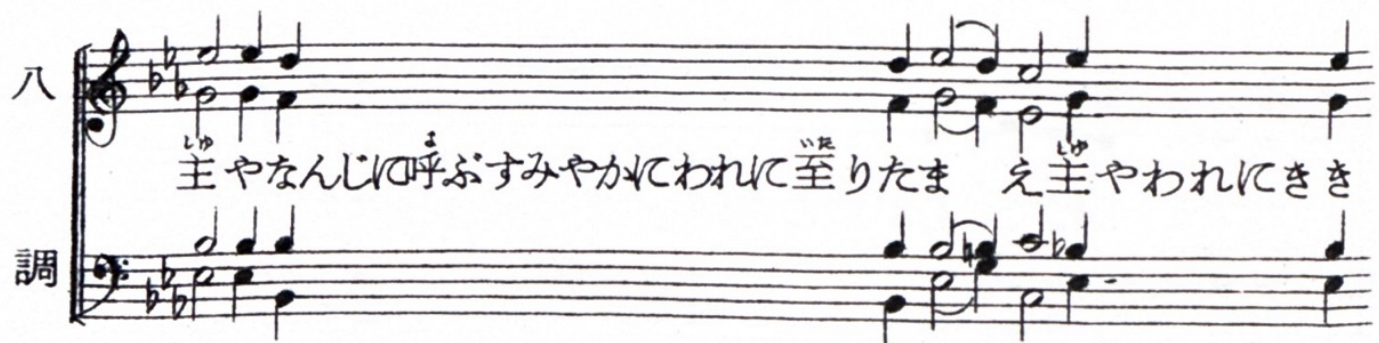


みななんじを神の母と認めてせつにねがうわれらのたましい



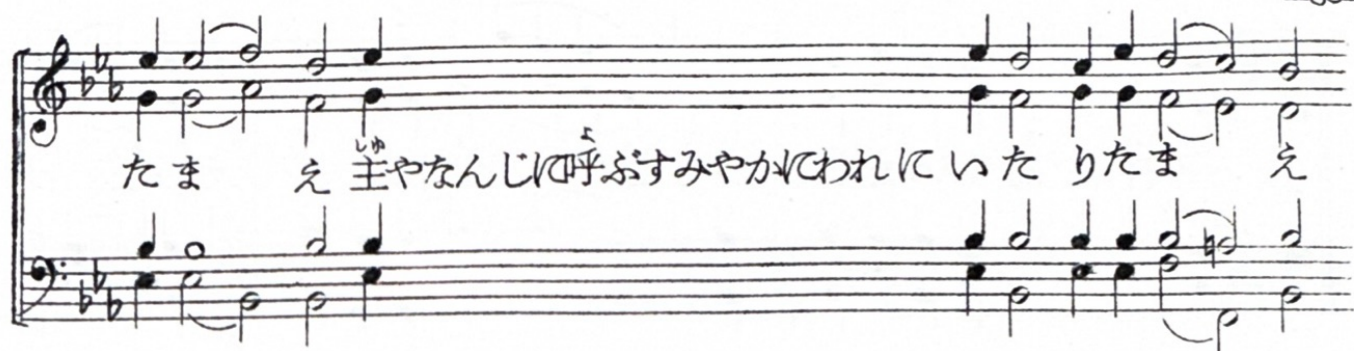
のすくわることゝをいのりたまえ

八

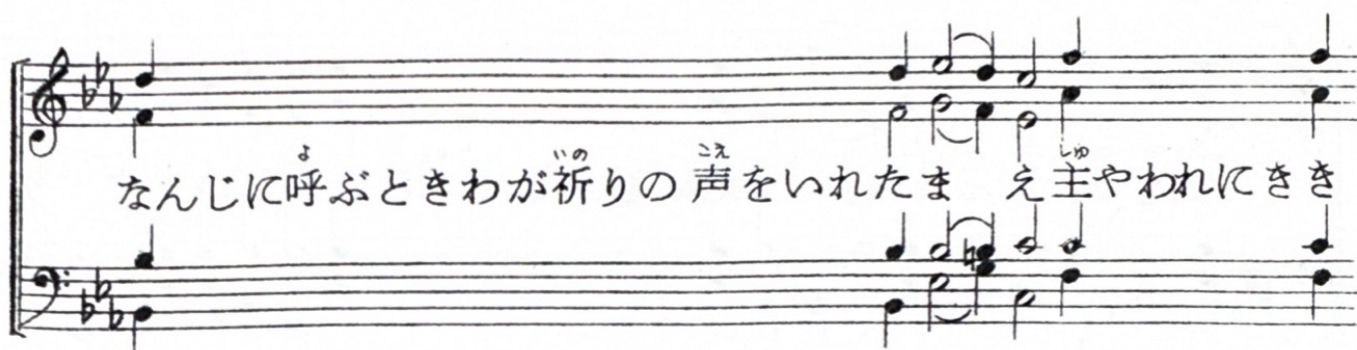


主やなんじに呼ぶすみやかにわれに至りたまえ主やわれにきき

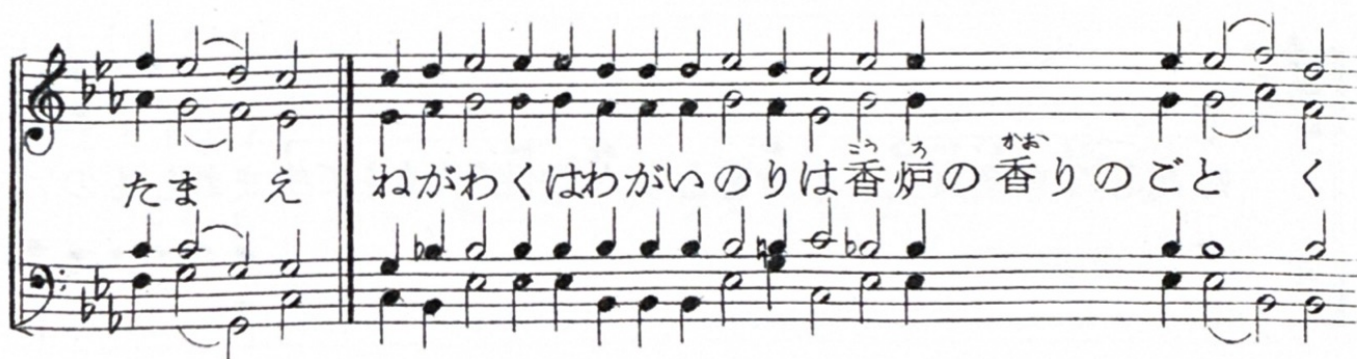
調



たま え ^{しゅ}主やなんじに呼ぶすみやかにわれにいた りたま え



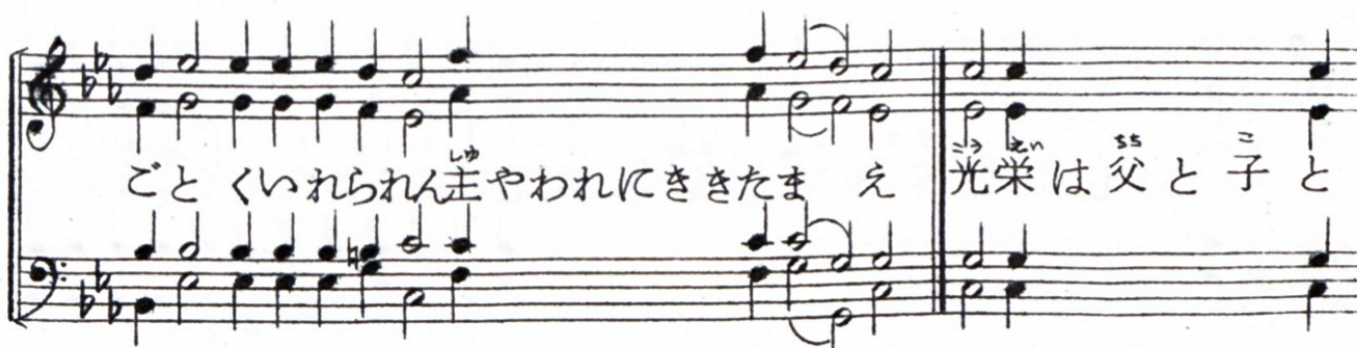
なんじに呼ぶときわが祈りの ^{こゑ}声をいれたま え ^{しゅ}主やわれにきき



たま え ねがわくはわがいのりは ^{かお}香炉の ^{かほ}香りのごと く



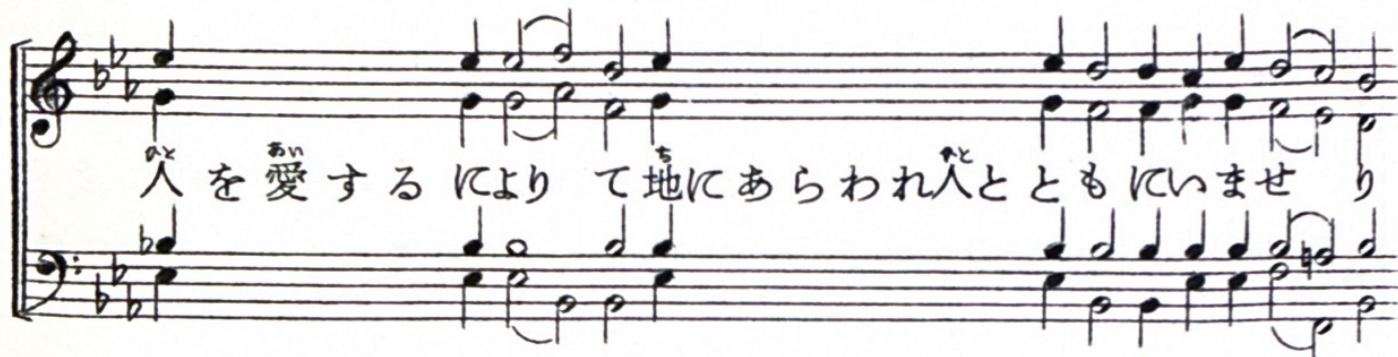
なんじが ^{かほ}顔のまえにのぼ りわが ^て手を ^あ挙ぐるは ^{くれ}暮の ^{まつり}祭の



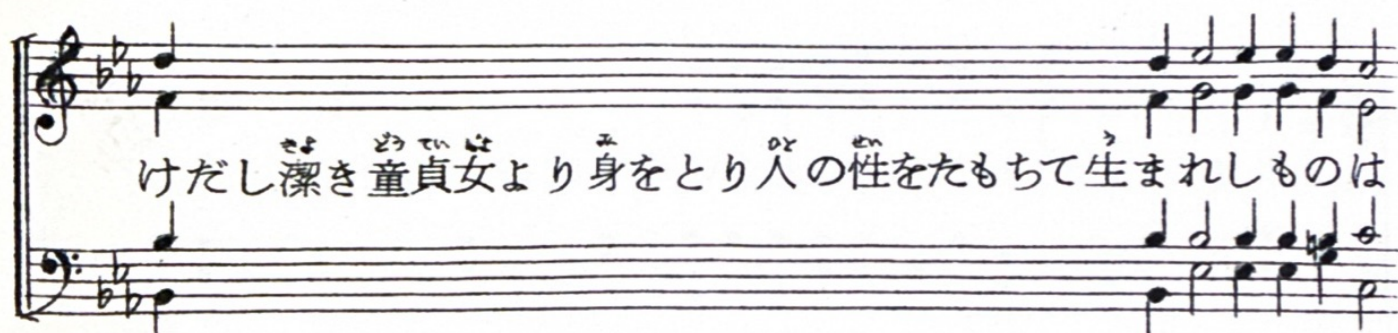
ごとく ^{しゅ}いられん ^{しゅ}主やわれにききたま え ^{こゝろ}光栄は ^{ちち}父と ^こ子と



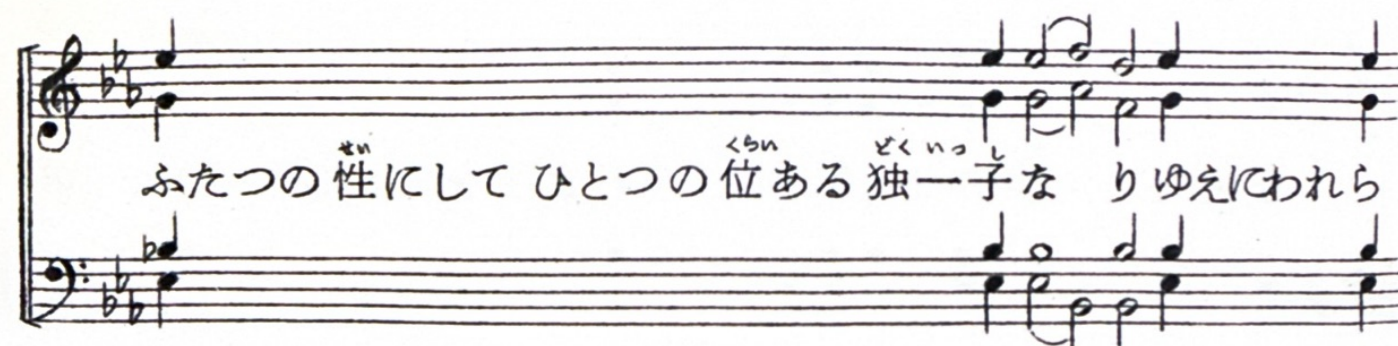
聖^{せい}神^{しん}に帰^{かえ}すいまもいつも世^よ 世^よにア^あシ^し 天^{てん}の主^{しゅ}は



人^{ひと}を愛^{あい}するによりて地^ちにあらわれ人^{ひと}とともにいませり



けだし潔^{さよ}き童^{どう}貞^{てい}女^{にょ}より身^みをとり人^{ひと}の性^{せい}をたもちて生^うまれしものは



ふたつの性^{せい}にしてひとつの位^{ぐわい}ある独^{どく}一^{いつ}子^しなりゆえにわれら



彼^{かれ}がじつに全^{まった}き神^{かみ}と全^{まった}き人^{ひと}となるをつたえて^{つた}えわが

37

神をうけみと む 笑を知らざるはは やわ が 霊の

れみをこうむらんことをかれにいのりたまえ

Detailed description: This block contains the first system of a musical score. It consists of two staves, a treble staff on top and a bass staff on the bottom, both in G major (one sharp) and 4/4 time. The melody is written in the treble staff, and the accompaniment is in the bass staff. The lyrics are written below the staves. The first line of lyrics is '神をうけみと む 笑を知らざるはは やわ が 霊の' with a '37' in the top right corner. The second line of lyrics is 'れみをこうむらんことをかれにいのりたまえ'.

聖ソフロニイ祝文 (一番)

聖にして福たる 常生なる天の父の聖なる光栄のおだやか

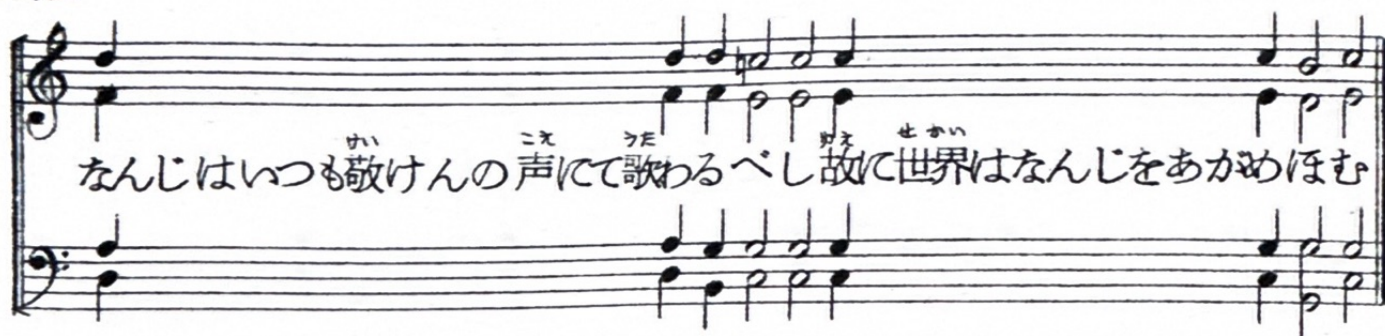
Detailed description: This block contains the second system of the musical score. It consists of two staves, a treble staff on top and a bass staff on the bottom. The melody is in the treble staff, and the accompaniment is in the bass staff. The lyrics are '聖にして福たる 常生なる天の父の聖なる光栄のおだやか'.

なる光イイスス ト やわれら日の入りに至り暮の光を見て

Detailed description: This block contains the third system of the musical score. It consists of two staves, a treble staff on top and a bass staff on the bottom. The melody is in the treble staff, and the accompaniment is in the bass staff. The lyrics are 'なる光イイスス ト やわれら日の入りに至り暮の光を見て'.

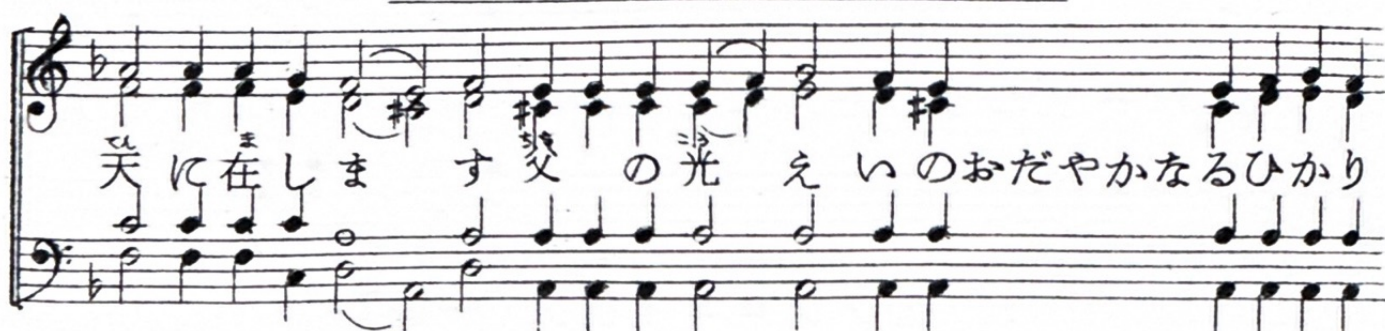
神 父 と 子 と 聖 神 を う た う 生 命 を 賜 う か み の 子 や

Detailed description: This block contains the fourth system of the musical score. It consists of two staves, a treble staff on top and a bass staff on the bottom. The melody is in the treble staff, and the accompaniment is in the bass staff. The lyrics are '神 父 と 子 と 聖 神 を う た う 生 命 を 賜 う か み の 子 や'.



なんじはいつも敬^{かい}けんの声^{こゑ}にて歌^{うた}わるべし故^{ゆゑ}に世界^{せかい}はなんじをあかめほむ

聖ソフロニイ 祝文 (二番)



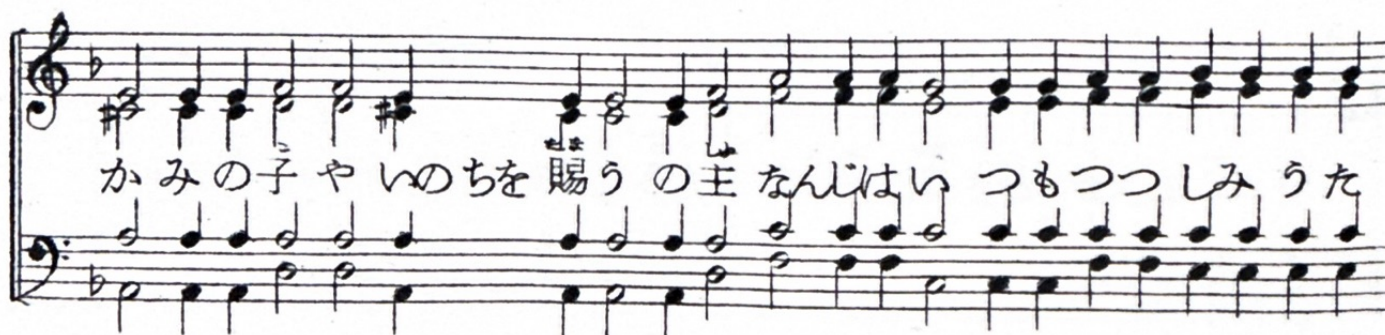
天^{てん}に在^まします父^{ちち}の光^{ひかり} えいのおだやかなるひかり



イイス^{いす}ス^すと やわれらくれにのぞんでいり日^ひを見



二^{ふた}たいのかみちちと子^ことせい神^{かみ} をあがめうた



かみの子^こやいのちを賜^{たま}うの主^{しゅ} なんじはいつもつつしみうた



わるべ し 故に世にあらゆるものはなんじを尊とみほむ

聖にして福たる
聖ソフロニイの祝文(番外)

デ・リオフスキ作曲



せいにしつゝふくたる常せいなる天のちちのせいなる



光えいのおだやかなる イイ ス ス やわれら



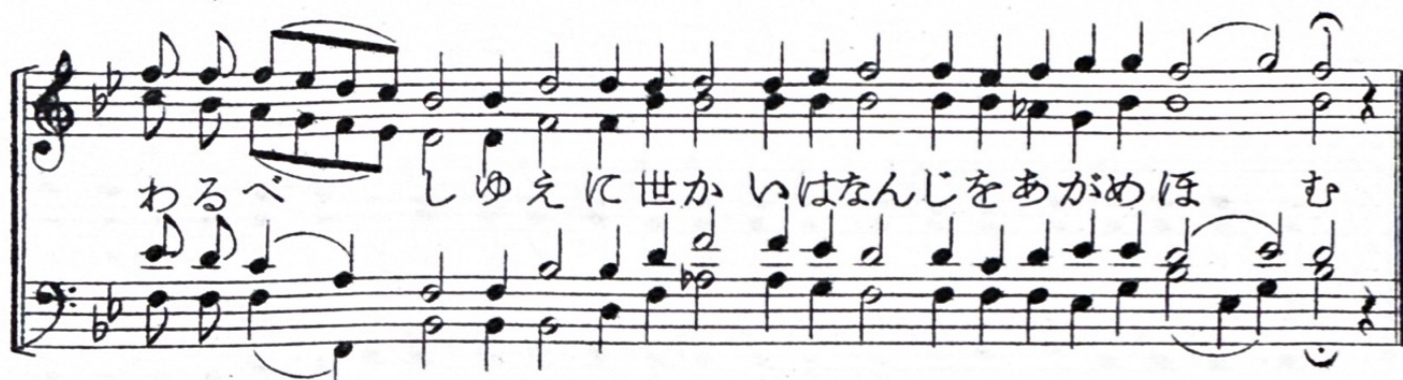
日の入りにいたりくれのひかりをみてかみち



ちと子とせい 神をうたう いのちを賜う



か みの 子 や なん じ は い つ も け い け ん の こ え に て う た



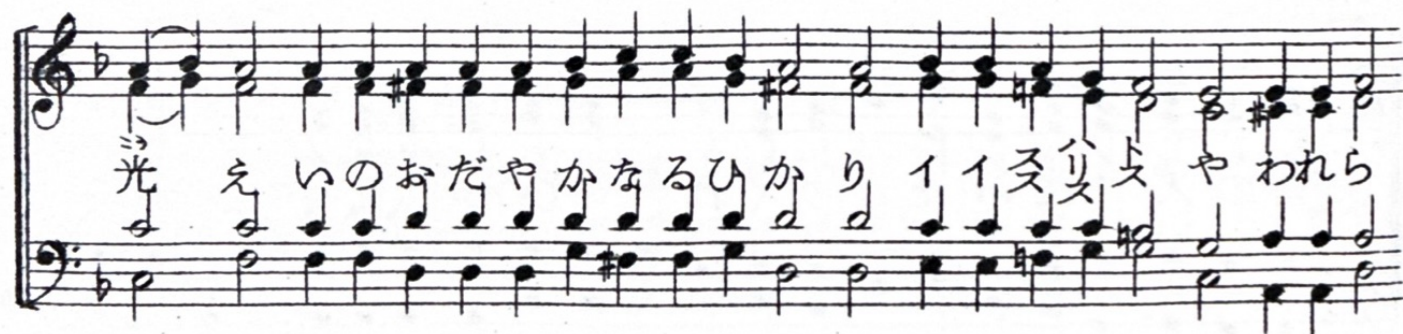
わ る べ し め え に せ か い は なん じ を あ が め ほ む

聖にして福たる(番外)

ドオレッツキイ 作曲
小原田 三郎 訳



せ い に し て ふ く た る 常 せ い な る 笑 の ち ち の せ い な る



光 え い の お だ や か な る ひ か り イ イ 笑 笑 や わ れ ら



日 の 入 り に い た り く れ の ひ か り を 見 て か み ち ち

と 子 と せい 神 を う た う い の ち を た ま う

か み の 子 や なん じ は い つ も け い け ん の こ え に て

う た わ る べ し ゆ え に 世 か い は なん じ を あ が め ほ む

土曜日

ポロキメン

主 は 王 た り 彼 は 威 厳 を 衣 た り 彼 は 威 厳 を 衣 た り

日曜日

主 の 諸 僕 や ち う 主 の 堂 に 立 つ も の や 今 主 を あ が め ほ め よ い ま 主 を

月曜日

あがめほめよ われ呼べば主はこれをきく 主はこれをきく

火曜日

主や願わくは なんじのいつくしみと憐れみは わが生命あるの日

水曜日

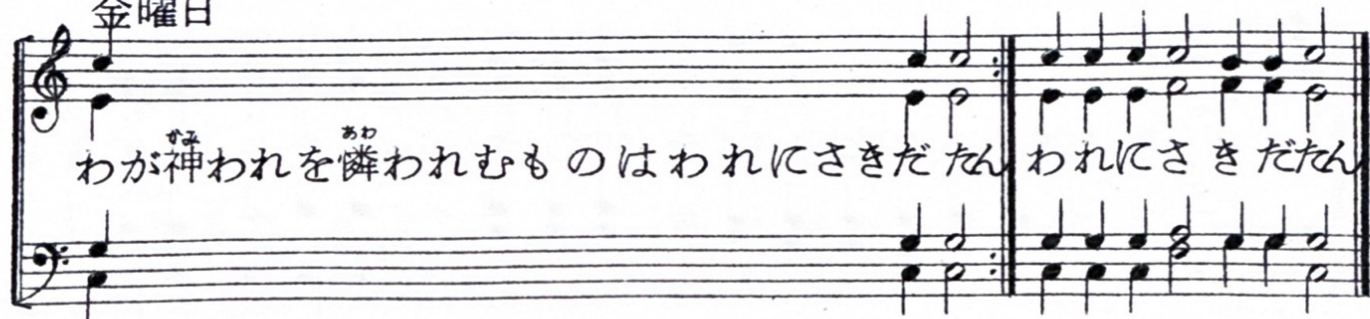
われにともなわん われにともなわん 神やなんじの名をもってわれを

救いなんじの力をもってわれをさばきたまえ なんじの力をもってわれを

木曜日

さばきたまえ わがたすけは天地を造りし主よりきたる 主よりきたる

金曜日



わが^{かみ}神^{あわ}われを隣^{あわ}われむものはわれにさきだたん われにさきだたん

抱神者シメオンの祝文(一番)

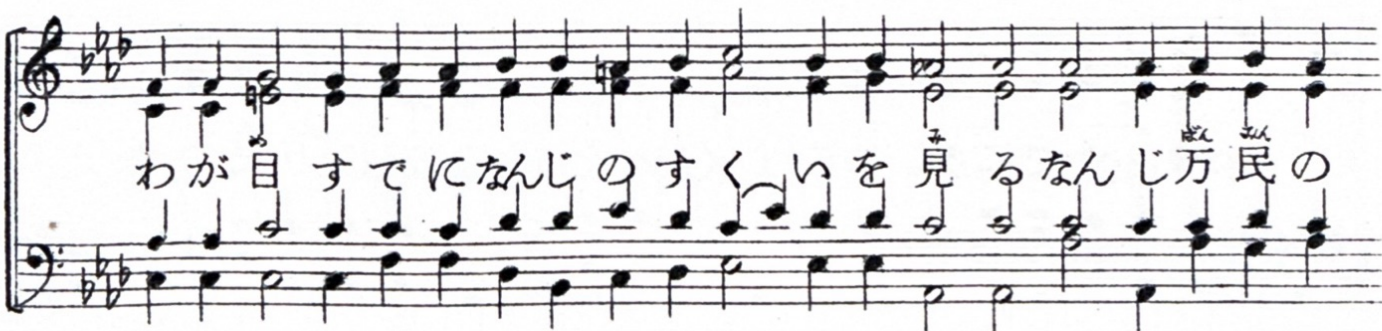
ヤコフ・チハイ作曲



主^しよいまなんじのことばにしたがつてなんじのほくを



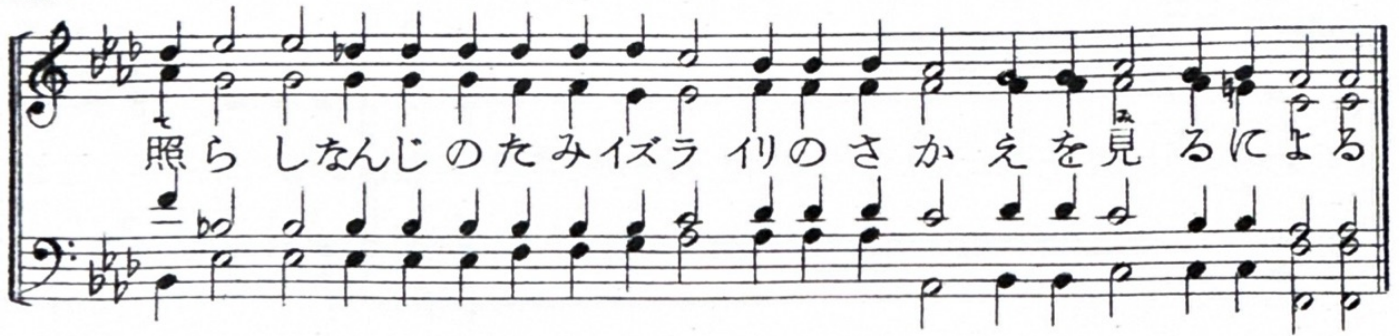
ゆるし^{あん}安^{ぜん}然^{ぜん}としてさらしむべしけだし



わが目^めすでになんじのすく^くいを見^みるなんじ万^{ばん}民^{みん}の



まえにそな^なるところのもののひかりとなつて異^い邦^{ぼう}を



照らしなんじのたみイブラ 仸のさかえを見るによる

抱神者シメオンの祝文(二番)

ロマキン作曲



主よいまなんじのことばにしがつてなんじのほくを



ゆるし安^{あん}然^{ぜん}としてさらしむべしけだし



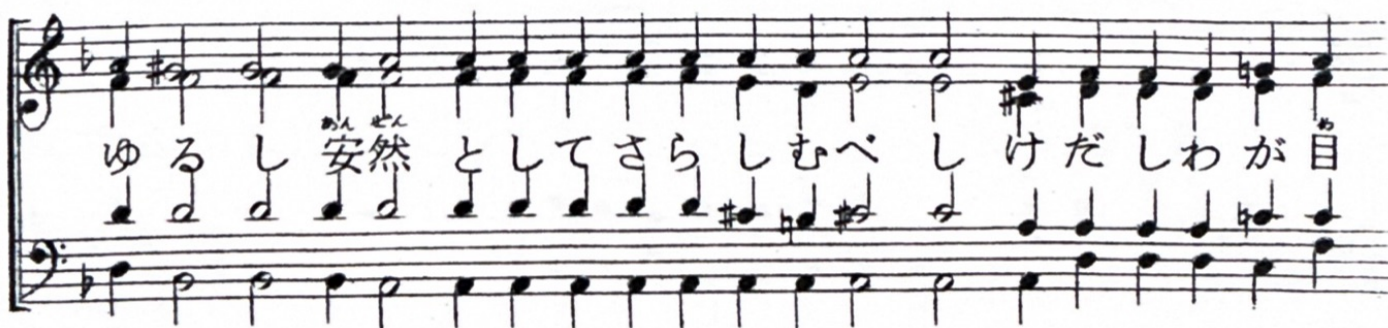
わが目^めすでになんじのすくいを見るなんじ^{ばん}万^{ばん}民^{みん}のまえに

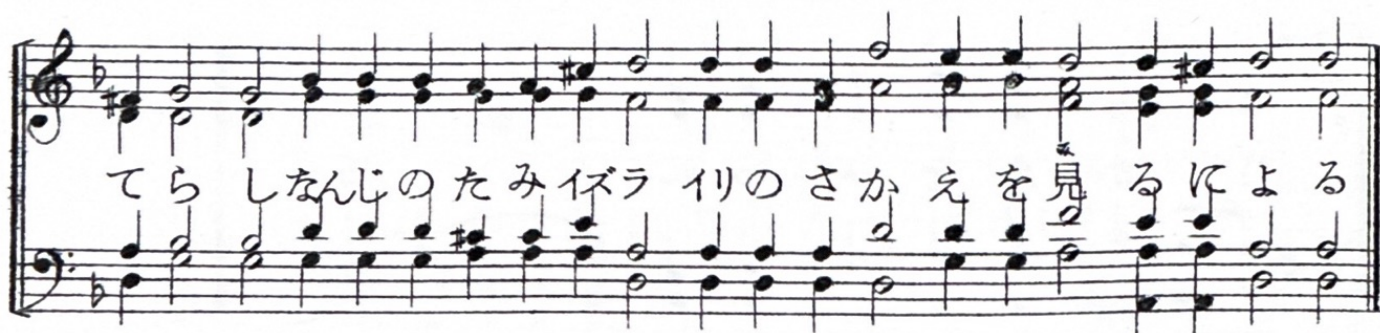


そなうるところのものひかりひかりとなって



抱神者シメオンの祝文(三番)





抱神者シメオンの祝文(四番)

ヤコフ・チハイ 作曲





抱神者シメオンの祝文(五番)

ヤコフ・チハイ作曲





生神童貞女や



願ねがわくは主しゅの名なはあがめほめられ今いまより世よ世よにいたらん

願ねがわくは主しゅの名なはあがめほめられ今いまより世よ世よにいたらん

早 課

至きとたかきには光ひかりえいかみに帰かへし地ちにはへい安あん降くだだり

三度

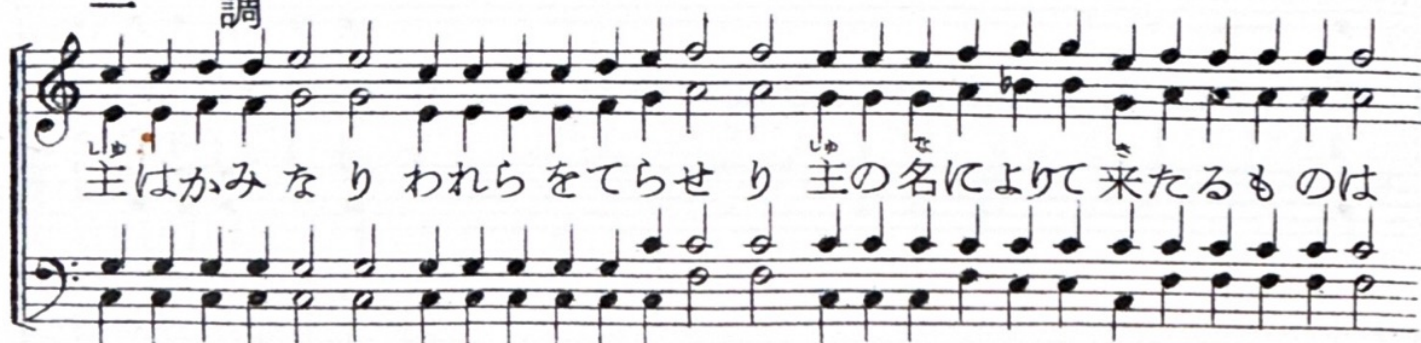
ひとにめぐみはのぞめり主しゅやわがくちびるを

二度

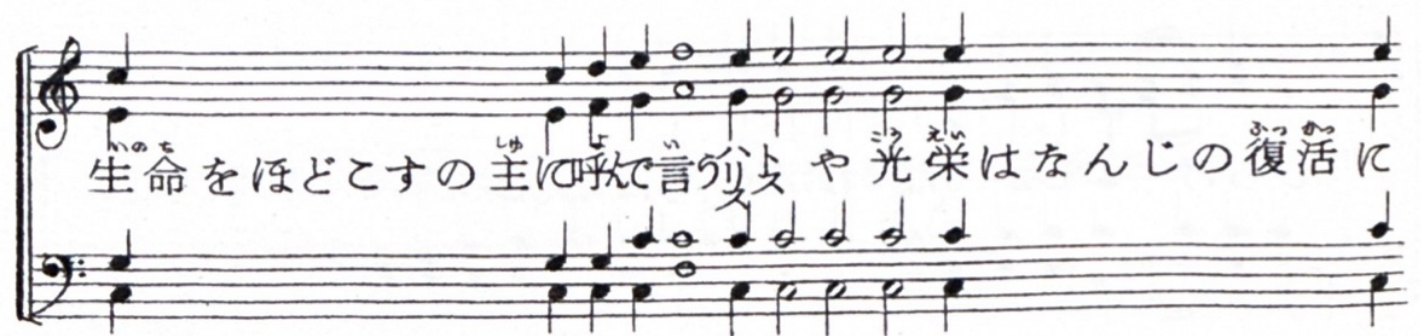
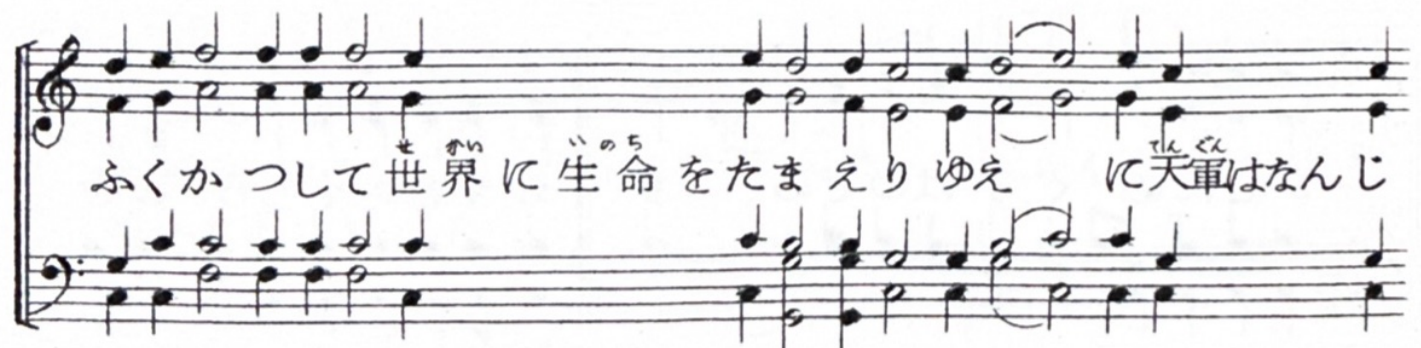
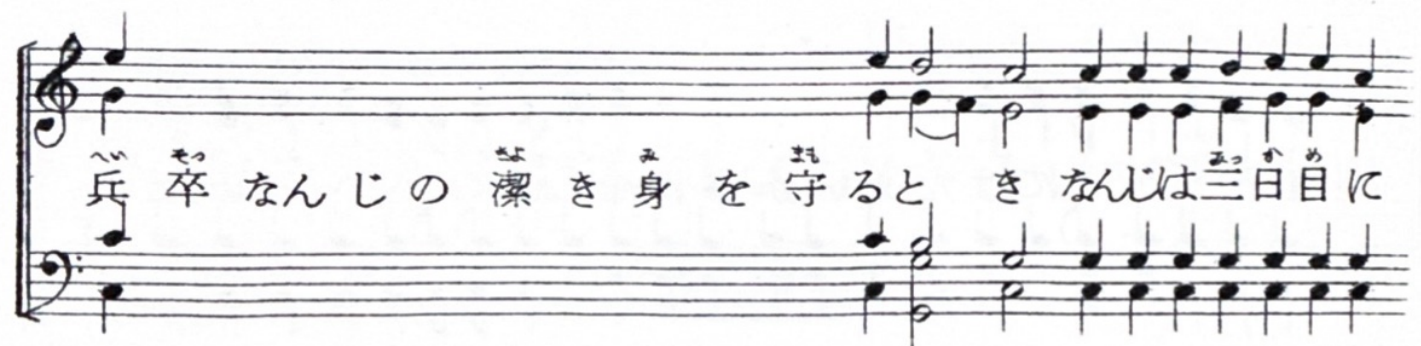
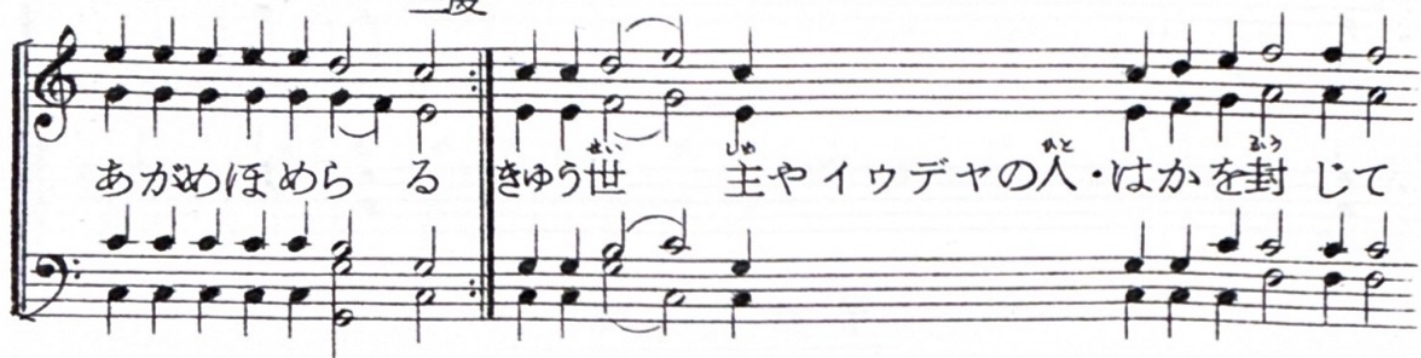
ひらけよしかせばわがくちはなんじの賛さん美びをあげんとす

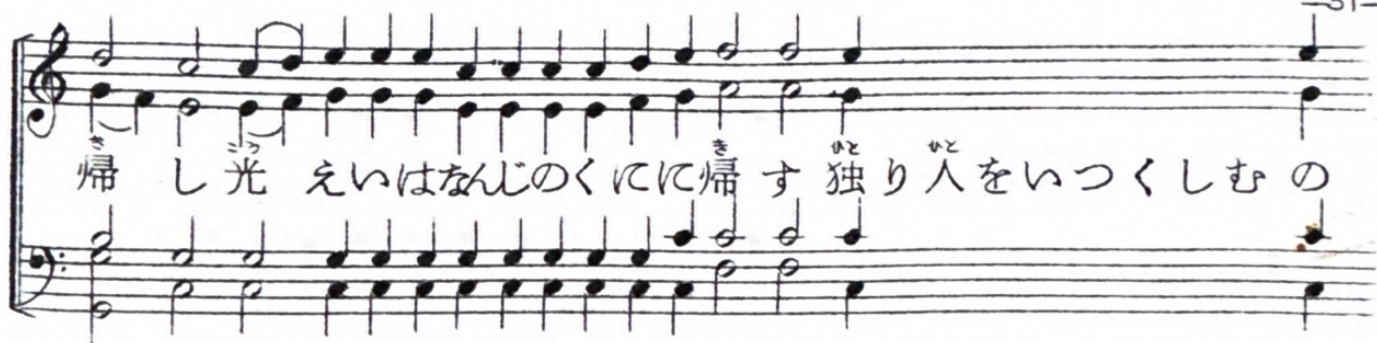
復活トロパリ

一 調

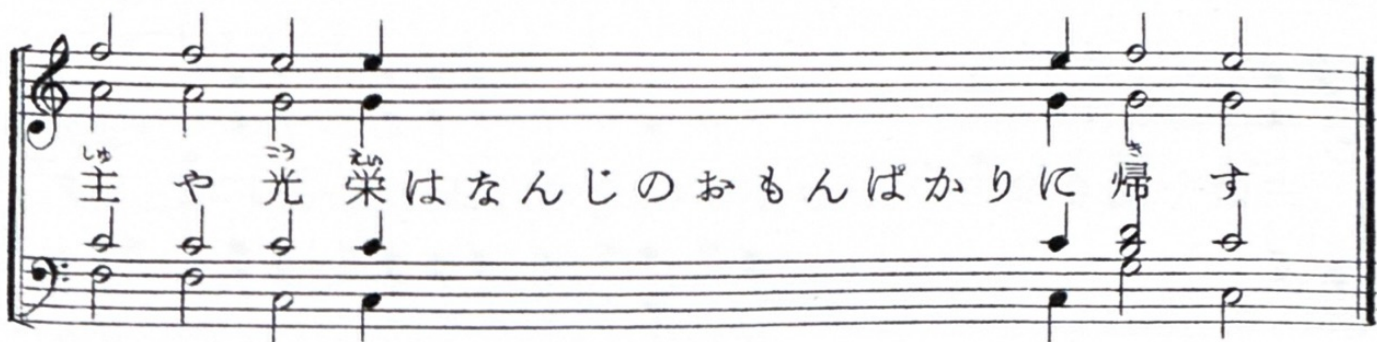


三度



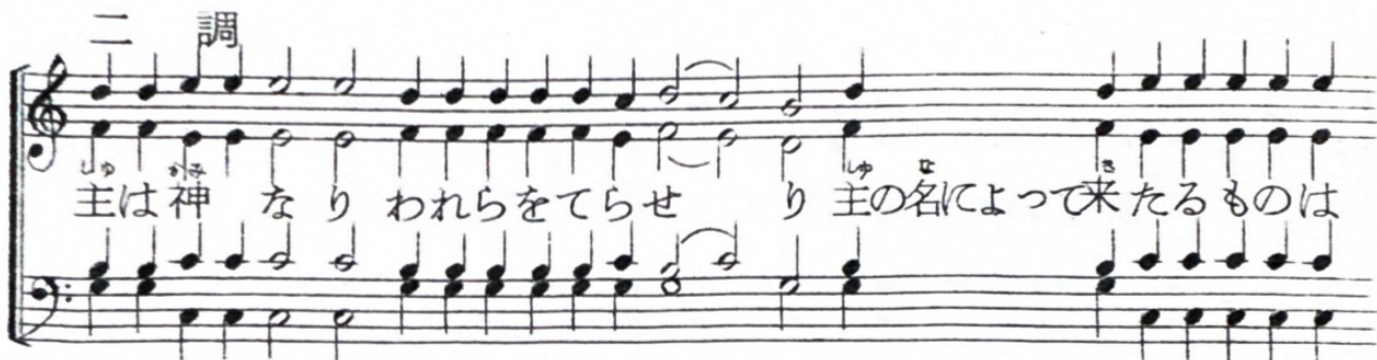


帰^きし光^{ひかり}えいはなんじのくにに帰^きす独^{ひと}り人をいつくしむの



主^{しゅ}や光^{ひかり}榮^{えい}はなんじのおもんばかりに帰^きす

二 調



主^{しゅ}は神^{かみ}なりわれらをてらせり主^{しゅ}の名^なによつて来^きたるものは

三度



あがめほめらる死^しせざるいのちやなんじ死^しに降^{くだ}りしとき



神^{かみ}の性^{せい}のひかりにてじごくをころせり死^しせしものを

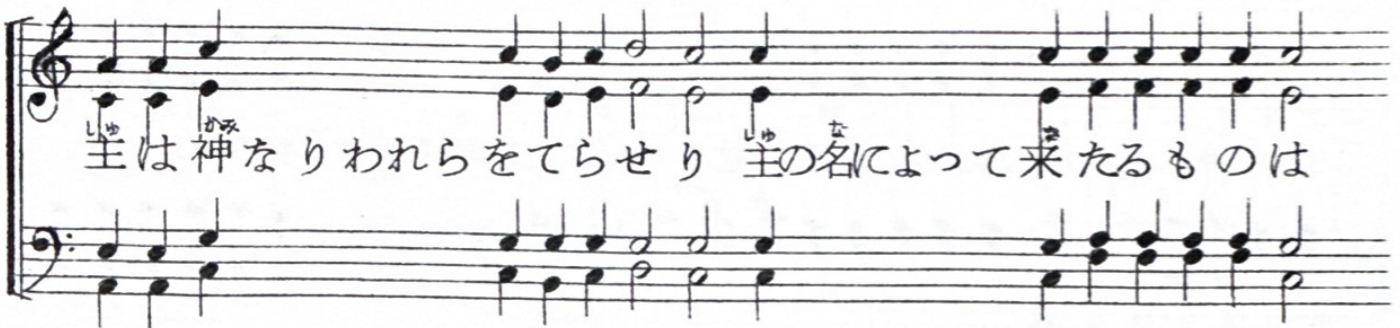


地下より復活せしめしとき天軍みな呼んで言えり



生命を賜うの主よわがかみや光えいはなんじに帰す

三 調



主は神なりわれらをてらせり主の名によって来たるものは

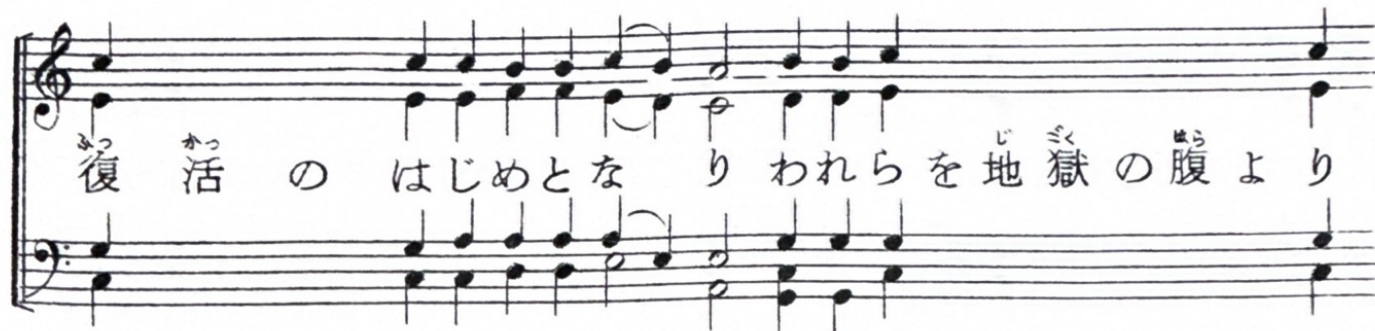
三度



あがめほめらるる天にあるものたのしめよ地にあるもの



よろこべよ主はそのひじの力をあらわして死をもつて死を亡ぼし

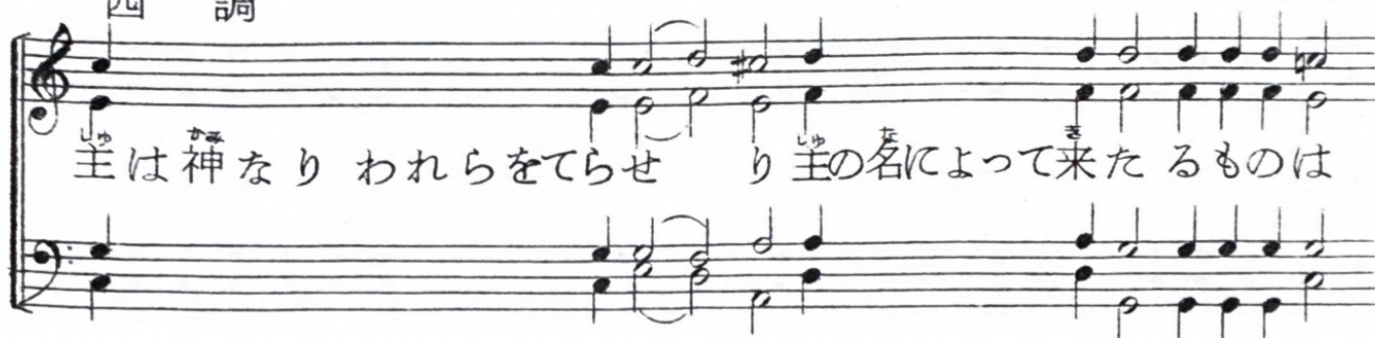


復活のはじめとなりわれらを地獄の腹より



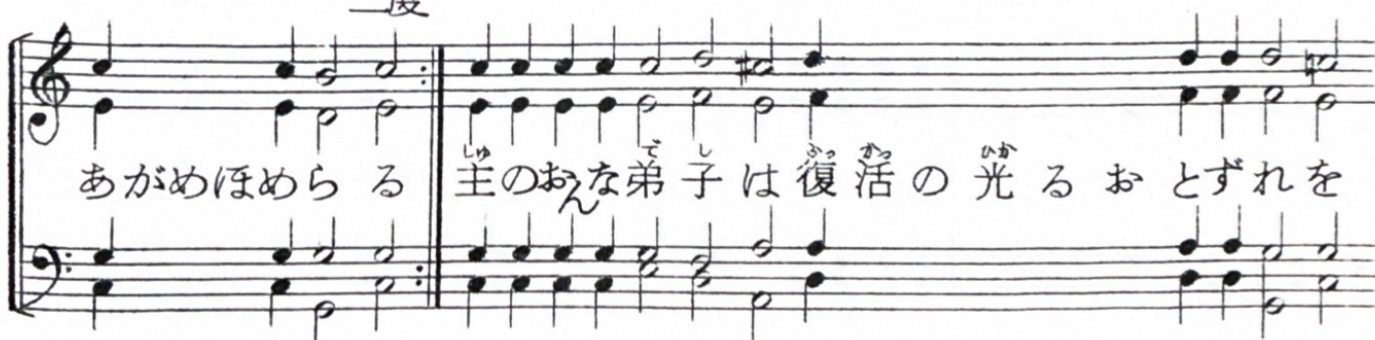
すくい世かいに大なるあわれみをたまえばなり

四 調

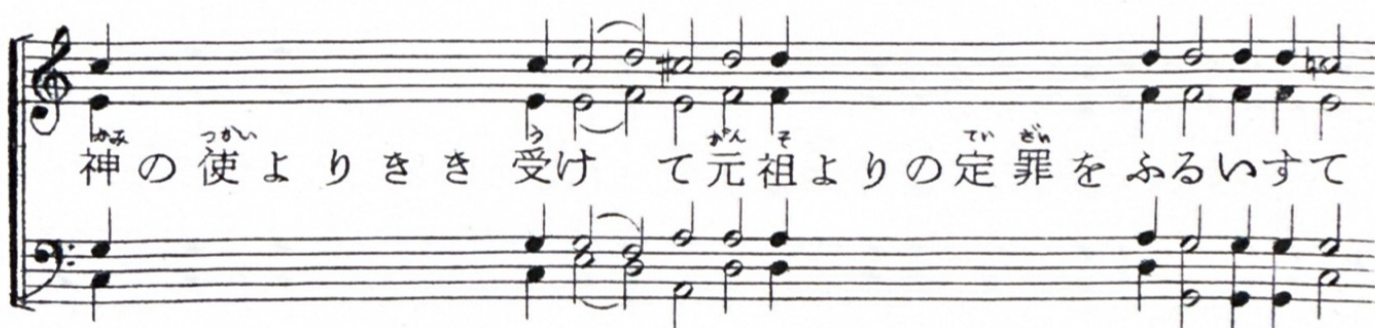


主は神なりわれらをてらせり主の名によって来たるものは

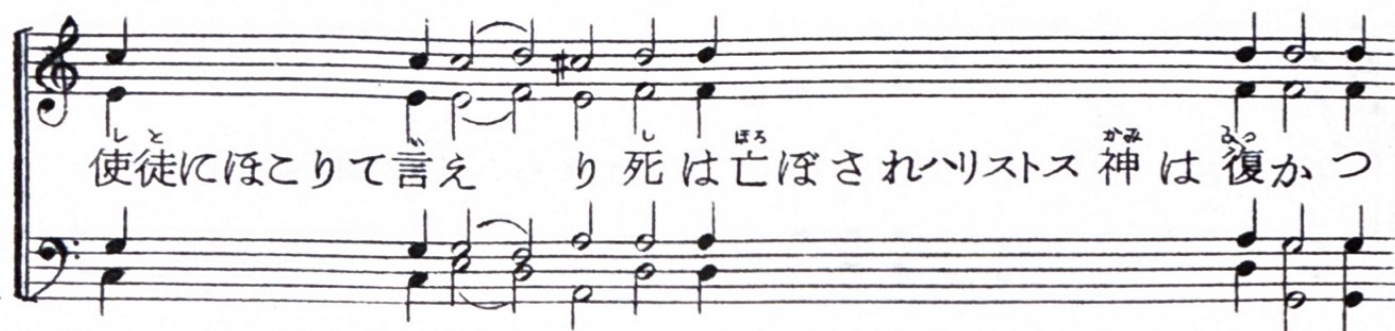
三度



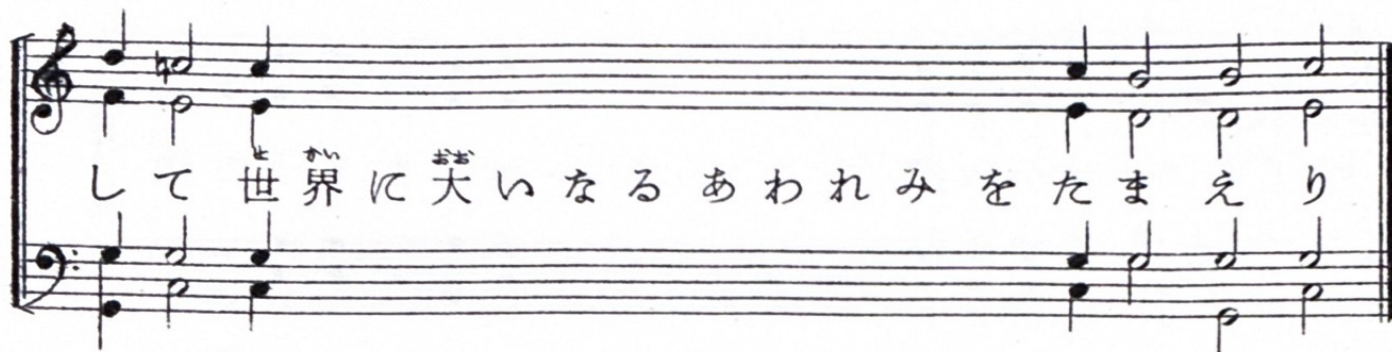
あがめほめらる主のおな弟子は復活の光るおとずれを



神の使よりきき受けて元祖よりの定罪をふるいすて

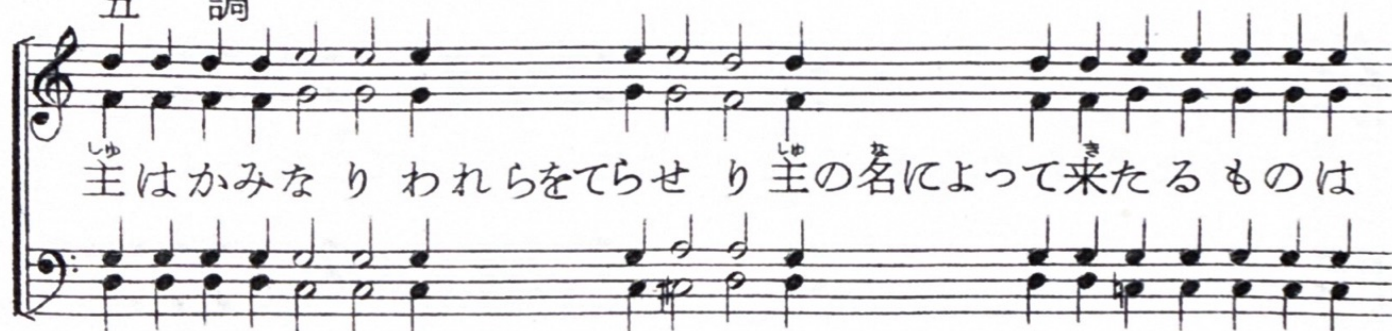


使徒にほこりて言えり死は亡ぼされリスス神は復かつ



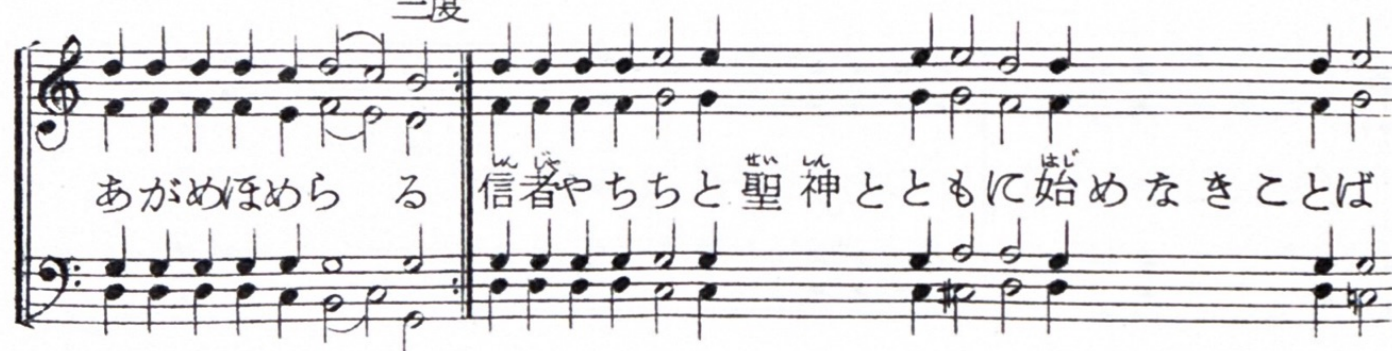
して世界に大いなるあわれみをたまえり

五 調



主はかみなりわれらをてらせり主の名によって来たるものは

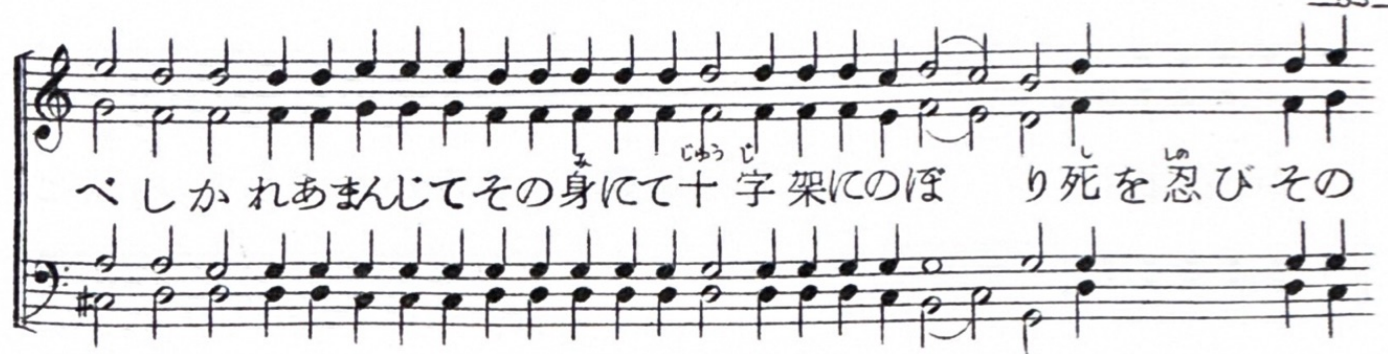
三度



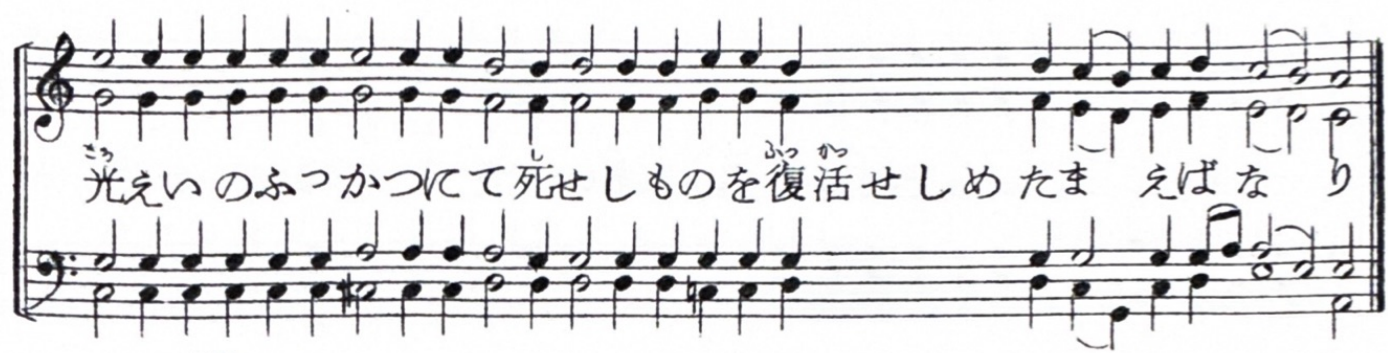
あがめほめらる 信者やちちと聖神とともに始めなきことば



わがすくいのために童貞女より生まれしものをほめ歌うて拝む



べしかれあま^まんじてその身^みにて十^{じゅう}字^じ架^かにのほり死^しを忍^{しの}びその



光^ひえいのふつかつにて死^しせしものを復^ふ活^{かつ}せしめたまえばなり

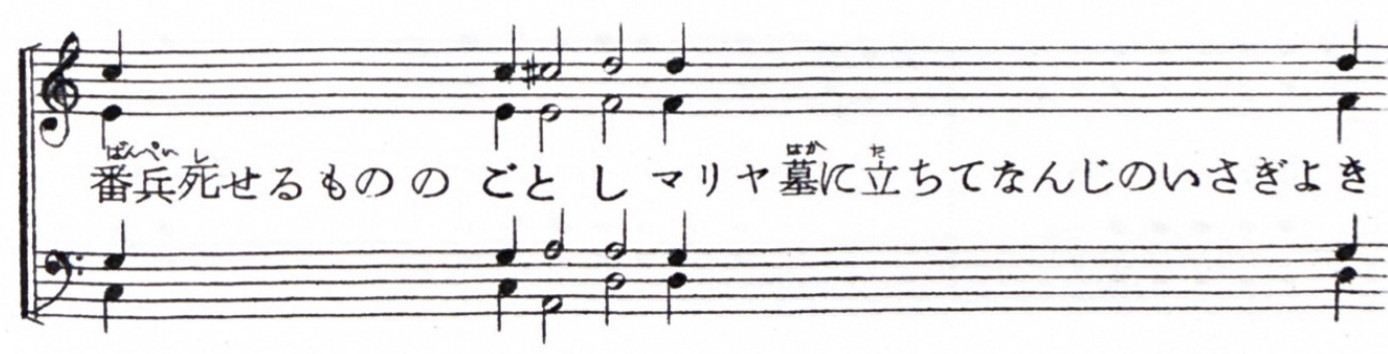
六 調



主^{しゅ}は神^{かみ}なりわれらをてらせり主^{しゅ}の名^なによつて来^きたるものは



あがめほめらる神^{しん}使^しの軍^{ぐん}なんじの墓^{はか}にあらわれしに



番^{ばん}兵^{べい}死^しせるもののごとしマリヤ墓^{はか}に立^たちてなんじのいさぎよき



からだをたずね りなんじは地獄にいざなわれずして 地獄を

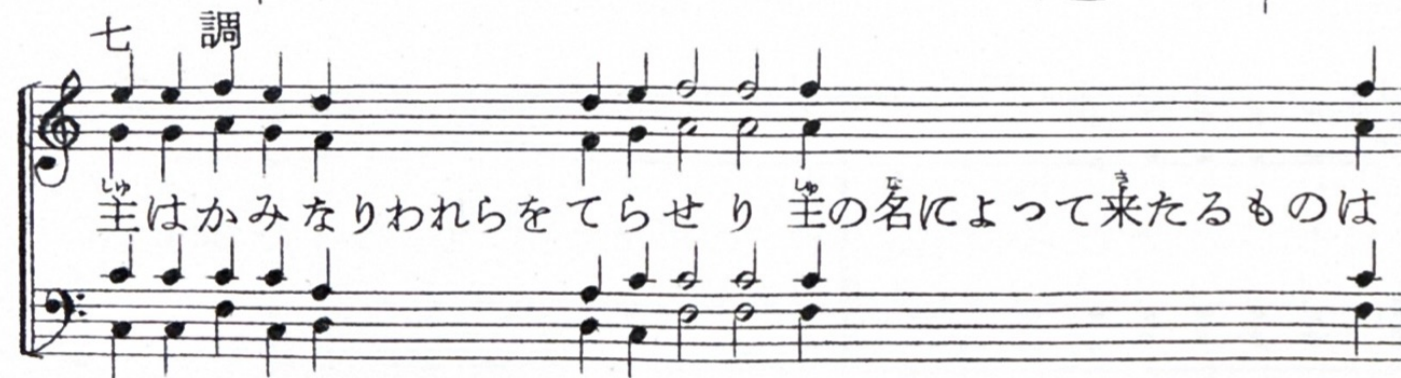


とりごにしいのちを賜うて処女にあいたまえり死より復活



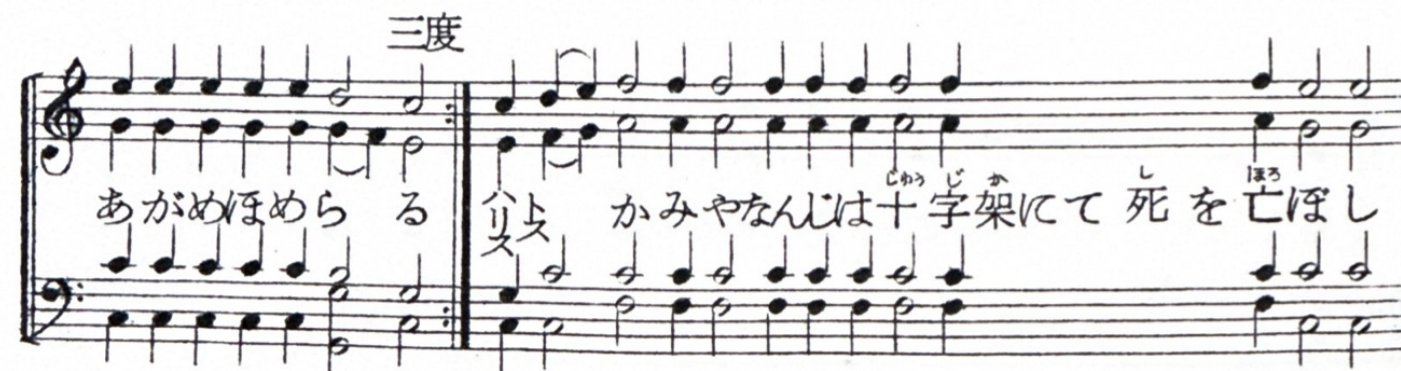
せし主や光えいはなんじに帰す

七 調



主はかみなりわれらをてらせり主の名によって来たるものは

三度



あがめほめらる 十字架にて死を亡ぼし

57

盗^{とろ}ぞくのために^{てんどう}天堂をひらきけい^し香女の^{かな}悲しみをなくさめ

使徒^{しと}に^{なんじ}なんじがふっかつして^{せかい}世界に^{おほい}大いなるあわれみを^{たま}賜いしを

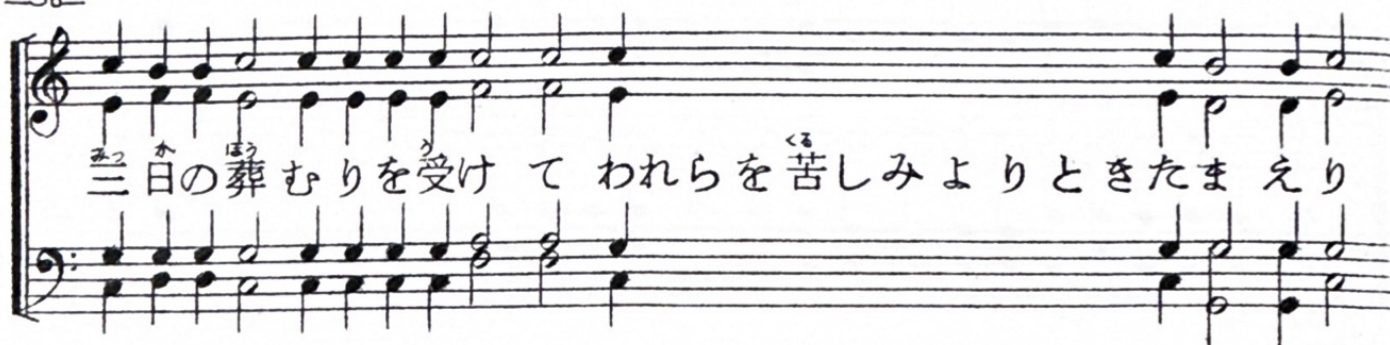
伝^{つた}えさせたまえり

八 調

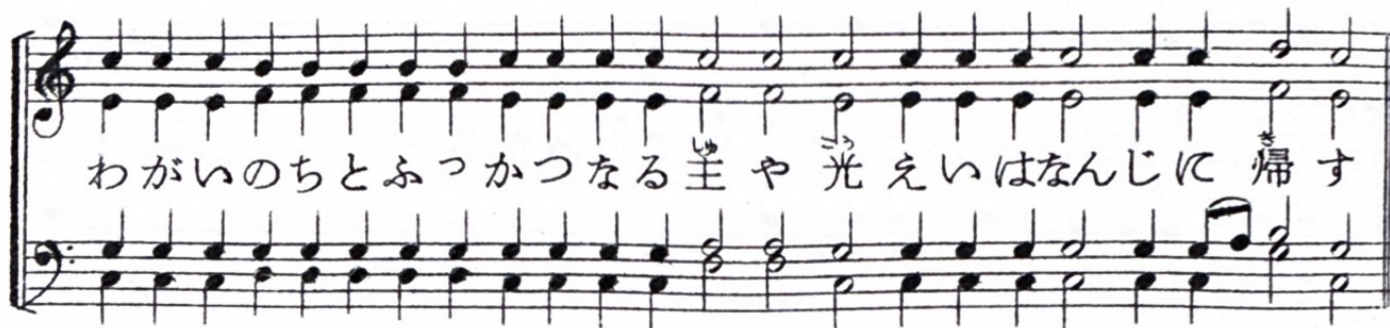
主^{しゅ}はかみなりわれらをてらせり主^{しゅ}の名によつてきたるものは

三度

あがめほめらるめぐみふかき主^{しゅ}やなんじはたかきよりくだり



三日の葬むりを受けてわれらを苦しみよりときたまえり



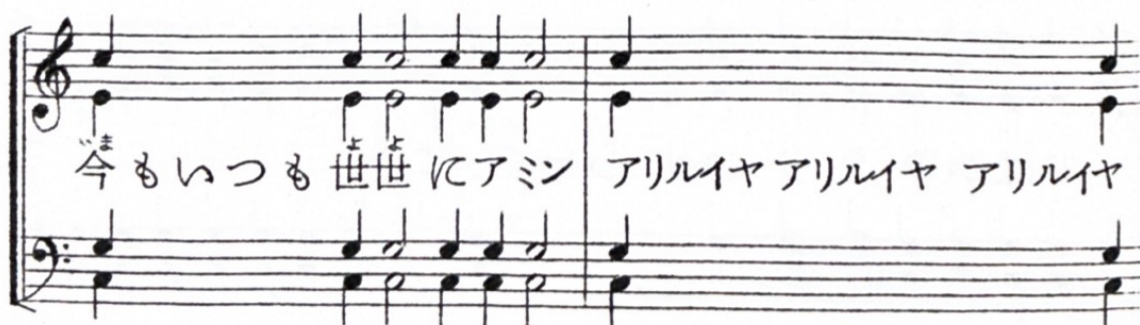
わがいのちとふつつなる主や光えいはなんじに帰す

「カ
フ
イ
ズ
マ」
読む時に歌う



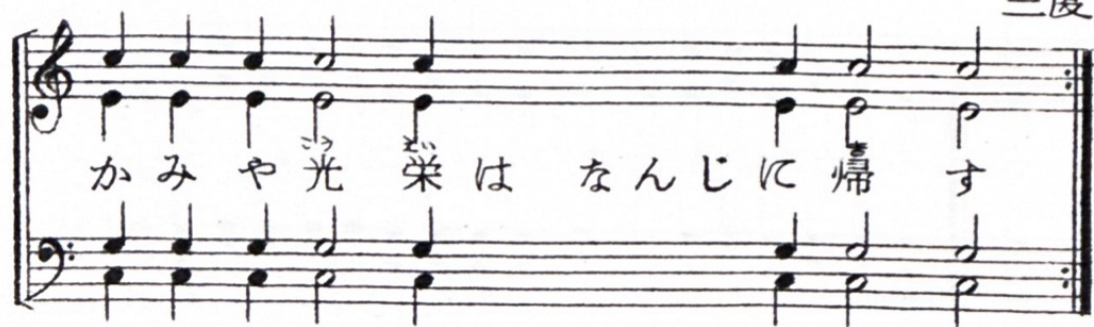
主憐れめ主憐れめ主憐れめよ 光栄は父と子と聖神に帰す

と聖神に帰す
次いで「光栄は父と子
「カヒズマ」を読む。
世にアミン」次いで
読経者「今も何時も世



今もいつも世世にアミン アリルイヤアリルイヤ アリルイヤ

三度



かみや光栄はなんじに帰す

終りて前の
主と子と聖神に
父と子と聖神に
憐れめよ光栄は

主の名を賛め揚げよ（一番）

主しゅの名なをほめあげよ主しゅの諸しよ僕ぼくやほめあげよ

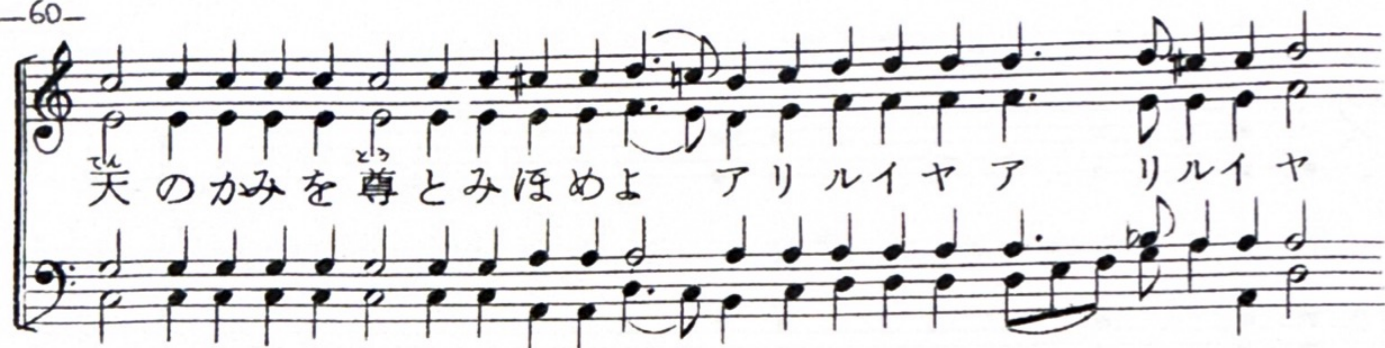
ア
リル イヤ アリル イヤ アリル イヤ

イエまエルサリムに在ましますの主しゅはシオンにあげほめらる

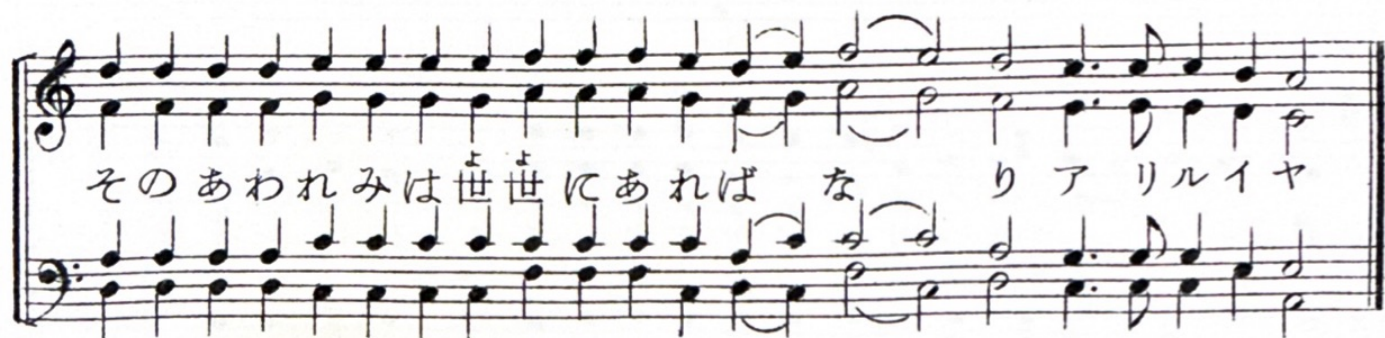
アリル
イヤ

主しゅを尊たうとみほめよ アリル イヤ アリル イヤ かれは

仁に慈じにしてそのあわれみは世よ世よにあれば なり アリル イヤ



天のかみを尊とみほめよ アリルイヤー リルイヤー



そのあわれみは世世にあれば なりア リルイヤー

主の名を賛め揚げよ (二番)



主の名をほめあげよ 主の諸ほくやほめあげよ



アリルイヤーアリルイヤーアリルイヤー イエルサリムに在しますの



主はシオンにあげめほめらる アリルイヤー 主を尊とみほめよ

かれは^い仁慈^じにして そのあわれみは^よ世^よに あればなり

アリルイヤー アリルイヤー アリルイヤー 天^{てん}のかみを尊^ととみ

ほめよ そのあわれみは^よ世^よに あればなり

アリルイヤー アリルイヤー アリルイヤー

主の名を賛め揚げよ（三番）

主^{しゅ}の名^なをほめあげよ 主^{しゅ}の諸^{しよ}ほくやほめあげよ

ア リル イヤ ア リル イヤ ア リル イヤ イエルサリムに

在し ます の まは シ オ に あ が め ほ め ら る

ア
リ
ル
イ
ヤ

主を尊 とみほめよ か れは 仁 慈 に し て そ の あ わ れ み は

世 世 に あ れ ば な り

ア
リ
ル
イ
ヤ
ア
リ
ル
イ
ヤ

ア
リ
ル
イ
ヤ

天 の か み を 尊 とみほめよ そ の



主の名を賛め揚げよ（四番）

ロマキン師作曲



ア
リ
ル
イ
ヤ

主を尊とみほめよかれは仁慈にしてその

あわれみは世世にあればなり

アリルイヤ

天のかみを尊とみほめよその隣れみは世世に

あればなり アリルイヤアリルイヤアリルイヤ

主の名を賛め揚げよ (五番)

ヤコフ・チハイ 師作曲

主の名をほめあげよひとびとや主を賛めあげよ

アリル イヤアリル イヤアリル イヤ イエル サリムに在し

ますの主はシオンに^いあかめほめらる^いアリル イヤ主を尊とみ

ほめよかれは^い仁慈にしてそのあわれみは^い世世にあればなり^いアリル イヤ

天のかみを尊とみほめよそのあわれみは

世世にあればなり アリル イヤアリル イヤアリル イヤ

主の名を賛め揚げよ（六番）

主しゅの名なをほめあげよ主しゅの諸しよ僕ぼくやほめあげよ アリルイヤー

アリルイヤー ア リル イ ヤ イエルサリムにに在ましますの

主しゅは シオンににあがめほめらる アリルイヤー 主しゅを尊そんとみほめよかれは

仁じん慈じにしてそのあわれみは世よ世よにあればなり アリルイヤー

天てんのかみを尊そんとみほめよそのあわれみは世よ世よにあればなり アリルイヤー

主の名を賛め揚げよ（番外）

オロロフ 作曲
金須嘉之進 訳



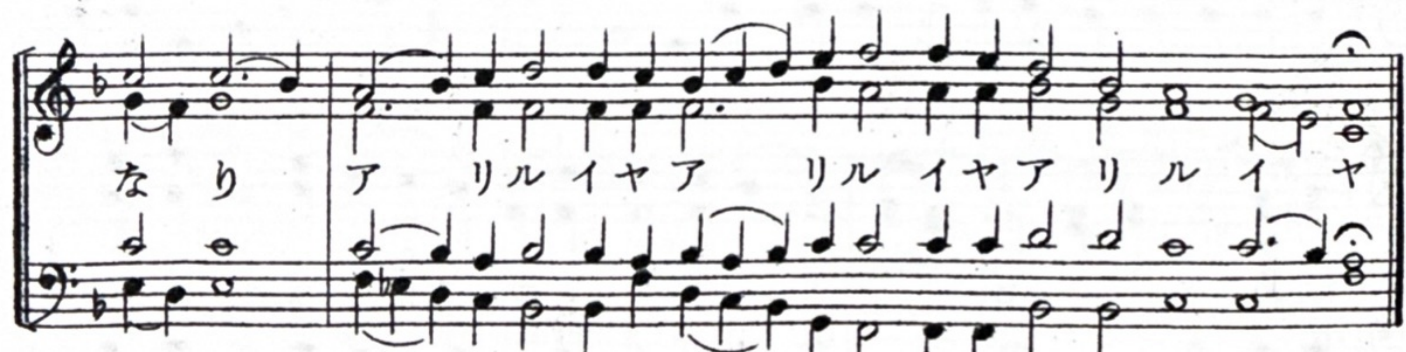
仁慈にして そのあわれみは世世 にあ ればな り



ア リル イヤア リル イヤア リル イ ヤ 天の



かみを尊 と みほめよ そのあわれみは世世 にあ れば



な り ア リル イヤア リル イヤア リル イ ヤ

主の名を賛め揚げよ (番外)

小原甲三郎 訳



主 の名をほめ あげよ 主の諸ほ くやほめ あ げよ

ア リ ル イ ヤ ア リ ル イ ヤ ア リ ル イ ヤ

イ エ ル サ リ ム に 在 し ま す の 主 は シ オ ン に あ が め ほ め ら る

ア
リ
ル
イ
ヤ

主 を 尊 と み ほ め よ か れ は 仁 慈 に し て そ の あ わ れ み は

世 世 に あ れ ば な り

ア
リ
ル
イ
ヤ

天 の か み を 尊 と み

ほ め よ そ の あ わ れ み は 世 世 に あ れ ば な り

ア
リ
ル
イ
ヤ

主の名を讃め揚げよ (ミ・ミノル)

ロストウスキイ作曲
東海林重吉 訳

主の名をほめあげよ 主の諸ほくやほめあげよ

アリル イヤ アリル イヤ ア リル イヤ

イエルサリムに在しますの主はシオンにあげほめらる

アリル
イヤ

主を尊とみほめよ かれは仁慈にして

そのあわれみは世世にあればなり

アリル
イヤ

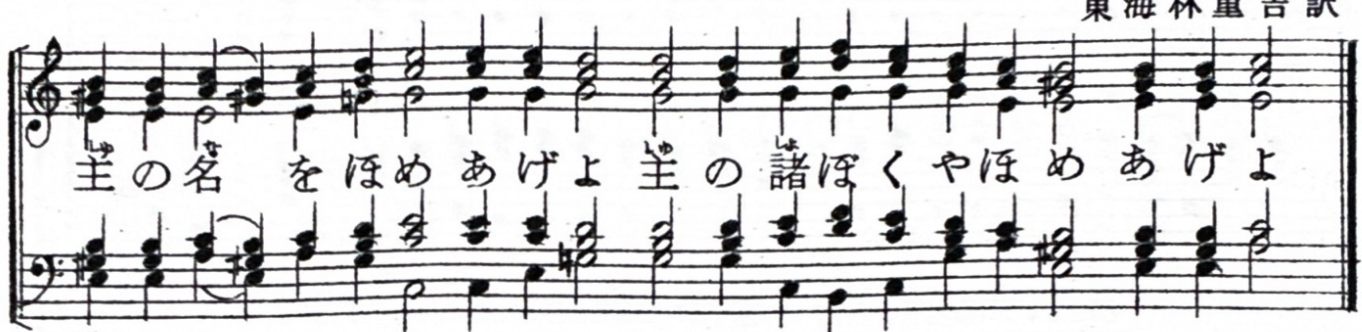


天のかみを尊とみほめよそのあわれみは世にあればなり

ア
リ
ル
イ
ヤ

主の名を讃め揚げよ (ラ・ミノル)

ロストウスキイ 作曲
東海林重吉 訳



主の名をほめあげよ主の諸ほくやほめあげよ



ア
リ
ル
イ
ヤ
ア
リ
ル
イ
ヤ
ア
リ
ル
イ
ヤ



イエルサリムに在しますの主はシオンに아가めほめらる

ア
リ
ル
イ
ヤ



主を尊とみほめよかれは仁慈にして

そのあわれみは世世にあればなり

アリルイヤ

天のかみを尊とみほめよそのあわれみは世世にあればなり

アリルイヤ

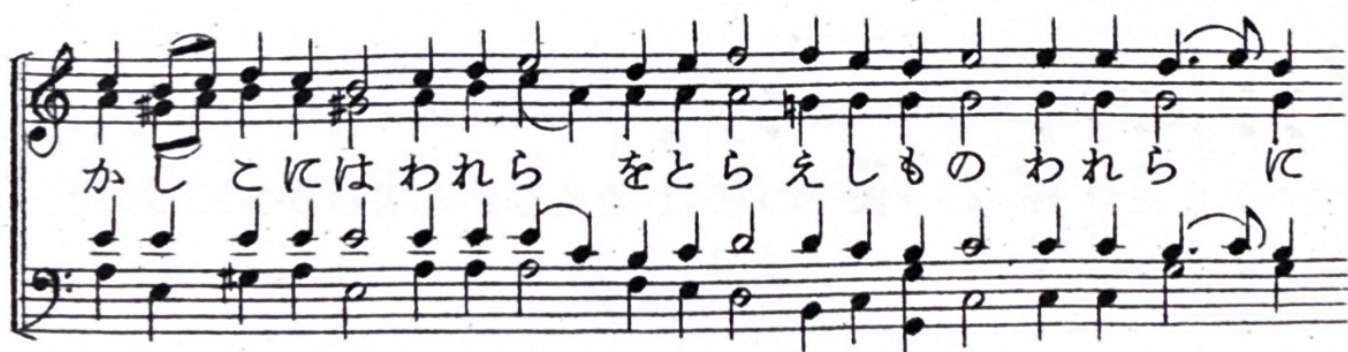
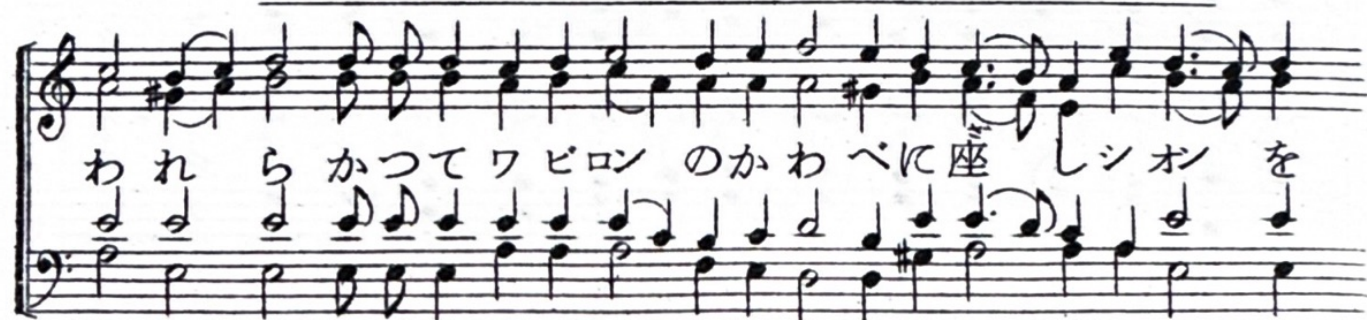
百三十六聖詠(蕩子・審判・出地堂の各主日に歌う)

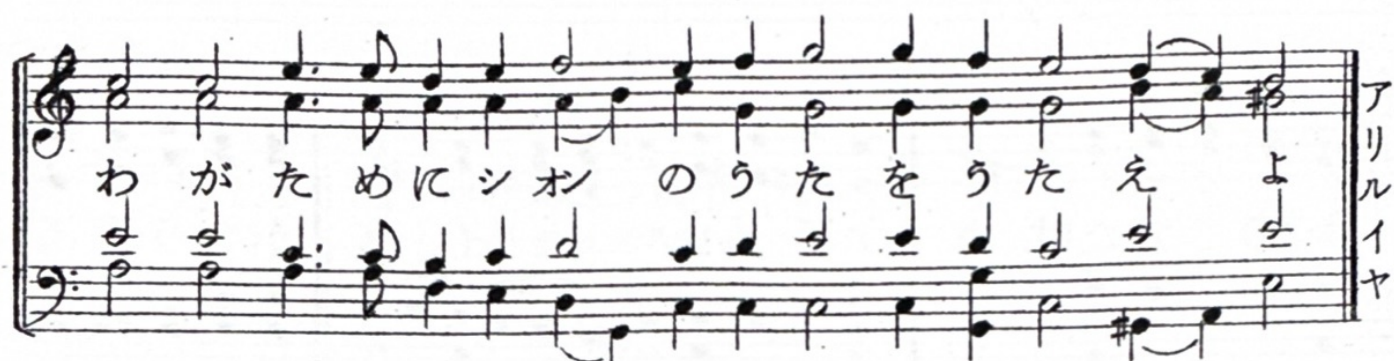
われらバビロンのかわぎしに座し

シオンをおもてシオンをおもて

なけりア リルイヤ

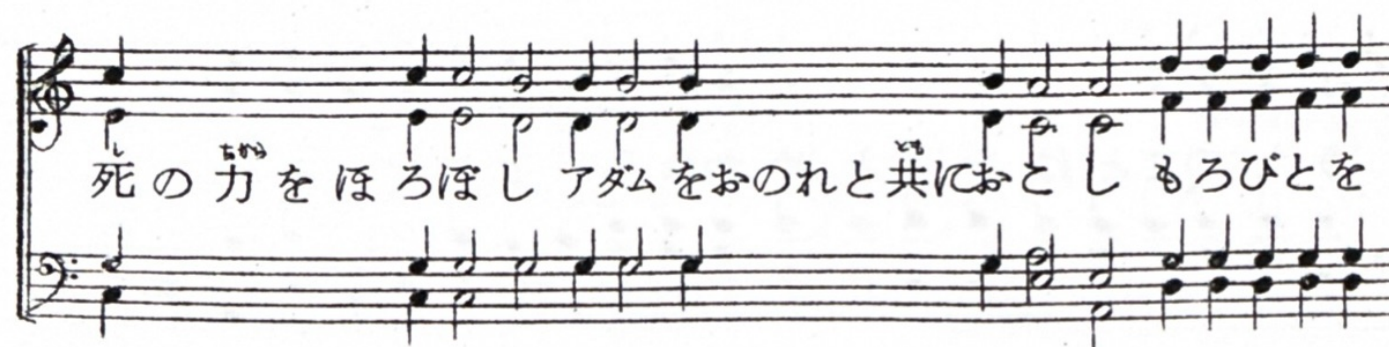
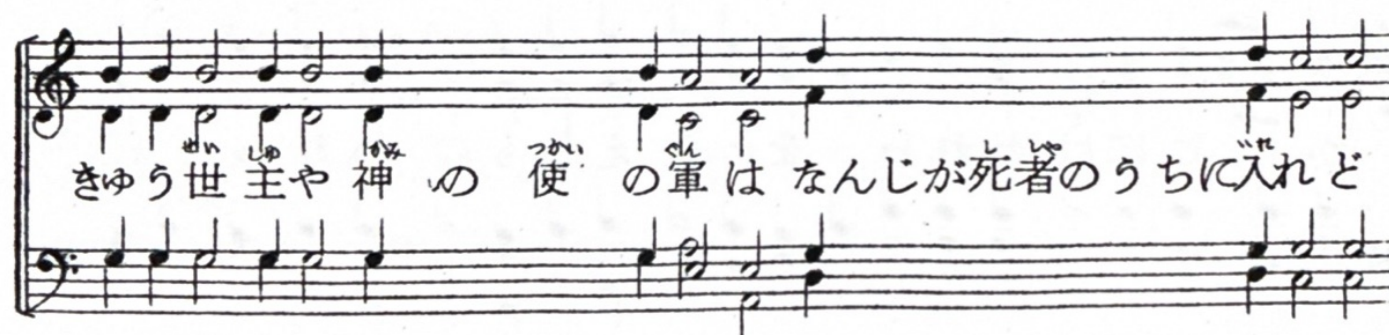
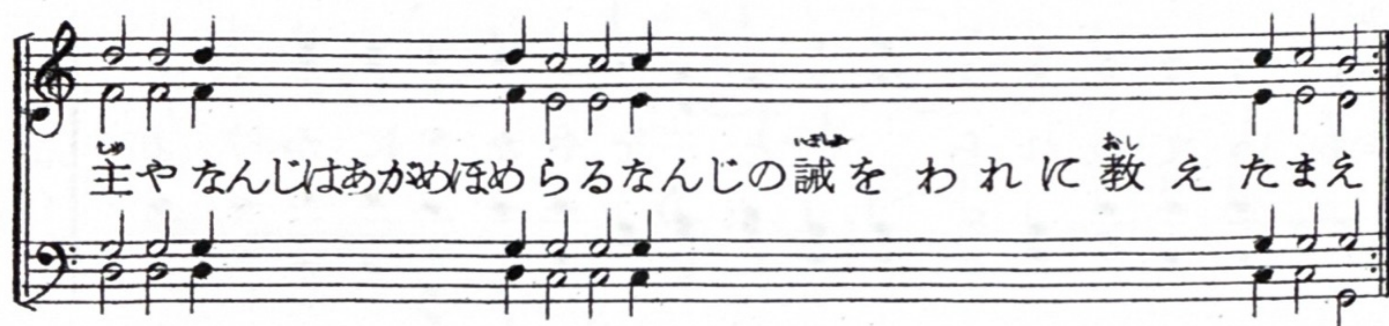
百三十六聖詠(番外) 蕩子・審判・出地堂の各主日に歌う

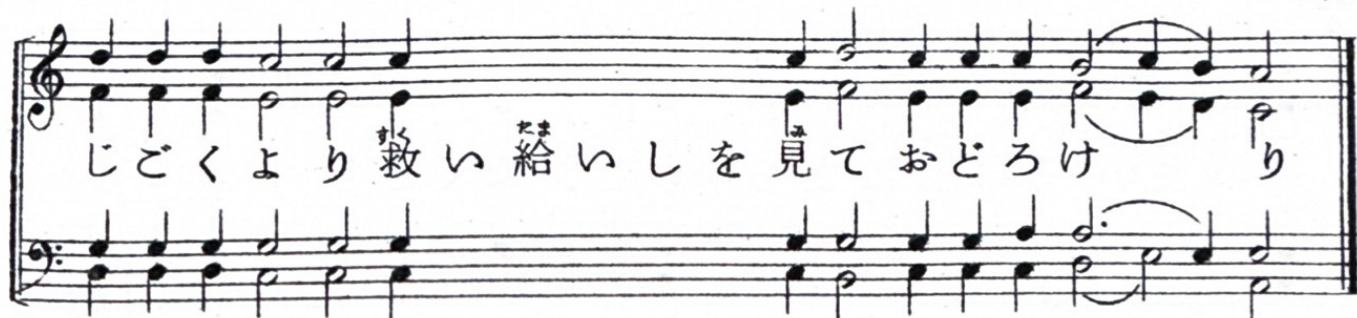




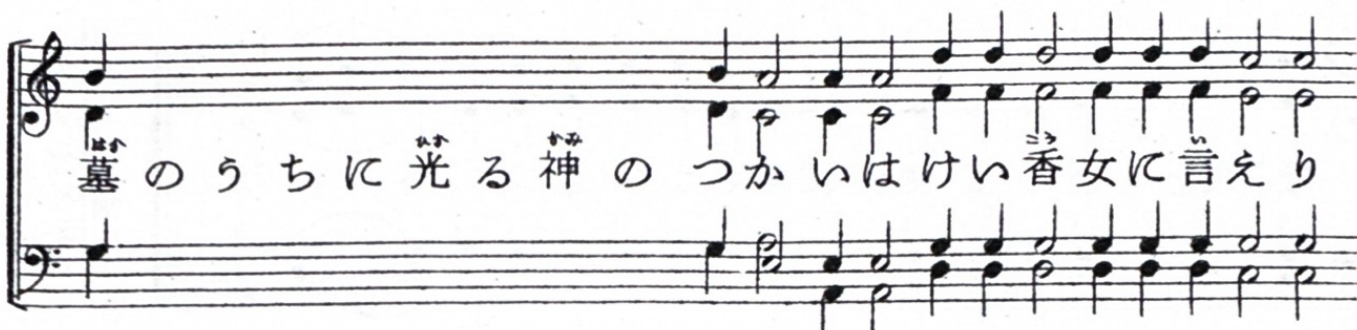
アリル
イヤ

復活讃詞

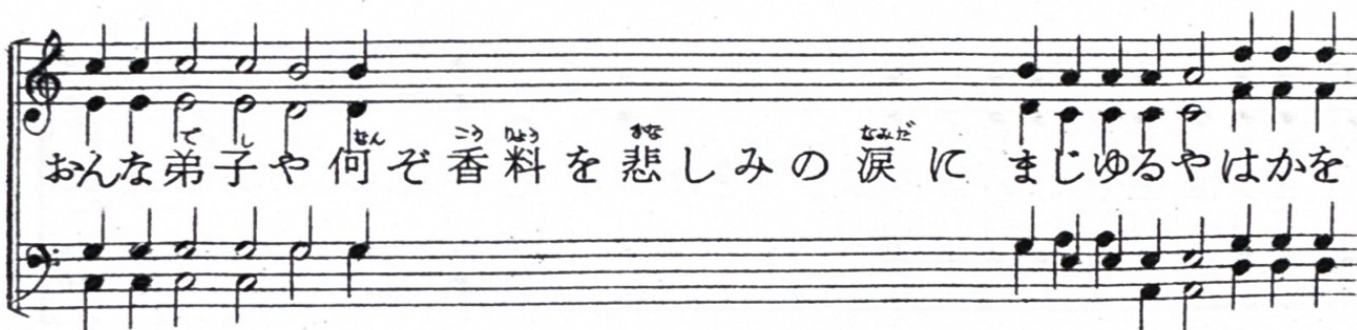




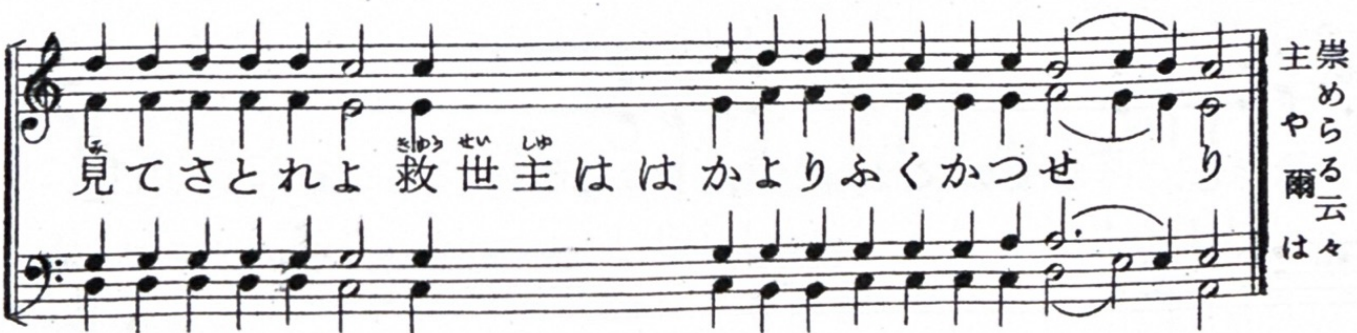
じごくより救^{すく}い給^{たま}いしを見ておどろけり



墓^{はか}のうちに光^{ひか}る神^{かみ}のつかいはけい香女^{かうにょ}に言えり



おんな弟子^{でし}や何ぞ香料^{かうりょう}を悲^{かな}しみの涙^{なみだ}にまじゆるやはかを

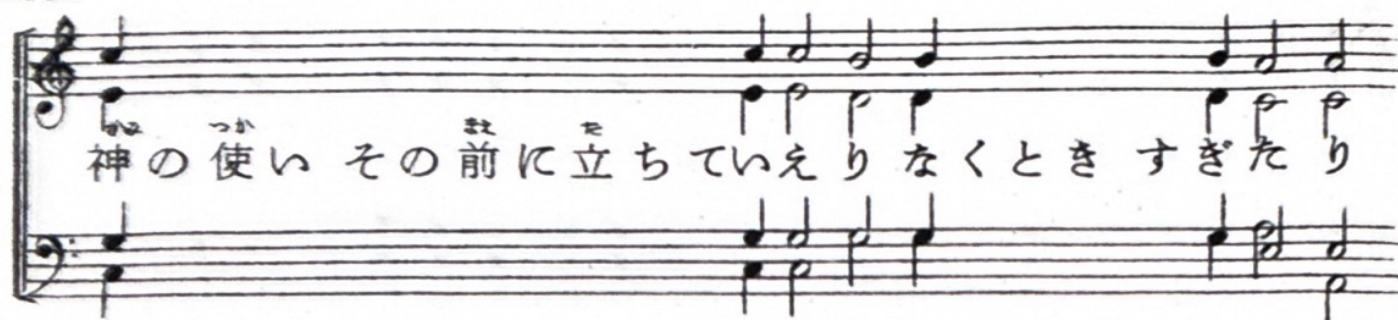


見てさとれよ救世主^{きゅうせいしゅ}ははかよりふくかつせり

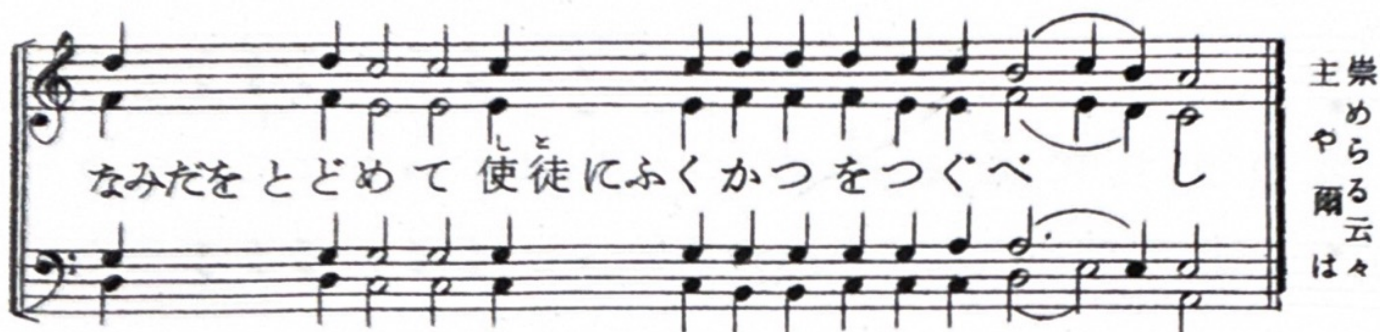
主崇
やめ
らる
爾云
は々



携^か香女^{かうにょ}はあさはやくなきてなんじの墓^{はか}にゆきしに

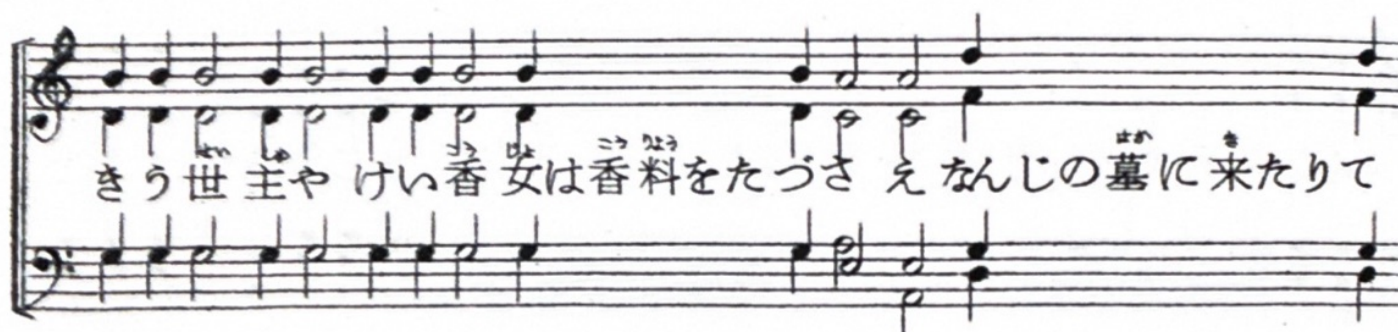


神の使つかい その前まへに立たちていえりなくときすぎたり

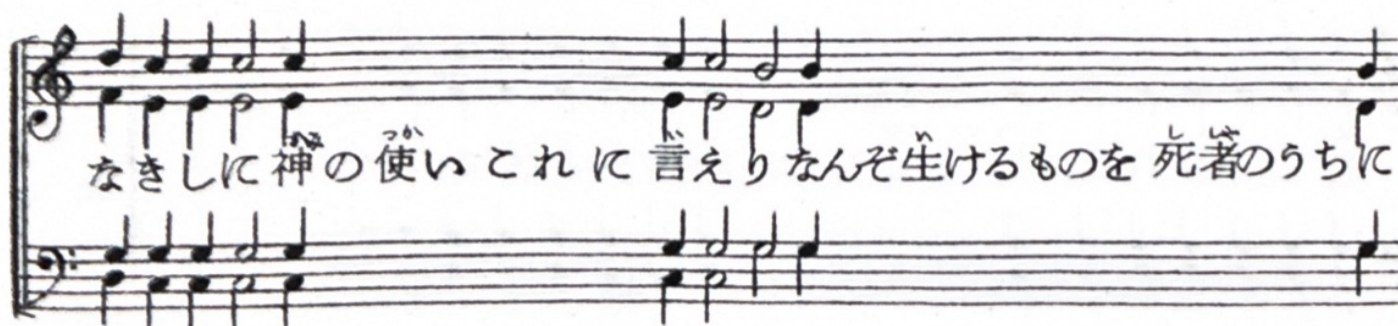


なみたをとどめて使徒しとにふくかつをつぐべ

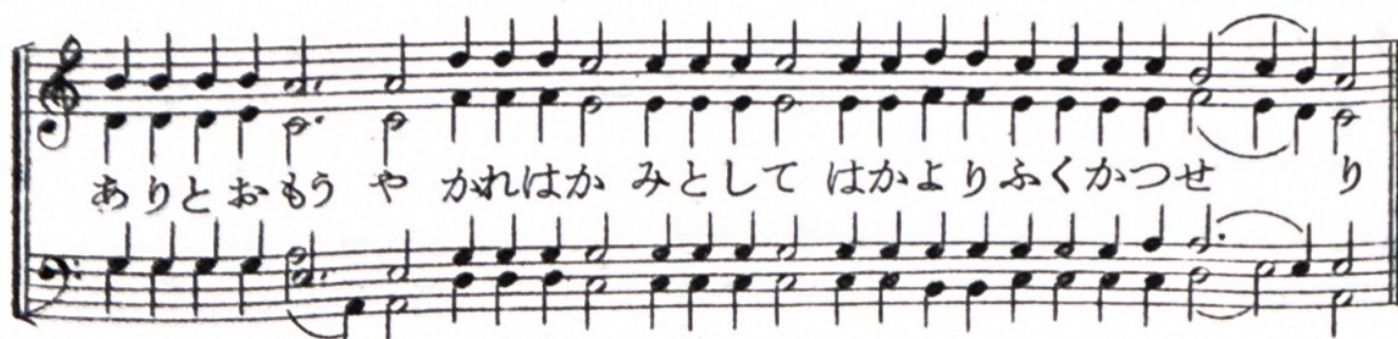
主しゅめらる云々
や爾なんは々



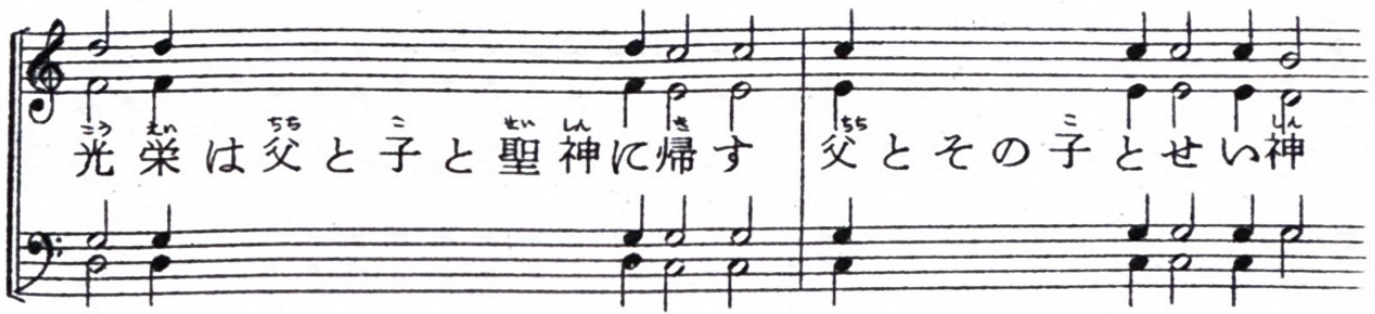
きう世よ主しゅや けい香かう女にょは香料かうりょうをたづさ えなんじの墓はかに來きたりて



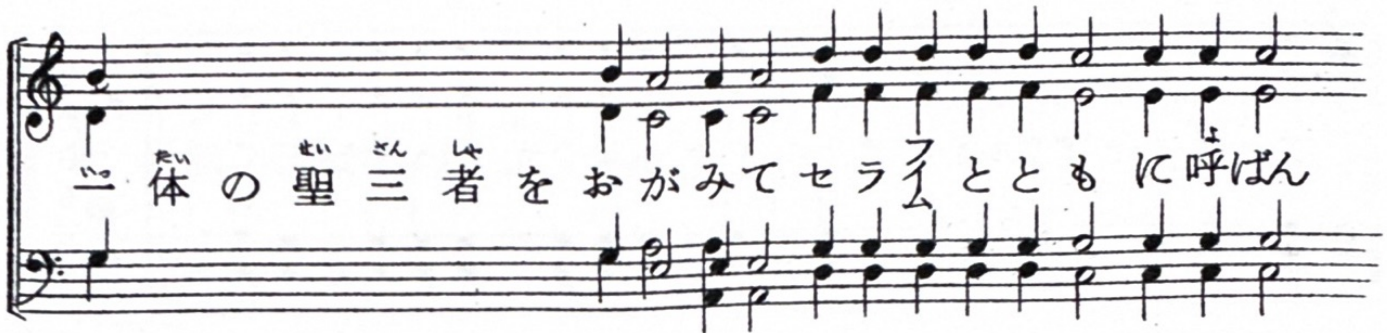
なきしに神かみの使つかいこれに言いえりなんぞ生いけるものを死い者のうちに



ありとおもう やかれはかみとしてはかよりふくかつせり



光^{ひかり}榮^{えい}は父^{ちち}と子^こと聖^{せい}神^{しん}に帰^{かへ}す 父^{ちち}とその子^ことせい神^{しん}



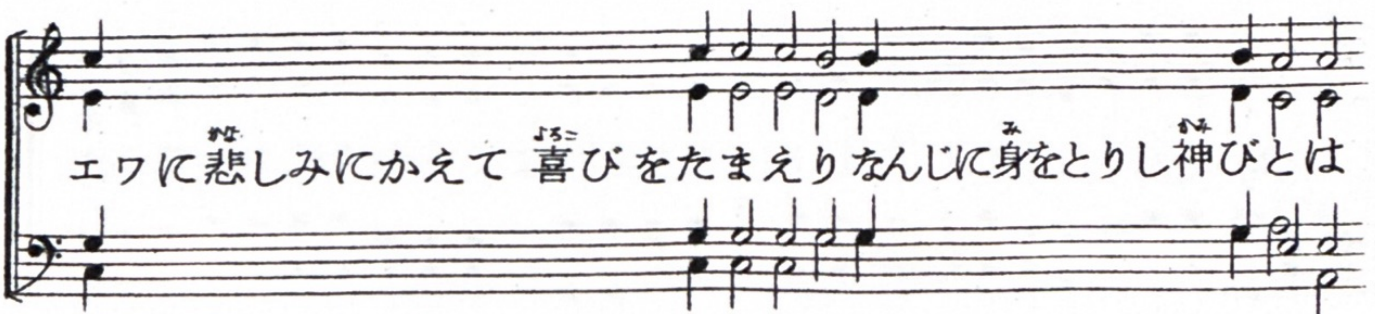
一^{いっ}体^{たい}の聖^{せい}三^{さん}者^{しゃ}を おがみてセラフ^{セラフ}ととも^{ととも}に呼^よばん



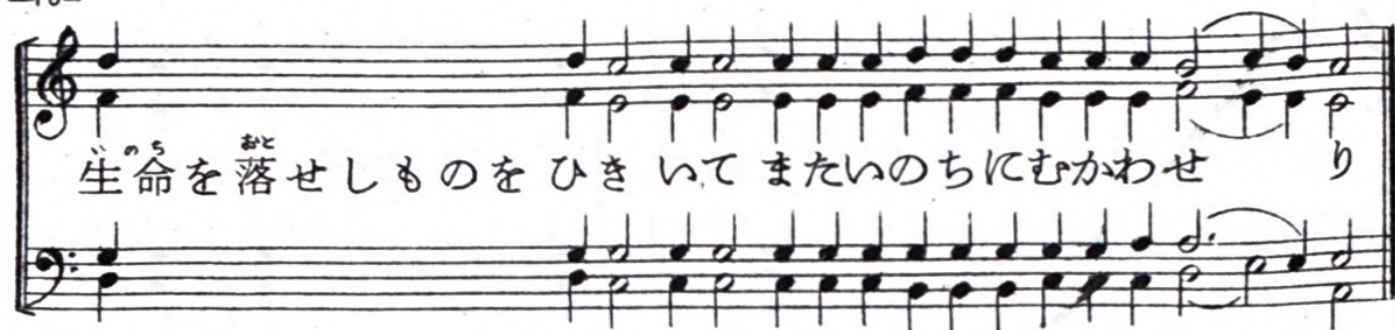
せいせいせいなるかな主^{しゅ}や 今^{いま}もいつも世^よ世^よにアジ



童^{どう}てい女^{にょ}やなんじは生命^{いのち}を賜^{たま}うの主^{しゅ}を生^うみてアダムを罪^{つみ}よりすくい



エワに悲^{かな}しみにかえて喜^{よろこ}びをたまえりなんじに身^みをとりし神^{かみ}びとは

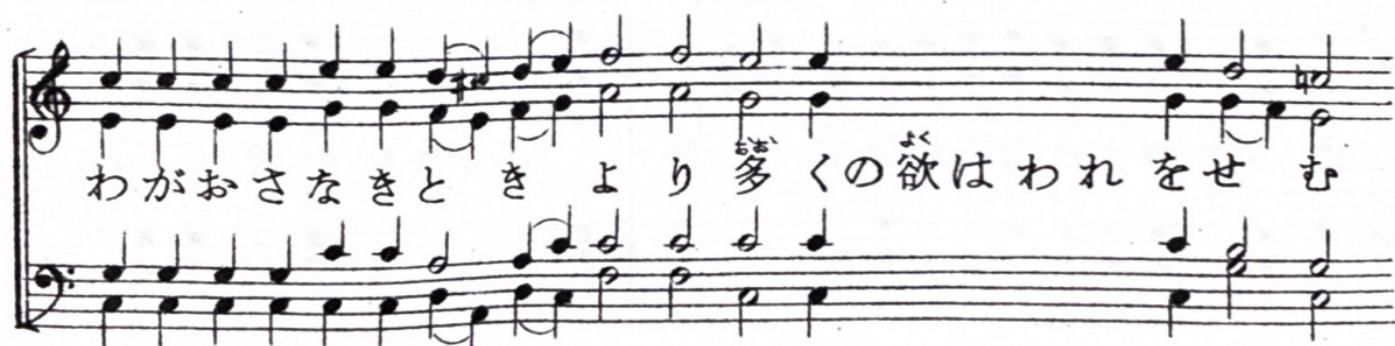


生命^{いのち}を落^{おと}せしものをひきいてまたいのちにむかわせり

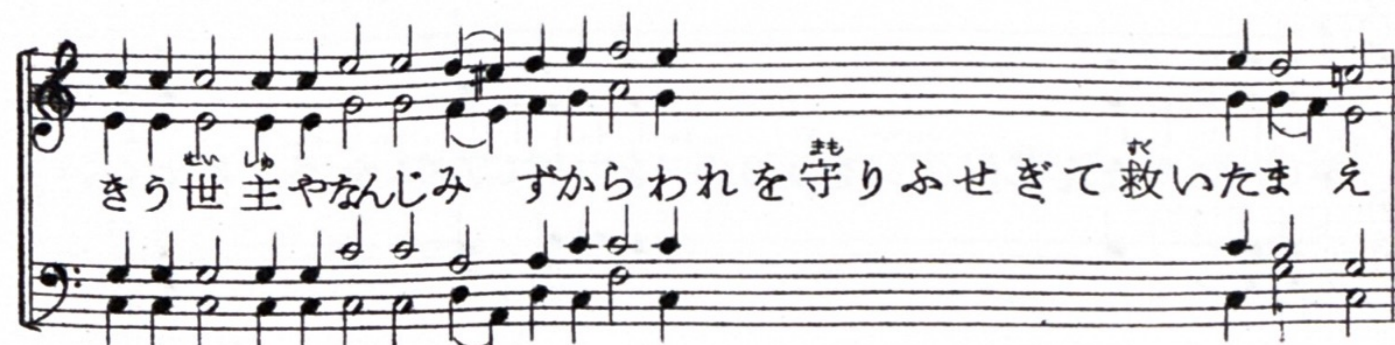


アリルイヤアリルイヤアリルイヤかみや光^{ひかり}えいはなんじに帰^{かへ}す

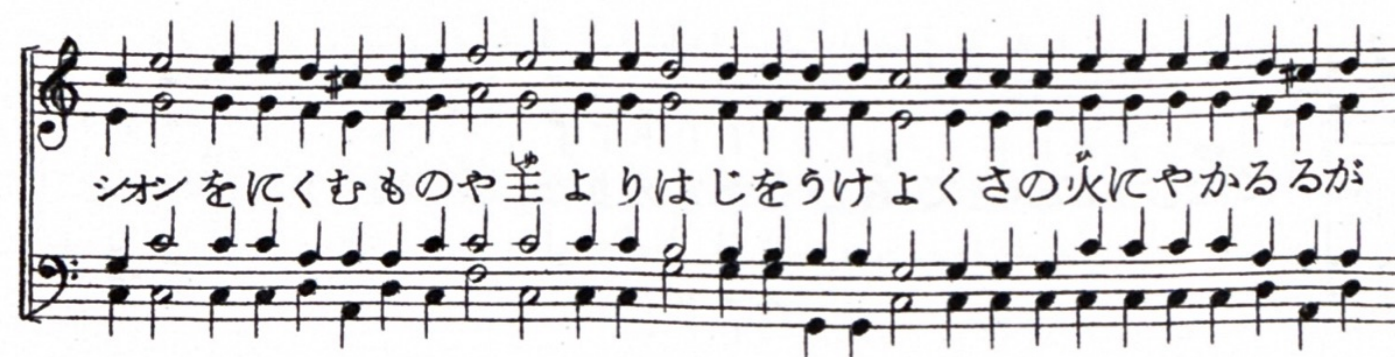
アンティホン 第四調



わがおさなきときより多くの欲^ほはわれをせむ



きう世^よ主^{しゅ}やなんじみずからわれを守^{まも}りふせぎて救^{すく}いたまえ



シオンをにくむものや主^{しゅ}よりはじをうけよくさの火^ひにやかるるが

ごとくなんじもつくされん 光 えいはちちと子とせい神に帰す

いまもいつも世世にアミン およそ のたましいは

聖神にて生かされきよきをもつていよいよのほり

聖三著の二体にて奥密に照らさる

ポロキメン

第一提綱

主いわくわれ今起き捕えられんとするものを危うからざるところにおか

危^かからざるところにおか^ん

第二提綱

主^{しゅ}わ^か神^{かみ}や起^おきてなんじが定^{さだ}めし

審^{しん}判^{はん}を^{おこな}行^ない給^{たま}え万^{ばん}民^{みん}なんじを^めめぐるん 万^{ばん}民^{みん}なんじを^めめぐるん

第三提綱

諸^{しよ}民^{みん}てい^うべし主^{しゅ}は王^{おう}となり世^せ界^{かい}堅^{けん}固^こにして動^{うご}かざらん 世^せ界^{かい}堅^{けん}固^こに

してうごかざらん

第四提綱

主^{しゅ}や起^おきてわれらを助^{たす}けよなんじのあわれみに

よつてわれを救^{すく}いたまえ なんじの隣^{かた}れみによつてわれらをすくいたまえ

第五提綱

主^{しゅ}わ^か神^{かみ}や 起^おきてなん^{なん}じの手^てをあげよ なん^{なん}じ世^よ世^よの主^おなればなり

なん^{なん}じ世^よ世^よの主^おなればなり

第六提綱

主^{しゅ}や なん^{なん}じの力^{ちから}を起^おこし

来^きたりてわれ^{われ}らを救^{すく}いたまえ われ^{われ}らをすく^{すく}いたまえ

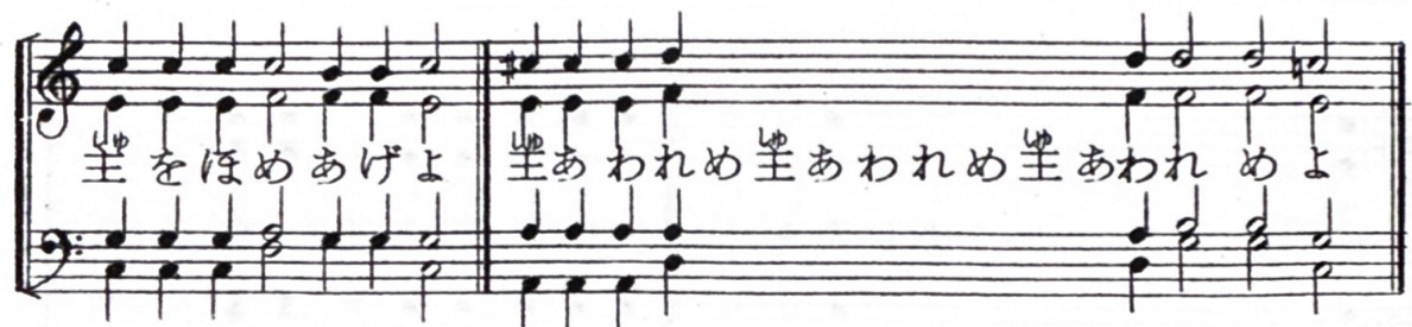
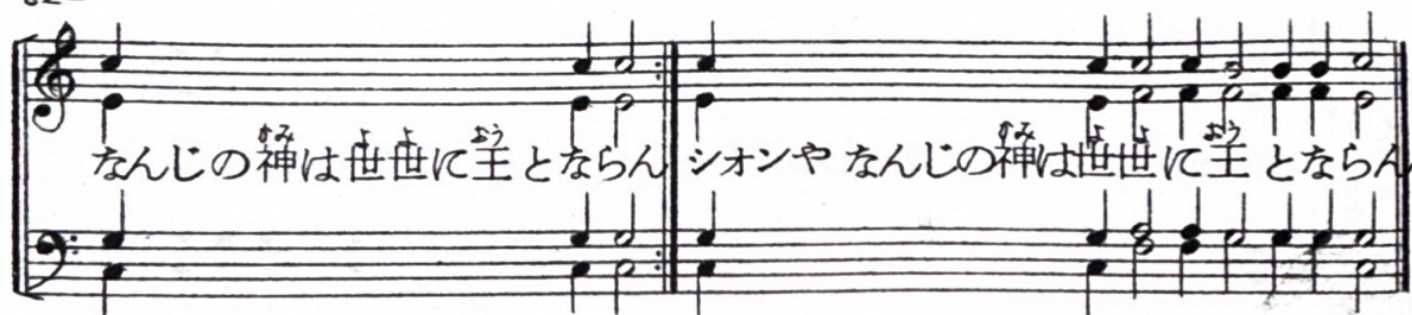
第七提綱

主^{しゅ}わ^か神^{かみ}や起^おきてなん^{なん}じの手^てを^あげよ 苦^{くる}しむものを永^{なが}く 忘^{わす}る^るな^なかれ

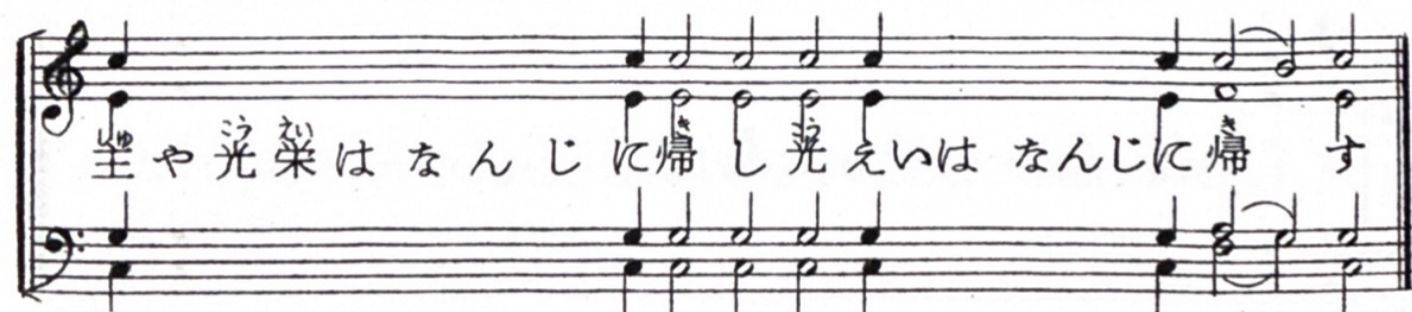
苦^{くる}しむものを永^{なが}くわ^わする^るな^なかれ

第八提綱

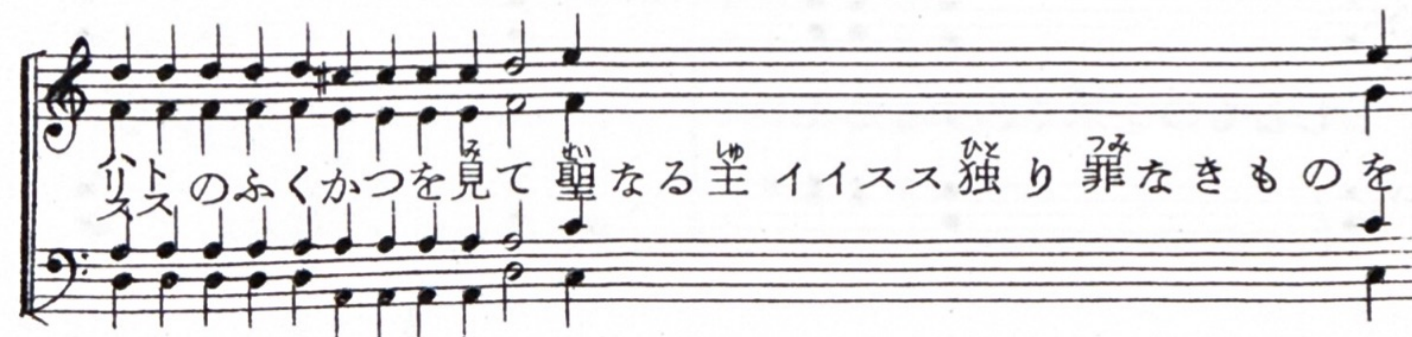
主^{しゅ}は永^{えい}遠^{えん}に主^おとならん^んジヤ

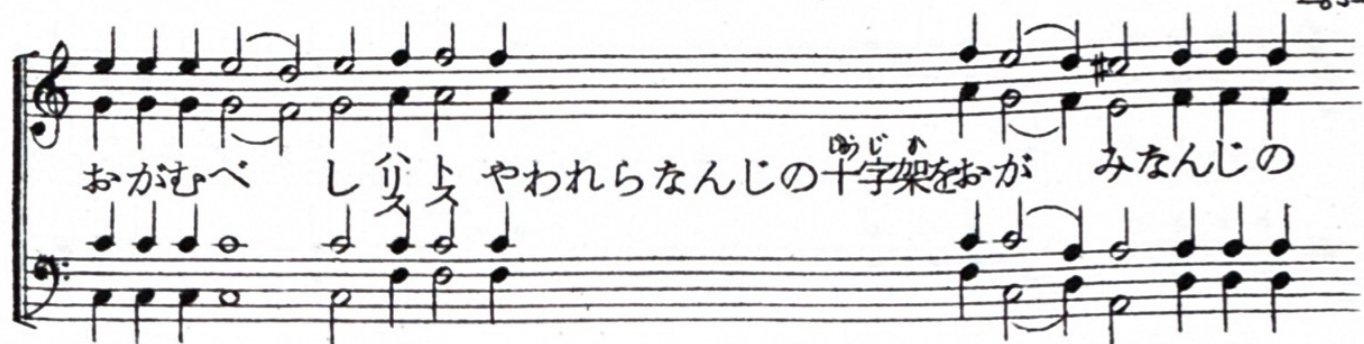


福音の前後に

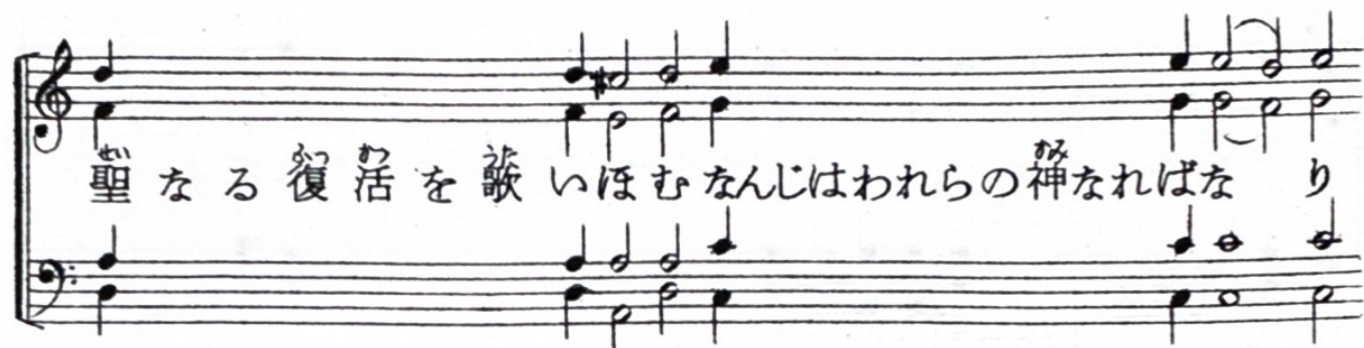


父の復活を見て

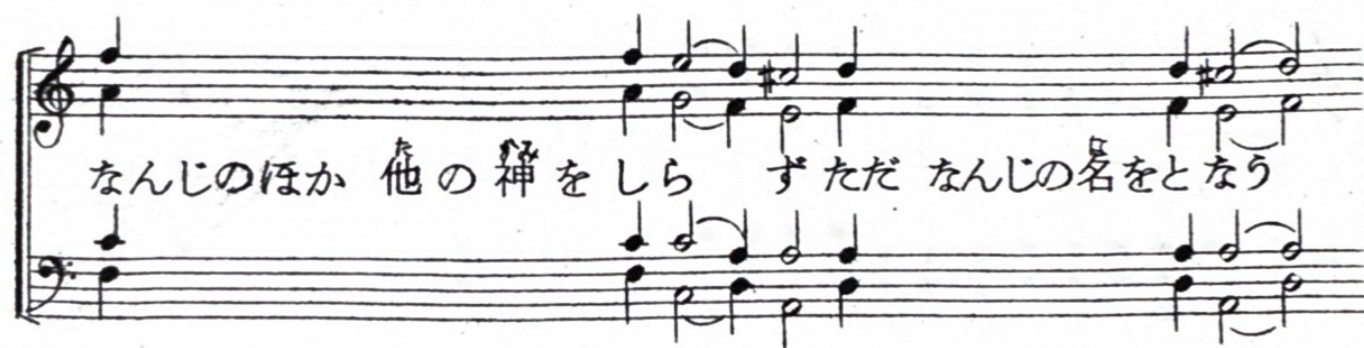




おかむべ し^りえ やわれらなんじの^{あじ}十字架をおが みなんじの



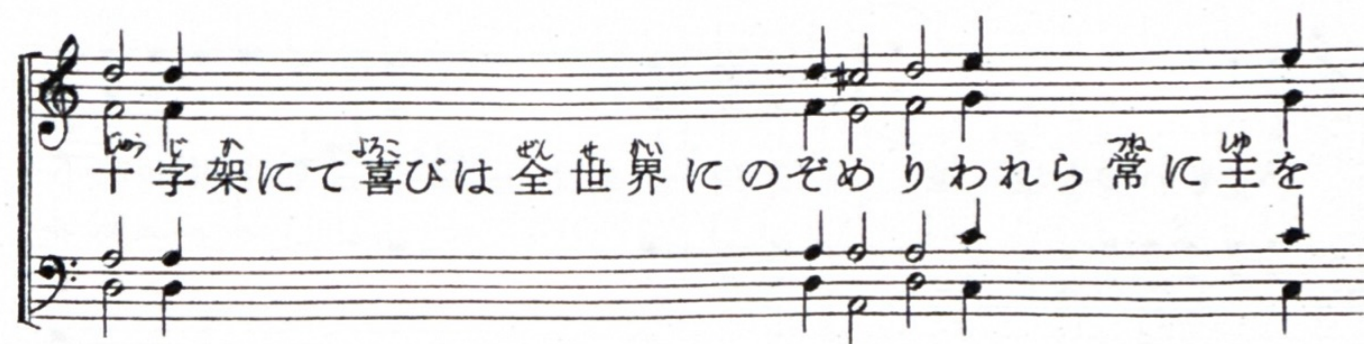
聖なる復活を^あかす いほむなんじはわれらの^あ神なればな り



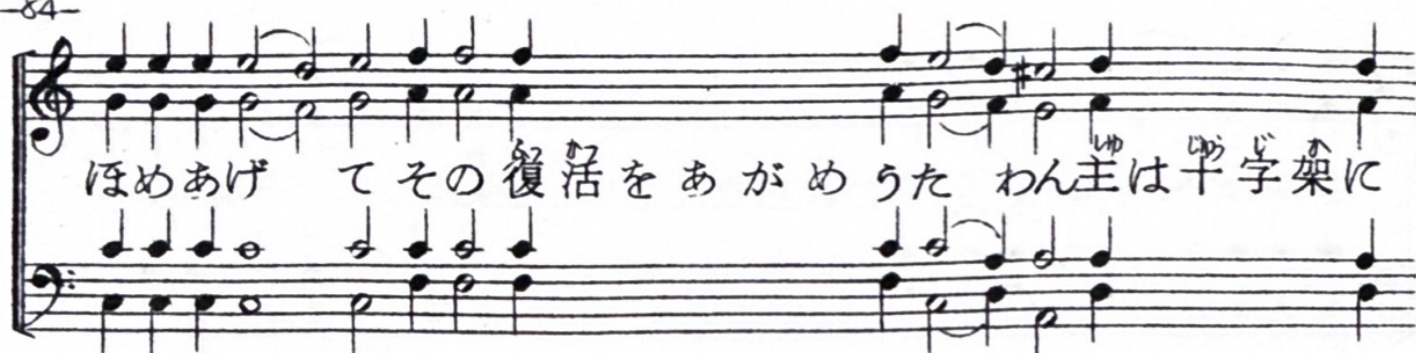
なんじのほか 他の^あ神をしら ずただ なんじの名をと^あなり



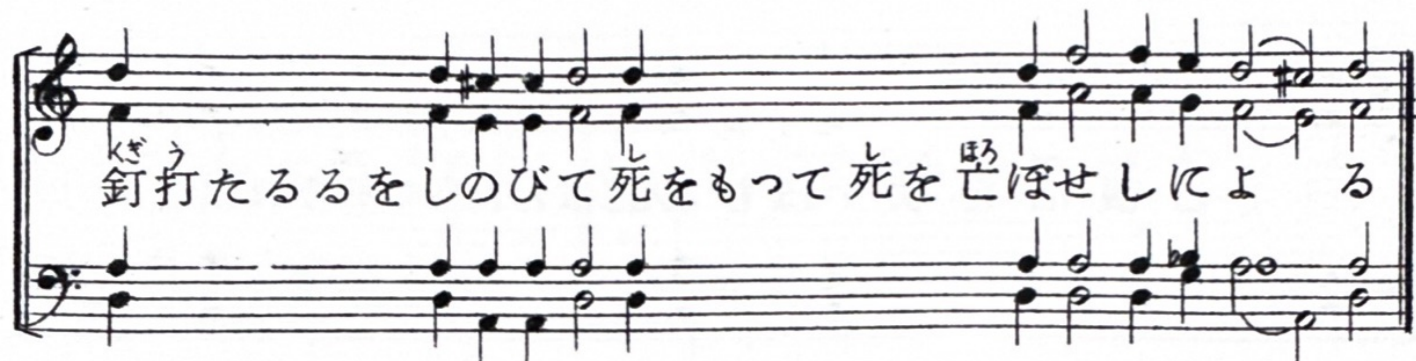
信^あ者や^あ皆^あ来たりて^あし^りえ の^あ聖なる復活を^あ拜むべ し



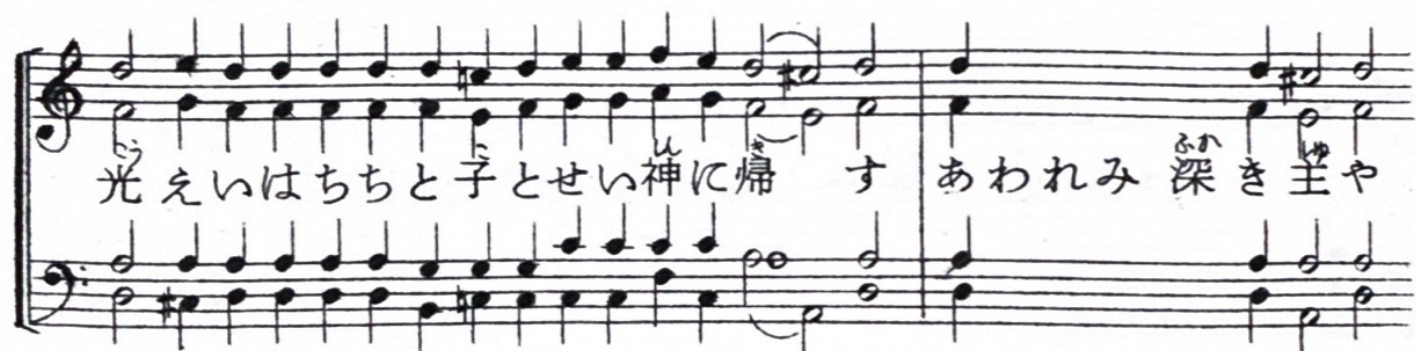
十字架にて^あ喜びは^あ全世界にのぞめりわれら^あ常に^あ主を



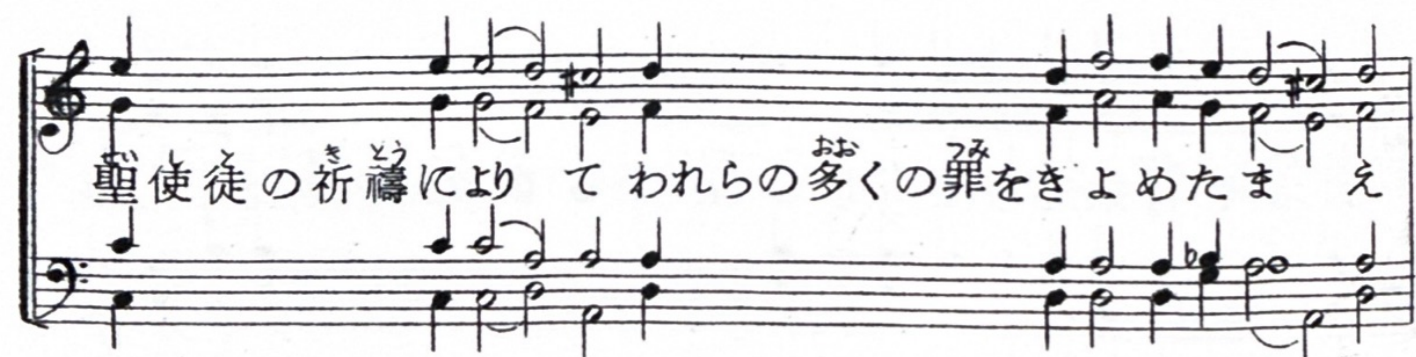
ほめあげ てその復活をあがめうた わん主は十字架に



釘^{くぎ}打たるるをしのびて死をもつて死を亡^{ほろ}ぼせしによ る



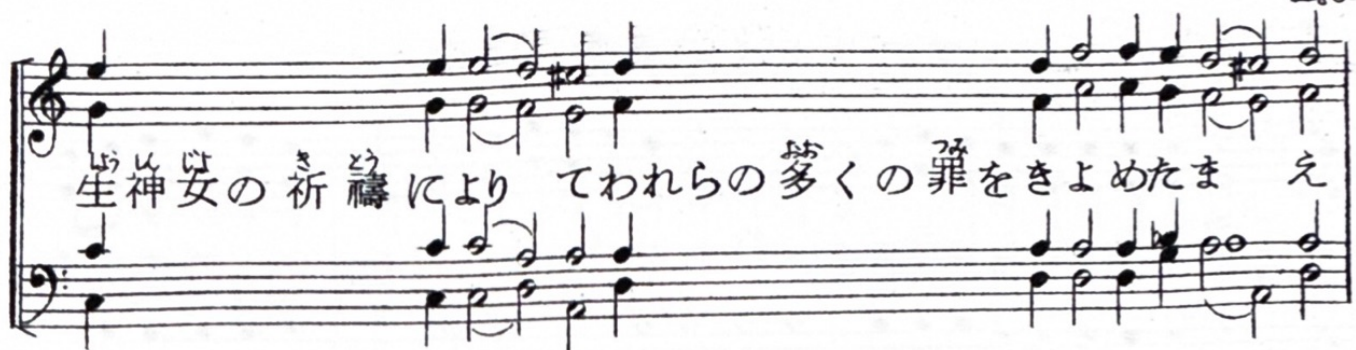
光^ひえいはちちと子とせい神に帰^{かへ}す あわれみ深^{ふか}き主^{しゅ}や



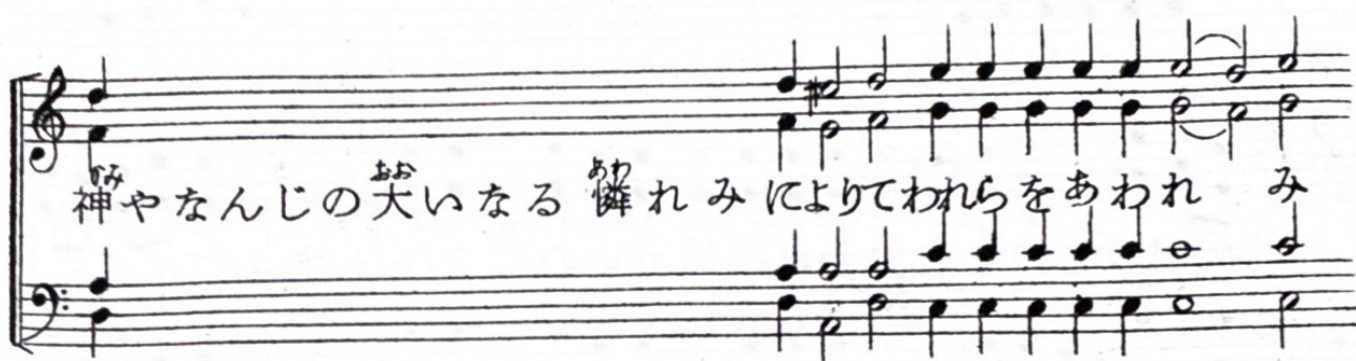
聖使徒の祈禱^{きとう}により てわれらの多^{おほ}くの罪^{つみ}をきよめたま え



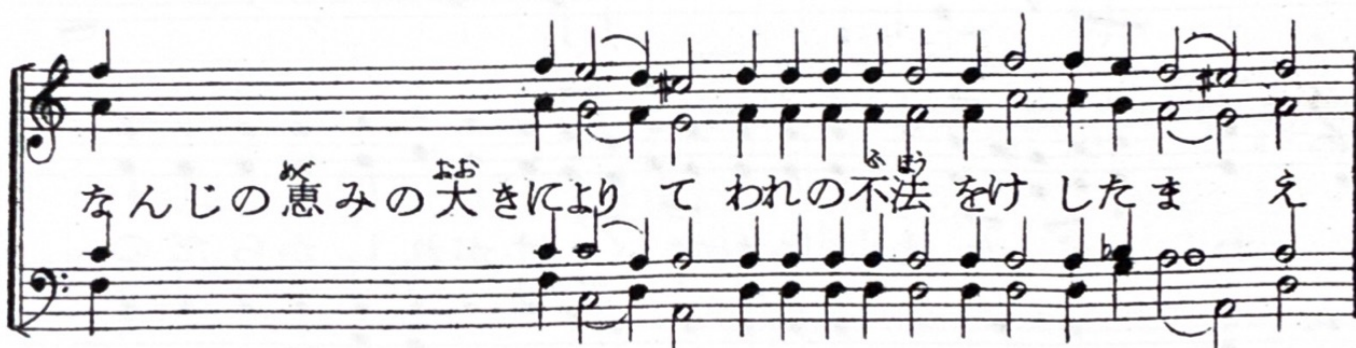
いまもいつも世^よ世^よにアミン あわれみ深^{ふか}き主^{しゅ}やしせいなる



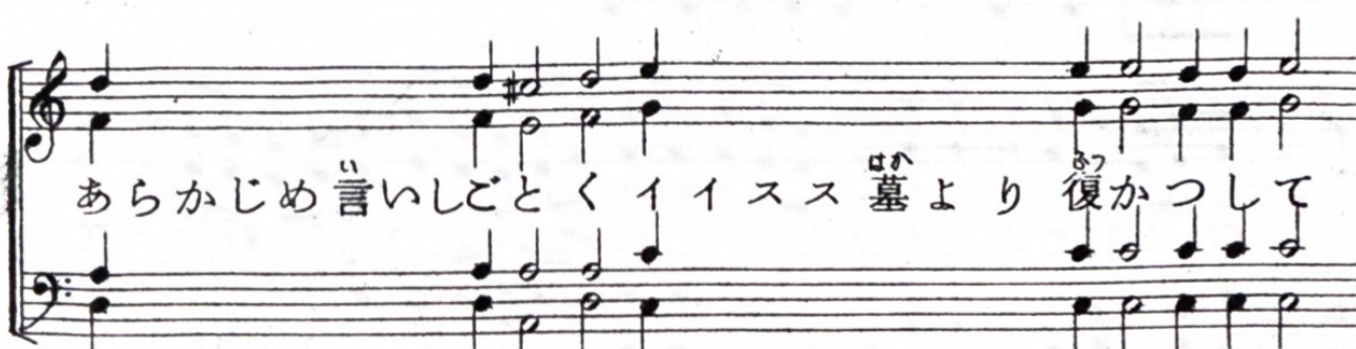
生^い神^{しん}女^{にょ}の祈^き禱^とにより てわれらの多^{おほく}くの罪^{つみ}をきよめたま え



神^{かみ}やなんじの大^{おほ}いなる 憐^{あはれ}れみによりてわれらをあわれ み



なんじの恵^{あはれ}みの大^{おほ}きにより てわれの不法^{ふぼう}をけしたま え

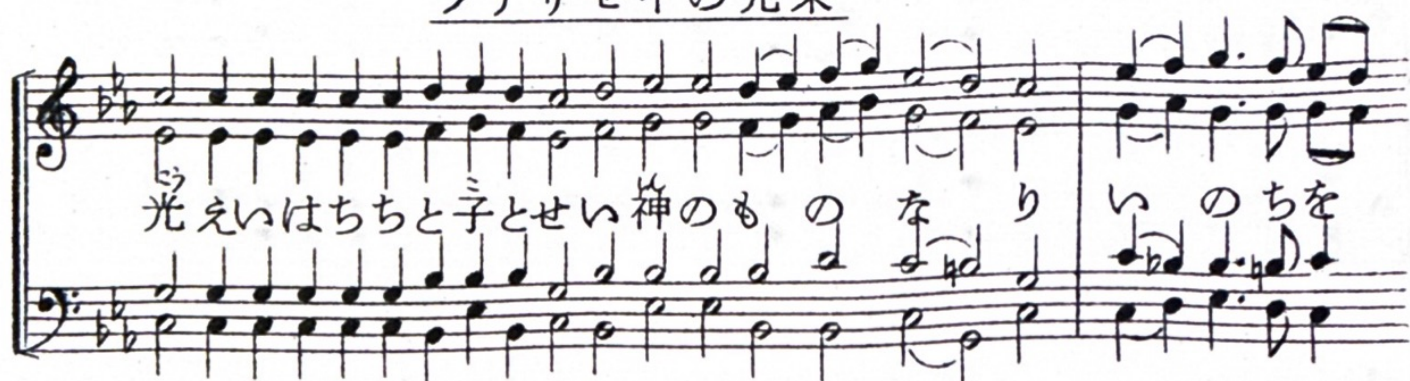


あらかじめ言^いいしごとく イイスス 墓^{はか}より 復^{あが}かつして



われらに永^{なが}きいのちと大^{おほ}いなるあわれみをたまえり

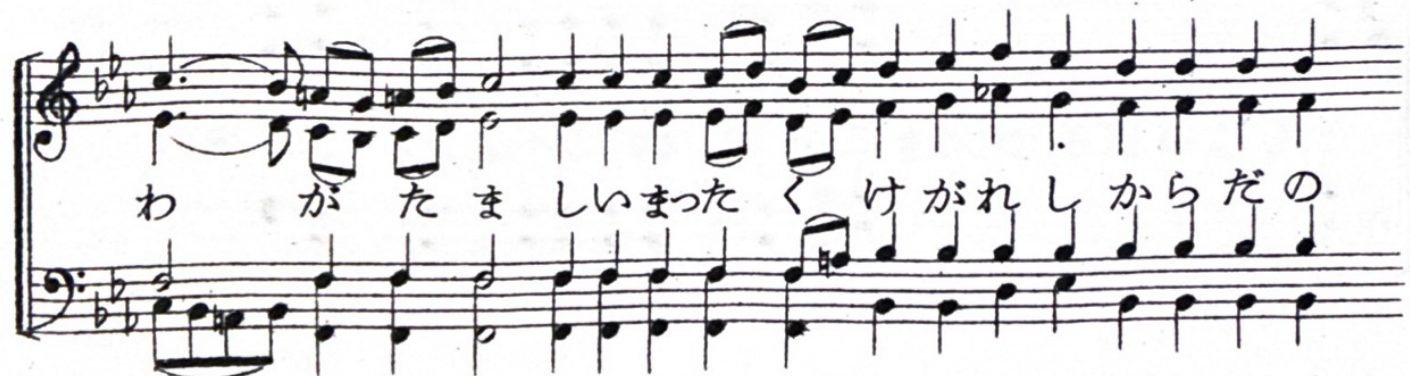
フアリセイの光栄



光^{ひかり}えいはちちと子とせい^{せい}禰^ねのも の な り い の ち を



た ま う の 主 や わ れ に 痛^{いた}か い の 門 を ひ ら け よ け た し



わ が た ま し い ま た く け が れ し か ら だ の



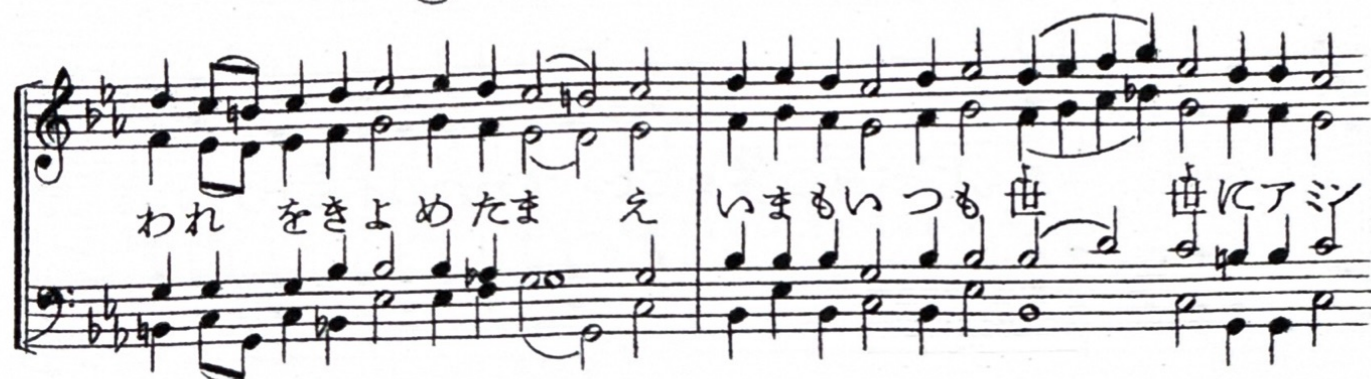
登^{のぼ} り に こ め る も の な ん じ の せ い ど う に む か っ て



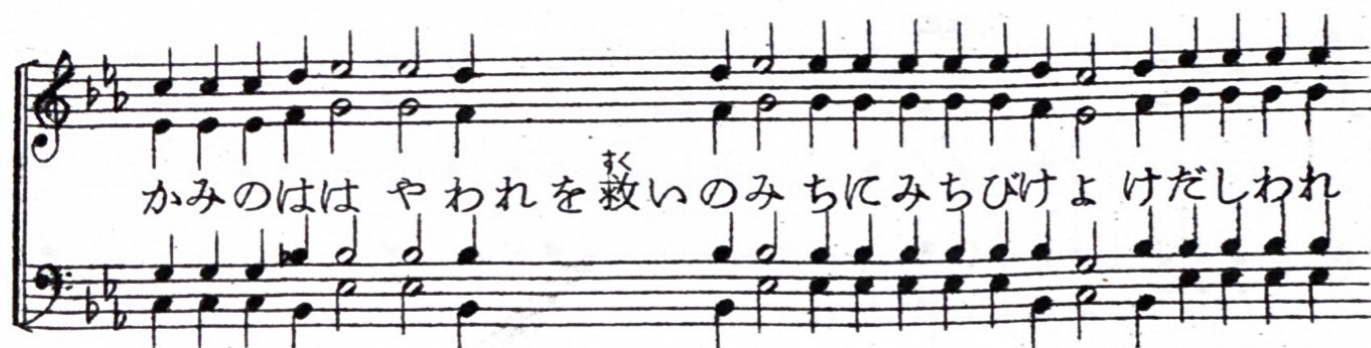
あ さ の 祈^{いのち}禱^{ねが} を た て ま つ る ね が わ く は な ん じ



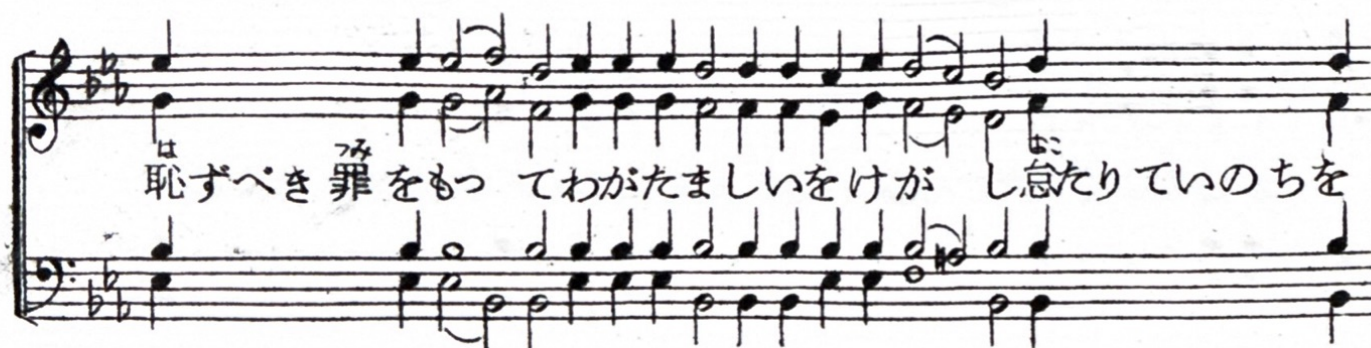
仁慈なるによりてなんじの恩寵にて



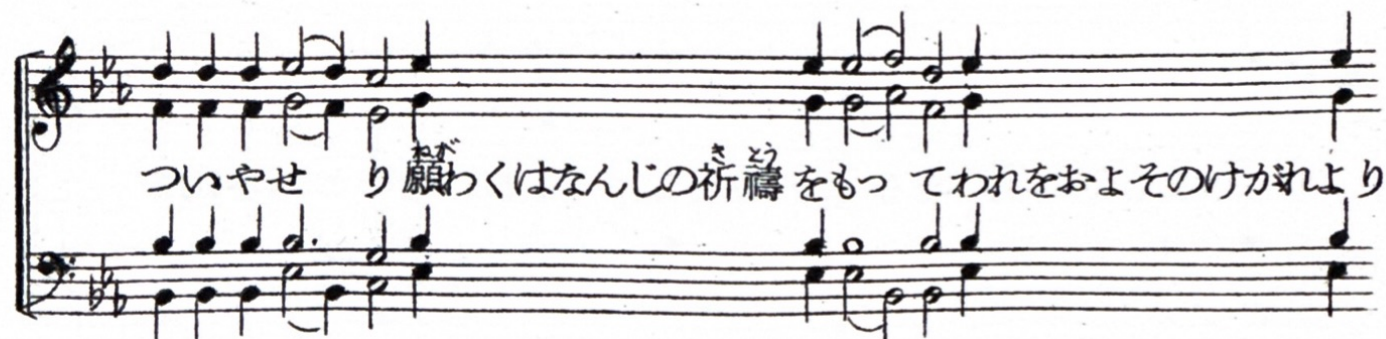
われをきよめたまえ いまもいつも世にアミン



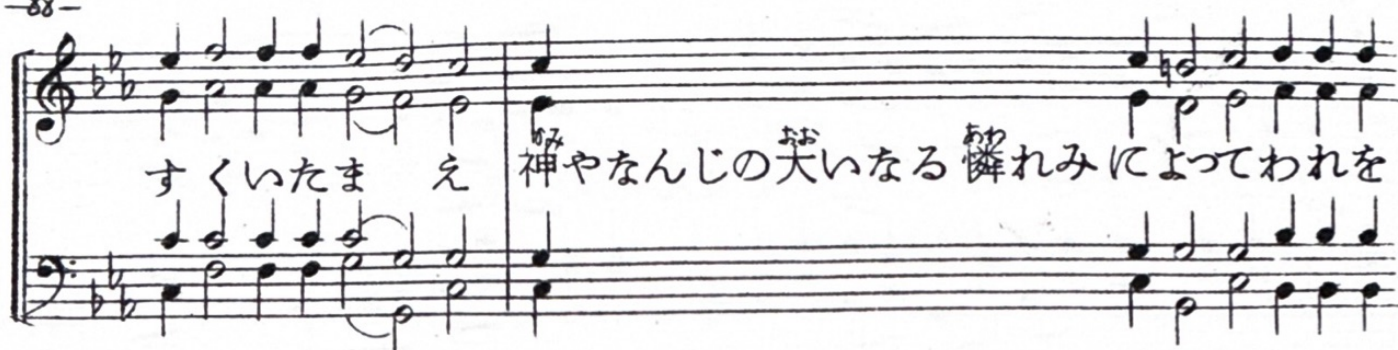
かみのははやわれを救いのみちにみちびけよけだしわれ



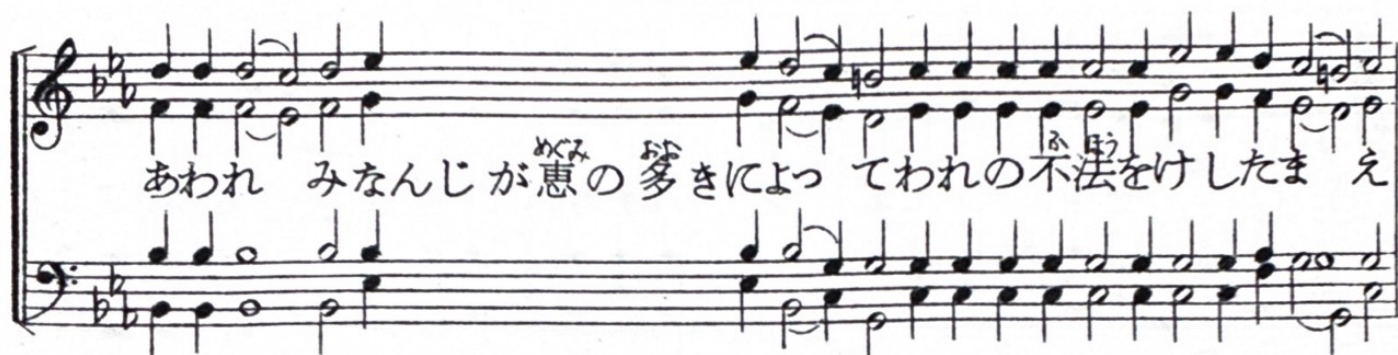
恥すべき罪をもつてわがたましいをけがし怠りていのちを



ついやせり願わくはなんじの祈禱をもつてわれをおよそのけかれより



すくいたま え 神やなんじの 大いなる 憐れみによつてわれを



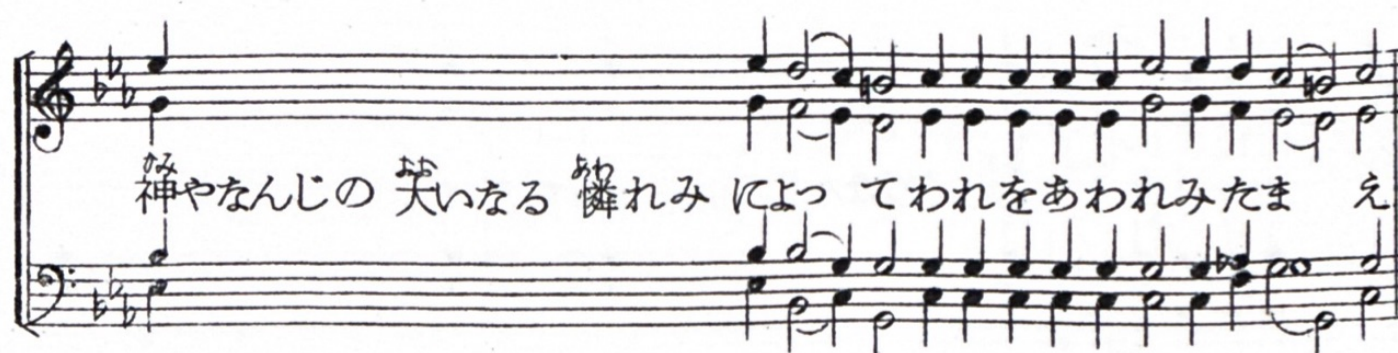
あわれ みなんじが 恵の 多きによつてわれの 不法をけしたま え



われ 不当の 物 多くのおかせし 罪をおも いおそるべき 審判の 日に



おのの ぐただなんじの 深き 仁慈を たのみ ダヴィドの 如く なんじに 呼ぶ



神やなんじの 大いなる 憐れみによつてわれを あわれみ たま え

主憐れめよ (十二次)

主^いあわれめ 主^いあわれめ 主^いあわれめよ 主^い憐れめ 主^い憐れめ 主^い憐れめ 主^い憐れめ

主^い憐れめ 主^いあわれめよ 主^いあわれめ 主^いあわれめ 主^いあわれめよ アミン

我が心は主を崇め (第一番)
(イルモス第八の後で歌う)

わが心^{こころ}は 主^いをあがめ わが^は霊^{たま}はただ 神^{かみ}わが救^{きう}主^{しゅ}を

よろこぶ ヘルム^{ヘルム}より尊^{たう}と くセム^{くセム}に並^{なら}びなくさかえ

操^{さう}をやぶらずして 神^{かみ}言^{ことば}を生^うみ しじつの生^い神^{かみ}女^{むすめ}たる



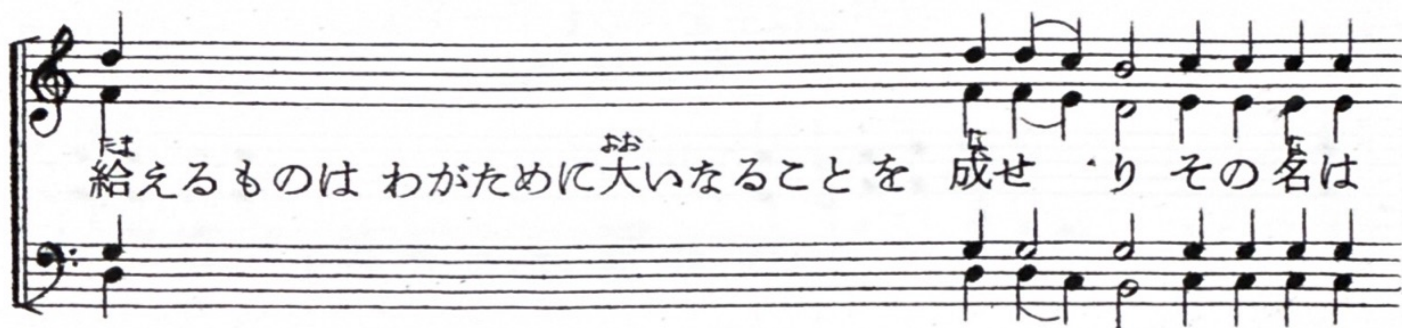
なんじをあがめほむ その婢の單しきを顧みたまえり



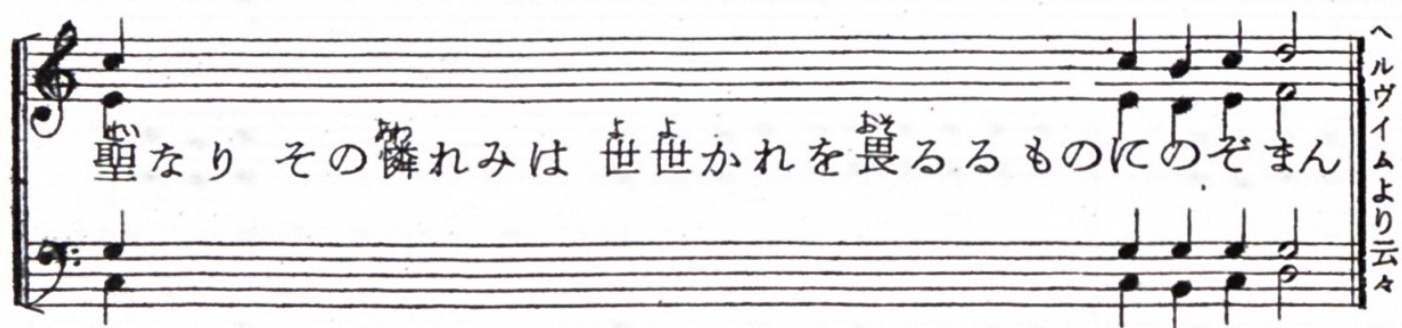
今より万代われを福なりと言わん

ヘルヴィムより云々

力をもち

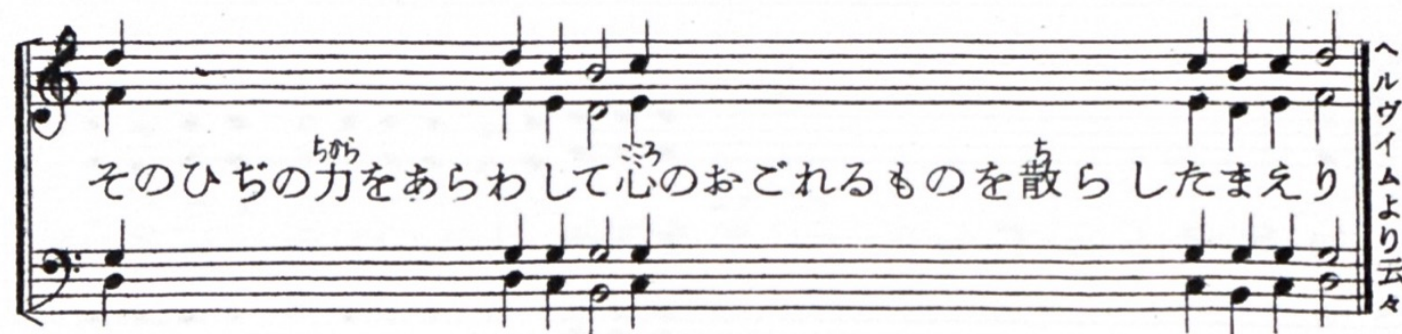


給えるものはわがために大いなることを成せり その名は



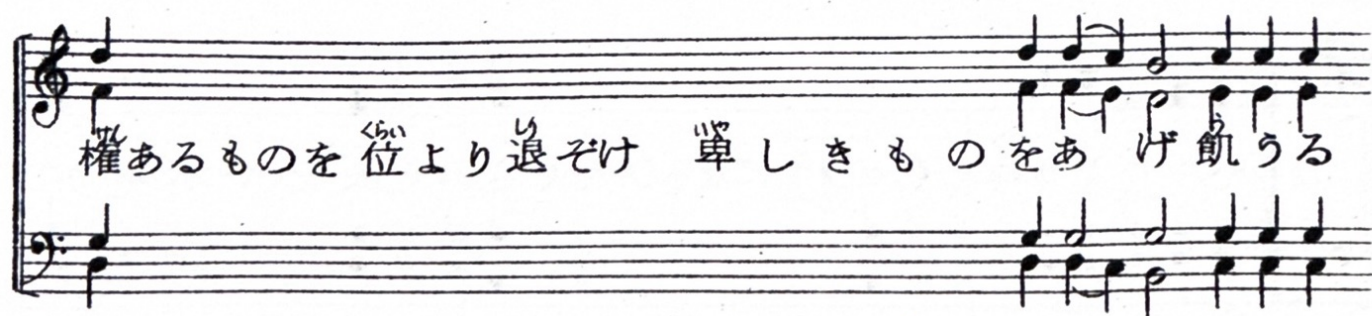
聖なり その憐れみは世世かれを畏るるものにぞまん

ヘルヴィムより云々

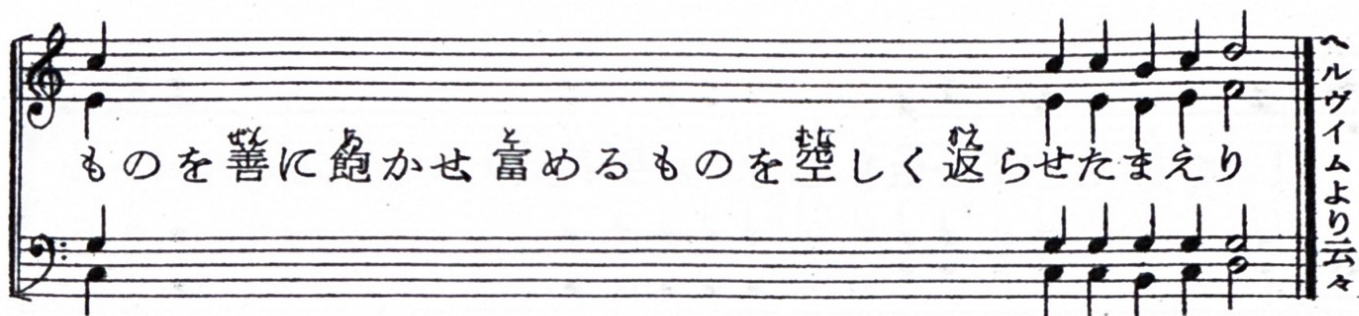


そのひちの力をあらわして心のおごれるものを散らしたまえり

ヘルヴィムより云々

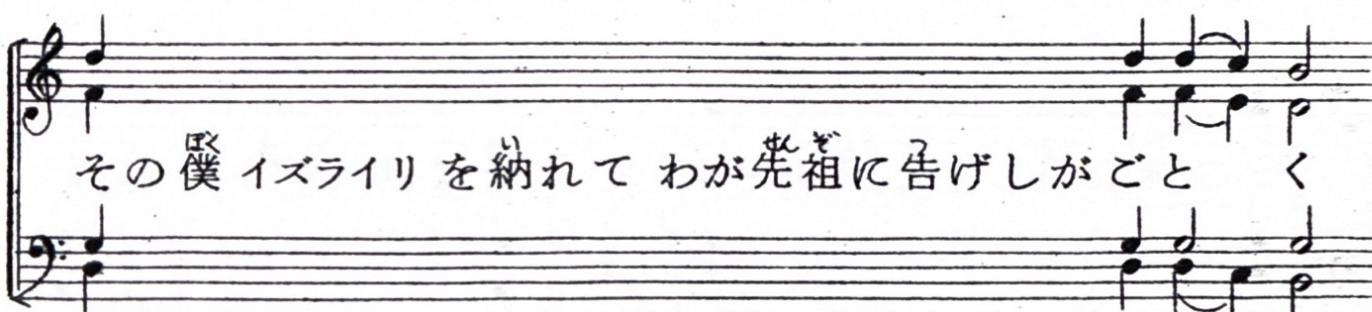


権あるものを位より退ぞけ 單しきものをあげ飢うる

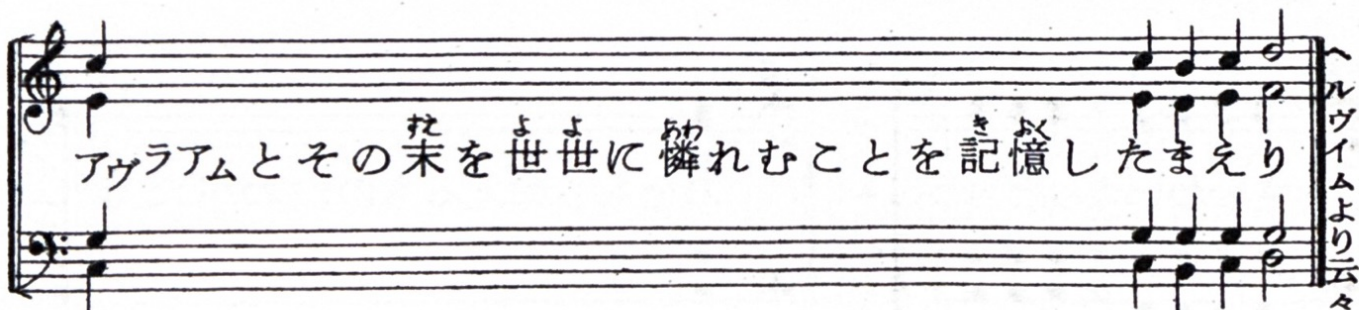


ものを善に飽かせ 富めるものを慥しく返らせたまえり

ヘルヴィムより云々



その僕 イズライリを納れて わが先祖に告げしがごとく



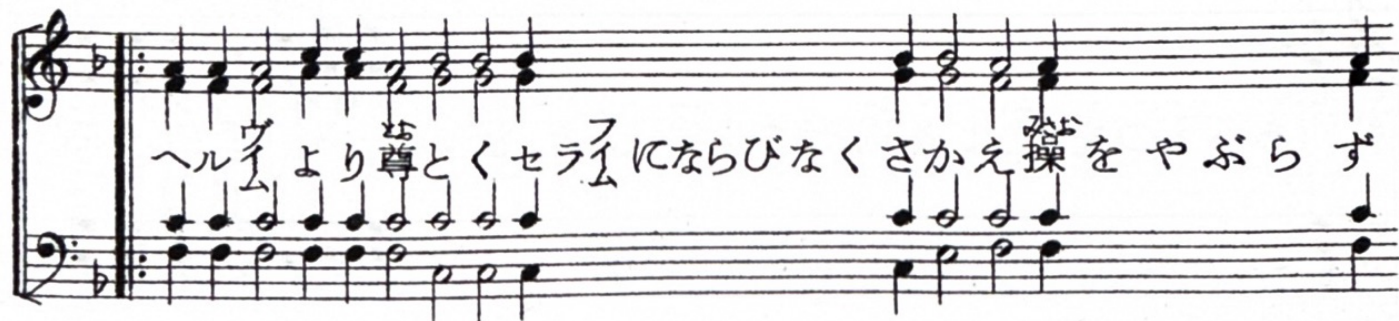
アッラアムとその末を世世に憐れむことを記憶したまえり

ヘルヴィムより云々

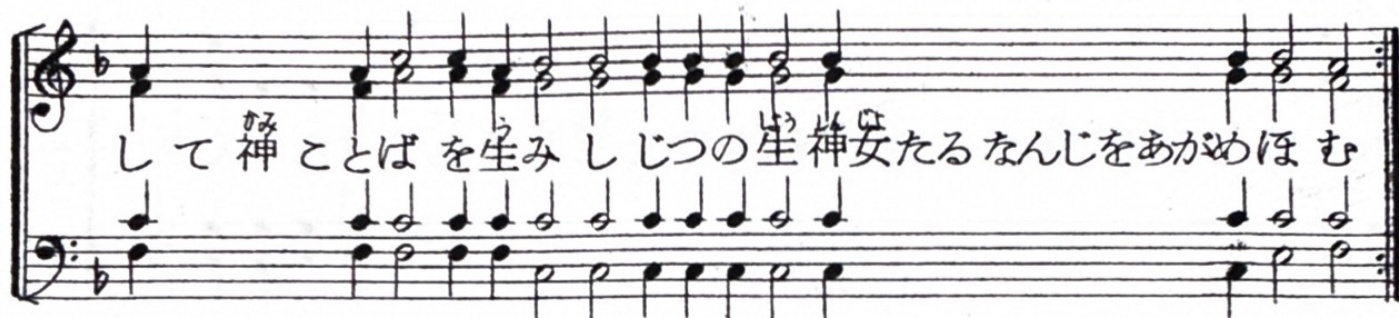
我が心は主を崇め (第二番)



わが心は主をあげめ わが霊は神 わが救主をよろこぶ



ヘルムより尊とくセラフにならびなくさかえ操をやぶらず



して神ことばを生みしじつの生神女たるなんじをあかめほむ

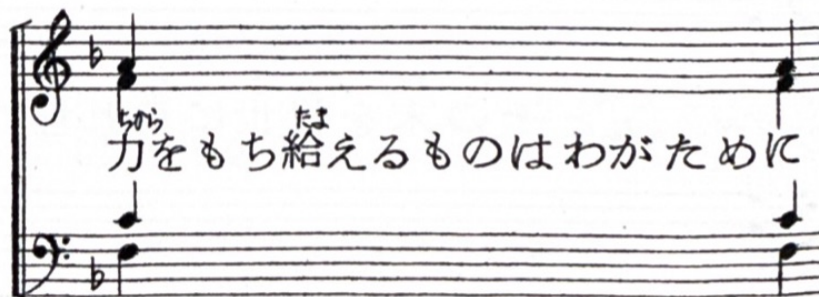


その婢の畏しきを顧りみたまえり今より芳代われを

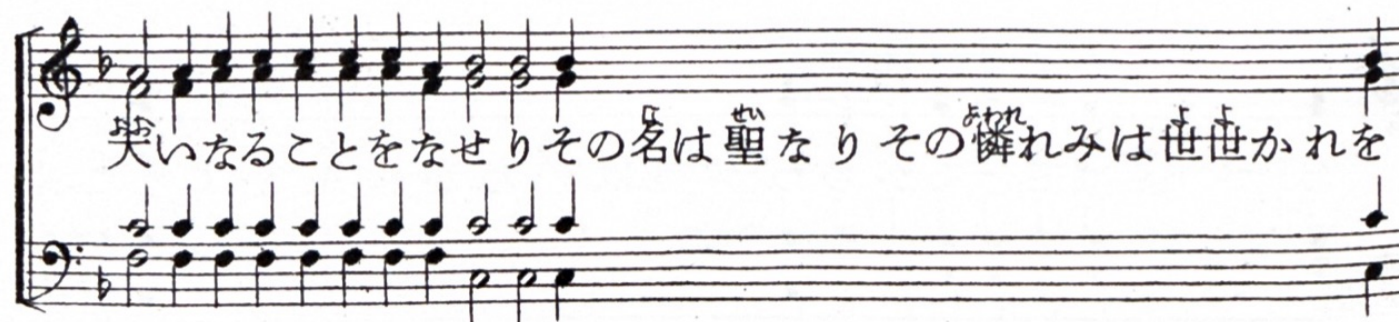


さいわいなりと言わん

ヘルムより云々



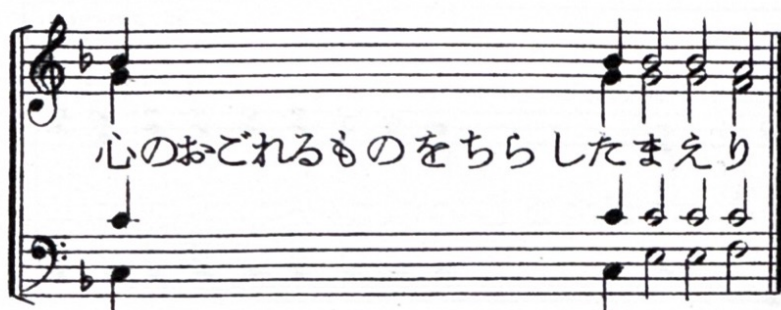
力もち給えるものはわがために

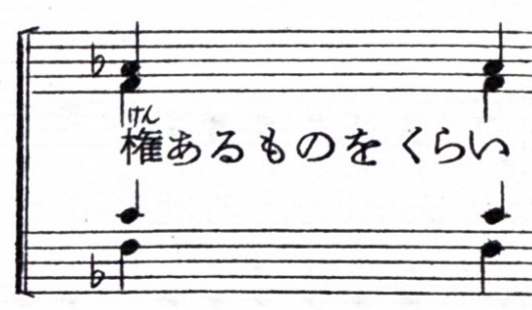


笑いなることをなせりその名は聖なりその憐れみは世世かれを

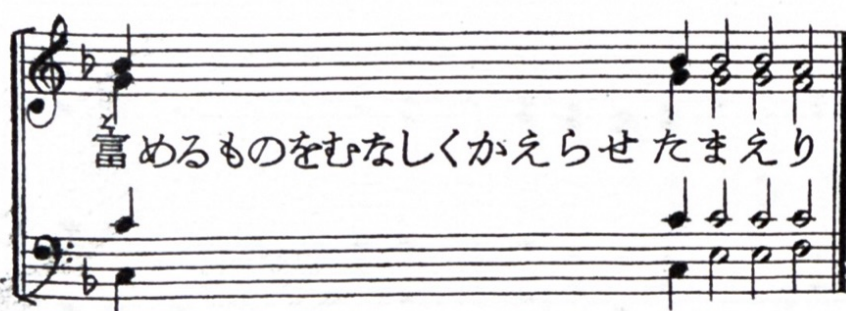

 畏るるものにぞまん
 ヘルウムより云々


 そのひちのちからをあらわして

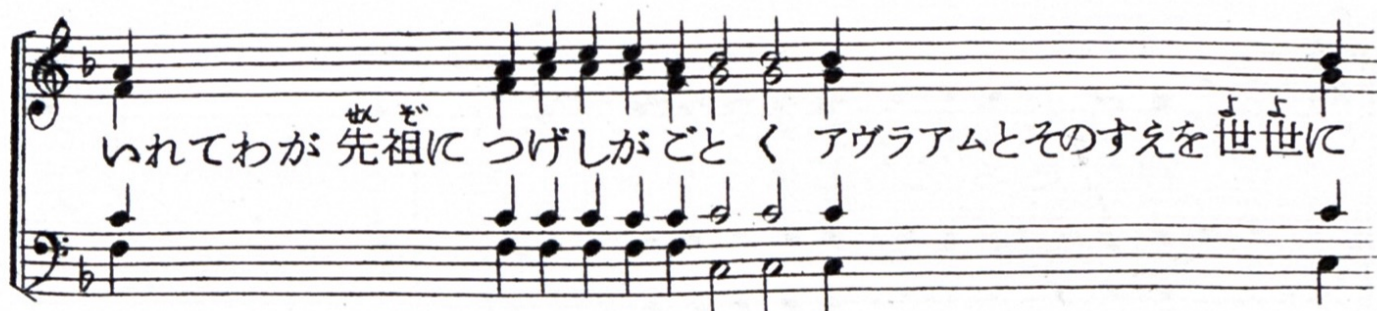

 心のおごれるものをちらしたまえり
 ヘルウムより云々


 権あるものをくらし


 よりしりぞけいやしきものをあげ飢うるものを善に あかしめ


 富めるものをむなしくかえらせたまえり
 ヘルウムより云々


 その僕イスライリを


 いれてわが先祖につげしがごとく アヴラアムとそのすえを世々に

あわれむことを記憶したまえり

ヘルウムより云々

我が心は主を崇め(番外)

デ・リオフスキー作曲

わがこころは主をあがめわがたましいはかみわがきゆう主

をよろこぶ ヘルウムより尊とくセラムにならびなくさかえ

みさおをやぶらずしてかみことばを生みしじつの

生神女たるなんじをあがめほむ その婢のいやしきを

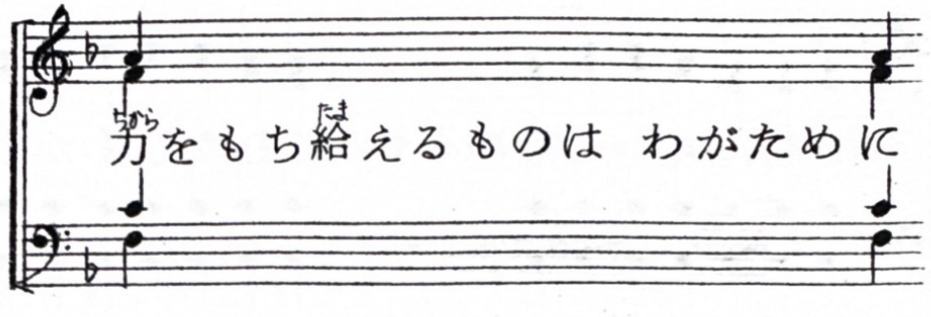


かえりみたまえり^はよりよろづよわれをさいわい



なりと言わん

ヘルヴィムより云々



力^{ちから}をもち給^{たま}えるものはわがために



大^{おほ}いなることをなせりその名^なはせいなりそのあわれみは世^よ世^よ



かれを畏^{おそ}るるものにぞまん

ヘルヴィムより云々

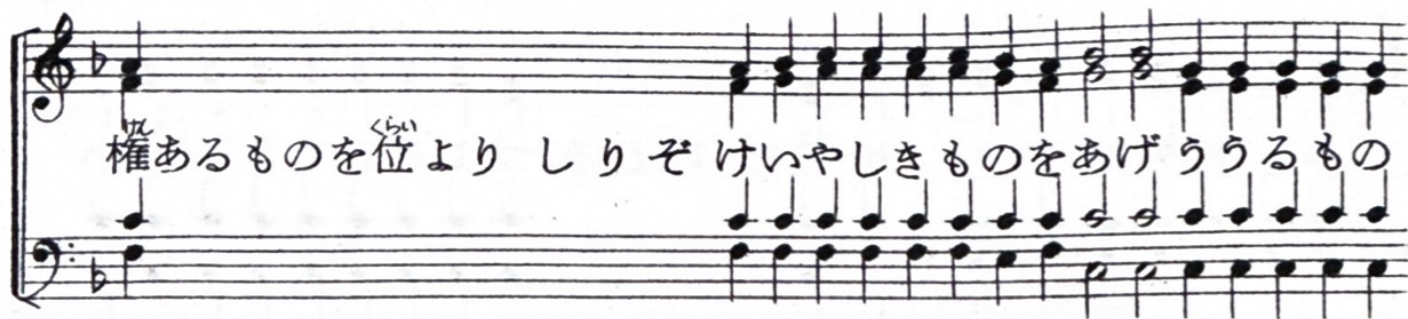


そのひちのちからを

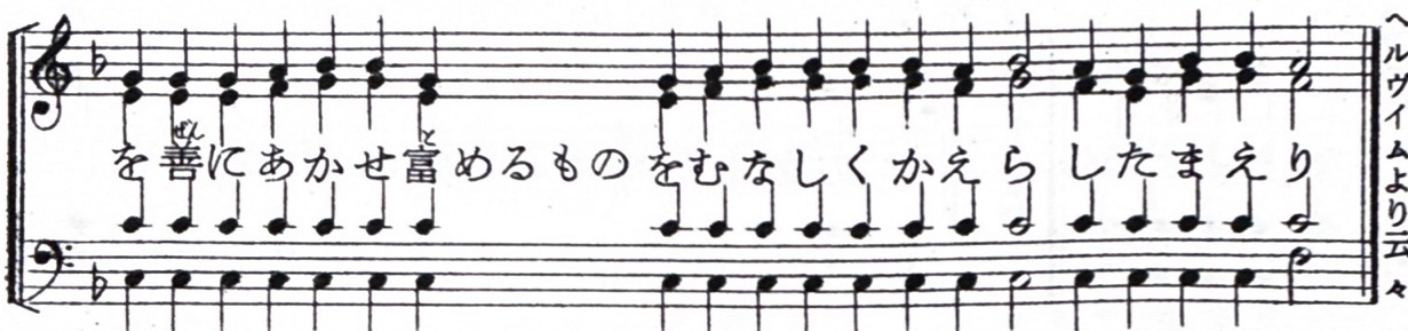


あらわしてころのおごれるものをちらしたまえり

ヘルヴィムより云々



権あるものを位より しりぞけいやしきものをあげうるもの



を善にあかせ富めるものをむなくかえらしたまえり

ヘルヴィムより云々



その僕 イズラリを納れてわが先祖につげしがごとくアラムと



そのすえを 世世にあわれむことをきおくしたまえり

ヘルヴィムより云々



主われらの神はせいなり 主われらの神はせいなり

凡そ呼吸ある者(一 調)

およそ 呼吸あるものは主をほめあげよ天より主をほめあげよ

いとたかきにかれをほめあげよほめ歌はなんじかみに帰す

そのことごとくの神使やかれをほめあげよそのことごとく

の軍やかれをほめあげよほめ歌はなんじかみに帰す

凡そ呼吸ある者(二 調)

凡そ呼吸あるものは主をほめあげよ天より主をほめあげよ

いと^{たか}高きにかれをほめあげよほめ^{うた}歌はなんじかみに帰^きす

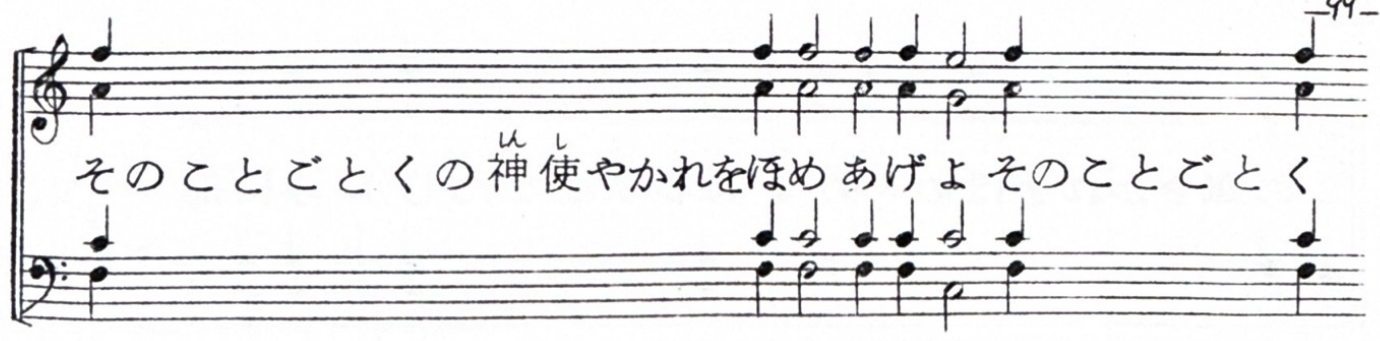
そのことごとくの神^{しん}使^しやかれをほめあげよそのことごとくの^{ぐん}軍^{ぐん}や

かれをほめあげよほめ^{うた}歌はなんじかみに帰^きす

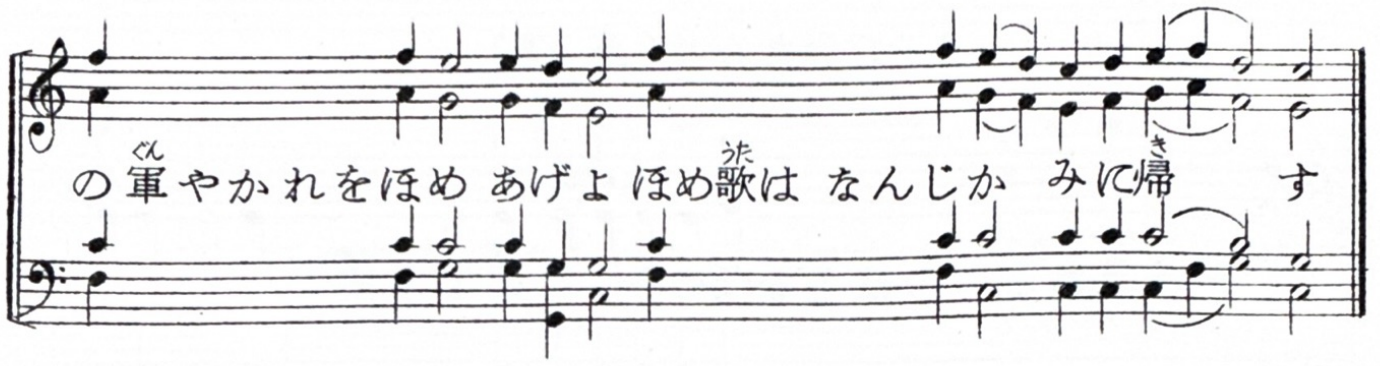
凡そ呼吸ある者(三 調)

凡そ呼吸^きあるものは主^{しゅ}をほめあげよ天^{てん}より主^{しゅ}をほめあげよ

いと^{たか}高きにかれをほめあげよほめ^{うた}歌はなんじかみに帰^きす



そのことごとくの^し神使^しやかれをほめあげよそのことごとく



の^{ぐん}軍^{ぐん}やかれをほめあげよほめ^{うた}歌^{うた}はなんじかみに^き帰^きす

凡そ呼吸ある者(四調)



凡そ^い呼吸^きあるものは^{しゅ}主^{しゅ}をほめあげよ^み天^みより^{しゅ}主^{しゅ}をほめあげよ



いとたかきにかれをほめあげよほめ^{うた}歌^{うた}はなんじかみに^き帰^きす



そのことごとくの^し神使^しやかれをほめあげよそのことごとく

の^ん軍やかれをほめあげよ ほめ^た歌はなんじか みに帰す

凡そ呼吸ある者(五 調)

凡そ呼吸あるものは主^しをほめあげよ 天より主^しをほめあげよ

至と^{たか}高きにかれをほめあげよ ほめ^た歌はなんじか みに帰す

そのことごとくの神使^しやかれをほめあげよ そのことごとく

の^ん軍やかれをほめあげよ ほめ^た歌はなんじか みに帰す

凡そ呼吸ある者(六 調)

凡そ呼吸あるものは主をほめあげよ 天より主をほめあげよ

至と高きにかれをほめあげよ ほめ歌は なんじか みに帰す

そのことごとくの神使かれをほめあげよ そのことごとく

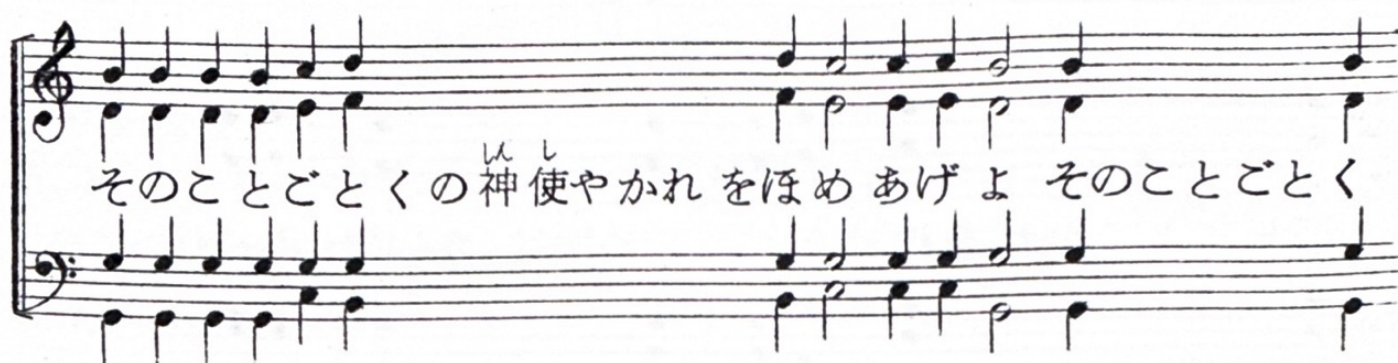
の軍やかれをほめあげよ ほめ歌は なんじか みに帰す

凡そ呼吸ある者(七 調)

およそ呼吸あるものは主をほめあげよ 天より主をほめあげよ



いとたかきにかれをほめあげよほめ^た歌はなんじかみに帰^きす

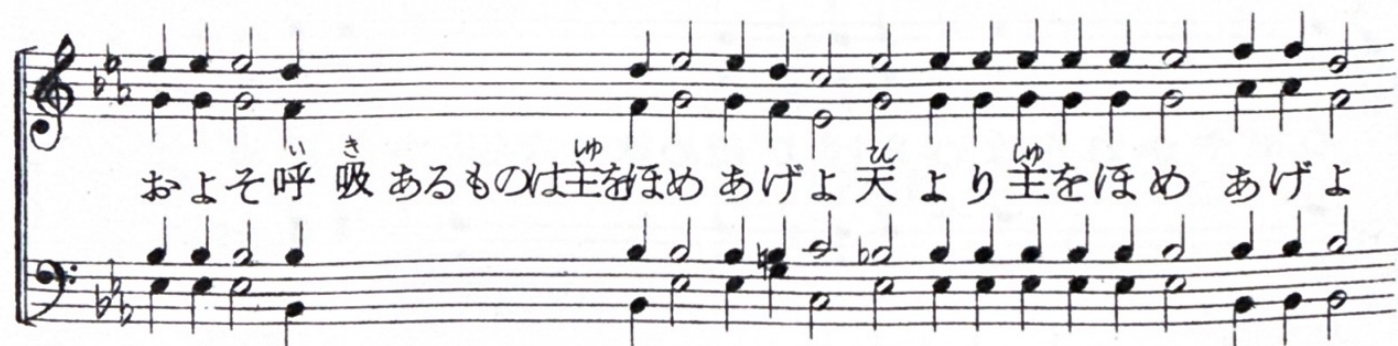


そのことごとくの^し神使やかれをほめあげよそのことごとく

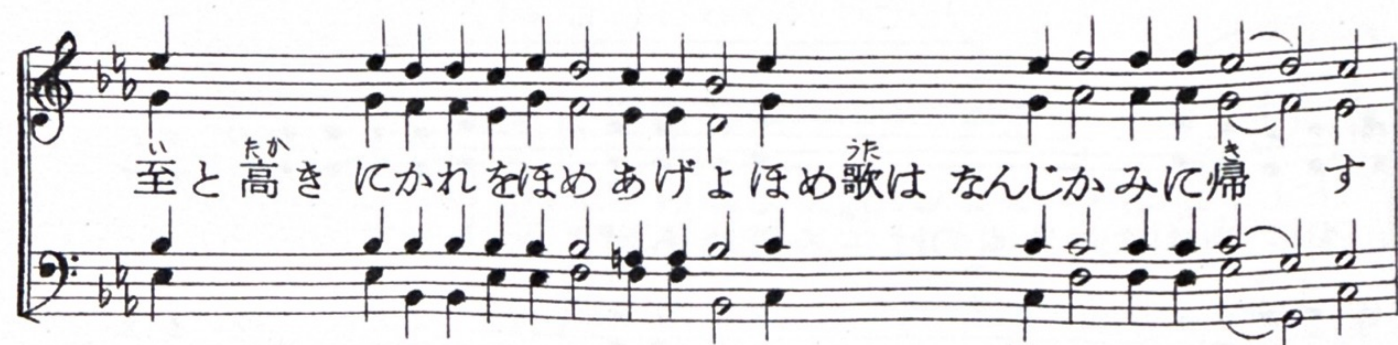


の^ん軍やかれをほめあげよほめ^た歌はなんじかみに帰^きす

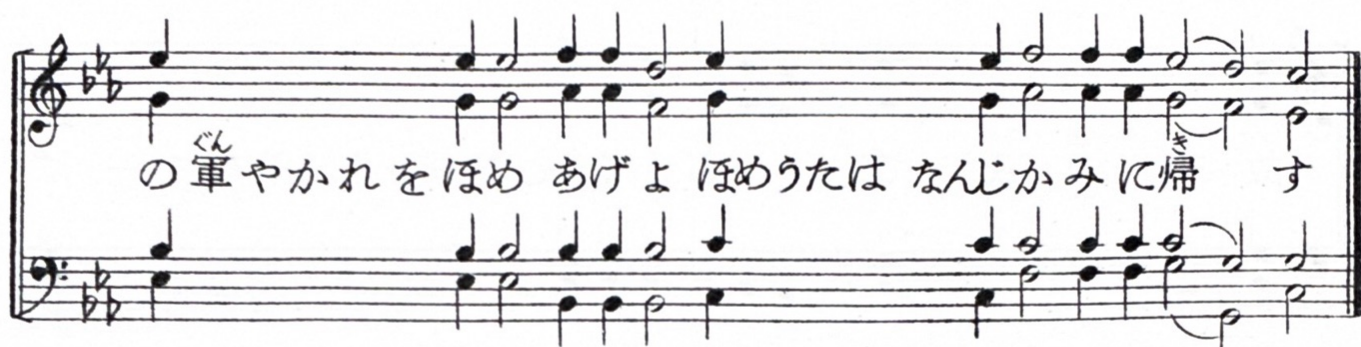
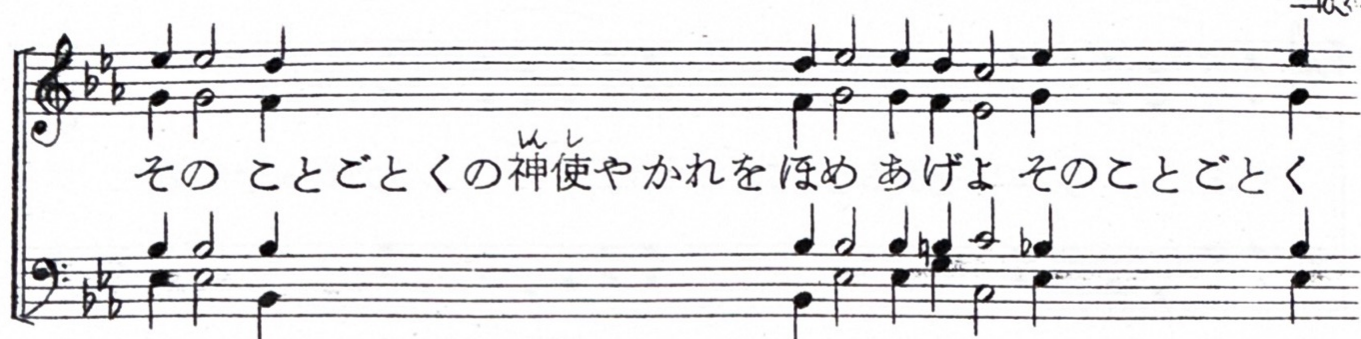
凡そ呼吸ある者(八調)



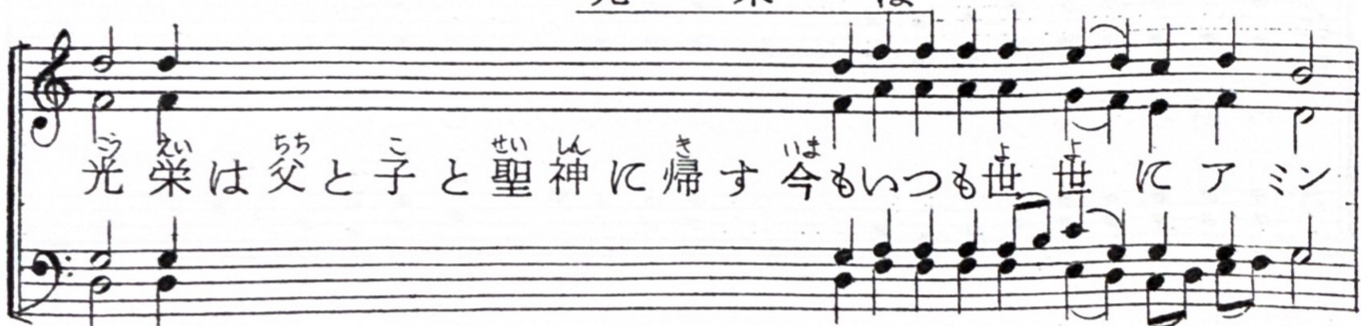
およそ呼^い吸^きあるものは主^{しゅ}をほめあげよ天^{てん}より主^{しゅ}をほめあげよ



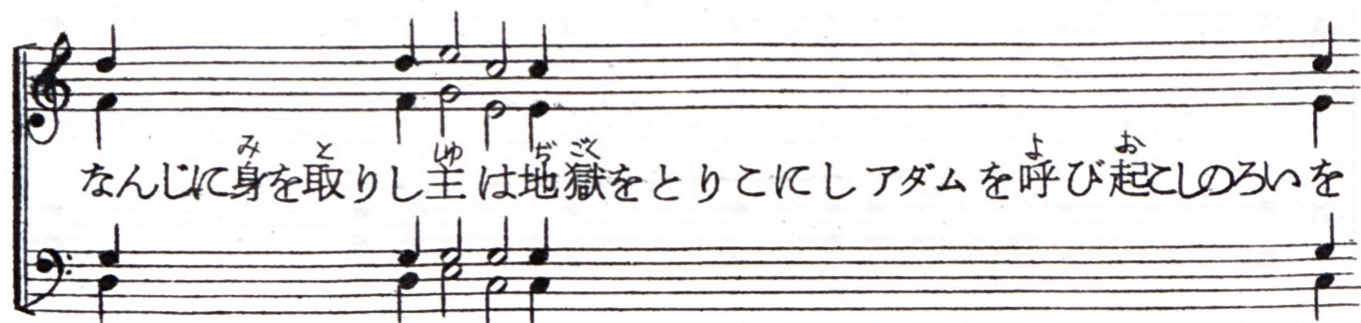
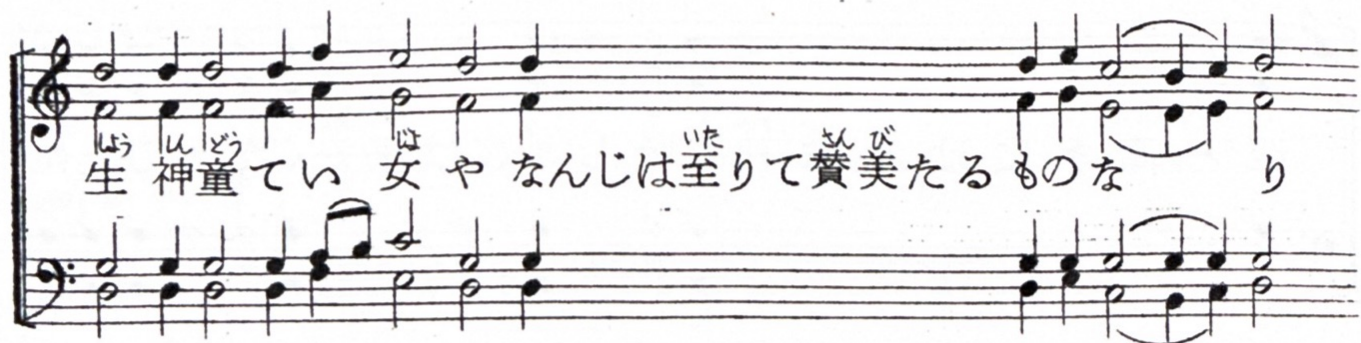
至^いと高^{たか}きにかれをほめあげよほめ^た歌はなんじかみに帰^きす

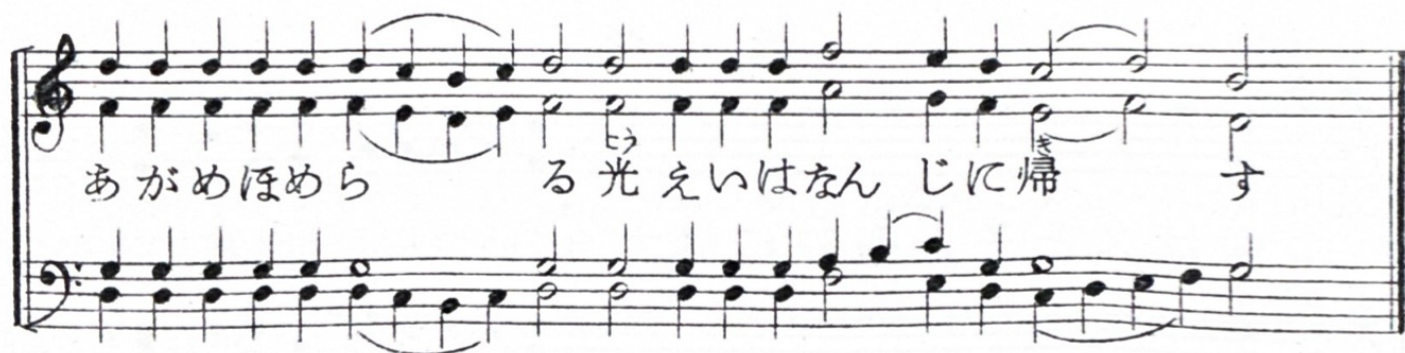


光 栄 は

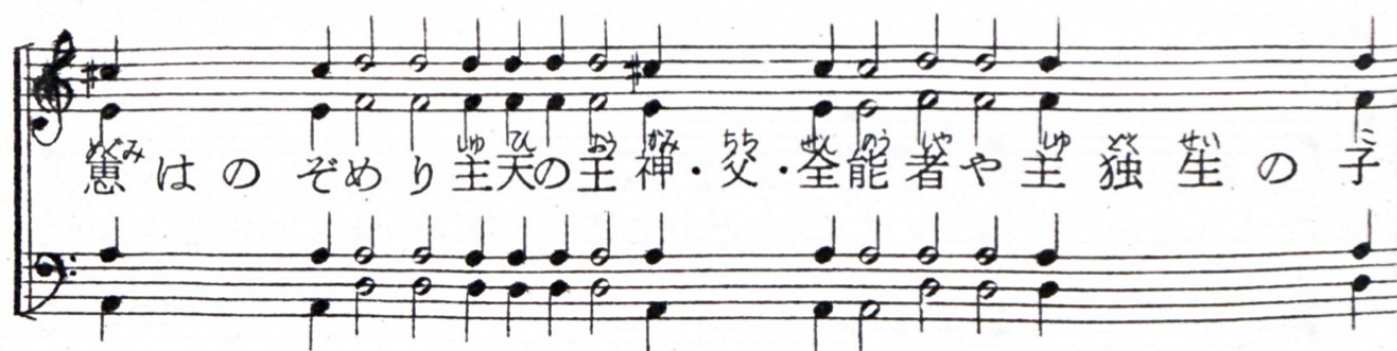


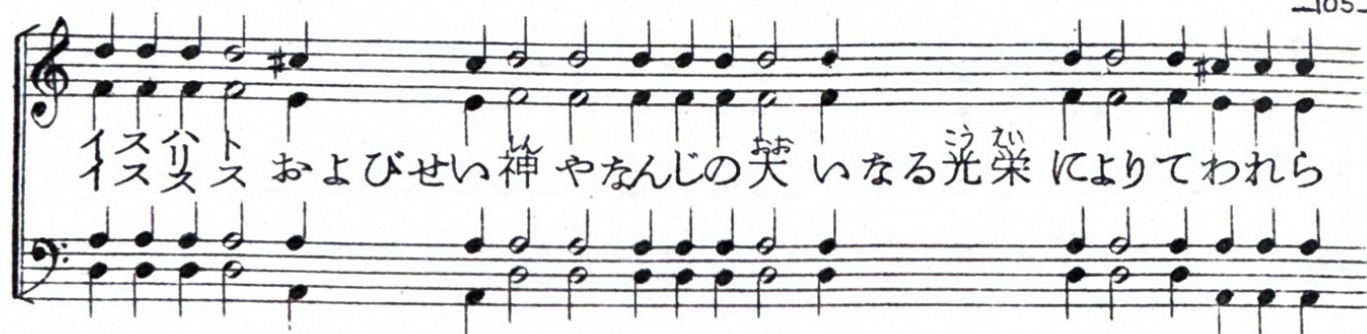
生 神 女 讃 詞



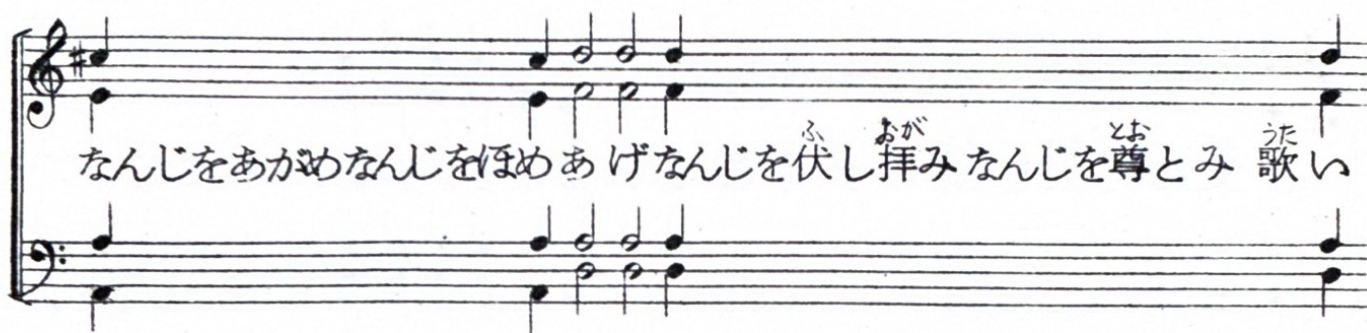


大 頌 詠 (一 番)





イス^スス^ス およびせい^し神^{かみ}やなんじの^お天^{あめ}いなる^こ光^ひ栄^えによりてわれら



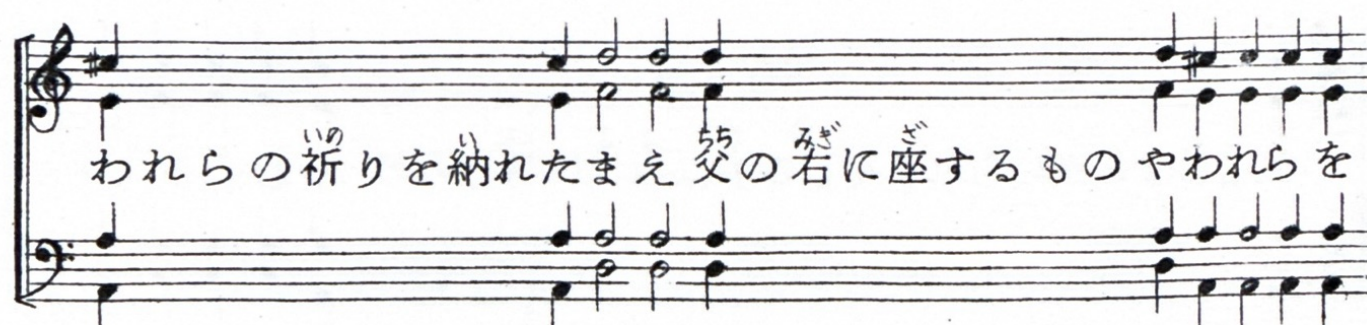
なんじをあかめなんじをほめあげなんじを^ふ伏し^{おが}拜みなんじを^と尊とみ^{うた}歌い



なんじに感謝^{おん}す主^ゆかみ^{かみ}や神^{かみ}の^こ小^{ひつじ}羊^{ちち}父^にの子^う世^よの^{つみ}罪^{にな}を荷^おいし



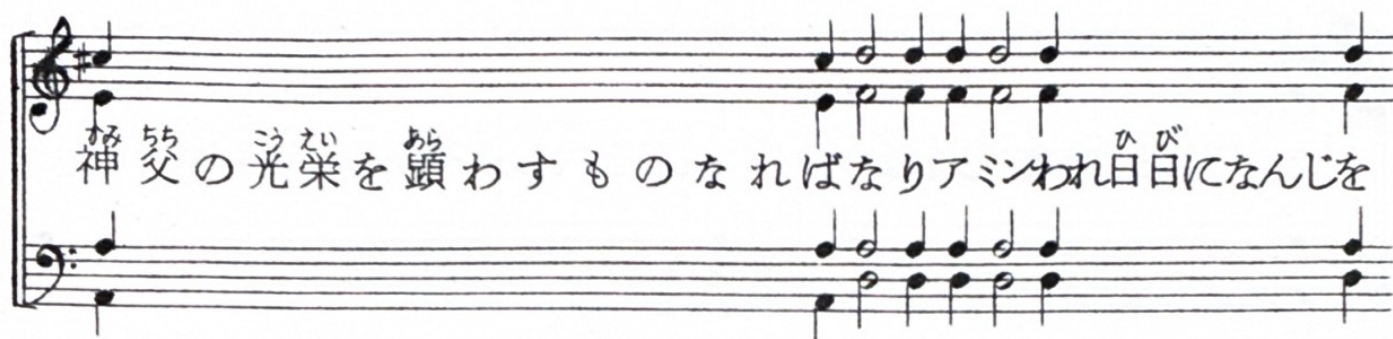
ものやわれらを^あ憐^れれみ^{たま}え世^よの^{もろ}諸^{もろ}の^{つみ}罪^{にな}を荷^おいしものや



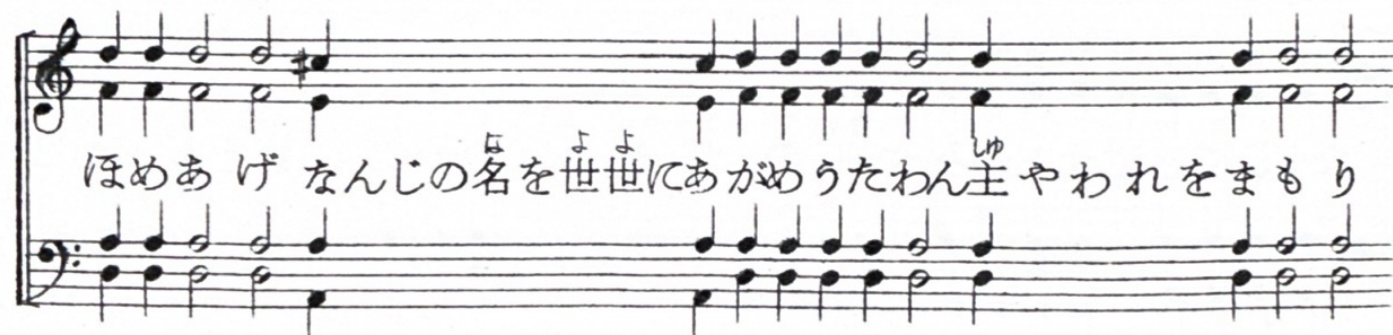
われらの^{いの}祈^りを納^めれたまえ^{ちち}父^の右^{みぎ}に^ざ座^するものやわれらを



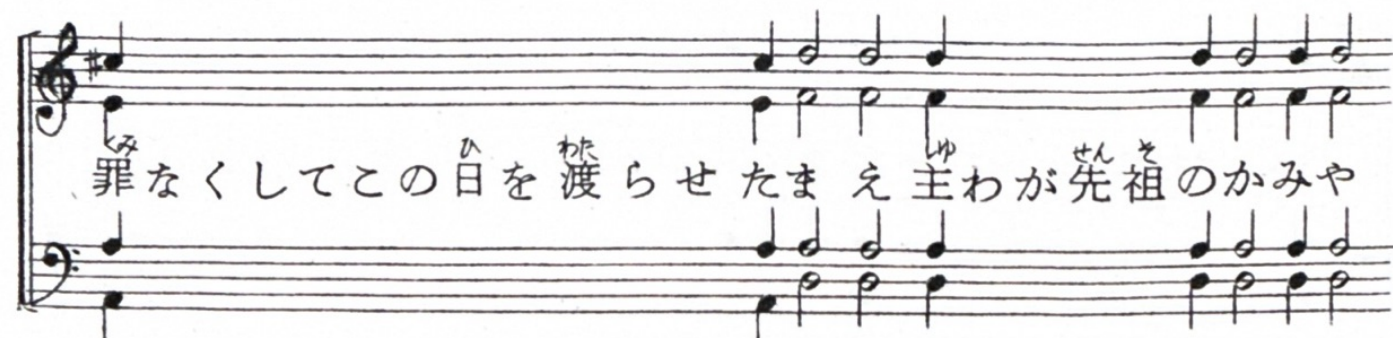
解れみたまえなんじはひとりせいなりなんじは独り主 イイスス



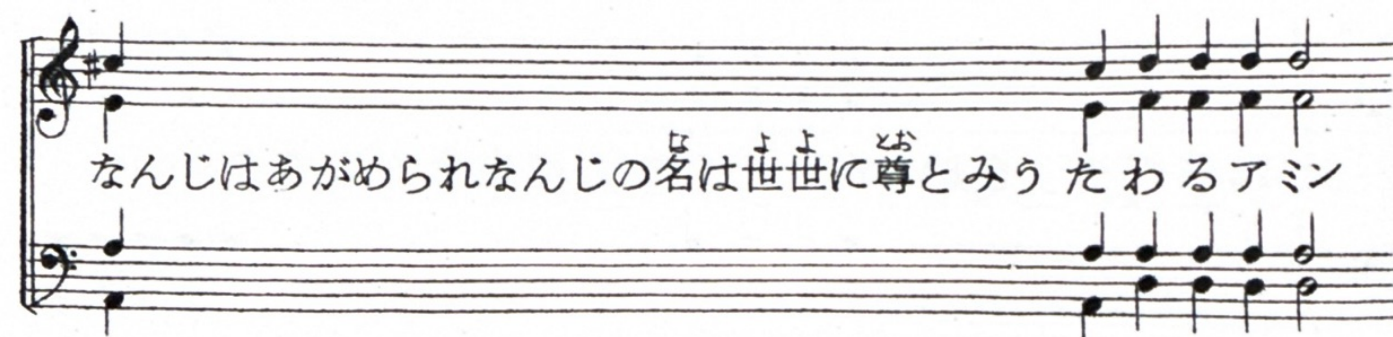
神父の光榮を顕わすものなればなりアミンわれ日々になんじを



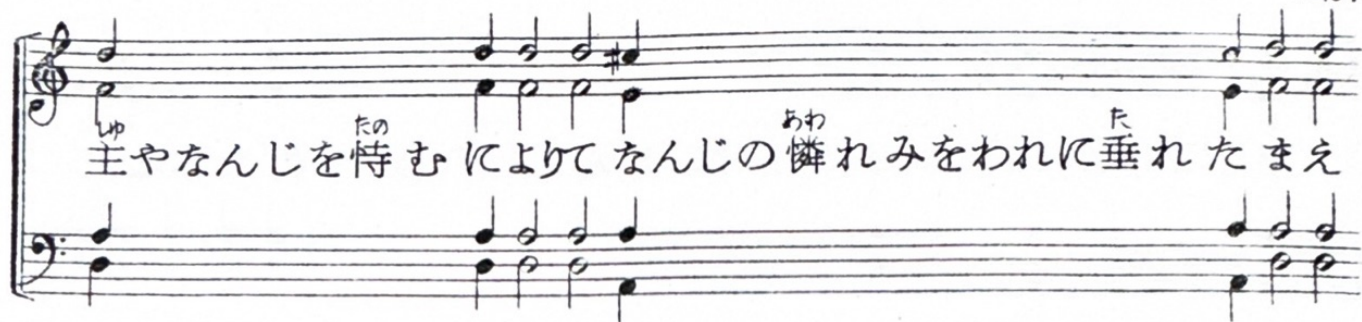
ほめあげなんじの名を世世にあがめうたわん主やわれをまもり



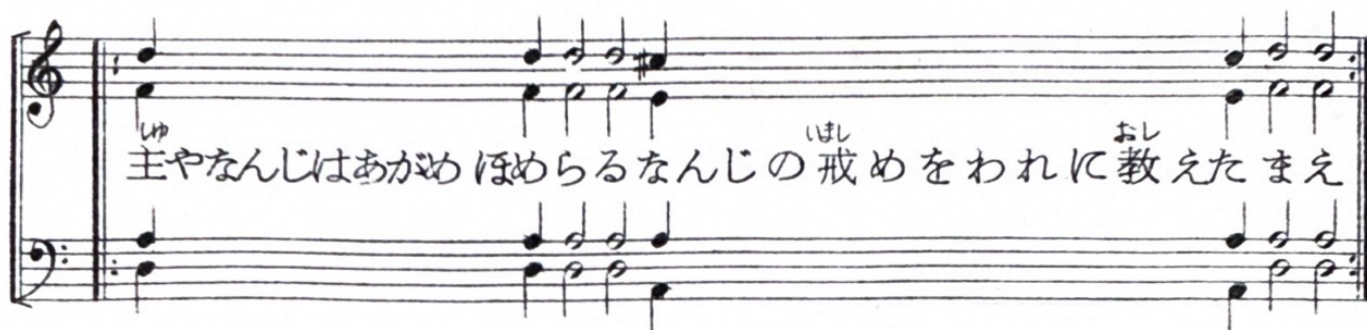
罪なくしてこの日を渡らせたまえ主わが先祖のかみや



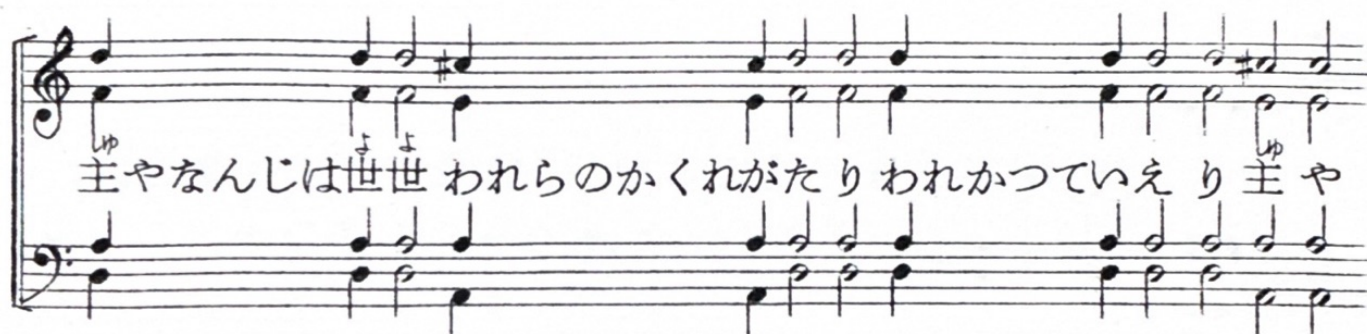
なんじはあがめられなんじの名は世世に尊とみうたわるアミン



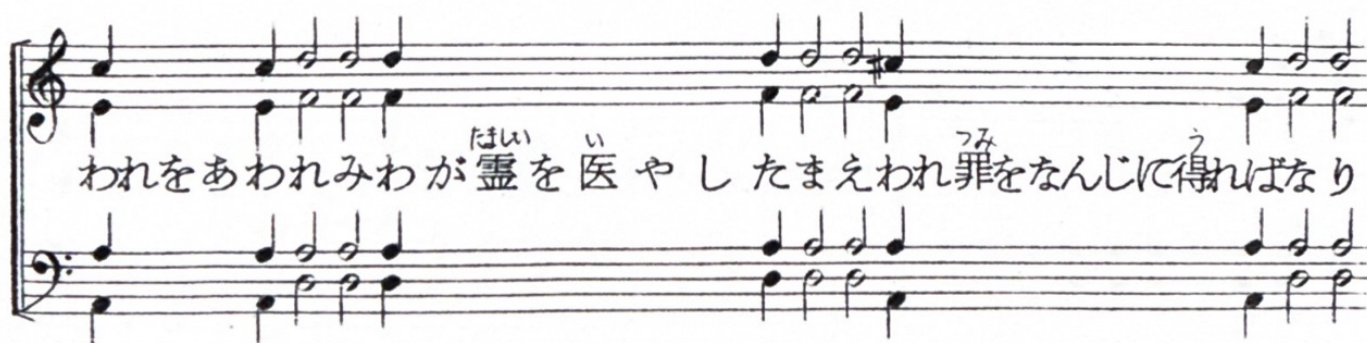
主^いやなんじを^{たの}恃^むによりてなんじの^{あわ}憐れみをわれに^た垂れたまえ



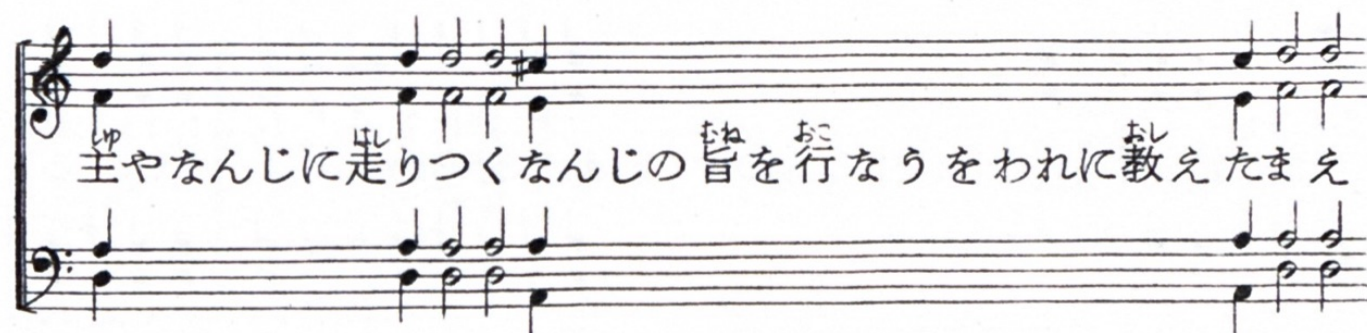
主^いやなんじはあかめほめらるなんじの^{いし}戒めをわれに^{おし}教えたまえ



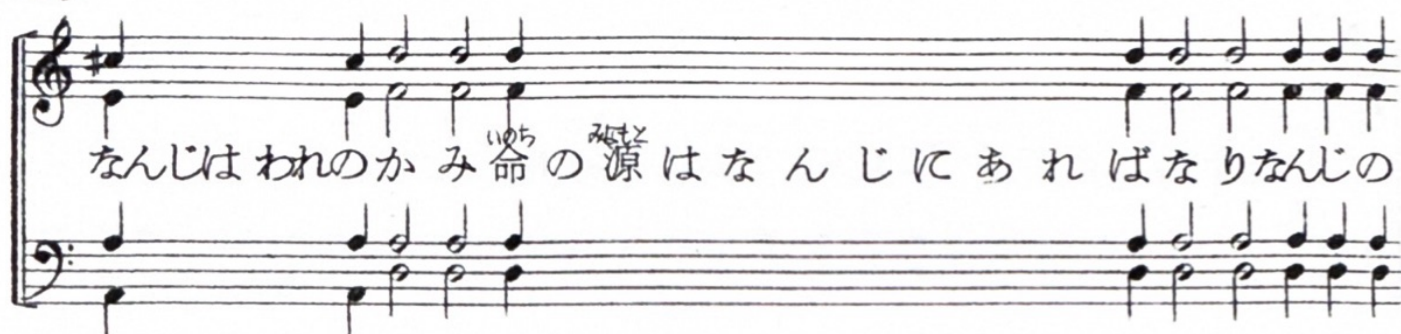
主^いやなんじは^よ世^よわれらのかくれがたりわれかつてい^いえり主^いや



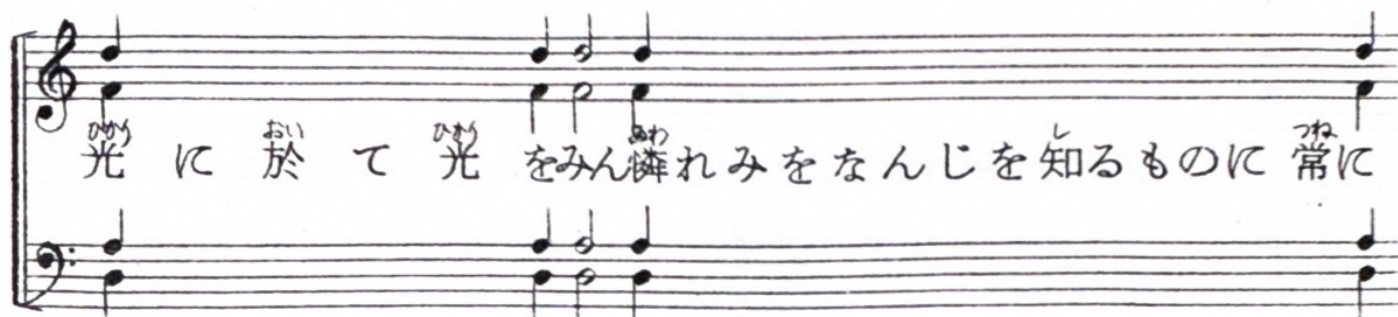
われをあわれみわが^{はい}霊を^い医^やしたまえわれ^{つみ}罪をなんじに^う得ればなり



主^いやなんじに^{いし}走りつくなんじの^{むね}旨を^{おこ}行なうをわれに^{おし}教えたまえ



なんじはわれのかみ^{いのち}命^{みこと}の源はなんじにあればなりなんじの

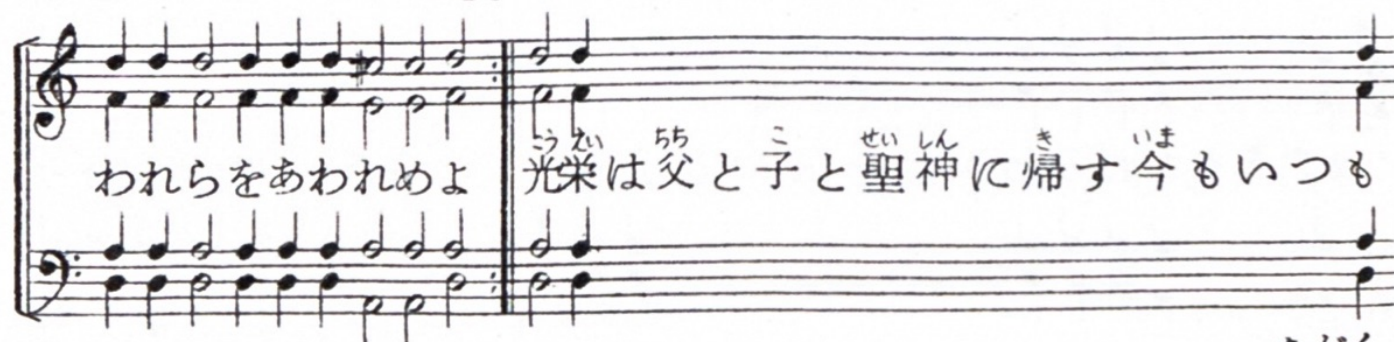


光^{ひかり}に於て光^{ひかり}をみん^{あわ}れみをなんじを知るものに常に



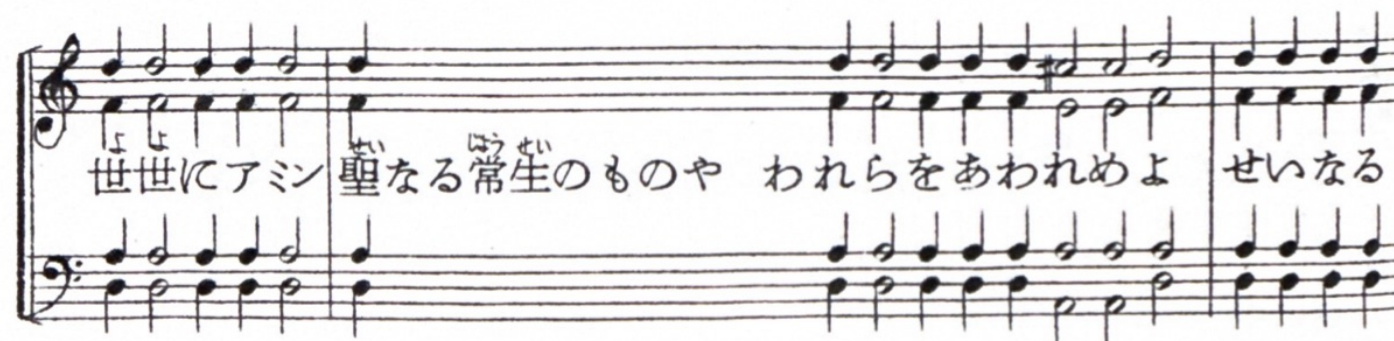
たれたま え 聖なる神^{かみ}・聖なる勇氣^{ゆうき}・聖なる常生^{じょうせい}のものとや

三度



われらをあわれめよ 光榮^{こうえい}は父と子と聖神^{せいしん}に帰す今もいつも

ながく



世にアミン 聖なる常生^{じょうせい}のものとや われらをあわれめよ せいなる

神 聖なる勇氣 聖なる常生のものやわれらをあわれめよ

大 頌 詠 (二 番)

天にはかみの光 えいあらわれ 地にはへい安くだり

ひとにめぐみはのぞめり かみちちあらゆるもののつかさや

ひとりの子 イイスス およびせい神 や なんじの笑 になる

光 えいによりて なんじをあかめなんをほめあげふしおがみて



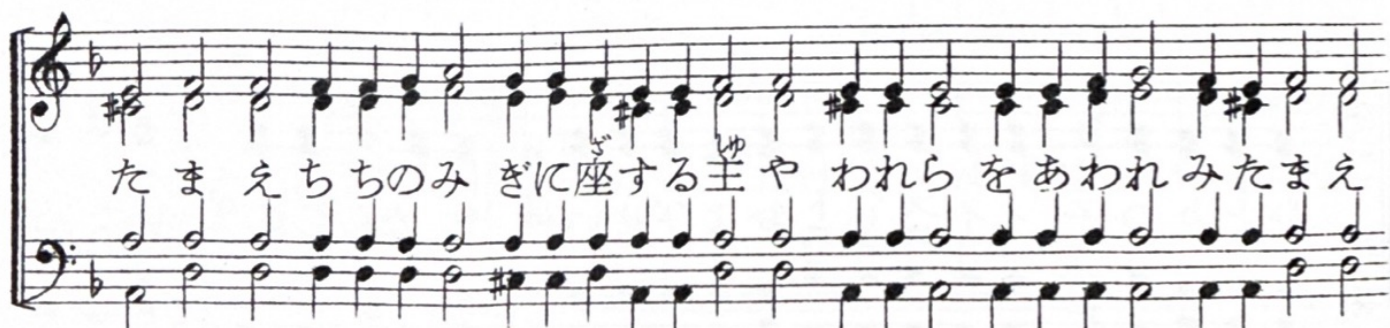
なんじを尊^ととみうたいなんじを感謝^{かんしゃ}し主^{しゅ}かみはかみのひつじ



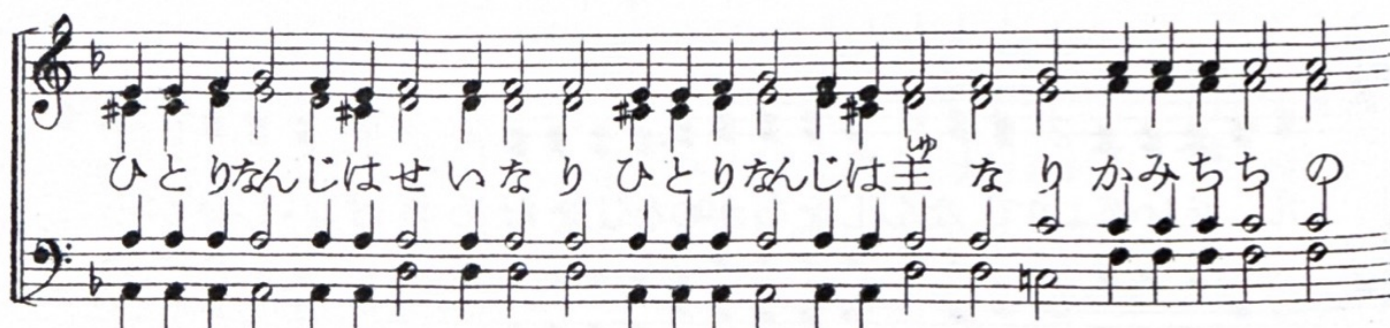
ちちの子世^{こよ}のつみをにないしものやわれらをあわれみたまえ



世^よの諸^{もろ}諸^{もろ}のつみをにないし主^{しゅ}やわれらのいのりをいれ



たまえちちのみぎに座^ざする主^{しゅ}やわれらをあわれみたまえ



ひとりなんじはせいなりひとりなんじは主^{しゅ}なりかみちちの

光 えいをあらわすのイイス^スス^スなればなりア^シン われひびに

なんじをほめあげなんじの名を世^よ世^よにあがめうたわん主^{しゅ}やわれを

まもりつみなくしてこの日^ひをわたらせたまえわが主^{しゅ}わが先祖^{せんぞ}の

かみやなんじはあがめられなんじの名は世^よ世^よにほめうたわるア^シン

ながく

主^{しゅ}や あわれみをたれてわれらのぞみにかなわせたまえ

はやく

三度

あがめほめらるの主やなんじのいましめをわれにおし えたまえ

ながく

主やなんじは世々にわれらを覆いまもれり われかつて言えり

主やわれをあわれみわれのたましいをいやしたまえ

はやく

われつみをなんじにうればなり 主やなんじにはしりつく

なんじのむねをおこなうをわれにおし えたまえなんじはわれのかみ

なんじはいのちのみなもとなればなりなんじにてらされてわれら

ひかりをみんなのるあわれみをなんじを知るものに常にたれ

たまえ せい^み天 主^{しゅ} せい^{ゆう}勇 毅^き せい^{じょう}常 せい^{しゅ}なる主

三度

われらをあわれめよ 光^{ひかり}えいは父と子と 聖^{せい}神^{しん}のものなり 今^{いま}も

いつも^{いつも} 世^よ世^よにアミン せい^{じょう}常 せい^{しゅ}なる主^{しゅ}われらをあわれめよ せい

天 主 せい 勇 毅 せい 常 せい なる 主 われら を あわれ め よ

至と高きには (三 番)

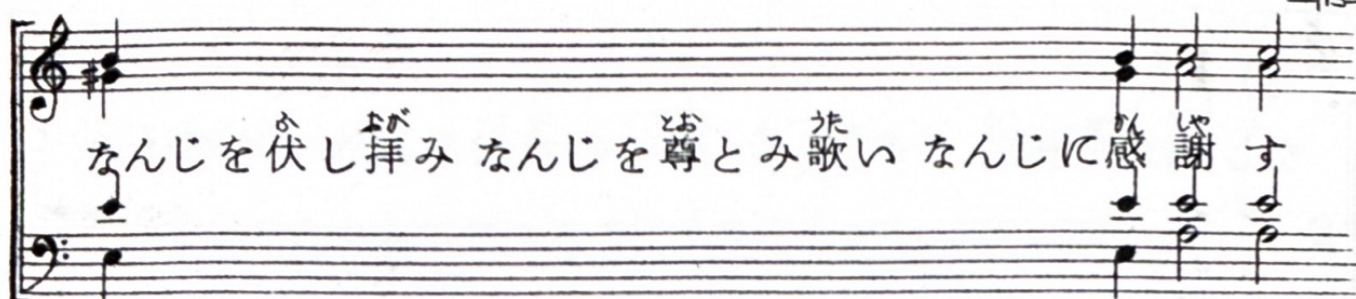
ロマキン作曲

至 と 高 き に は 光 榮 神 に 帰 し 地 に は 平 安 く だ り

人 に 恵 は の ぞ め り 主 天 の 主 神 父 全 能 者 や

主 独 生 の 子 イ イ ス ス お よ び せ い 神 や なん じ の

大 い なる 光 榮 に よ っ て わ れ ら なん じ を あ か め なん じ を ほ め あ げ



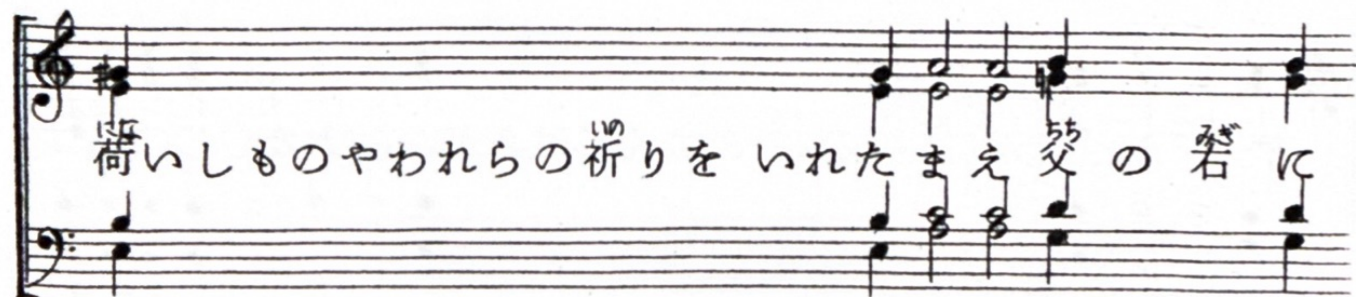
なんじをひ伏しよ拝み なんじをた尊とみた歌い なんじにかん感い謝す



主しゅか みや 神かみ の 小せう羊じやう ちち の 子こ 世よ の 罪つみ を 荷か い し



ものやわれを あわれ みたま え 世よ の 諸もろ 諸もろ の 罪つみ を



荷か い し ものやわれらの 祈いの り を い れ た ま え 父ちち の 右みぎ に



座ざ する ものやわれらを あわれ みたま え なんじは 独ひとり り せい な り

なんじは独り主 イイスス 禰父の光榮を顯わすものなれば

なりアシン われ日々に なんじをほめあげなんじの名を世世に あがめ

うたわん主 や われをまもり 罪なくしてこの日をわたらせ

たまえ主 わが先祖の禰や なんじはあがめられなんじの名は

世世に尊とみ うたわるアシン主 やなんじを恃むによつてなんじの

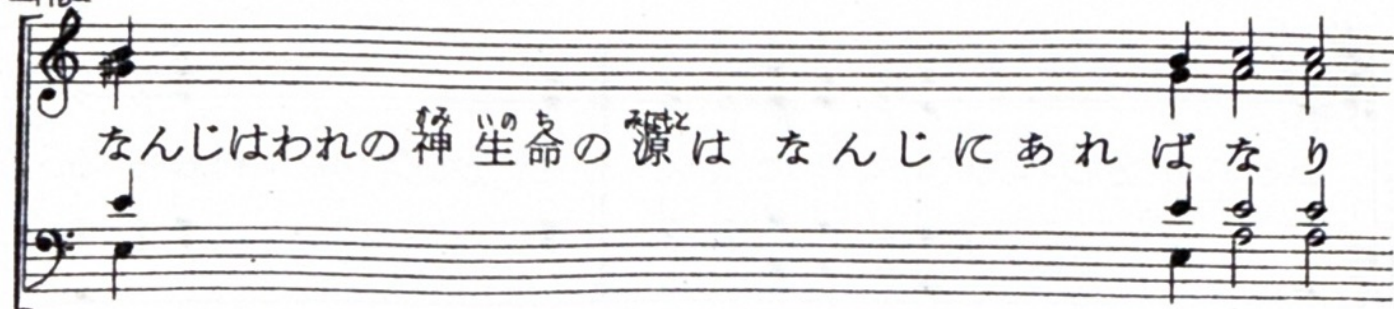
あわれみをわれらにたれたまえ 主^{しゅ}やなんじはあかめほめらる

なんじの^{いし}戒めをわれに^{おし}教えたまえ 主^{しゅ}やなんじは^よ世世

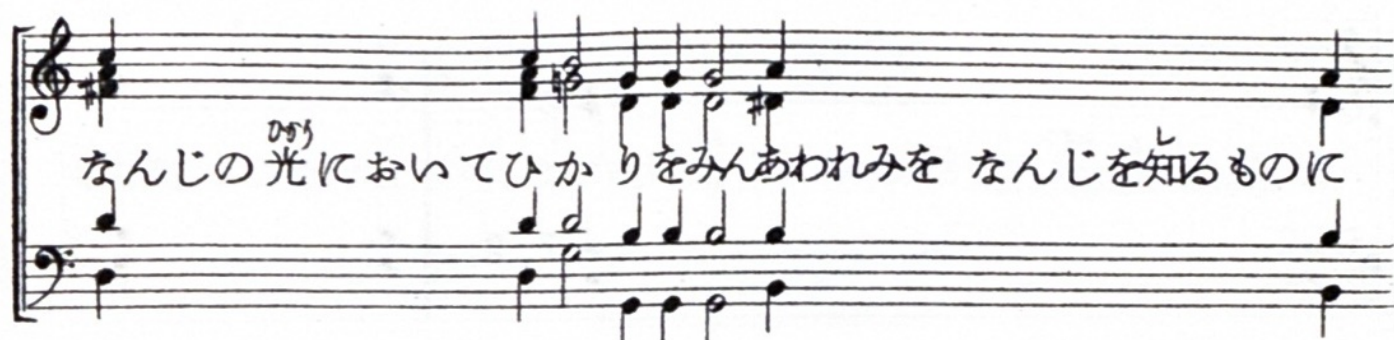
われらのかくれがたりわれかつて^い言えり主^{しゅ}やわれをあわれみ

わがたましいをいやしたまえわれ^み罪をなんじにうればなり

主^{しゅ}やなんじにはしりつくなんじのむねをおこなうをわれに^{おし}教えたまえ



なんじはわれの^{いのち}神 生命の^{もと}源は なんじにあれば なり



なんじの^{ひかり}光においてひかりをみんあわれみを なんじをしるものに



つねにたれたま え 聖なる^{けい}神 聖なる^{ゆうき}勇毅 聖なる



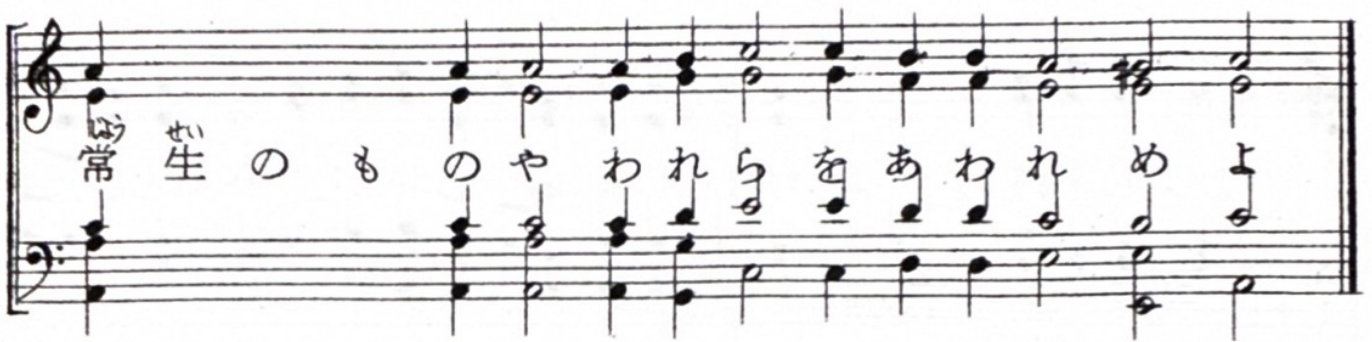
常^{じょう}生^{せい}の ものやわれらをあわれめよ 光^{ひかり}えいは 父^{ちち}と子^こと



聖^{せい}神^{しん}に帰^{かえ}す 今^{いま}もいつも 世^よ世^よにアミン 聖^{せい}なる 常^{じょう}生^{せい}の ものや



われらをあわれめよ 聖なる神 聖なる勇毅 聖なる



常 生 の も の や われらをあわれめよ

大 頌 詠 (番 外)

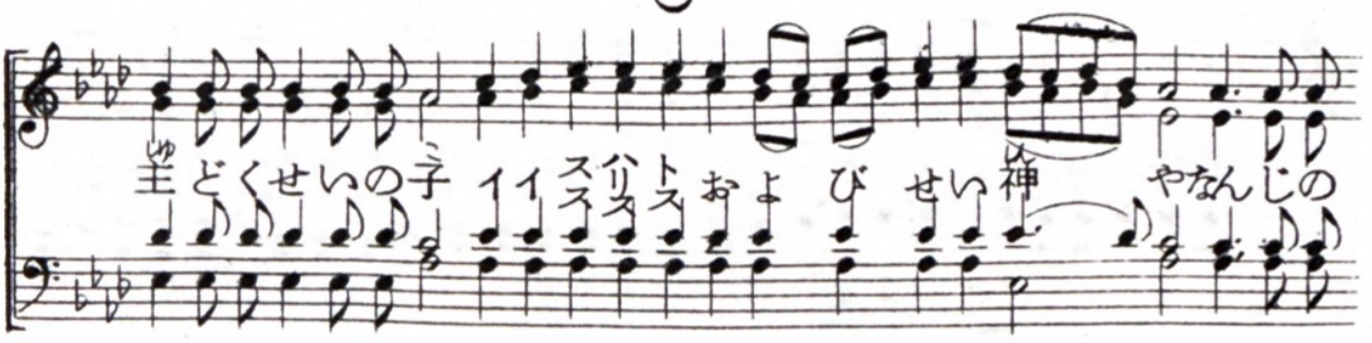
ギリシヤ の 歌 譜
デ・リオフスキイ 訳



至とたかきには光えいかみに帰し 地にはいふくんだり



ひとにめぐみはのぞめり主天の主 かみちち全能者や



主どくせいの子 イイススおよびせい神 やなんじの

笑 いる光 えいにより てわれ らなんじをあが め

なん じをほめ あげなんじをふ しおが みなんじを

尊 と みうた いなんじに感謝 す主かみや

かみの小ひつじちち の子世のつみをにないしものや

われらをあわれみなま え世のもろもろのつみをにないし

121-

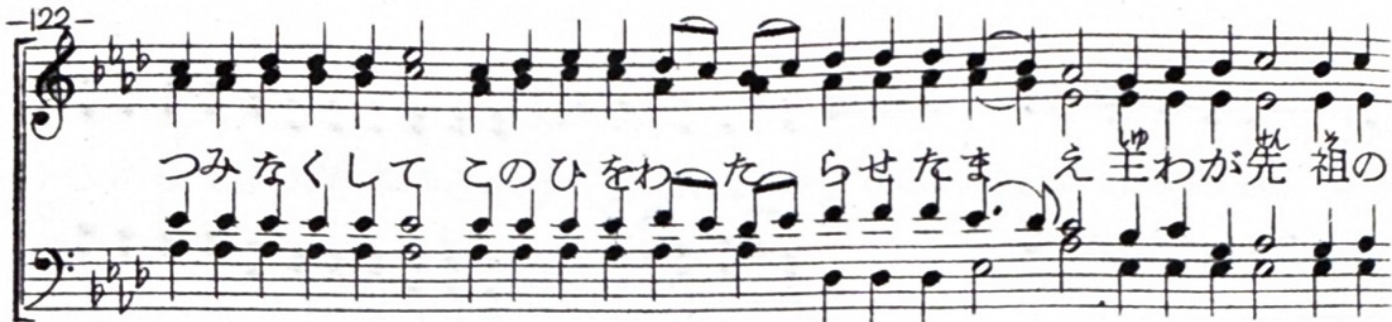
ものやわれらのいのりをいれたま えちちのみぎに座するものや

われらをあわれ みたま えなんにはひとりせいなり

なんにはひとり主 イイスカミちちの光 えいをあらわすもの

なればなりアミンわれ ひびになんじをほめあげなんじの名を

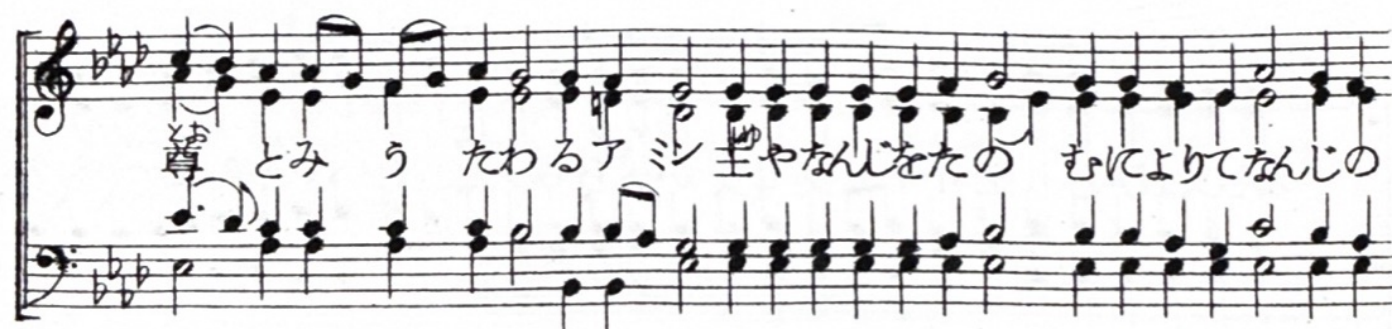
世世に あがめうたわん主やわれらをまもり



つみなくして このひをわ た らせたま え^ゆ主^わが^先祖^の



か みやなんじはあ がめほめら れなんじの名は世世^{よよ}に



尊^{たう}とみ う たわるア^シ主^ゆやなんじをたの むによりてなんじの



あわれみをわれらにた れ たま え^ゆ主^わやなんじはあ がめ

三度



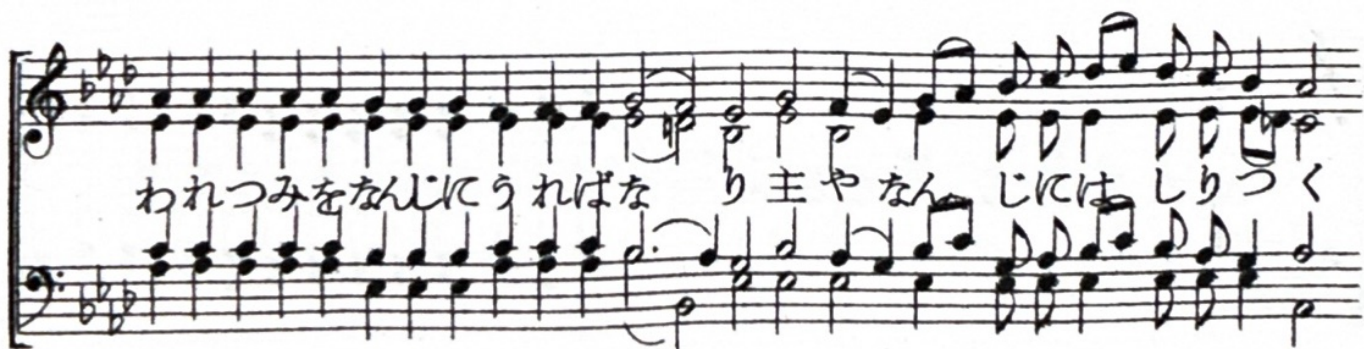
ほめらるなんじのいましめを われに お しえたま え



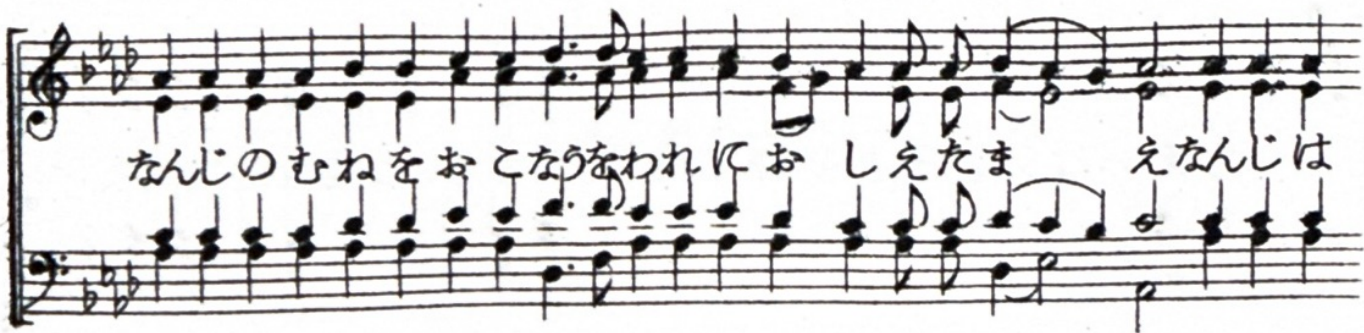
主やなんは世世われのかくれがたりわれかつて言えり



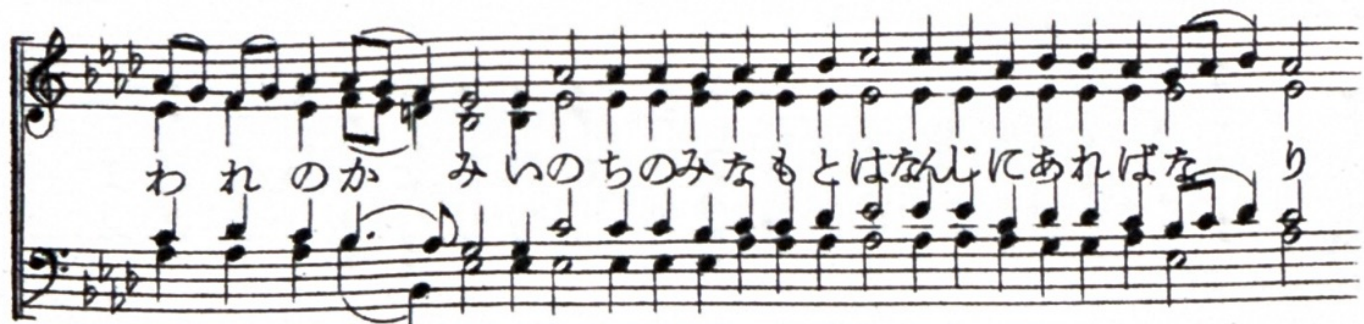
主やわれをあわれ みわがたましいをいやしたまえ



われつみをなんにうればなり主やなんじにはしりつく



なんじのむねをおこなうわれにおしえたまえなんじは



われのかみいのちのみなもとはなんじにあればなり

なんじの光^{ひかり}におい て ひかりをみんなあわれみ をなんじを

知るものにつねに た れ た ま え 聖^{せい}なる神^{かみ}

三度

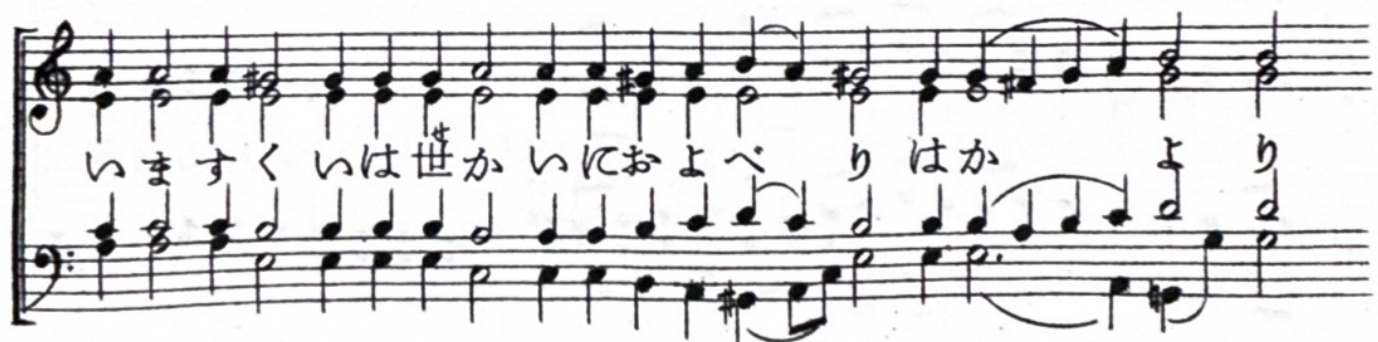
聖^{せい}なる勇毅^{ゆうぎ} 聖^{せい}なる常生^{じょうせい}の ものやわれらをあわれめよ

光^{ひかり}えいは父^{ちち}と子^こと聖^{せい}神^{かみ}に帰^{かへ}す いまもいつも世^よ世^よにアミン

聖^{せい}なる常生^{じょうせい}の ものやわれらをあわれめよ



讃 詞 (第一・三・五・七調の時歌う)



-126-

勝利と天いなるめぐみをたまえばなり

讃 詞 (第二・四・六・八 調の時歌う)

主やなんじはかよりふくかつして地ごくのくさを

やふり死のばつをほろぼし万ぶつをあだのあみに

脱しすくえりひとりい 慈の主やなんじの

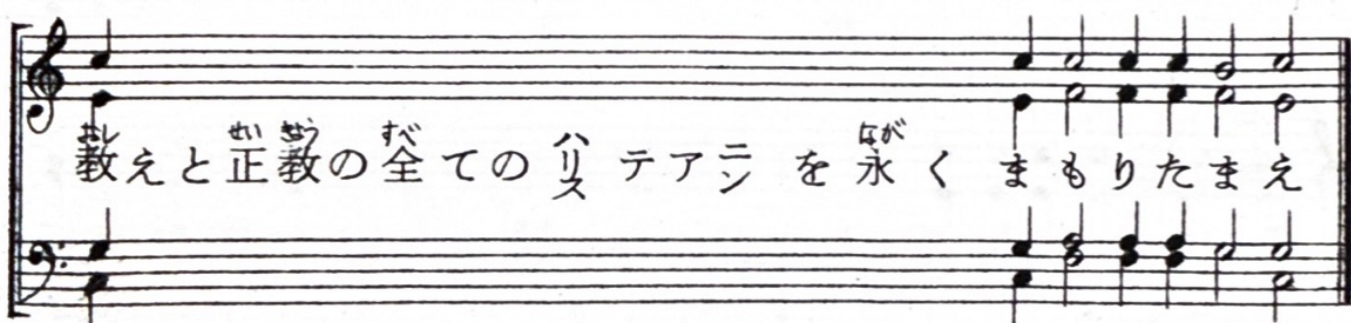
門徒にあらわれてこれをふくいんするにつかわし



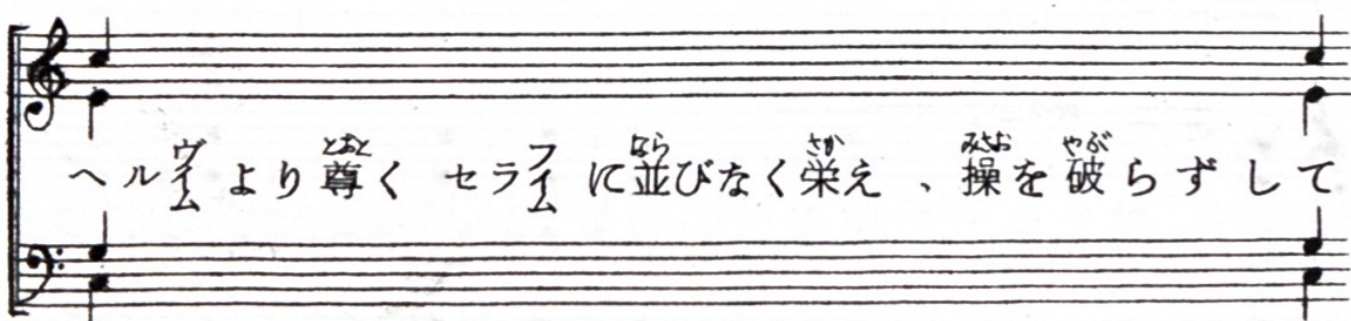
もってなんじのへい^め安を世^せかにたまえり



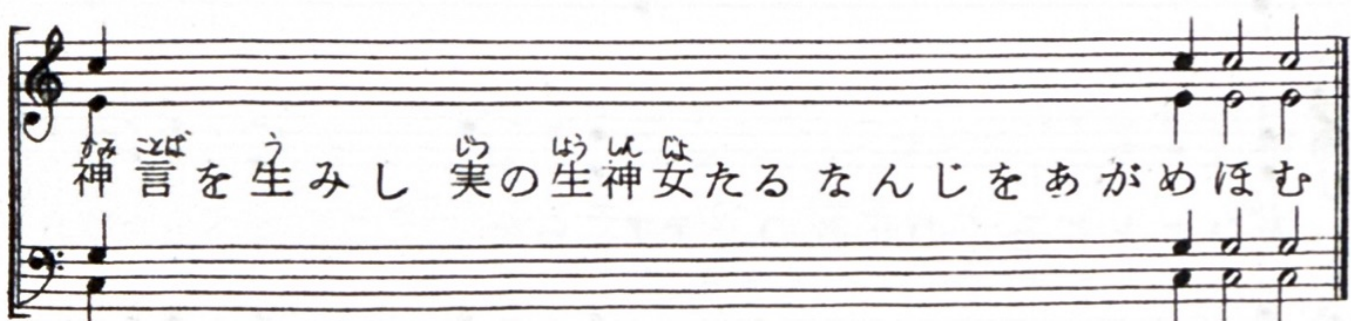
ふくをくだせ アミン かみやわが^{くに}国の^み天皇と^{せい}正教会の



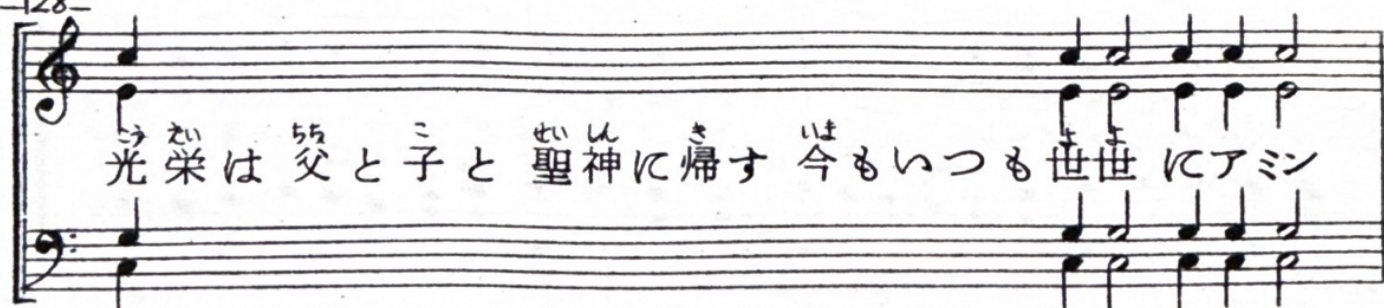
教えと^{せい}正教の^{ばん}全ての^ふアミンを^{なが}永くまもりたまえ



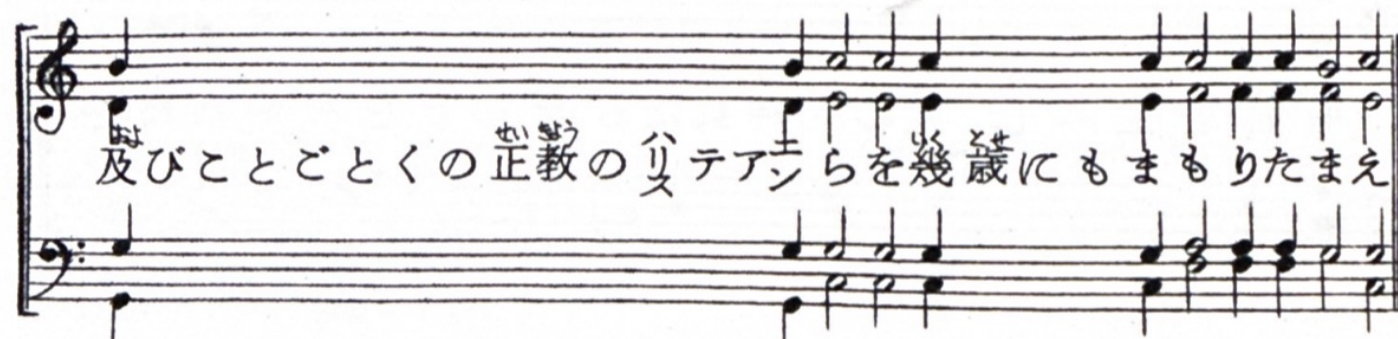
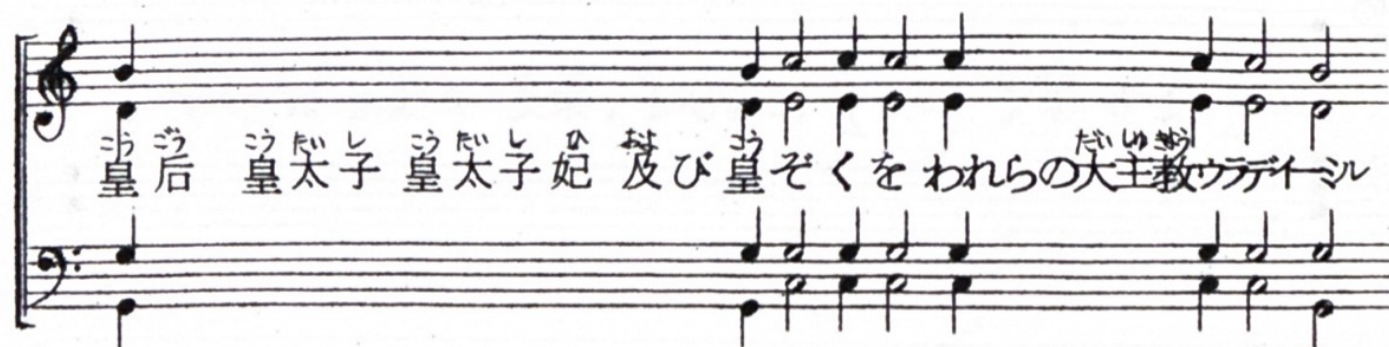
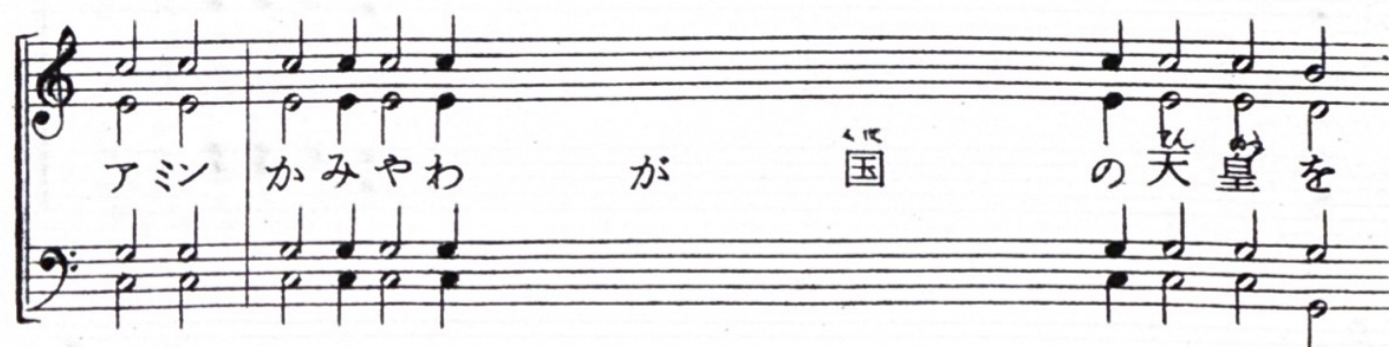
ヘル^うより^た尊くセラフに^{なら}並びなく^き栄え、^み操を^{やぶ}破らずして



神^{かみ}言^{ことば}を生^うみし^い実の^う生^い神女^{しんむすめ}たるなんじをあがめほむ



萬 寿 詞

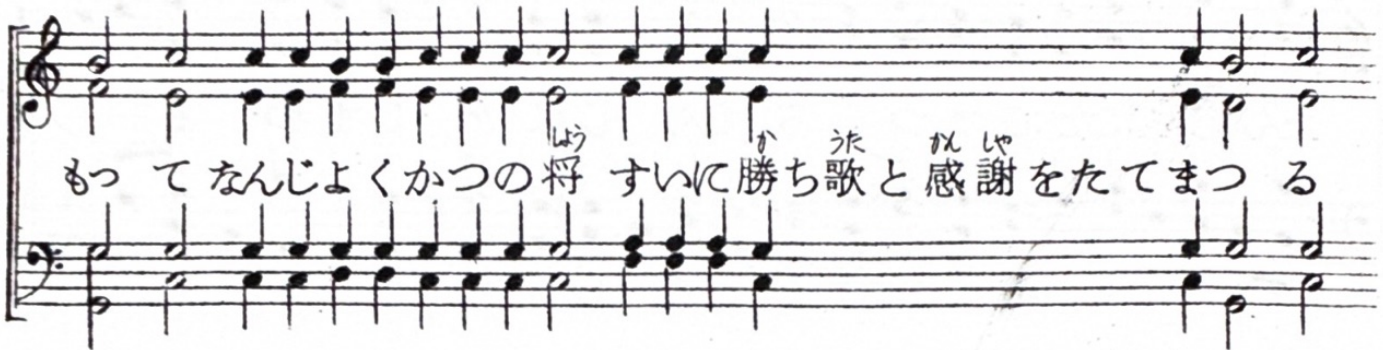


生神女讃詞（第一番）

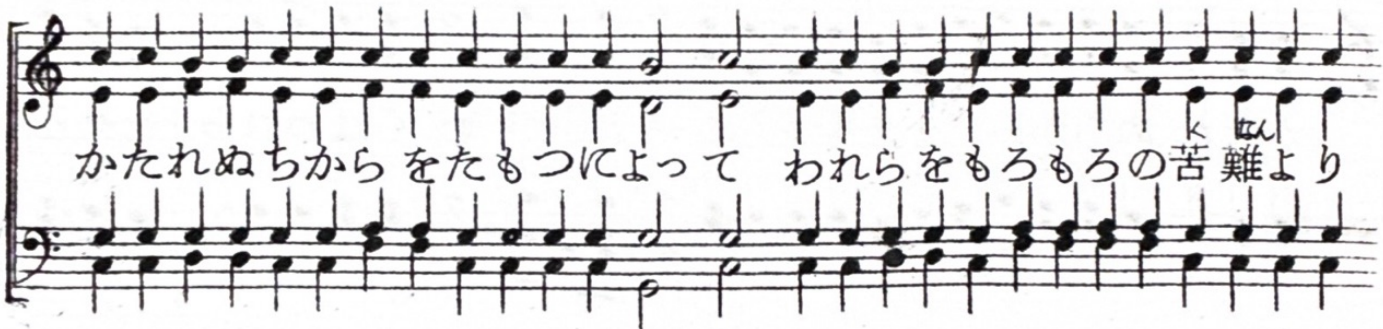
-129-



生^い神^し女^なやわれらなんじのほく婢^いはわざわいよりたすけられしを



もつてなんじよくかつの将^{しやう}すいに勝^かち歌^{うた}と感謝^{かんしゃ}をたてまつる

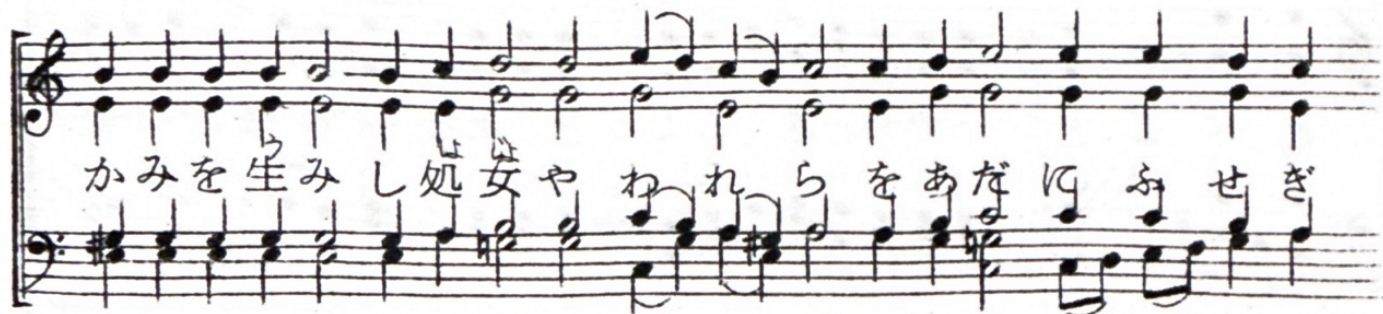


かたれぬちからをたもつによつてわれらをもろもろの苦難^{くなん}より

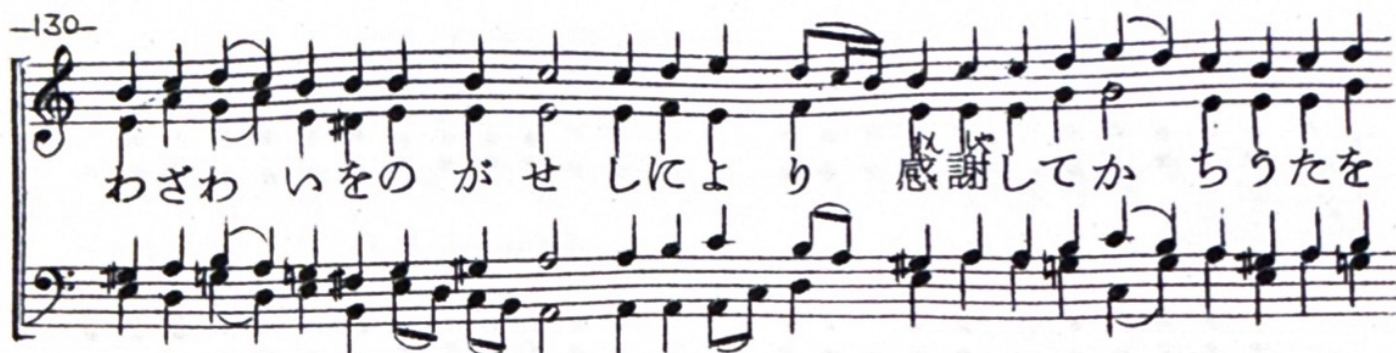


すくいなんじをうたうてよめならぬよめや慶^{うら}べよと呼^よばしめたまえ

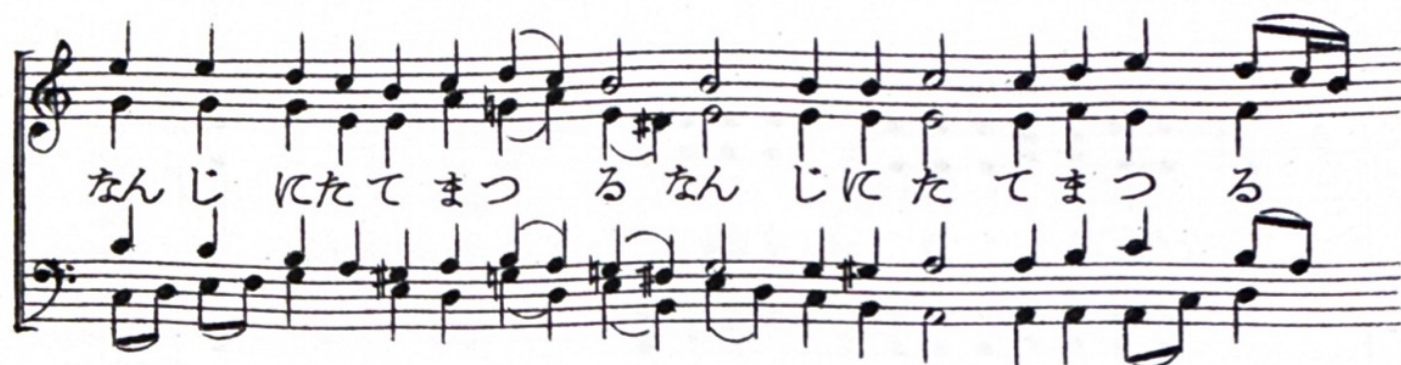
生神女讃詞（二番）



かみを生^うみし処女^{しよな}やわれらをあだにふせぎ



わさわ いをの が せ しに よ り 感謝してか ちうたを



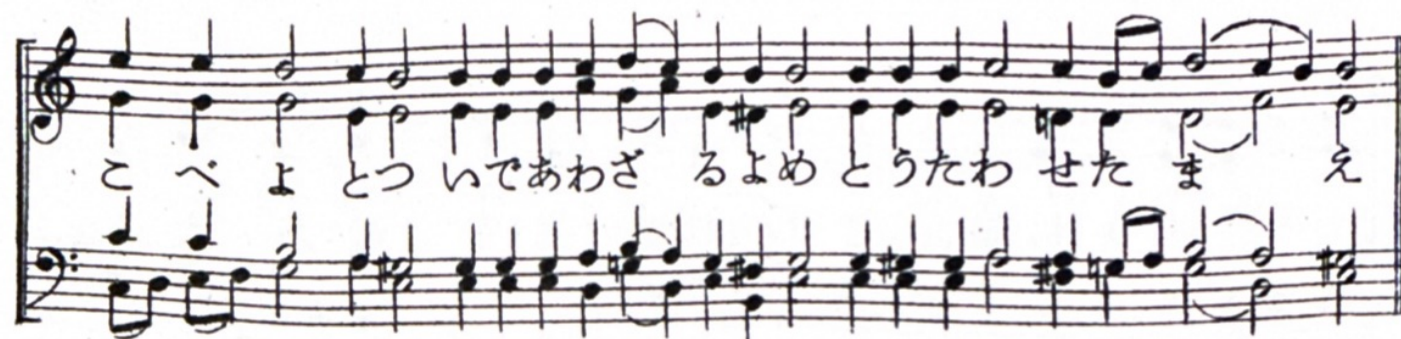
なんじ にたてまつ る なんじ にたてまつ る



かたれぬちから をたもつものやね がわくはわれら をもろ

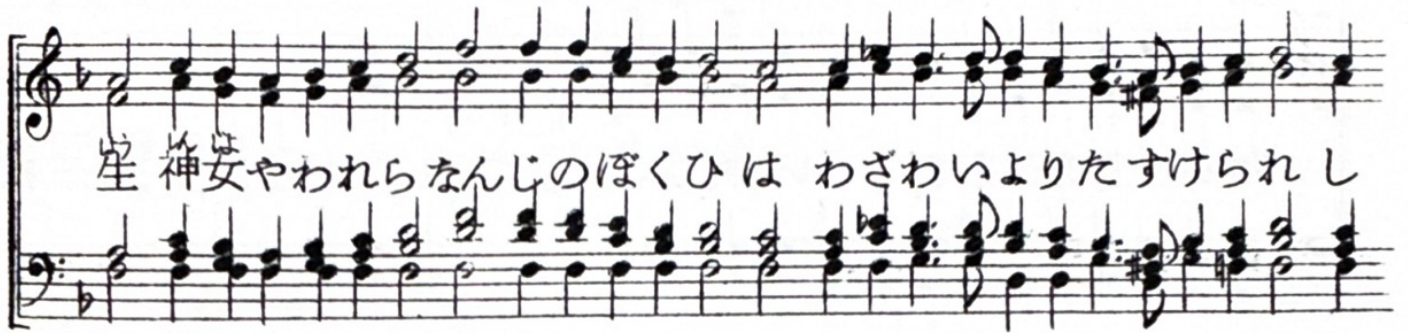


もろのあや うきにまもり なんじをほめ あげてよろ

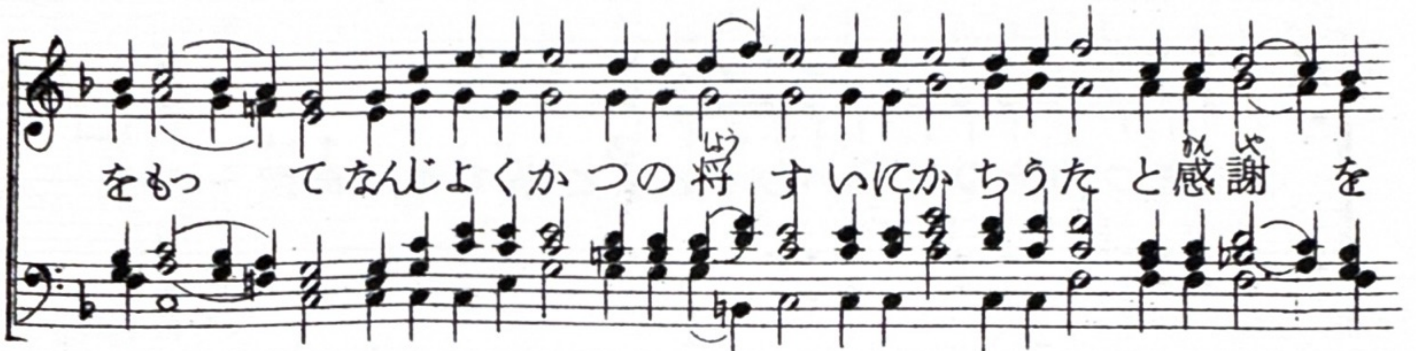


こべよ とついであわさ るよめ とうたわせた ま え

生神女讃詞（三 番）



生神女やわれらなんじのぼくひは わざわいよりたすけられし



をもつてなんじよくかつの将^いすいにかちうた^いと感謝^いを



たてまつるかたれぬちからをたもつによつてわれらを



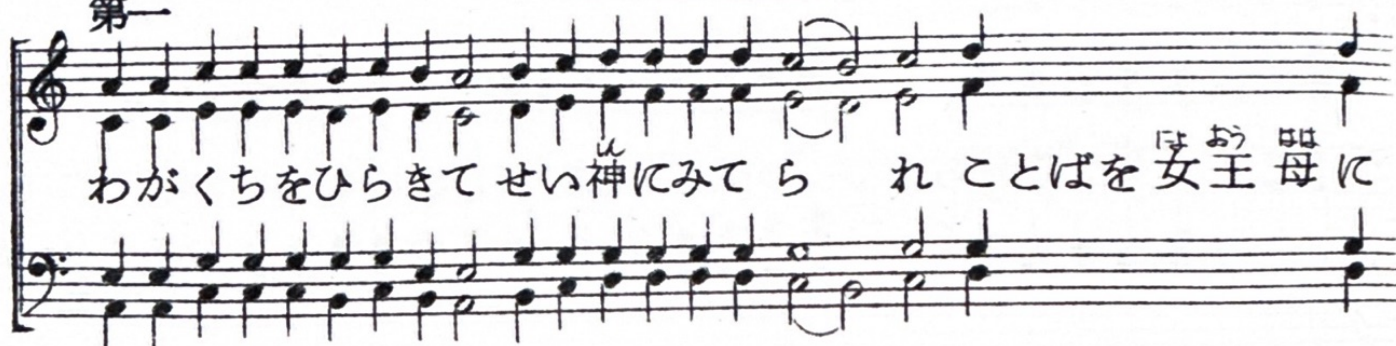
もろもろのくなんよりすくいなんじをうたうてよめ



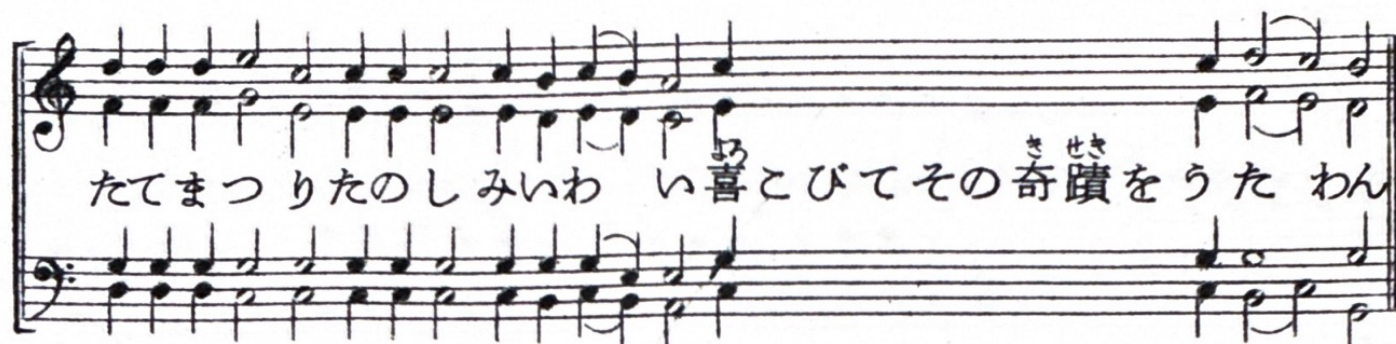
ならぬよめやよろこべよとよばしめたまえ

共 頌 歌

第一



わがくちをひらきてせい^ん神にみてら れ ことばを^ほ女^お王^母に



たてまつりたのしみいわ い喜^{よろこ}びてその奇蹟^{きせき}をうた わん

第三

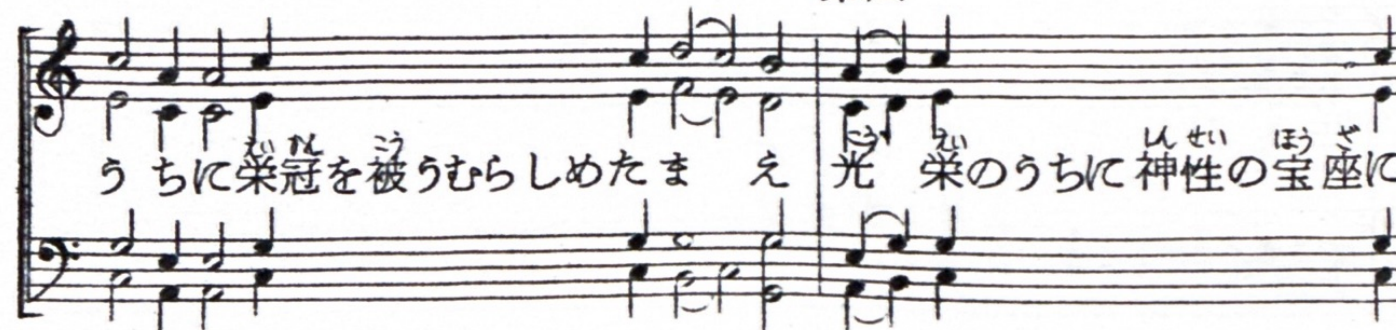


聖^{せい}神^{じん}女^{にょ}せい^{せい}活^{かつ}にしてつきさるいずみや祝^{いわ}うてなんじを



ほめ^{ほめ}歌^{うた}うものの^は霊^{たま}をかためかれらになんじが神妙^{しんみょう}なる光^{ひかり}えいの

第四



うちに榮冠^{えいかん}を被^かうむらしめたま え 光^{ひかり} 榮^えのうちに神性^{しんせい}の宝^{ほう}座^ざに

座するイイタかみはかるき 雲にのるがごとく 朽ちざるの手に

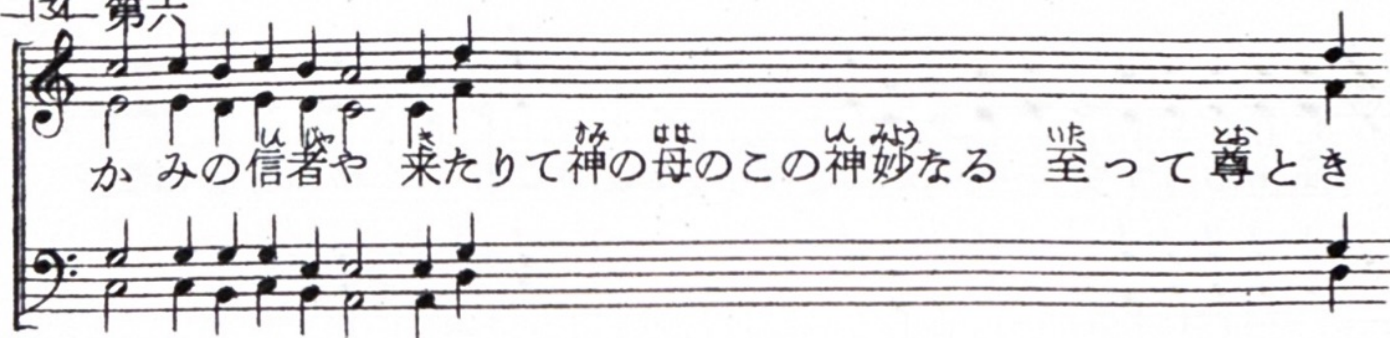
いだかれきたりて リス や光 えいはなんじの 力に帰すと 呼ぶものを

第五

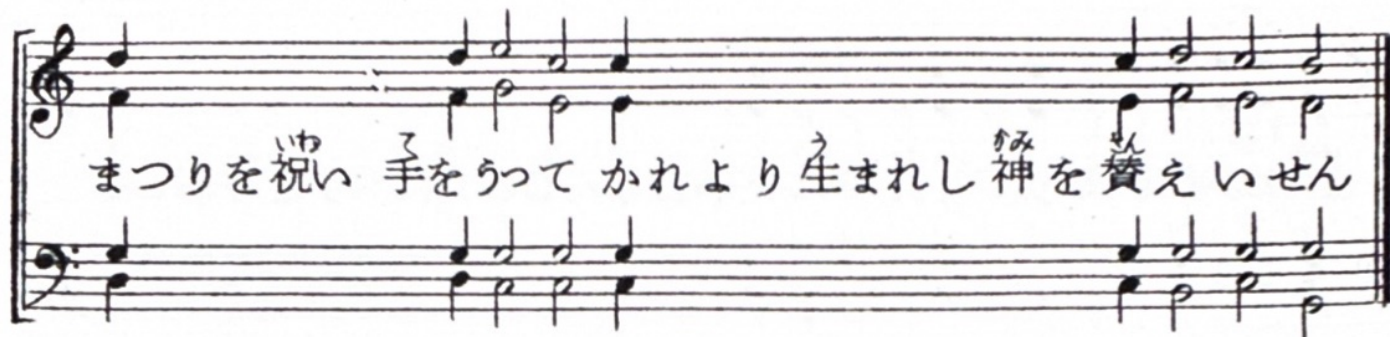
すくいたまえり 万物はなんじが神妙の 光榮におどろかざるなし

なんじ 婚配を知らざる 童貞女は至上の 神をはらみ 永遠の子を

生みておよそなんじをほめ 歌うものに 平安を たまえばなり

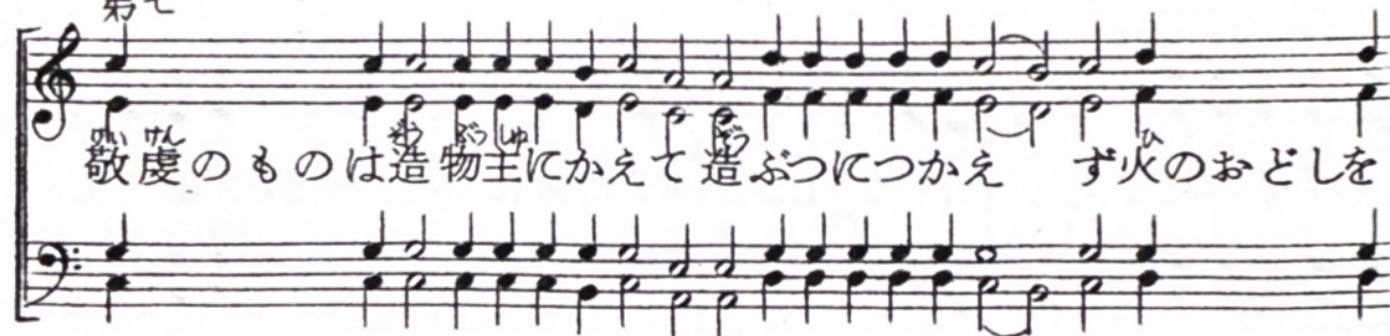


かみの信者や 来たりて神の母のこの神妙なる 至って尊とき



まつりを祝い 手をうって かれより生まれし神を賛えいせん

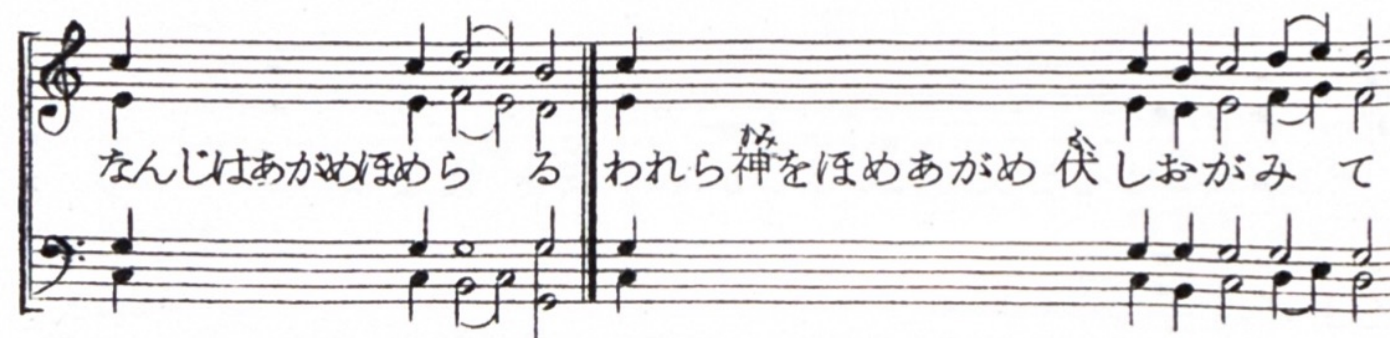
第七



敬虔のものは造物主にかえて造ぶつにつかえ ず火のおどしを



勇ましく ふみて 喜び うたえり 賛美たる主先祖のかみや



なんじはあかめほめらる われら神をほめあかめ 伏しおがみ て

第八

135-

世世にうたいほめん 生神女の産はけい度の少者を

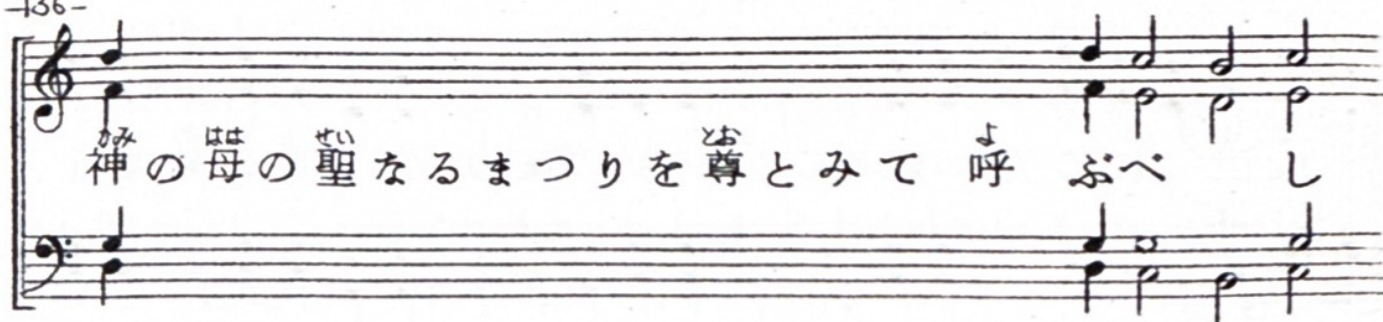
炉のうちにまもれり その時にあらかじめ記るされ

今すでに かないしこの産は全世界にすすめてなんじにうたわしむ

第九

造ぶつは主をうたうて 世世にほめあげよ およそ地にうまるる

ものは聖神に照らされて たのしみかたちなき知恵の性もいわい

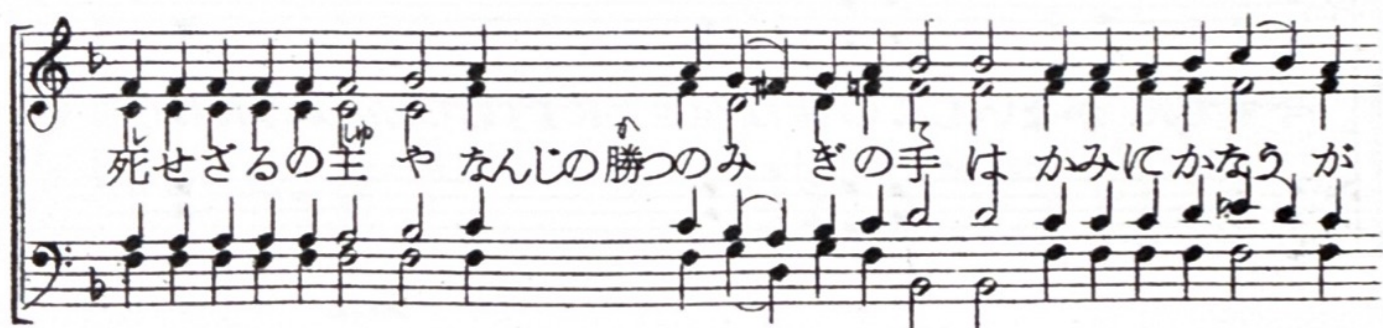


神かみの母ははの聖せいなるまつりを尊たふとみて呼よぶべし

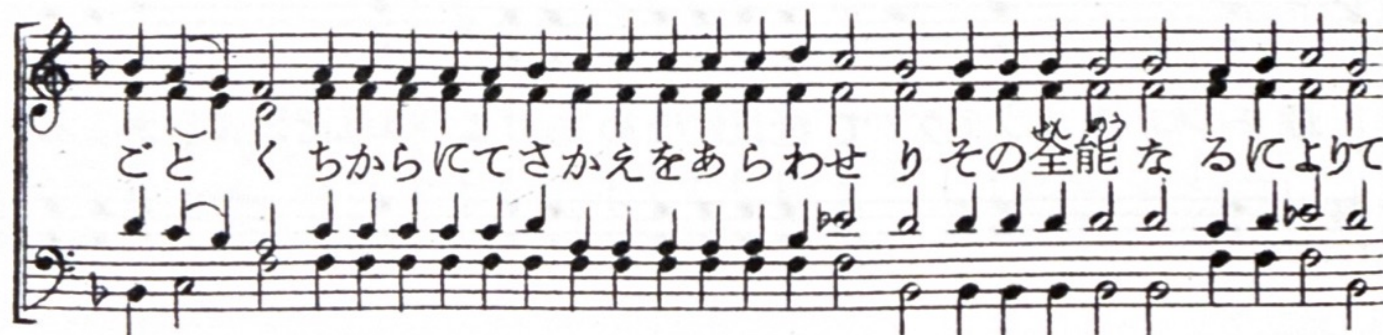


至いたつて福さいわいなる潔いさぎよき生い神しん女は永か貞てい童どう女はやよろこべよ

第一歌頌 イルモス



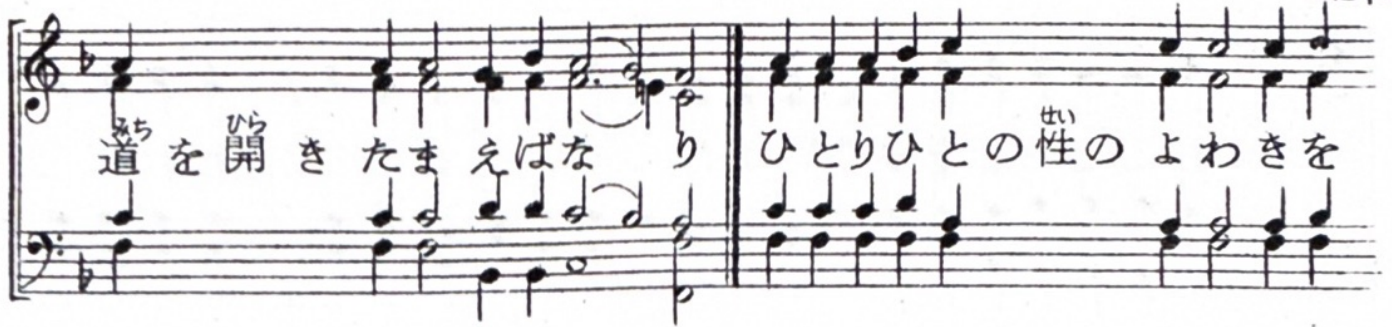
死しせざるの主しゅやなんじの勝かつのみぎの手はかみにかなうが



ごとくちからにてさかえをあらわせりその全けん能のうなるによりて



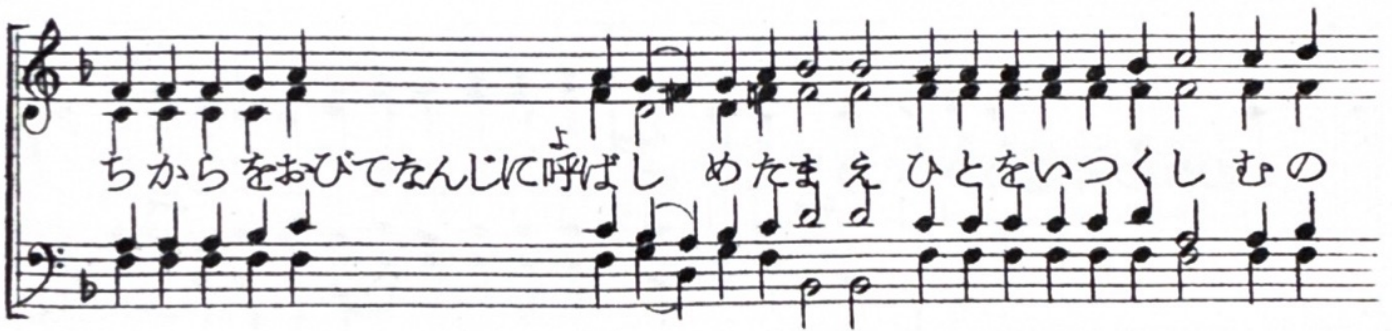
てきをほろぼしイズライリ人のために新あらたなる深ふ水みづの



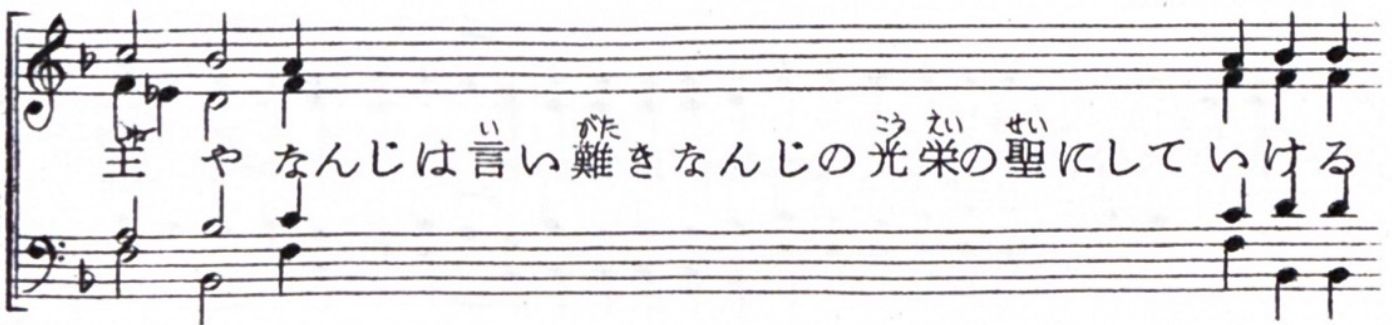
道^{みち}を開^{ひら}きたまえばなり ひとりひとの性^{せい}のよわきを



知^しつてあわれみをもつてこれを衣^きたるもの やわれに上^うよりの



ちからをおびてなんじに呼^よばし めたまえひとをいつくしむの



主^きやなんじは言^いい難^{がた}きなんじの光^{こう}榮^{えい}の聖^{せい}にしていける



みやなり アワクムは先^{せん}知^ちの自^{みづか}にてなんじかみの恩^{おん}ちうに

おおわるるやまをみてイザラのせいなるものがわれらを

すくいあらたむるがた めなんじよりいずるを予言せり

第五

おのれの^{こゝろ}降臨のひかりにてせ かいのはてをてらし

おのれの^{あざ}十字架にてこれをかがやかせ しリスツス や

なんじが^{ちえ}知恵のひかりにて^{ただ}正しく なんじをうたうもののところを

第六

139

てら したま え ^は今を ^び限りの ^ゆ淵はわれらをかこめ り

の 脱がれしむる もの なしわれらは ^と屠所の ^はひつじのごと し

わが かみやなんじの たみをすく えなんじは ^よ弱るもののちからと

第七

あらためなればな り ^い生 ^{しん}神 ^い女やわれら ^{しん}信者はなんじを

みて たましいあるいろりとな す ^い尊とまるるものが ^み三人の

40-

少者をすくえるごとく先祖のあがめほめらるるかみは

なんじのはらにおいて全世界を改めたまえばなり

われら神をほめあがめ伏し拝みて世々にうたいほめん

第八

スライの少者はいろりにありてルツボにあるがごとく

敬虔の麗わしきにて黄がねよりもあきらかにかがやきて

い え り 主 の こ と ご と く の 造 ぶ つ は 主 を あ が め ほ め こ れ を

第九

う た う て 世 世 に ほ め あ げ よ 生 神 女 や も ゆ れ ど も

焼 か れ ん ゅ い ば ら は な ん じ が 潔 き 産 の 形 を あ ら わ

せ り 祈 る 今 も わ れ ら を せ め か こ む い ざ な い の

い ろ り を う ち け し て 常 に な ん じ を あ が む る を い た さ せ た ま え

第二歌頌 イルモス

第一

全^みたくそなわれる^ちから はむかし^み アラオンの全^み軍^みを

ふか^みに敷^き入^いたいをとりしことば^み 賛^みえいせら

る^る主^みはよろずの悪^みをいたすのつみをほろぼしたまえり

第三

その光^ひえいかが^やけばな^り 主^みやあれ地^ちのごとく

実^みを結^{むす}ばさる^い異^い邦^{ほう}の教^{きょう}かいはなんじの来^きたるによりて

百合のごとくはなさけりわがこころもこれによりて

第四

かためられたり童てい女によりて来たりしものは

使者にあらず神使にあらず主みづから人たいをとりて

われ聖たきひとをすくいたまえりゆえにわれなんじに呼ぶ

第五

主や光えいはなんじのちからに帰す
ハリス か みや



なんじはかみとひととのなかだちとなれり ^ゆさいや



われら はなんじによりて ^む無知のや みより ひかりのもと なる

第六



なんじの ちちにつくを ^え得たれば なり われはつみの ふちに



おぼれてなんじがあわれみのはかりがたきふちに ^よ呼ぶ



かみやわれをほろびより ^ひ引きあげ たま ^ええ

第七

-45-

不法なるしいたげびとのかみてもとるみことのりは

たかきほのおをおこせどもほめうたわるるハリスは

敬けんの少者にせい神のつゆをくだしたまえり

われら神をほめあがめ伏し拝みて世々にうたいほめん

第八

昔ワヴィロンの火のいろりはかみのみことのりにて

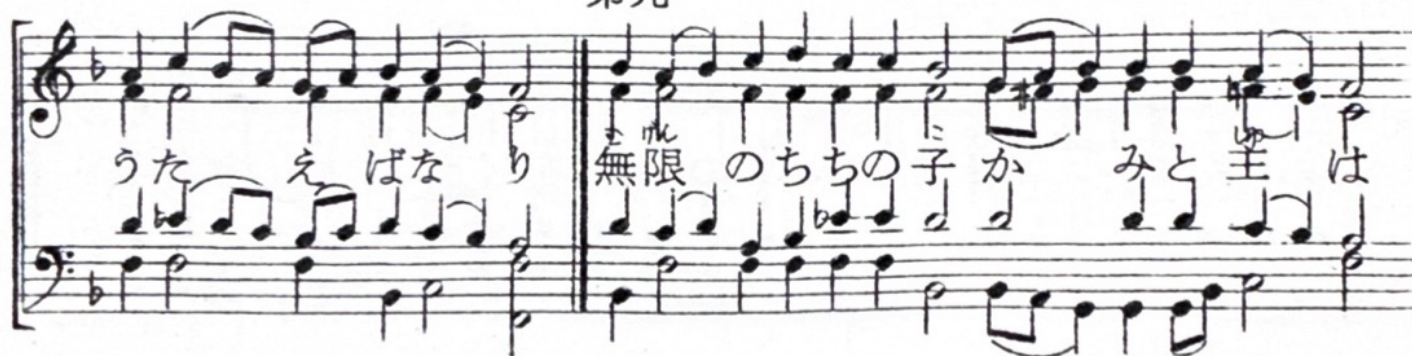


そのいきおいをわかちハルデイを焦がして 信者をすすしう

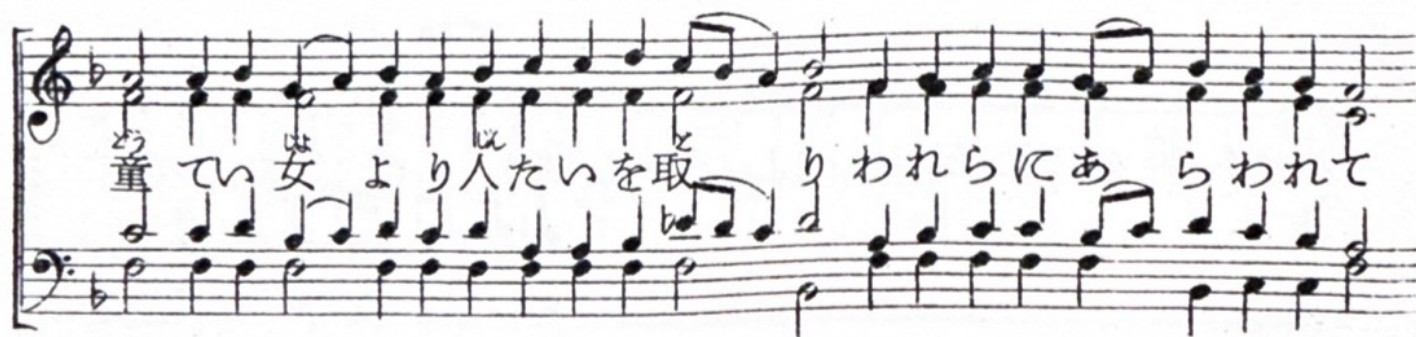


せり主のことごとくの造ぶつは主をあがめほめよと

第九



うたえばなり無限のちちの子かみと主は



童てい女より人たいを取れわれらにあらわれて



くらまされしものをあかし 散らされしものをあつめ

たまえりゆ えにわれら賛美たる生神女を あがめうたう

第三歌頌 イルモス

第一

むかし神妙のまたたきにてみづをひとつに

あつめまたイスリ人のためにうみをわかちし

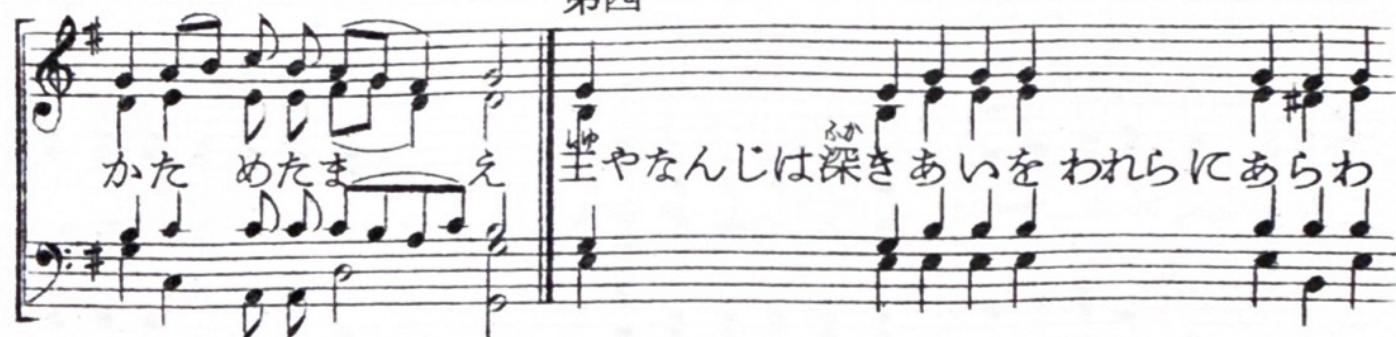
ものはこれあがめほめらるるわがかみなりわれら独り

第三

かれに歌うその光えいかがやけばなりことばにて



第四



149

主^ゆや光^ひえ いはなんじのちか^ちかに帰^{かへ}す

第五

なんじ万^{ばん}ぶつをつくりし主^ゆさとりがたきへい安^{やす}に

あさの祈^{いの}りをたてまつるなんじの戒^{かい}めは光^ひりなるに

よ りわれにこれをおしえた^おたまえ

第六

いまをかぎりのつみのふちはわれらをか^かみ



わがたましいはほろびんとすいのる主さい教導



者やなんじの尊とき手をのべてわれをペトルのごとく

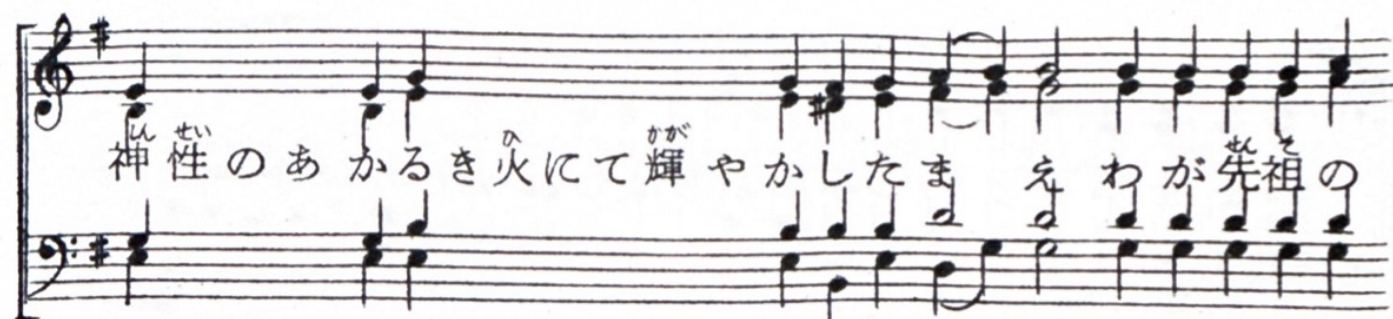
第七



すくいたまえむかしけい虔なる三人の少者を



ハルデイの炎に涼しうせしごとくわれらをも



神性のあかるき火にて輝やかしたまえわが先祖の

か み や なんじはあかめほめら ると呼 べばな り

われら神をほめあかめふしおが みて世世にうた いほめん

第八

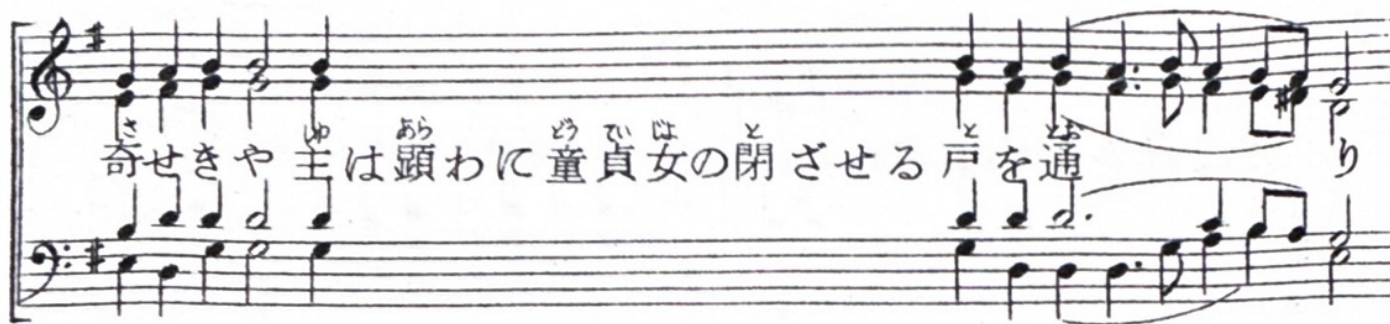
けい虔ののりたる少 者はたえがたき火に入れられ に

ほのおになやまされずして神の うた を うた え り

およそ主のつくりしものや 主をあかめほめ



これをうたうて世世にほめ あげよ かににかなうあらたなる



奇せきや主は頭わに童貞女の閉させる戸を通り



入るときは無けいのかみにしていつるときは



人体を衣たるものとなり 戸はもとのままとさせり



われらかれをかみのははとしていいがたくあがめほめん

第四歌頌 イルモス

第一

いにしえのイライ は^{あし}足をぬらさずして うみのくれない

のふちをわたり 野^のにてモイセイの十^{じゅう}字^じかたのてにて アマ^{あま}の

第三

ちからにかて り イ^いト^とやなんぢの教^{きょう} かいは なんじのため^{ため}にたの

しみて呼^よぶ主^{しゅ}やなんじはわが力^{ちから}と 避^が所^れとかためな^めり

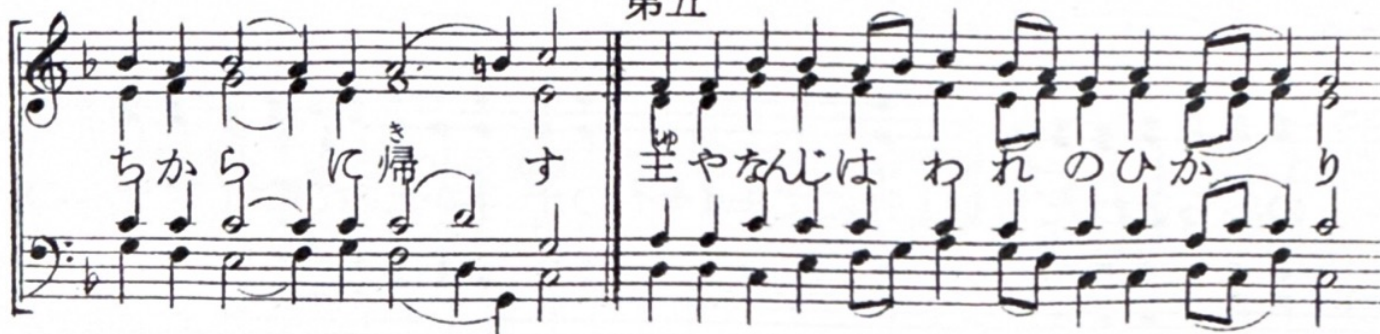
第四

教^{きょう} かいはなんじ 義^ぎの^ひ日^ひが十^{じゅう}字^じ架^かに^あ上^あげられしをみて

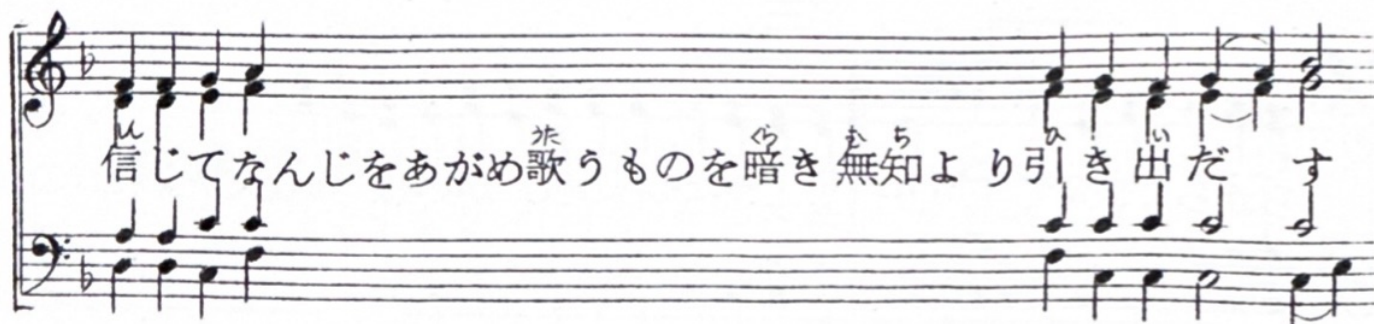


ならび^た立ちてただしく^よ呼べり^ゆ主や^ひ光えいはなんじの

第五



ちからに^き帰す^ゆ主やなんじはわれのひかり

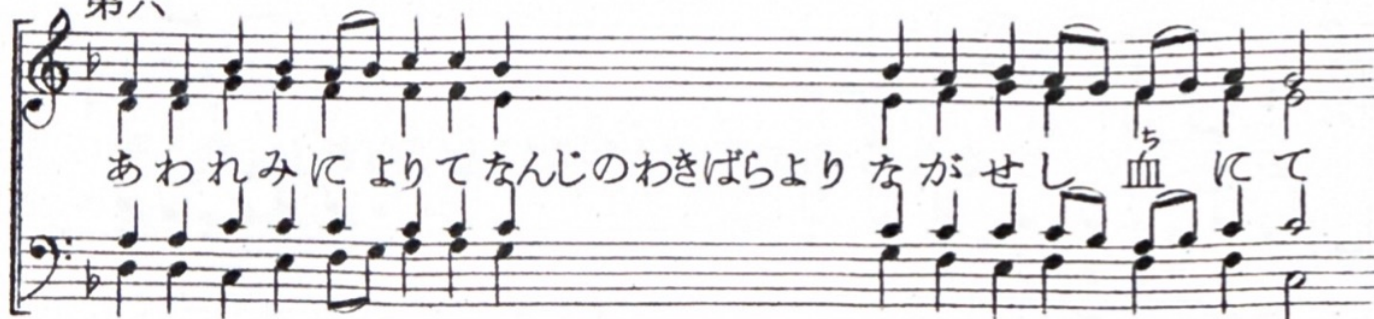


信じてなんじをあがめ^み歌うものを^{くら}暗き^む無知より^ひ引き出だす



聖なる^{ひかり}光にして^せ世界に^き来たり^{たま}えり

第六



あわれみによりてなんじのわきばらより^ちながせし^ち血にて

あくまのまつりの血より浄められし教かいなんじに呼ぶ

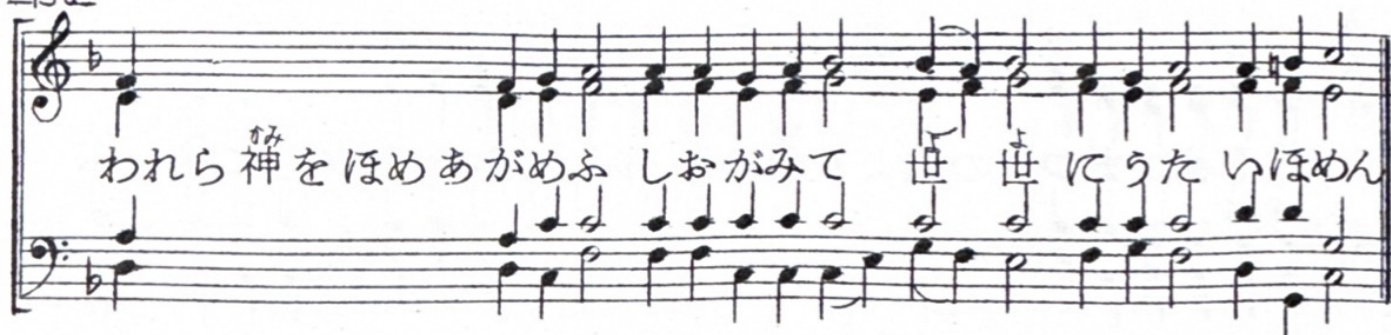
主やほめあげの聲をもつてなんじをまつらん

第七

アウラムの少者はペルシャのいろりにありて

ほのおよりもつよく敬虔の愛にやかれて呼べり

主やなんじが光榮の宮に於てなんじはあがめほめらる

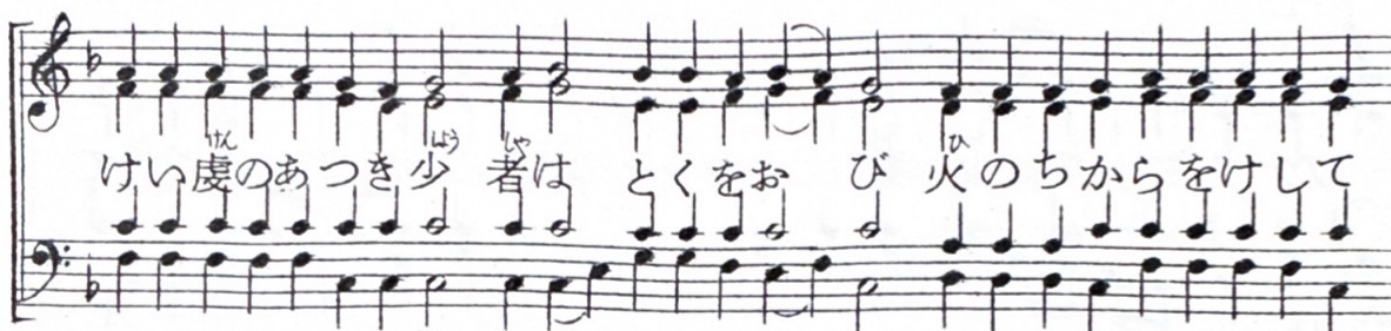


われら^{かみ}神をほめあがめふしおがみて 世^よ世^よにうたいほめん

第八



ダニエルは獅子^しあな^しに手^てをの^のばして獅子^しのくちをとざ^し



けい^{けん}度^どのあつき少^い者^{しや}はとくをお^おび火^ひのちからをけして



呼^よべ^べり主^{しゅ}のことごとくの造^{ぞう}ぶつは主^{しゅ}をあがめほめよ

第九



童^{どう}てい女^{にょ}や手^てにて切^きられざるすみいし^{リス}はなんじ切^きられざる

やまよりきりわけられてはなれたるせいをあわし

たまえり 故にわれら^{たの}楽しんでなんじ^{はうしん}生神女をあがめうたう

第五歌頌 イルモス

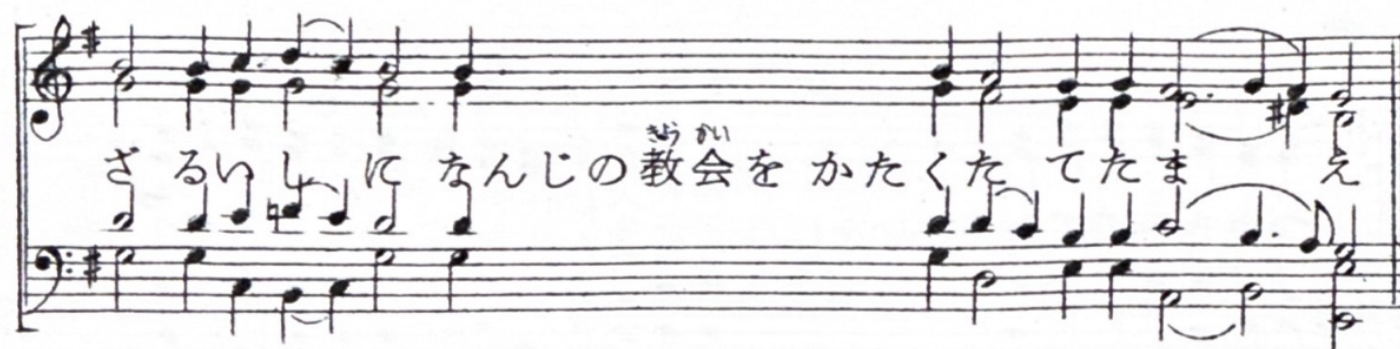
第一

つよき^て手にてたたかいをほろぼす^{ハリス}はうまと^の乗りてを

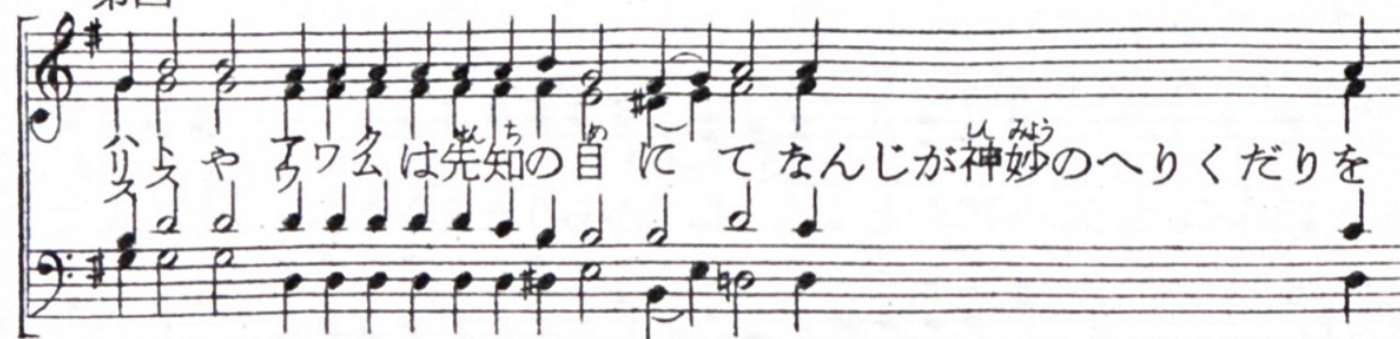
^{くれない}紅のうみにおとし^しかちうたをうたう^イスライを

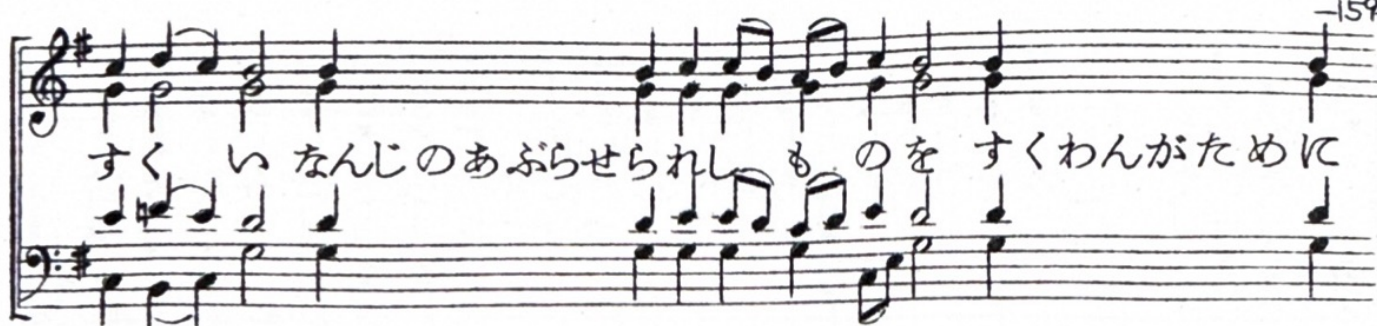
第三

すくいたまえり おのれのみことのりにて^整しきに^ち地を

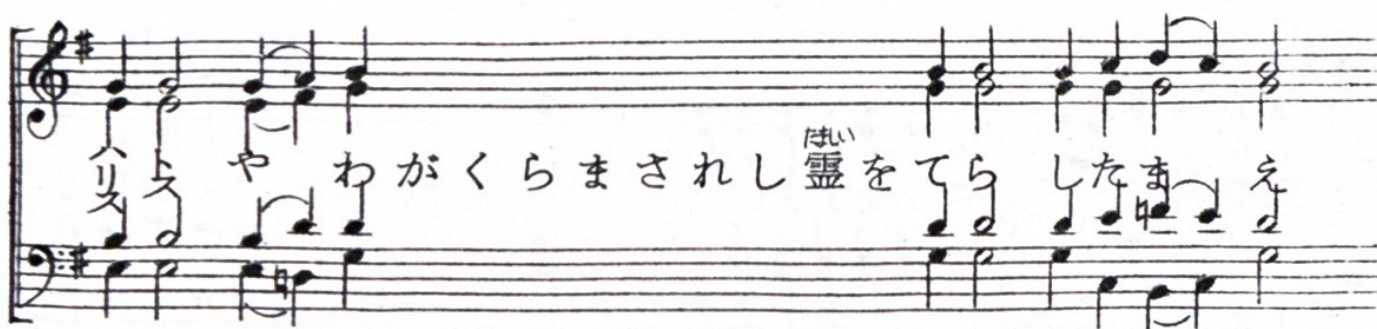


第四



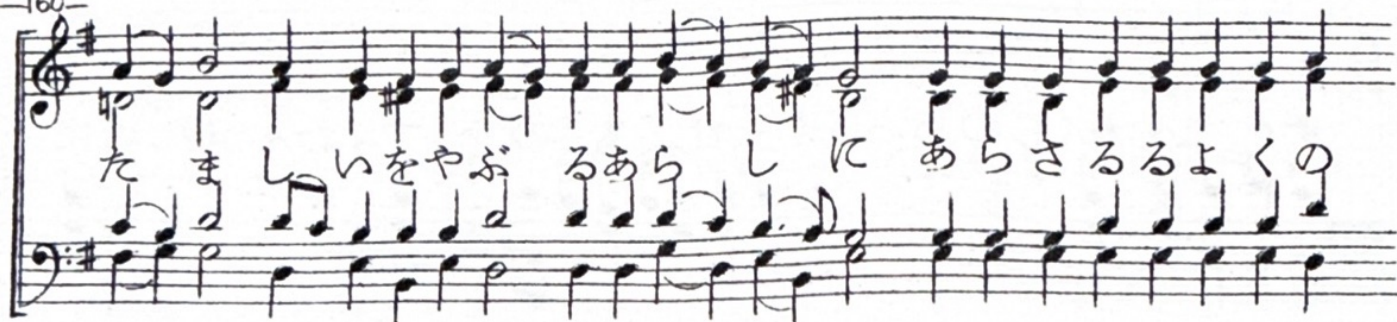


第五



第六





た ま し い を や ぶ る あ ら し に あ ら さ る る よ く の

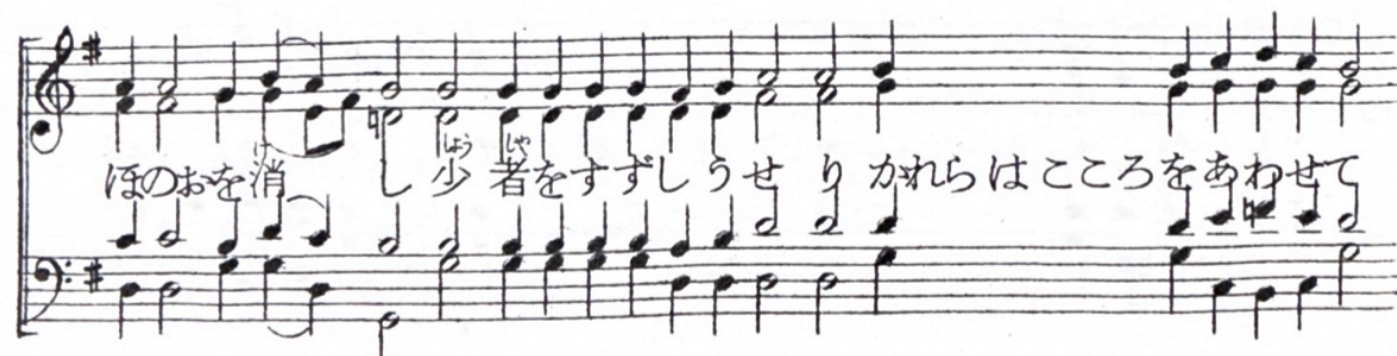


う み を し づ め て わ れ を ほ ろ び よ り た す け た ま え な ん じ は

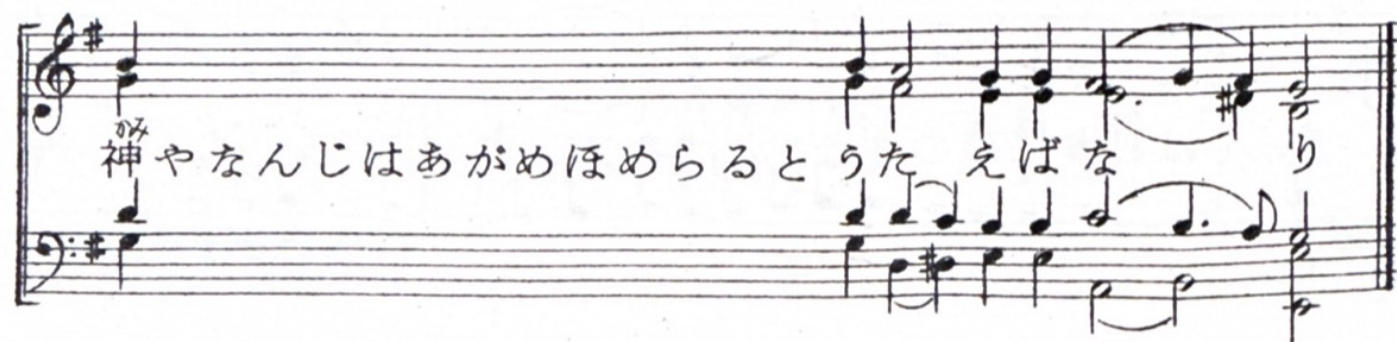
第七



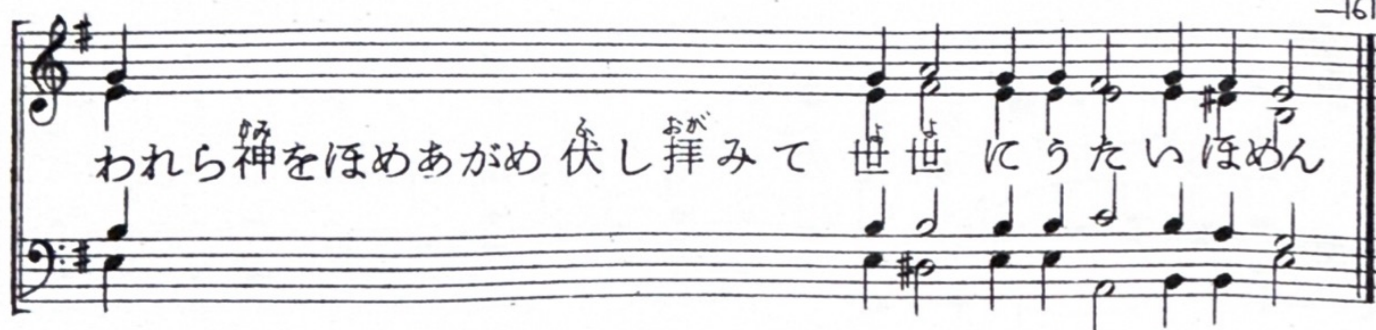
仁 慈 の 主 な れ ば な り 尊 と ま る る 先 祖 の 主 は



ほ の お を 消 し 少 者 を す ず し う せ り か れ ら は こ こ ろ を あ わ せ て



神 や な ん じ は あ が め ほ め ら る と う た え ば な り

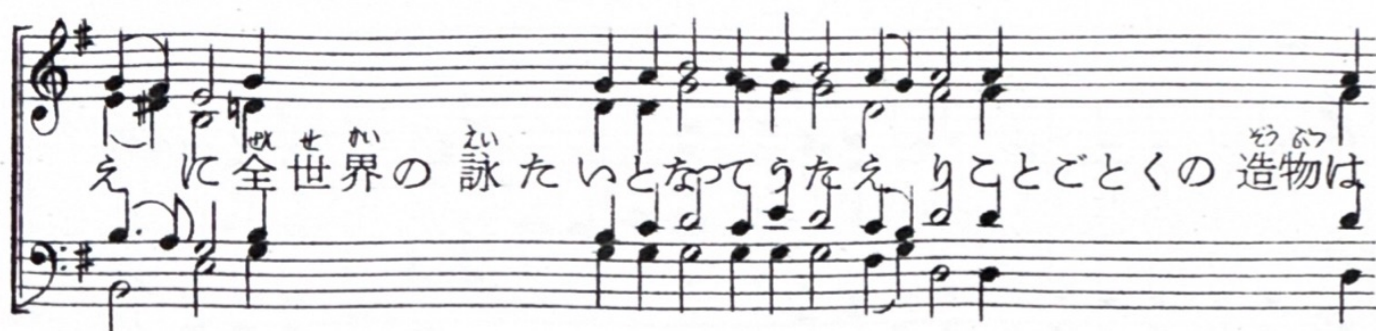


われら^み神をほめあがめ 伏し^{おが}拜みて 世世にうたいほめん

第八



少^{しょう}者はいろりにありて なんじ^{ばん}万物を造りし主^{しゅ}のま



えに^け全世界の 詠たいとなつてうたえりこととくの造物は^{ぞうぶつ}

第九



主^{しゅ}をうたうて世世にあがめほめよ イサイヤいわえよ



童^{どう}てい女^{にょ}ははらみて シマヌイル^{しまぬいる} 神と人となるものを

生め り その 名 は ひ が し わ れ ら は

か れ を あ が め て 童 て い 女 を さ い わ い な り と す

第六歌頌 イルモス

第一

イ ズ ラ イ は く が の と く 淵 を ふ み わ た り お い つ め し

ア ラ オ ン の 溺 る る を み て 呼 べ り か ち う た を か み に

第三

た て ま つ ら ん な ん じ が 信 者 の つ の を た こ う し わ れ ら を

なんじが 承認^{しんとう}めの石^{いし}にかため し^し仁^に慈^じの主^{しゅ}わがか みや

第四

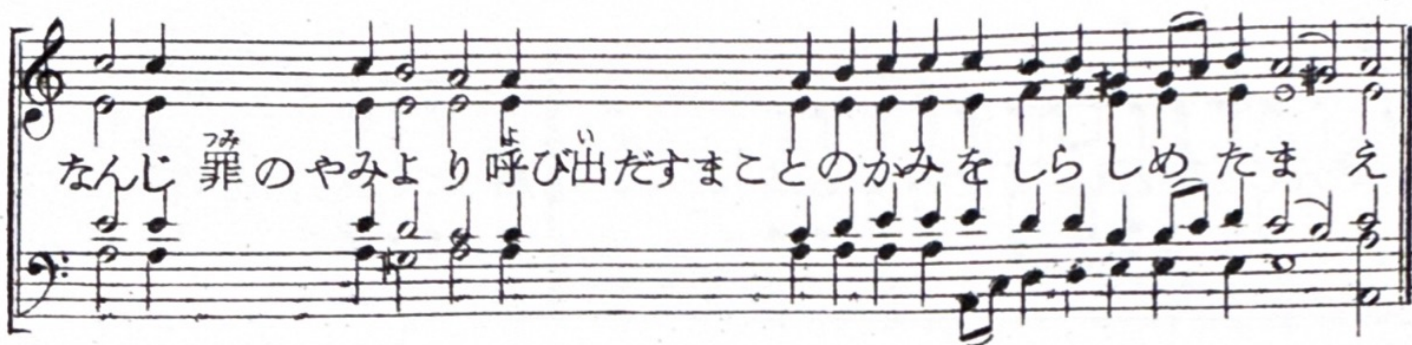
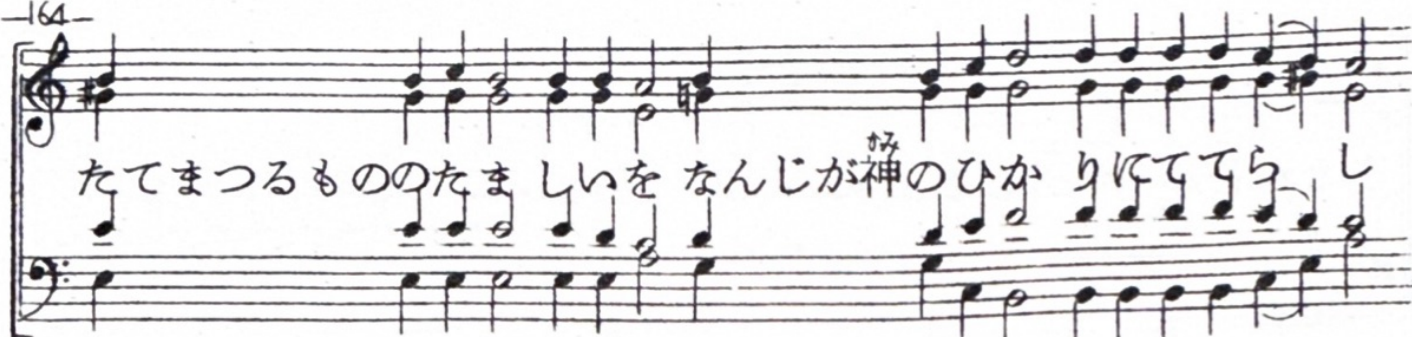
なんじとひとし くせいなるはな し^し時^{とき}教^{きょう}か い は

きよきこころより^{より}主^{しゅ}のためにな いわ い か みにかないて

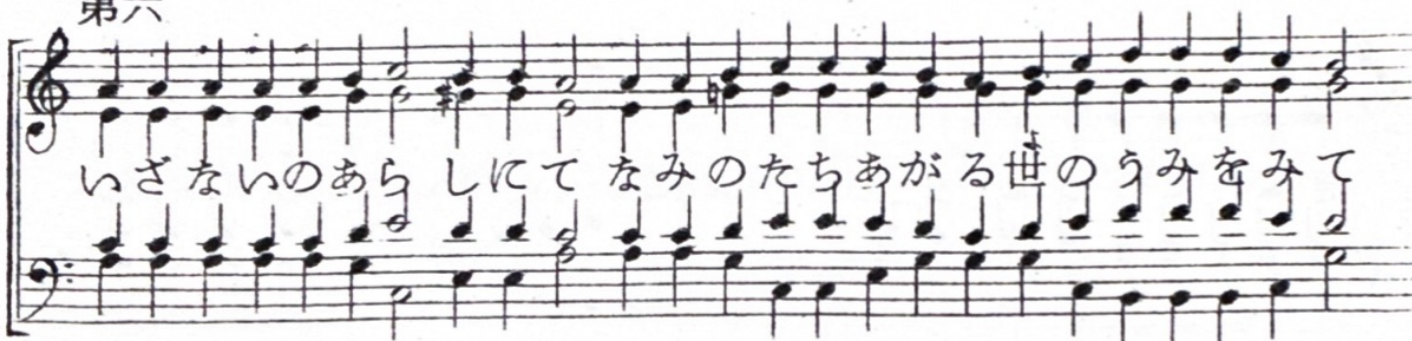
呼^よびうたう リス^{リス}はわがちからと か みと主^{しゅ}なり

第五

至^し仁^になるかみのことばや せつにいの るなんじに朝^{あさ}の祈^{いのり}禱^をを



第六



第七

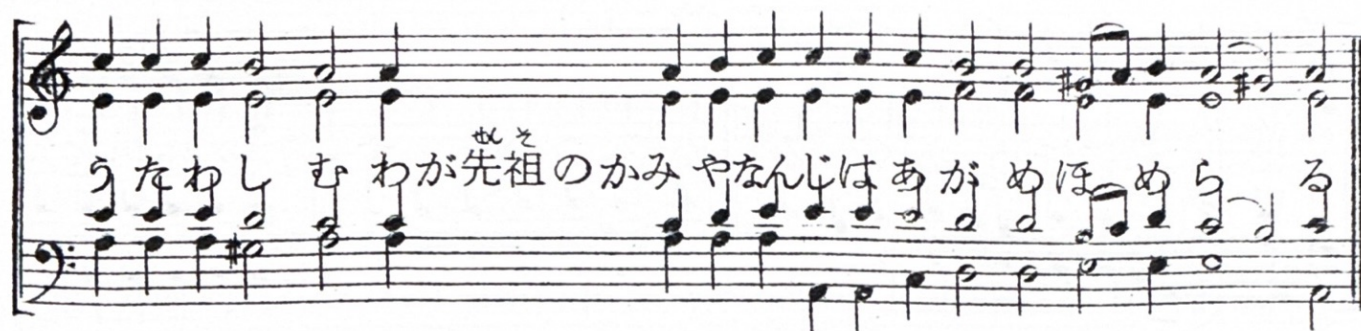
165



かみのつかいはいさぎよき少者のためにいろいろに露を



いださしめハルデイを焼く禰のみことのりは苦しむるものに

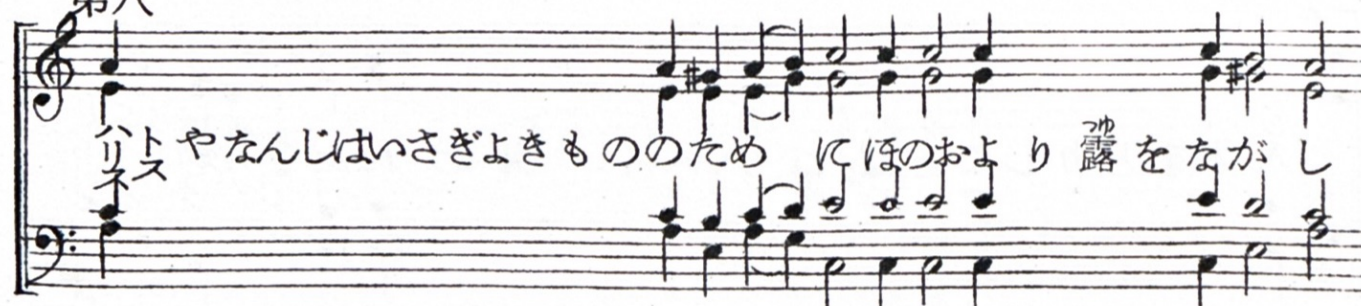


うたわしむわが先祖のかみやなんじはあがめほめらる

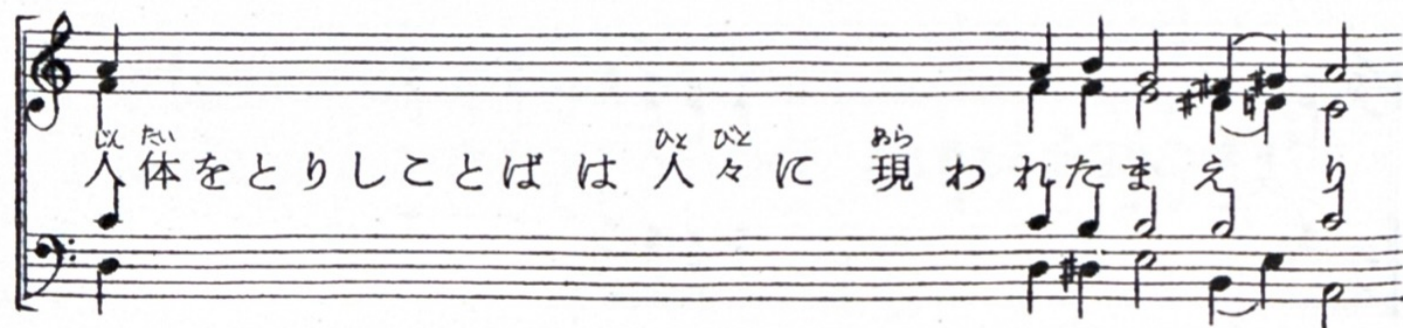
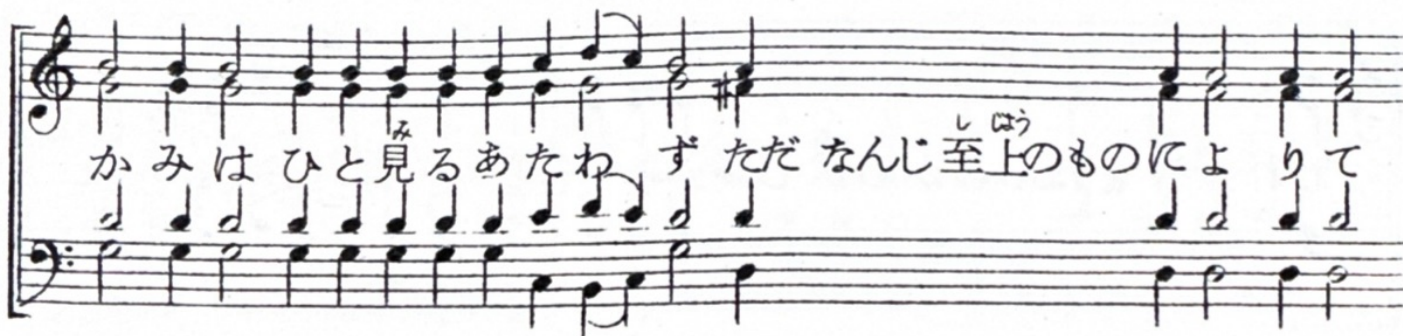
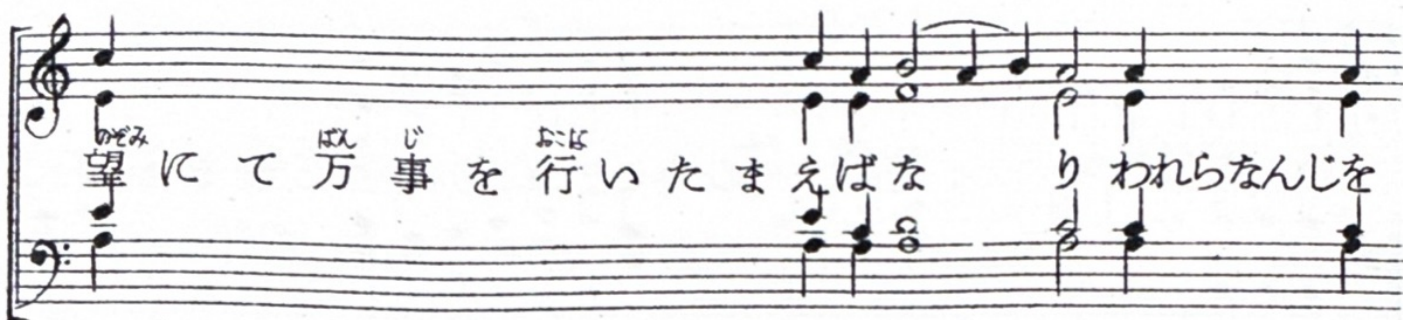
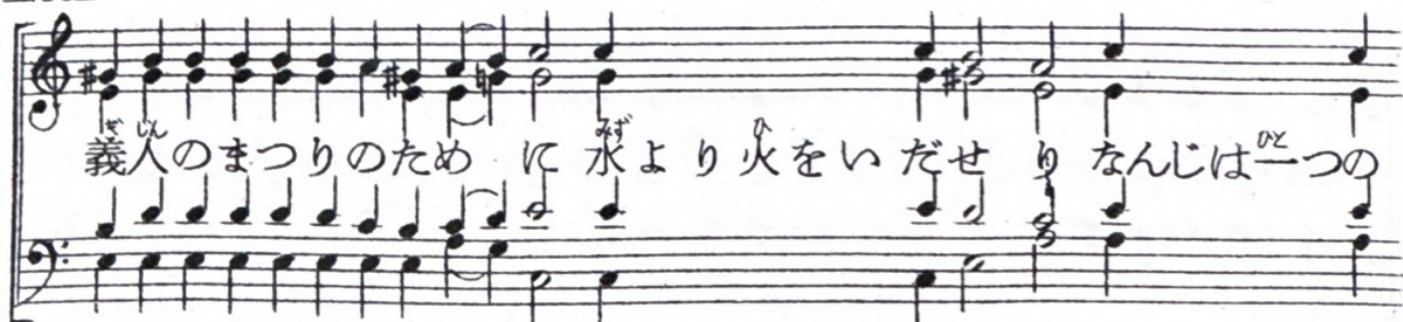


われら禰をほめあがめ伏しおがみて世世にうた いほめん

第八



イトやなんじはいさぎよきもののためにほのおより露をながし



われら かれを あがめて 天^{てん}軍^{ぐん}とともになん じをさいわいなりとす

第七歌頌 イルモス

第一

主^{しゅ}やかつて ながれやすきせいのみ づはなんじのまたたきに

地^ちのすがたにかわれ りゆえにズラ^いリ足を濡^ぬらさずわたりて

第三

かちうたをなんじにうたう はじめに全能^{ぜんねう}のことばにて天^{てん}を

かた めあたわさるなきせい神^{かみ}にてそのことごとくの

ちからをそなえし^ゆ主きゆうせい^ゆ主やなんじが^か承^と認めの^{うご}動かさる

第四

いしにわれをかためたまえちちのふところをはなれずして

地にくだりし^りえかみやわれなんじのおもんばかりのひみつを

きき^{ひと}てなんじ独り人を^{あい}愛するの^{しゅ}主をほめあぐ^る

第五

^りえとや夜は^{しん}信ぜさるもののためにあかるから^{しん}ず信者のためには

なんじの言^{ことば}を甘^{あま}んずるによりてあかるし故^{ゆゑ}にわれ朝^{あさ}のいのり

をなんじにたてまつりてなんじの神^{かみ}せいをほめうたう

第六

ハリス やわれはイオナのごとくなんじに呼^よぶわれ世^よのおもんばかりめ

うみにただよいつみのなみにしずめられたまいしを

ほろぼすたけきけものにくださるるもの^{もの}を死^しの淵^{ふち}より

第七

引きあげたま え むかし^い者はもゆるいろりをつゆをいだす

ものとあらわし^ひつの^{ひみ}神をうたうていえ りなんじは

あがめほめらるる^ひ先祖のかみ なり われら神をほめあがめ

第八

伏し^{おが}拝みて^よ世世にうたいほめん もゆれどもやけざるシナイの

いはらはくごもりて^{こゝろ}言おそき モイセイにかみをあらわし

かみをしたうあつきころ は三^みたりの少^い者^いを火に焼かれざる

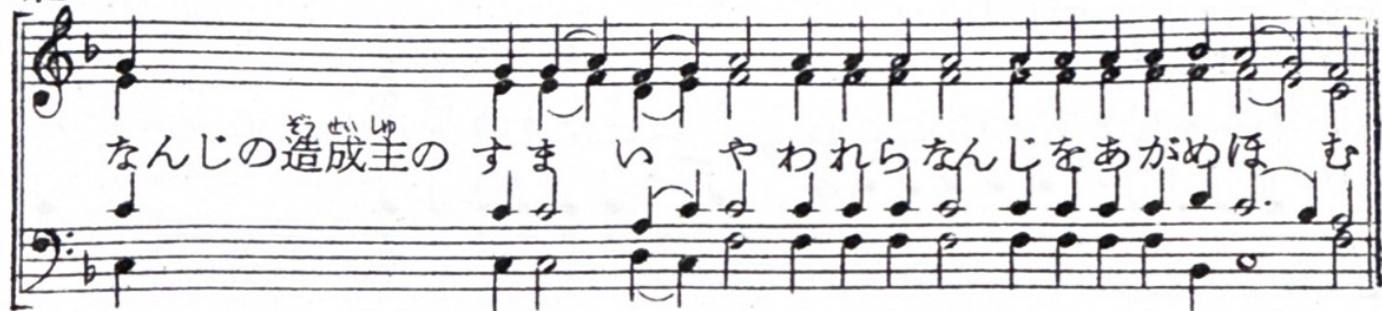
うたうものとなせ り主^{しゅ}のことごとく^ごの造^{ぞう} ぶつは主^{しゅ}をうたう て

第九

世^よ世^よにほめ あげよ けがれにそまずして生^うみ よろずの物^{もの}を

つくりしことばに体^{からだ}をかせ しおつとをし^しらざるのはは

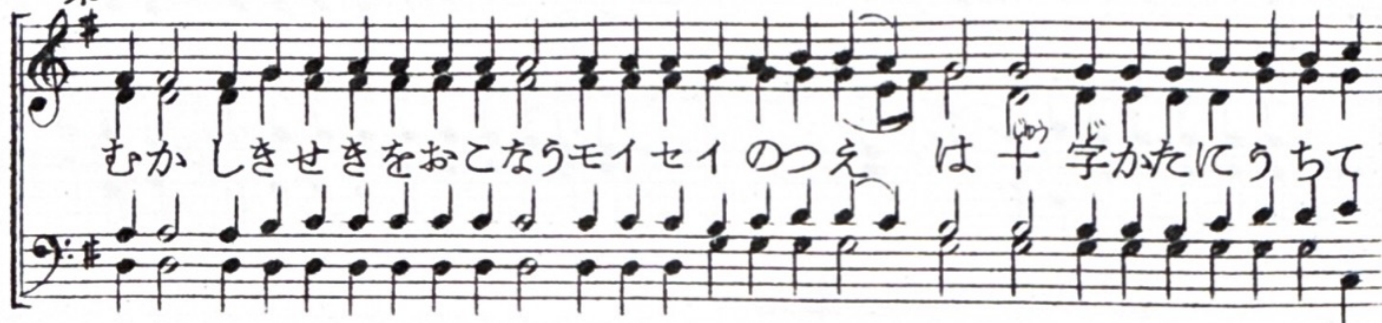
生^う 神^し 童^{どう} 貞^{てい}女^{にょ} 容れがたきものうつわかぎりなき



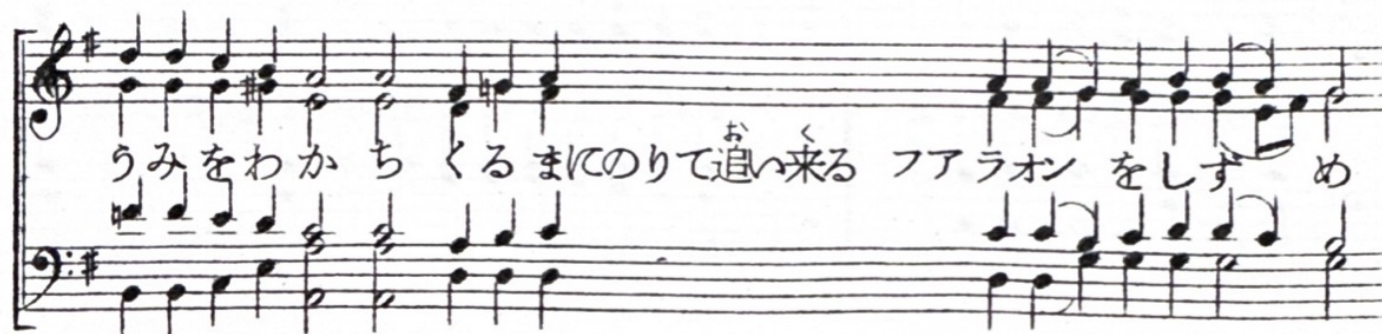
なんじの造成主の すま い やわれらなんじをあがめほ む

第八歌頌 イルモス

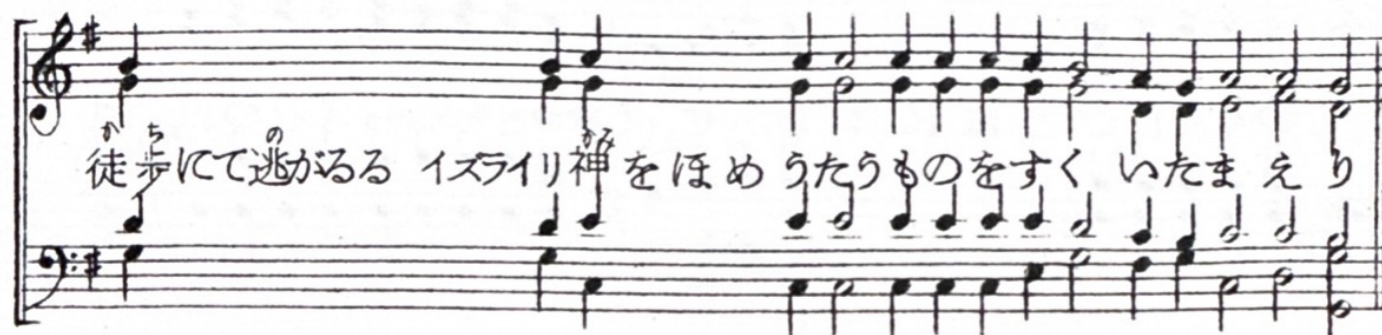
第一



むか しきせきをおこなうモイセイのつえ は十字かたにうちて



うみをわかち くるまにのりて追ひ来る ファラオンをしす め



徒歩にて逃かる イスライリ神をほめ うたうものをすく いたまえり

第三



はじめに知慧にて天 をかた め地を水にたてし

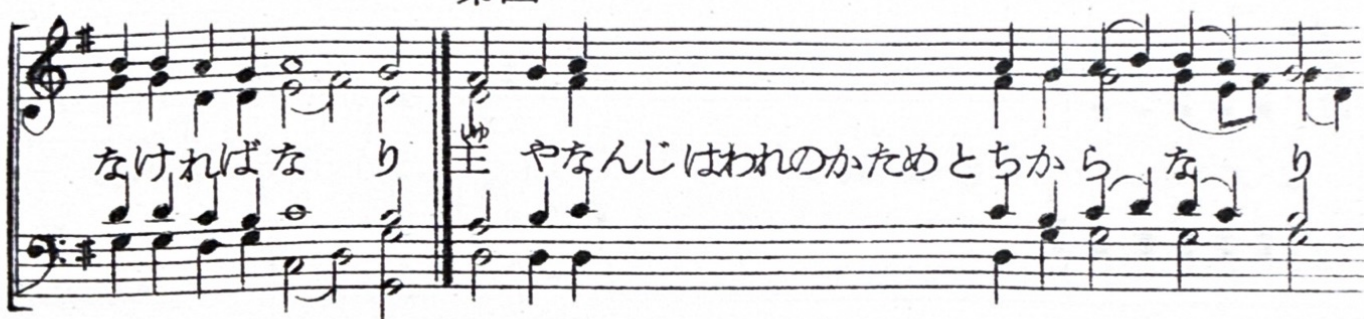


ハ ト やなんじがいましめ のいし にわれをかためたま え



なんじ^{ひと}独り^{ひと}人をいつくしむ^{しゅ}主 のほか に^{せい}聖なるもの

第四



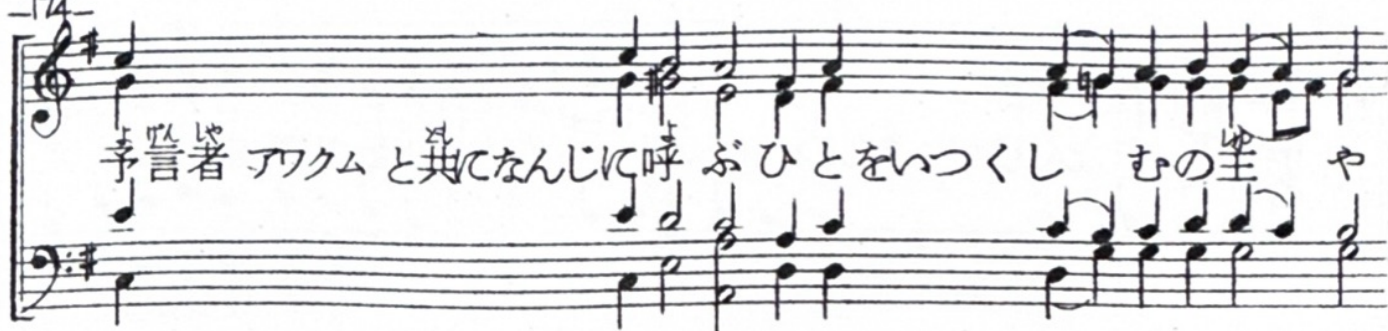
なければな り ^{しゅ}主 やなんじはわれのかためとちから な り



なんじはわれの^{かみ}神と よろこびな り なんじは^{ふち}父のふところを

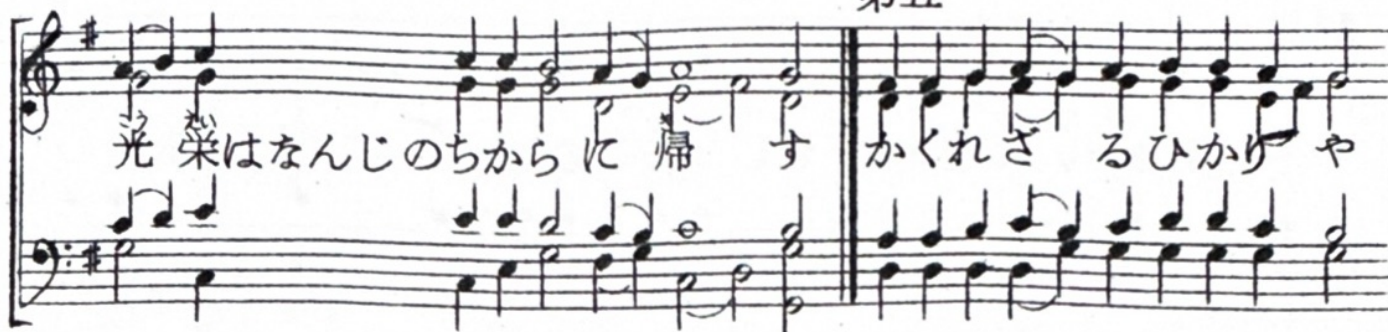


はなれ ずしていやしきわれにのぞ みたま えり ゆえに



予言者 アタクム と共になんじに呼ぶひとをいつくし むの主 や

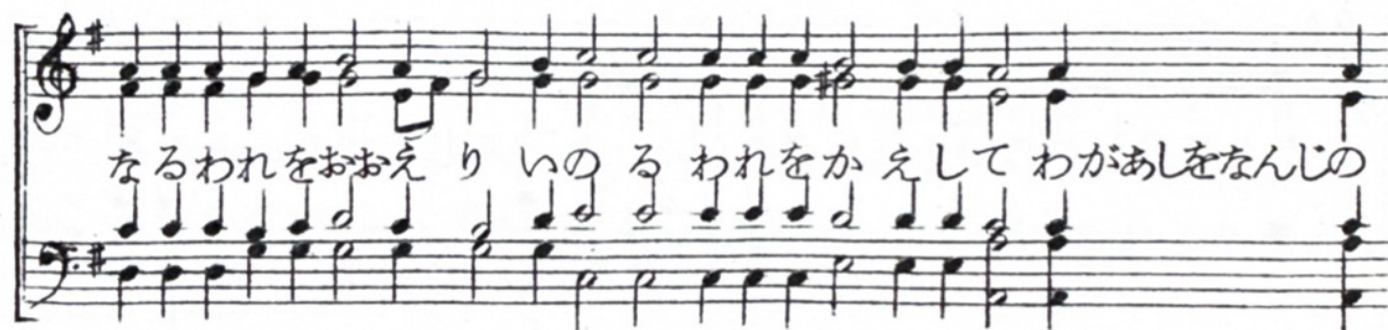
第五



光榮はなんじのちからに帰す かくれざるひかりや

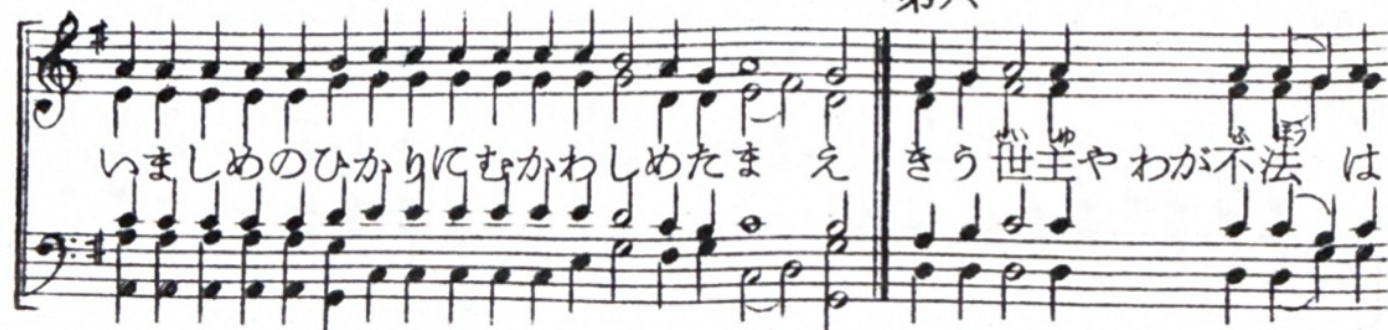


なんぞわれをなんじの顔よりしりぞけしや ほかのやみは憐われ



なるわれをおおえりいのるわれをかえして わがあしをなんじの

第六



いましめのひかりにむかわしめたまえ きう世主やわが不法は

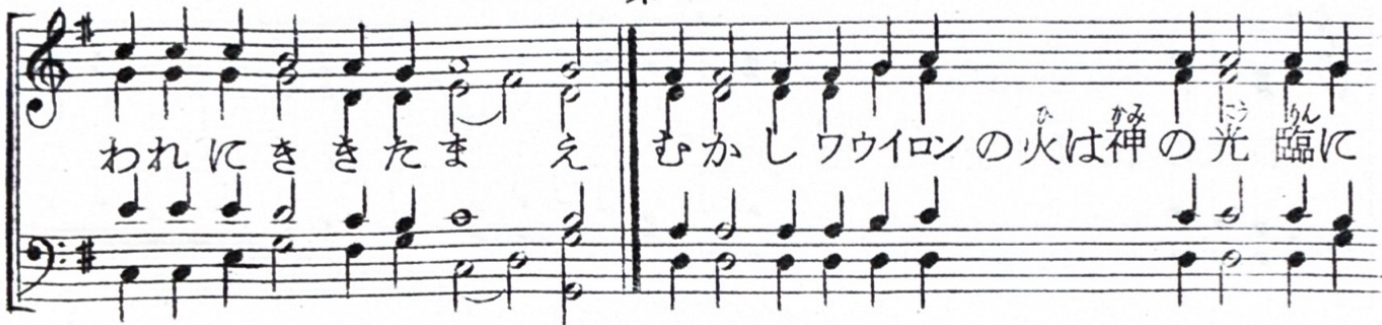


夢 しいのるわれをきよめたまえわれを悪の淵より

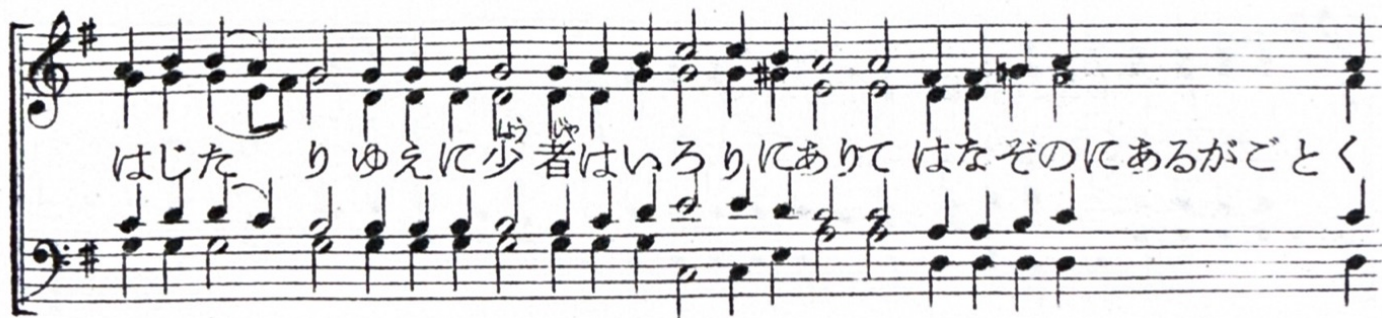


引きあげたまえわれなんじに呼ばなりわが救いの神や

第七



われにききたまえむかしワウイロンの火は神の光臨に



はじたりゆえに少者はいろりにありてはなぞのにあるがごとく



いわいうたえりわが先祖のかみやなんじはあがめほめらる

176

われら神をほめあがめ 伏し^{おが}拝みて 世世にうたいほめん

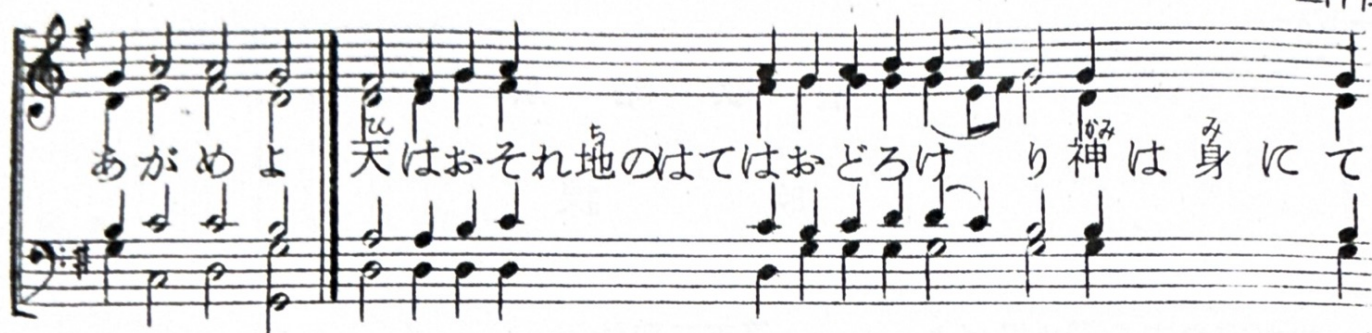
第八

ルデヤのくるしめびと は いかりにたえずして 敬^{かい}虔^{けん}のもの

のために^{いり} 炉^ろを七^し 倍^{ばい} あつうした れども うえのちからの

これをすく^くろをみて 造^{つく} 物主^{ものぬし}ときう世^よ 主^{ぬし}に呼^よべ り わらべや

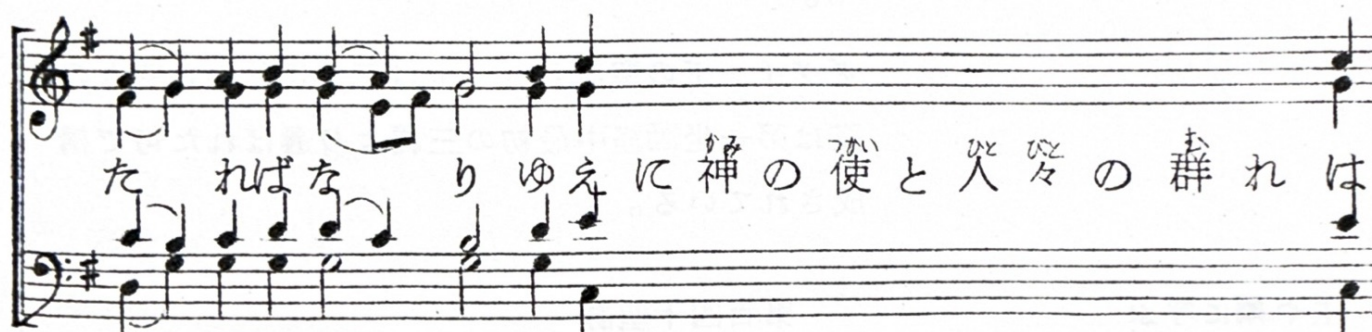
あがめほめよ 司^し さいやほめうたえよ 民^{たみ}や 万^{ばん}世^{せい}に尊^{たか}とみ



あがめよ 天はおそれ地のはてはおどろけ り神は身にて



ひとびとにあらわれなんじの腹は天より広きものとなり



たればなりゆえに禰の使と人々の群れは



なんじ生神女をあがめほむ

聖歌略解

晩課

我が霊や主を讃め揚げよ

第百三聖詠

原人アダムが罪に陥る前に天使らと共に神造物主を讃美した状態を歌う

悪人の謀

第一聖詠(1) 第二聖詠 (11) (12) 第三聖詠(9)

カフイズマ、訳して坐誦經とも名付けられる。
昔此を歌った後信者は坐して説教を聞いた事による。

ダヴィードの聖詠百五十篇は二十に分かれ悪人の謀は第一坐誦經中最初の三篇より選ばれた句で構成されている。

主や爾に呼ぶ

第百四十聖詠

ダヴィードが敵に攻められ困難に陥った時に称えた哀歌で ひたすら神に助けを求めた事を象る。

生神女讃詞（ステヒラ誦読の後） 讃詞・歌譜共八つあり

旧約の生神女に関する予象と神子イエスが人体をとって人となり給うた真理を示す。

聖にして福たる

聖ソフロニーの祝文

肉眼をもって太陽を直視する事が出来ないが暮にいたり はじめてこれを見得るように 我々が見る事あたわざる神は穏かなる光即、人として我らに現われ給うた事を感謝し讃美する。

ボロキメン

旧約聖書中より選んだ短い句

提綱と訳される 短句であるが当日行われる奉神礼の大意を表わしている。

主よ今爾の言葉に従い

シメオンの祝文 ルカ伝2章29～32節参照

ハリストスを見ざる前は死せずと予言せられた義人シメオンがイエルサリムの殿に於て、生後四十日目のイイススを迎えた時に称えた。

旧約時代の予象の終局をつける。

生神女讃詞

生神女に対する讃美

早 課

主は神なり

救主ハリストスが愈々公務のために世に顯われ給うた事を示す。

トロバリ

主ハリストスが十字架の苦しみを受けて死し、葬られ三日目に復活した事を示し、復活によってその憐れみが全世界に及んだ事を喜ぶ。

主の名を讃め揚げよ

第134聖詠 第135聖詠

主の復活が地上の万民に知らされ、福音が万民に伝えられた事を象り、無限の恩寵を讃揚するために歌う。

主や爾は崇めほめらる

復活のトロバリ

主を墓に尋ねたのに会えなかった携香女を記憶、祭日には代りに祭日のステヒラを歌う。

我等ワウイロンの河辺に坐し 第136聖詠

神にそむいたエウレイ（ヘブライ）民が神の怒をうけてワビロンの地に連れていかれ、ワビロン人に苦しめられていた折、故郷をしのんで歌った哀歌。斎中のみ歌われる。

我が幼なき時より

アンティフォン

右左両聖歌隊によつて交互に歌われる交互唱法をアンティフォンと称した。八つの歌詞と歌譜があり一週間毎にかわる。

我らをハリストス教の諸敵より守り給わん事を祈る。

ボロキメン

当日読むべき福音の主意を示す。

ハリストスの復活を見て

十字架に釘せられ復活した救世主を讃美する。

光栄は、憐み深き主や

主が大いなる憐みにより又聖使徒と生神女の祈禱によつて我らを憐み給わん事を願う。

ファリセイの光栄

ルカ伝18章10～14節参照

斎中のみ歌われ

謙遜と痛悔の熱切なる祈り

我が心は主を崇め

ルカ伝1章46～55節 参照

凡そ呼吸あるものは

讃揚歌

第148聖詠・第149聖詠・第150聖詠中の句

生神女讃詞

生神女への讃美

大詠頌

ルカ伝 2 章 14 節参照

早課初めの六段の聖詠前に読まれる。小詠頌と区別して大詠頌と名付けられる。

天と地 即ち、天使と万民が神聖三者を讃美し、憐れみによつて我らを導き給わん事を祈る。

今教いは

復活讃詞

主や爾墓より

復活讃詞

一時課

生神女や

生神女讃詞

イルモス

九つの頌歌より成るカノンは、それぞれ数句よりなつており、各頌歌の第一の句をイルモスという。

斎中を除いては、第一句であるイルモスのみを歌う。

イルモスは接続の意で次に誦読される讃詞と連続するのでこのように名付けられた。

その出典は次の通り

第一 出エジプト記 15 章 1～9 節参照

イスラエリ民がエジプトより逃れてパレスチナへ帰る途上の出来事、即ちファラオの軍勢に追つめられた時紅海が陸の如くに開かれて救われた事を歌ったモイセイの歌

第二 申命記 32章 1～43節参照

モイセイが其の死の前にイスラエリ民の不信不義を責めた哀歌。斎中にのみ歌われる。

第三 サムイル前書 2章 1～10節参照

石女予言者サムイルの母アンナが神恩をうけてサムイルを生み、神に感謝して歌った歌。

第四 アワクム（ハバクク）書 3章 2～19節参照

予言者アワクムが救世主が地上に現われる事を予知して、おそれおののきて歌った歌。

第五 イサイヤ書 26章 9～19節参照

予言者イサイヤの言葉によつて、神が其の恩寵をもつて我らを照し給う事を祈る。

第六 イオナ（ヨナ）書 2章 3～10節参照

予言者イオナが其の呑みこまれた大魚の腹より主神に呼びて祈った歌

第七 ダニエル書 3章 26～56節参照

偶像を拝する事を拒んだイスラエリの三人の若者がバビロンの王によつて火の炉に投げ込まれたが焼ける事なく、神を讃美した。

第八 ダニエル書 3章 57～72節参照

（6章 16～23節参照）

予言者ダニエルがその信仰の故に迫害され獅子の穴に投げられたが害せられる事なく救われた事を歌う。

第九 ルカ伝1章 68～79節参照

生神女の讃美する歌で前駆受洗イオアンの父ザハリヤの予言の歌よりとつたもの。

（出エジプト記 3章の2～4節参照）

昭和41年8月1日 印刷

昭和41年9月1日 再発行

発行所 大阪ハリストス正教会

印刷所 大阪市天王寺区上本町九丁目三の二

福田 楽 譜 社

福田 元 三 郎

